宮城県文化財調査報告書第202集

壇の越遺跡ほか

平成17年3月

宮城県教育委員会

壇の越遺跡ほか

序　　文

新たな世紀を迎え、ゆとりと豊かさを目指すことが重要になってきたなかで、地域住民の間では身近な地域の個性豊かな風土や歴史的な文化財の保存・活用の取り組みへの気運が高まっています。

しかし、一方では道路建設や宅地造成など都市化の波が地方にも押し寄せ、大規模なほ場整備などの各種開発事業も年を追うごとに激化しており、文化財は年々破壊され、消滅の危機にさらされることが多くなってきております。なかでも土地との結びつきの強い埋蔵文化財は、各種の開発により常に破壊される恐れがあることから、当教育委員会では開発部局等に遺跡の所在を周知徹底するとともに、開発との関わりが生じた場合には貴重な文化財を積極的に保護することに努めてきております。

本書は、開発関係機関などと十分な協議・調整を重ねたうえで調査することとなったもののうち、平成16年度に当教育委員会が国庫補助金を得て、学術的に重要な遺跡について行った発掘調査成果と、開発工事に先立って事前調査及び確認調査を実施した遺跡の成果を収録したものです。こうした成果が広く県民の皆様や各地の研究者に活用され、地域の歴史解明の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、遺跡の保存に理解を示され、発掘調査に際しては多大なるご協力をいただいた関係機関の方々、さらに実際の調査にあたられた皆様に対し、厚く御礼申し上げる次第です。

平成17年３月

宮城県教育委員会
教育長　白　石　　晃

目　　次

平成16年度発掘調査の概要
壇の越遺跡……1
北小松遺跡……67
袖沢古墳群……73
吹付遺跡……85
大石原遺跡……91
上川名貝塚……99
要害遺跡……103
洲崎城跡……113

例　　言

１．本書は宮城県が平成16年度の国庫補助金を得て、宮城県教育庁文化財保護課が担当した公共事業等に係わる発掘調査報告書である。
２．各遺跡の発掘調査から調査報告書にいたる一連の作業は、遺跡の重要性から保存を前提として遺跡の性格や構成を把握することを目的として文化財保護課が行ったほか、調査原因となった開発行為に関わる機関の依頼を受けて文化財保護課が行ったものである。
３．各遺跡の保存協議や発掘調査にあたっては、開発関係部局や地元教育委員会から多大な協力をいただいた。
４．本書における土色の記述については、『新版標準土色帳』（小山・竹原、1996）を参照した。
５．本書に使用した各遺跡の位置図は、国土交通省国土地理院発行の1/25,000の地形図を複製して使用した。
６．本書所収の大石原遺跡は、世界測地系に基づく平面直角座標第Ｘ系による。大石原遺跡以外の座標値は、日本測地系（改正前）に基づく平面直角座標第Ｘ系による。
７．本書の遺構記号は、種別によって以下の記号を使用した。
塀跡・柱列跡：SA、掘立柱建物跡：SB、竪穴住居跡：SI、井戸跡：SE、溝：SD、土壙：SK、
道路跡・土器埋設遺構・焼土遺構・その他性格不明の遺構：SX
８．本書は、調査を担当した各調査員の協議を経て下記の者が執筆・編集した。

平成16年度発掘調査の概要	佐藤　則之
壇の越遺跡　第１章～第４章	柳澤　和明
壇の越遺跡　付章、要害遺跡	吉野　武
北小松遺跡、吹付遺跡、洲崎城跡	相原　淳一
袖沢古墳群	高橋　栄一
大石原遺跡	田中　政幸
上川名貝塚	菊地　逸夫

９．壇の越遺跡付章の執筆に際して東野治之氏、大平聡氏、鈴木拓也氏、袖沢古墳群の執筆に際して藤沢敦氏、洲崎城跡の執筆に際して佐藤正人氏の御教示をいただいた。御芳名を記し、感謝の意を表したい。
10．鉄製品のＸ線撮影と錆落としについては、東北歴史博物館の及川規氏の協力を得た。

平成16年度発掘調査の概要

平成16年度の埋蔵文化財緊急調査費の国庫補助金（総事業費5,400千円、補助率１/２）による調査は、加美町壇の越遺跡、田尻町北小松遺跡、柴田町上川名貝塚、桃生町袖沢古墳群、岩出山町要害遺跡について実施した。以下にはそれぞれの調査の概要を記す。

壇の越遺跡は、県営ほ場整備事業に伴って、平成８年度から加美町教育委員会が主体となって実施してきている。これまでの調査で、遺跡の東半部には北に隣接する東山官衙遺跡の外郭南門跡を基準とした東西・南北道路による方格地割が存在することが明らかになっている。方格地割は約１町を単位としており、地割内部の様子も具体的に明らかになっている。今年度は遺跡東半部を対象として、以前に材木塀が検出されていた場所の周辺を広く発掘して、地割内部の様子を明らかにすると共に、東西・南北道路の交差点部分を調査し、方格地割の建設時期や基準の解明を目的として実施した。調査の結果、方格地割内を材木塀で区画し、内部に掘立柱建物跡が配置されていた様子が明らかになった。また、交差点は想定通りの位置で検出され、１町単位の方格地割が広い範囲に施工されていることが確認できた。一方、交差点の形状は時期や場所によって様々であり、道路幅も場所によって異なっていた。なお、地割の成立時期が８世紀前半まで遡るのか、また、すべてが同時に施工されたのかどうかは今後の課題である。

北小松遺跡は、縄文時代晩期の豊富な遺物が出土する遺跡として古くから著名であり、県営ほ場整備事業に先立って、保存協議の資料を得るために調査を実施したものである。調査の結果、西へ張り出す丘陵の先端部周辺に縄文時代晩期から弥生時代前期にかけての遺物包含層が形成されており、砂や粘土などの厚い沖積層によってパックされていることから、保存状態が良好であることが確認された。

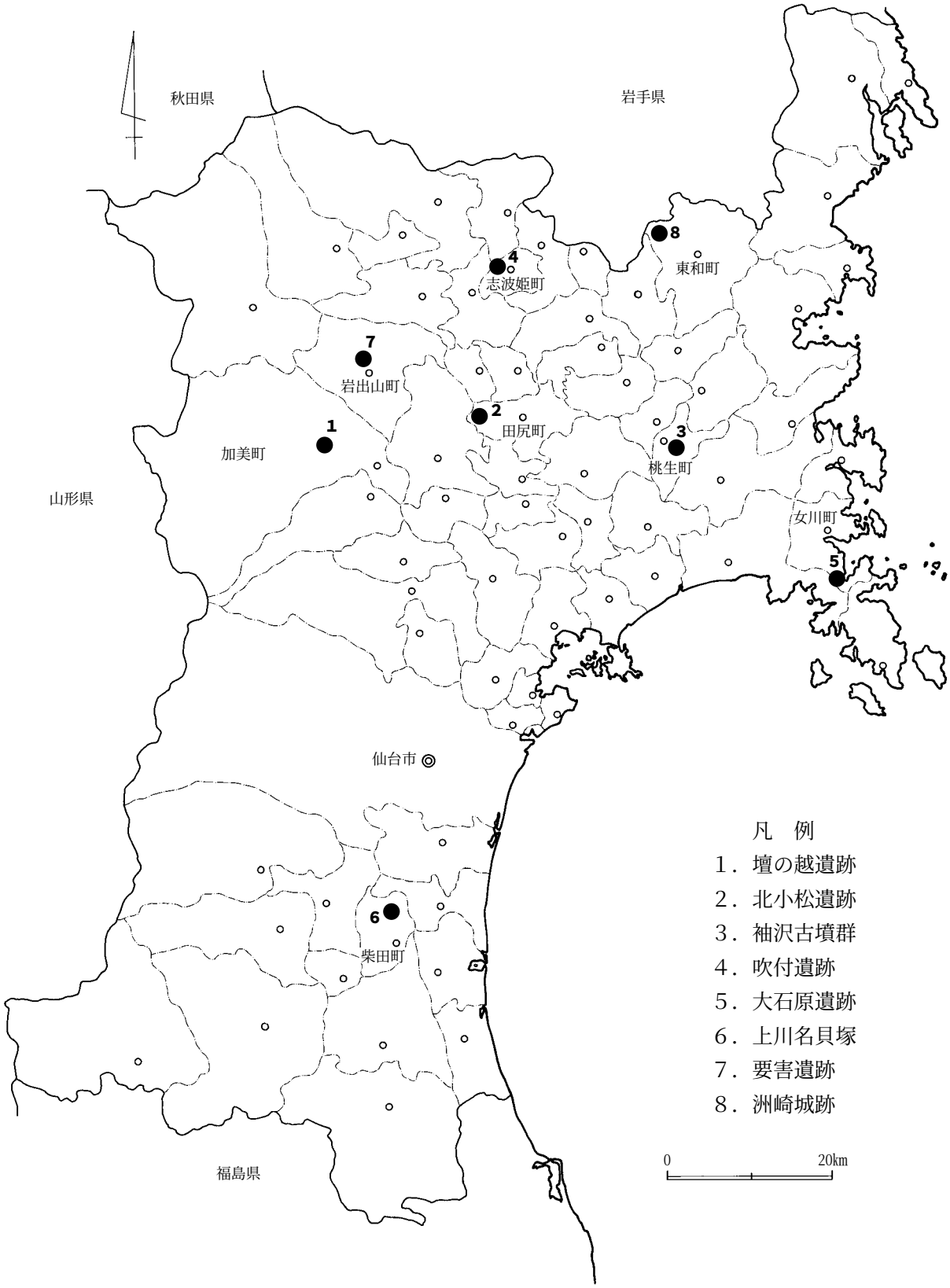
上川名貝塚は、大規模な貝層が存在し、明治時代には『東京人類学会雑誌』に紹介されるなど、古くから注目されてきた貝塚であり、縄文時代前期初頭の標式遺跡としても知られている。個人住宅を建て替えるため住宅裏側の丘陵部と斜面を調査したが、削平のため遺構は検出されなかった。しかし、周辺の踏査や聞き取り調査の結果から、かなり厚い貝層が広く分布していることが予想され、引き続き調査していく必要があろう。

袖沢古墳群は、新発見の遺跡で、墳丘は削平のため残っていなかったものの、埴輪を有する２基の円墳が確認され、周辺の分布調査でさらに２基が存在することが明らかになった。時期は、埴輪の年代から５世紀後葉頃と推定された。宮城県北部沿岸地域では古墳時代中期の埴輪を有する古墳は従来知られておらず、この時期の遺跡の調査例も無いことから、この地域の歴史を考える上で貴重な資料である。

要害遺跡は、砂利採取現場から出土した墨書土器等の報告で、大部分が「万上」と記されている。何らかの祭祀に使用されたものが河川跡にまとめて投げ込まれたものと推定され、時代は９世紀後半頃である。周辺には官衙は存在せず、平安時代の祭祀を考える上で貴重な資料になると思われる。

なお、事業者の協力を得て実施した確認調査や本発掘調査のうち内容が軽微だった女川町大石原遺跡、志波姫町吹付遺跡、東和町洲崎城跡の成果も本書に併せて収録した。

宮 城 県 全 図


秋田県
岩手県
山形県
福島県
8
東和町
4
志波姫町
7
岩出山町
2
田尻町
1
加美町
3
桃生町
女川町
5
仙台市
6
柴田町
凡　例
1．壇の越遺跡
2．北小松遺跡
3．袖沢古墳群
4．吹付遺跡
5．大石原遺跡
6．上川名貝塚
7．要害遺跡
8．洲崎城跡
0
20km

壇(だん)の越(こし)遺(い)跡(せき)

目　　次

第１章　遺跡の概要と調査に至る経緯 ･･･3
　１．遺跡の概要 ･･･3
　２．調査に至る経緯と調査方法 ･･･4
第２章　発見された遺構と遺物 ･･･5
　１．43Ｂ区 ･･･5
　２．43Ａ区･･･19
　３．43Ｃ区･･･25
　４．43Ｄ区･･･25
　５．43Ｅ区･･･30
　６．43Ｆ区･･･34
　７．43Ｇ区･･･38
第３章　考察･･･38
　１．43Ｂ区の主要遺構の変遷･･･38
　２．南北道路跡・東西道路跡交差点の様相･･･42
第４章　まとめ･･47
附　章　34区出土の漆紙文書･･･48
写真図版･･･55

調　査　要　項

遺 跡 名：壇の越遺跡（宮城県遺跡地名表登載番号：30040、遺跡記号：PN）

所 在 地：宮城県加美郡加美町鳥嶋、鳥屋ヶ崎、谷地森地内

調査原因：平成16年度「県内遺跡発掘調査等」補助事業　重要遺跡確認調査

調査主体：宮城県教育委員会

調査担当：宮城県教育庁文化財保護課

調査期間：平成16(2004)年４月12日～５月26日

調査対象：平成16年度県営経営体育成基盤整備事業（宮崎北部）で面工事が行われる「ほ区番号57」の約70,000m²

調査地点：43Ａ区、43Ｂ区、43Ｃ区、43Ｄ区、43Ｅ区、43Ｆ区、43Ｇ区の７地点

調査面積：43Ａ区（約250m²）、43Ｂ区（約660m²）、43Ｃ区（約210m²）、43Ｄ区（約300m²）、43Ｅ区（約400m²）、43Ｆ区（約600m²）、43Ｇ区（約100m²）、計約2,520m²

調 査 員：柳澤和明、相原淳一、菊地逸夫

調査協力：宮城県古川産業振興事務所、宮城県古川土木事務所、加美郡西部土地改良区、加美町教育委員会

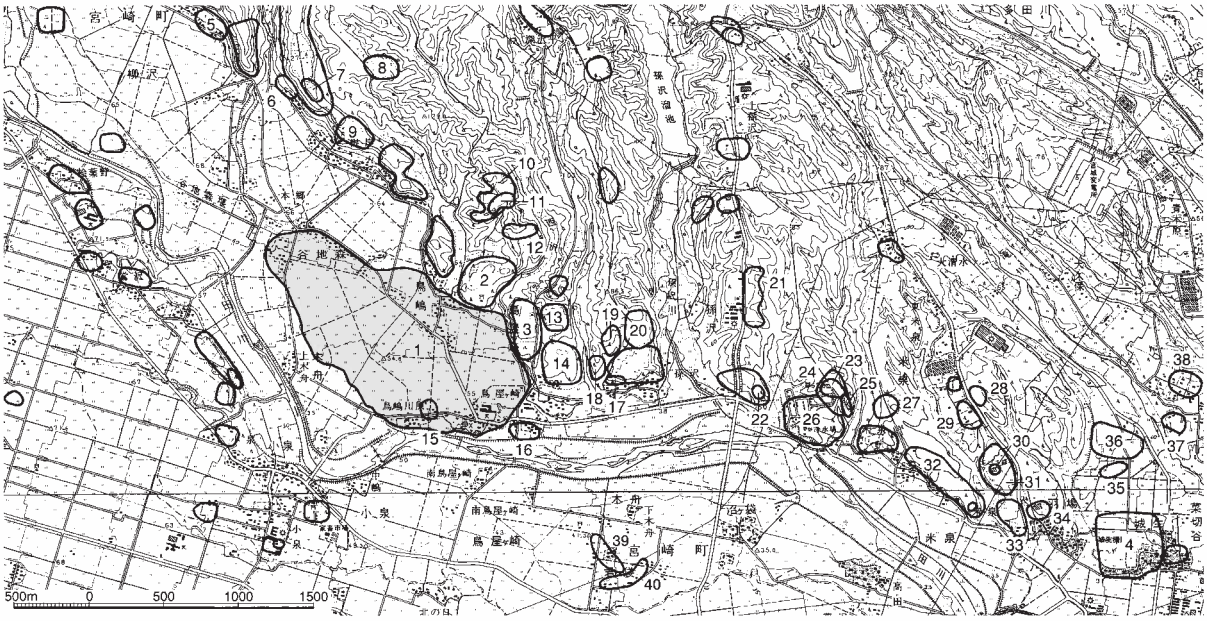
第１章　遺跡の概要と調査に至る経緯

１．遺跡の概要

壇の越遺跡は、加美郡加美町鳥嶋、鳥屋ヶ崎、谷地森に所在する。大崎平野の西端に位置し、奥羽山脈から南東に延びる丘陵の末端を東に流れる鳴瀬川支流の田川の左岸河岸段丘上に立地する。本遺跡内の段丘面は、比高差２m程の上位段丘（北東側）と下位段丘（南西側）の２段に分けられ、それらの標高は48～65mである。遺跡の範囲は東西約２km、南北約1.5km、約３㎢ときわめて広範囲に及ぶ。

本遺跡の位置する大崎平野には多くの遺跡が分布している。特に古代においては律令国家の政治、軍事の拠点として城柵・官衙遺跡が多く造営され、東から遠田郡田尻町新田柵跡、古川市宮沢遺跡（国史跡）、古川市名生館官衙遺跡（国史跡）、加美郡加美町城生柵跡（国史跡）などが知られている。

本遺跡のすぐ北側の丘陵上には加美郡家と推定されている国史跡の東山官衙遺跡がある（第１図）。12年間にわたる発掘調査の結果、東山官衙遺跡は①東西約300m、南北約250mの範囲を築地塀で区画



No.	遺　跡　名	立　地	種別	時代	No.	遺　跡　名	立　地	種別	時代
1	**壇の越遺跡**	段丘	集落	縄文・弥生・古墳・奈良・平安	21	泥坂屋敷遺跡	丘陵斜面	散布地	縄文中・晩、弥生・古墳・奈良・平安
2	国史跡　東山官衙遺跡	丘陵麓	官衙・城館	古墳後・奈良・平安・中世	22	地蔵館遺跡	丘陵麓	散布地	縄文早・前、弥生・古代
3	早風遺跡	丘陵斜面	集落	縄文中・晩、古墳・奈良・平安	23	古城遺跡	丘陵斜面	散布地	縄文早・前、古代
4	国史跡　城生遺跡	丘陵	官衙・集落・城館	縄文中・晩、奈良・平安・中世	24	念仏山古墳群	丘陵	円墳・横穴墓	古墳後
5	柳沢遺跡	丘陵麓	散布地	古代	25	米泉館山横穴墓群	丘陵斜面	横穴墓	古墳後
6	長丸木遺跡	丘陵	散布地	古代	26	米泉城本丸遺跡	丘陵	散布地	縄文・弥生・古代
7	上館遺跡	丘陵	散布地	縄文前・中・晩、古代	27	古屋敷遺跡	丘陵斜面	散布地	縄文前・中・晩、弥生・古代
8	長棺寺樋遺跡	丘陵	散布地	縄文中・晩、弥生・古墳・奈良・平安	28	中新田東遺跡	自然堤防	散布地	縄文
9	天王裏遺跡	丘陵	散布地	縄文早・前・晩、弥生・古墳？・平安	29	三吉平遺跡	丘陵	散布地	縄文早?・中・晩、弥生・古墳?・古代
10	鳥谷ケ森古墳群	丘陵尾根	方墳	古墳後	30	夷森（大塚森）古墳	丘陵	円墳	古墳前
11	古館遺跡	丘陵	散布地	縄文・古墳・奈良・平安	31	小池裏遺跡	丘陵	散布地	縄文早?・晩、弥生・古墳・奈良・平安
12	鳥谷ケ森遺跡	丘陵	散布地	縄文・古代	32	米泉古墳群	丘陵斜面	古墳	古墳中
13	愛宕山古墳群	丘陵斜面	円墳	古墳後	33	米泉遺跡	丘陵	散布地	古代
14	上の山遺跡	丘陵斜面	散布地	古墳・奈良	34	羽場遺跡	丘陵	散布地	古代
15	行人塚古墳群	段丘	古墳	古墳中	35	塚前Ａ遺跡	丘陵麓	散布地	古代
16	毘沙門堂遺跡	段丘	散布地	縄文中・晩、古代	36	町史跡　へっぴり塚古墳群	丘陵	円墳・散布地	古墳後・古代
17	孫沢古墳群	丘陵麓	円墳・方墳	古墳後	37	出羽通り遺跡	段丘	散布地	古代
18	壇だれ山遺跡	丘陵斜面	散布地	縄文前・中、古代	38	大柳遺跡	丘陵	散布地	古代
19	上の原下遺跡	丘陵斜面	散布地	縄文早?・晩、弥生・古墳・奈良・平安	39	道下遺跡	段丘	集落跡	縄文・弥生・平安・中近世
20	孫沢上の原遺跡	丘陵斜面	散布地	縄文晩・弥生・古墳・古代	40	君ケ袋館跡・遺跡	段丘	館跡、散布地	弥生・古代・中世・近世

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡（1／50,000）

し、南辺中央には南門が設けられていること、②内部は南北大溝によって東西に大きく分けられ、大溝東側には一本柱塀で区画された郡庁院、実務官衙など、大溝西側には倉庫院などが存在すること、③８世紀中葉頃に造営され、10世紀前葉頃まで存続したことなど、構造と変遷がかなり明らかとなっている（宮城県多賀城跡調査研究所、1987～1993；宮崎町教育委員会、1996～1998）。

本遺跡の発掘調査は平成８年度から毎年継続的に行われている。これまでの発掘調査の結果、①壇の越遺跡は加美郡家と推定される東山官衙遺跡と密接に関連した一連の遺跡であること、②東山官衙遺跡の外郭南門から南に延びる南北大路を基準として、路心間の距離を１町とした計画的な地割に基づいて造られていること、③南北・東西道路跡による方格地割の成立は８世紀前半頃に遡る可能性があり、８世紀末頃～９世紀初頭頃に方格地割が成立する陸奥国府多賀城跡よりも古く、全国的にみても国府以下の地方官衙関連遺跡として初めての発見であること、④方格地割内の上位段丘面の縁辺部に沿って、築地塀跡、材木塀跡、門跡、櫓跡で構成される大規模な区画施設が８世紀後葉頃に造営され、東山官衙遺跡を大きく取り囲むとみられること、⑤方格地割内には材木塀跡、溝によってさらに区画された一画もあることなどが明らかとなってきた（加美町教育委員会、2004；斉藤、2003；宮城県教育委員会、1997・1998・2003a・2004；宮崎町教育委員会、1999a・1999b・2001・2002・2003a・2003b）。

２．調査に至る経緯と調査方法

壇の越遺跡の所在する加美郡加美町鳥嶋、鳥屋ヶ崎、谷地森では、県営の宮崎北部地区経営体育成基盤備事業（ほ場整備事業）が平成８（1996）年度から実施されることになり、これと並行して県道鳥屋ヶ崎・小野田線、県道柳沢・中新田線の移設・改良工事も実施されることになった。

そこで、宮城県教育委員会では平成８（1996）年度に経営体育成基盤整備事業の対象区域約1,278,000m^2（127.8ha）について確認調査を行った（宮城県教育委員会、1997）。その結果を基に関係する宮城県土木部、宮城県古川産業振興事務所、宮城県古川土木事務所、加美郡西部土地改良区、宮崎町教育委員会と協議を行い、全域の田面を切り盛りでほ場整備する当初計画については、過度の盛土、切り土部分を極力減らすよう計画変更した。

さらに平成９（1997）年度からは、県道移設・改良工事箇所、道路側溝工事箇所、経営体育成基盤整備事業で切土される面的工事箇所、排水路、舗装道路工事箇所などについては、宮崎町教育委員会が主体となり、宮城県教育委員会が協力して事前調査を行うことにした。なお、平成15（2003）年度に宮崎町、中新田町、小野田町の３町が合併して加美町となったが、これ以降の事前調査も加美町教育委員会が引き続き調査主体となり、宮城県教育委員会が協力して実施している。

事前調査で次第に本遺跡の重要性が明らかになるにつれ、壇の越遺跡は北に隣接する国史跡の東山官衙遺跡と密接に関連し、古代東北史を解明する上できわめて重要な遺跡であることなどが次第に明らかとなってきた。

経営体育成基盤備事業の盛土工事箇所については、国庫補助事業の重要遺跡確認調査事業で宮城県教育委員会が確認調査を平成14（2002）年度より毎年度行っている。

平成16年度は、宮城県教育委員会が経営体育成基盤備事業の盛土工事箇所について確認調査を実施し（43区）、加美町教育委員会が県道移設工事箇所、経営体育成基盤備事業の切土、排水路等の工事箇所について事前調査を行った（27区、37W区、38区、40B・F・G区、44区）。

本報告は今年度に宮崎北部地区県営経営体育成基盤備事業で面的盛土工事が行われる「ほ区番号57」の約70,000m²を対象として実施した確認調査（43区）について報告するものである。

これまで判明してきている方格地割の様相と作付け前の調査期間とを勘案して43A区～43G区の７地区を設定し、計約2,520m²について確認調査を実施することにした（第２・３図）。各調査区はいずれも上位段丘面上に位置する。

確認調査の主目的は、43A区（約250m²）、43D区（約300m²）、43E区（約400m²）、43F区（約600m²）の４区が道路交差点の位置確認、43B区（約660m²）が方格地割内の様相把握、43C区（約210m²）が方格地割内の小区画の確認、43G区（約100m²）が道路跡の確認である。

確認調査は４月12日より開始し、５月26日に終了した。確認調査にあたっては、重機で表土を除去して遺構検出を行い、各遺構の掘り下げ、道路側溝、柱穴等の断ち割りについては最小限度に止めた。

また、各調査区には国家座標第Ｘ系：Ｘ＝－155,951.5700、Ｙ＝－3,200.2600を原点として国家座標第Ｘ系と平行となるように測量基準杭を移動し、原点からの東西・南北距離で示した測量基準線を使用して遺構の実測を行っている。なお、この調査原点は平成８年度に宮崎町教育委員会が設置したもので、それ以降の発掘調査についてはいずれもこれを調査原点に用いている。

各地区で検出した遺構の平面図については1／50、断面図については1／20の縮尺で作成した。また、写真撮影には、35mmカラースライド・モノクロネガフィルム、６×７モノクロネガフィルム・カラースライド、デジタルカメラを使用した。

なお、本報告の遺構平面図は1／150、遺構断面図は1／50または1／100、遺物実測図は土器、木製品が1／3、瓦が1／4、石器が2／3の縮尺で示した。

第２章　発見された遺構と遺物

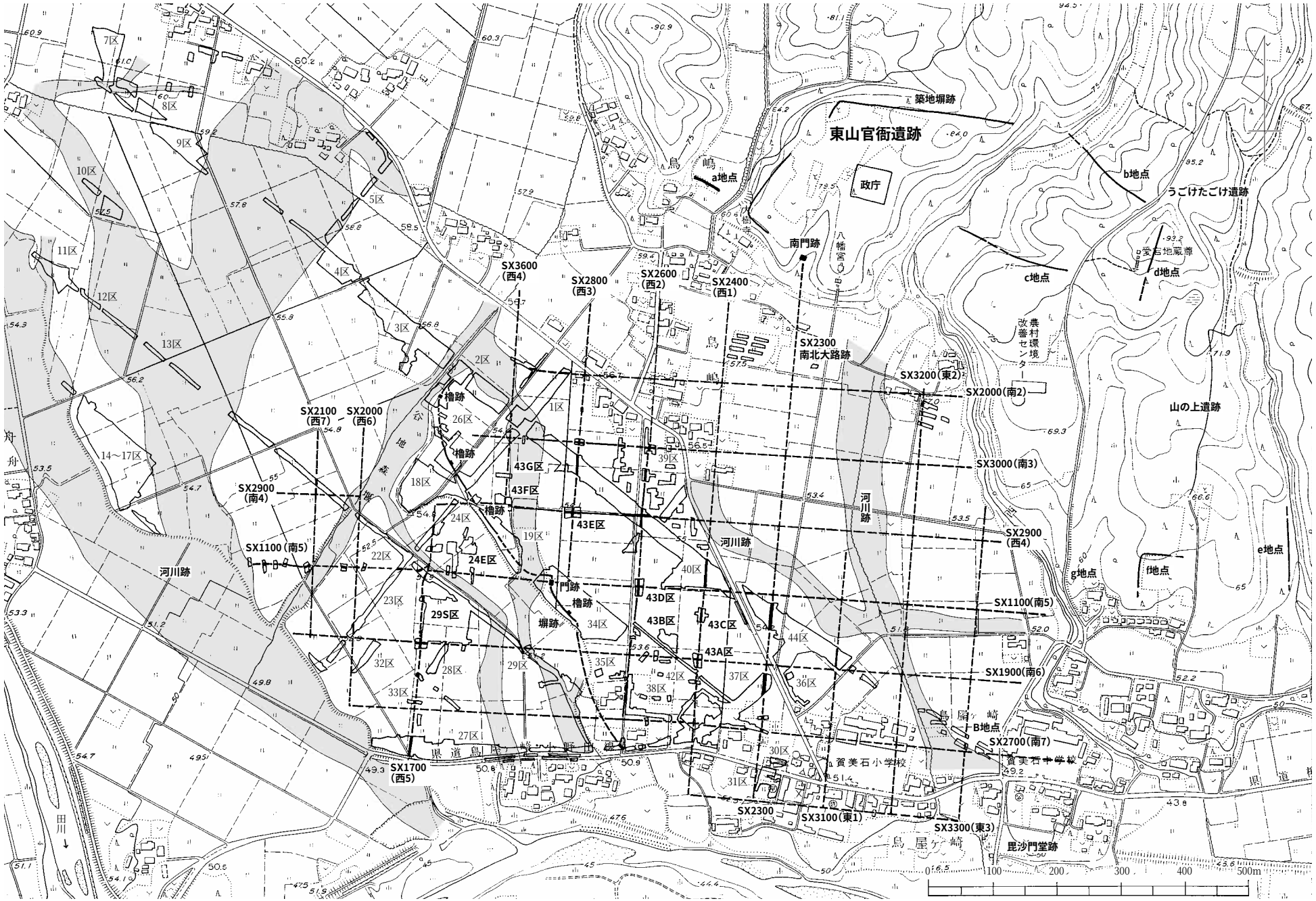
１．43Ｂ区

43B区は、後述の西２南６区の南部中央に位置する調査区である（第２・３図）。西２南６区内部をさらに小区画する材木塀跡６条（SA3523・3525・3527・3666・3667・3668）の他、掘立柱建物跡13棟（SB3641～3653）、土壙９基（SK3655～3663）、溝跡４条（SD3521・3532・3664・3665）などを地山上面で検出した（第４図、図版１～３）。なお、調査区北東部で掘立柱建物跡の一部をなすとみられる柱穴がこの他いくつかあり、さらに建物跡の軒数は増えるものとみられる。

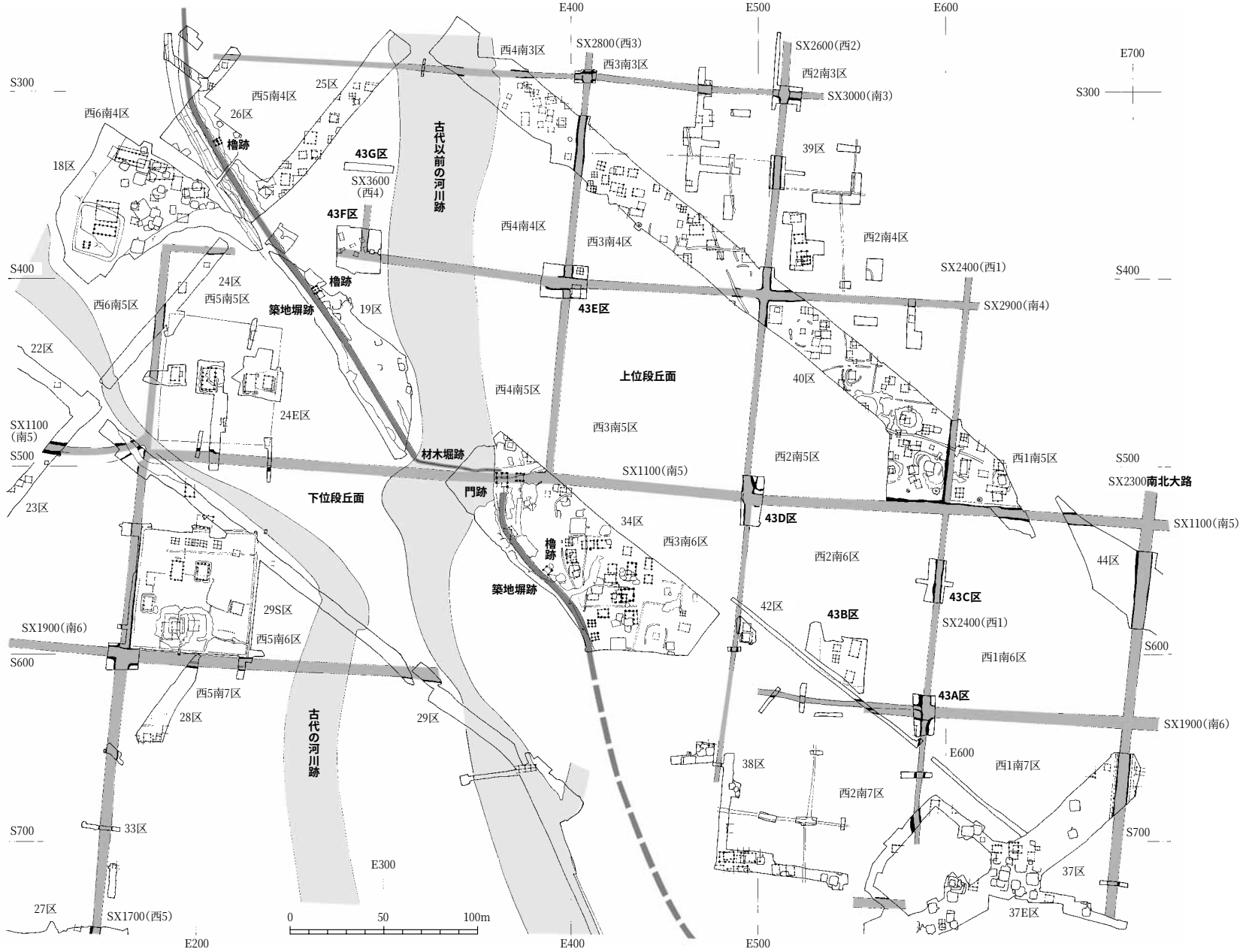
(1) 材木塀跡

【SA3523材木塀跡】

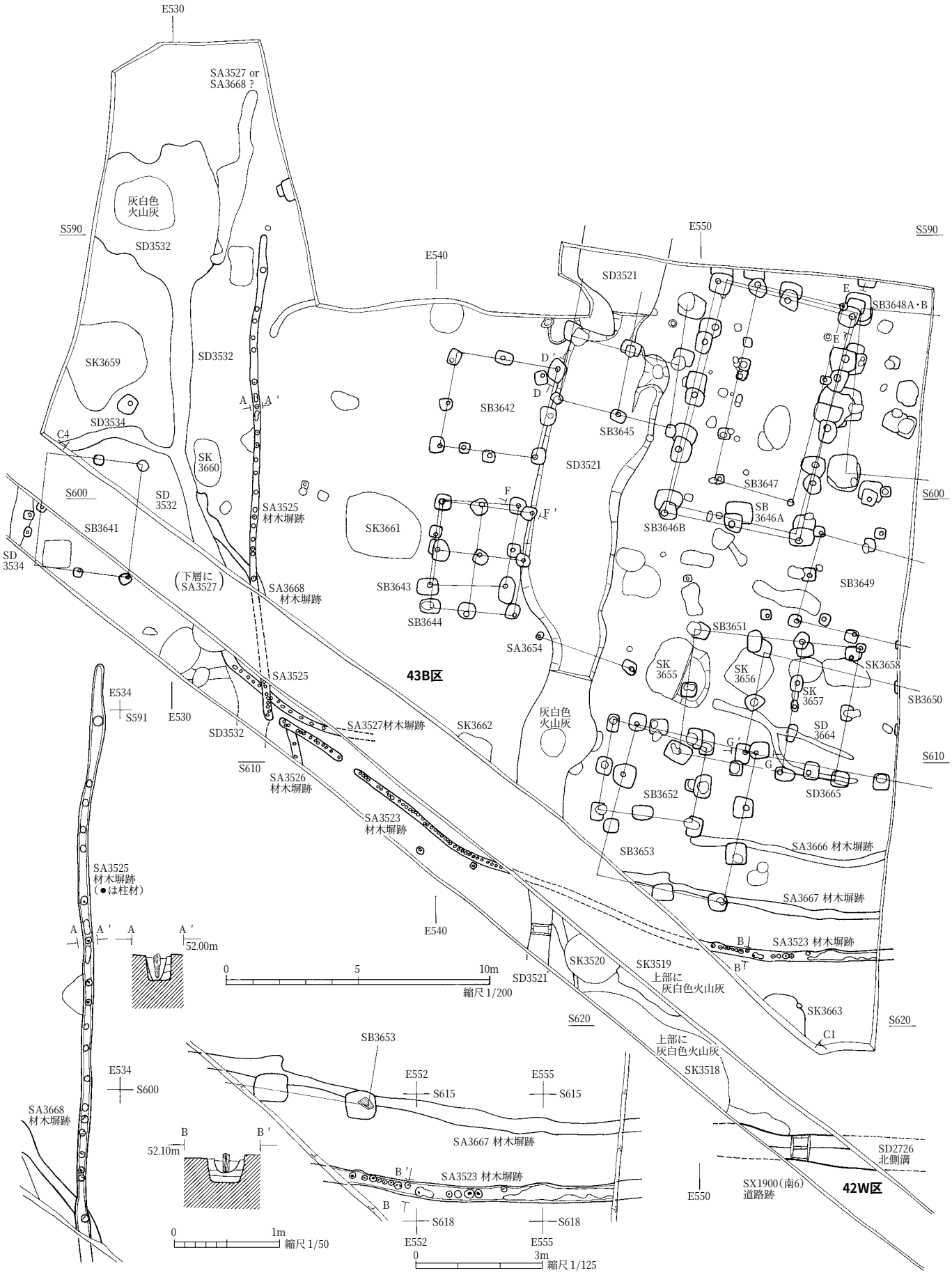
東西方向の材木塀跡で、42W区からみると、長さ約21.0m分検出した。42W区では西で北に約47°偏りながら約5.2m延び、そこから西で北に約20°と偏りを小さくしながら東に延びていたが、本調査区ではほぼ東西方向を向いてSX1900（南６）東西道路跡のSD2776北側溝と平行している。本調査



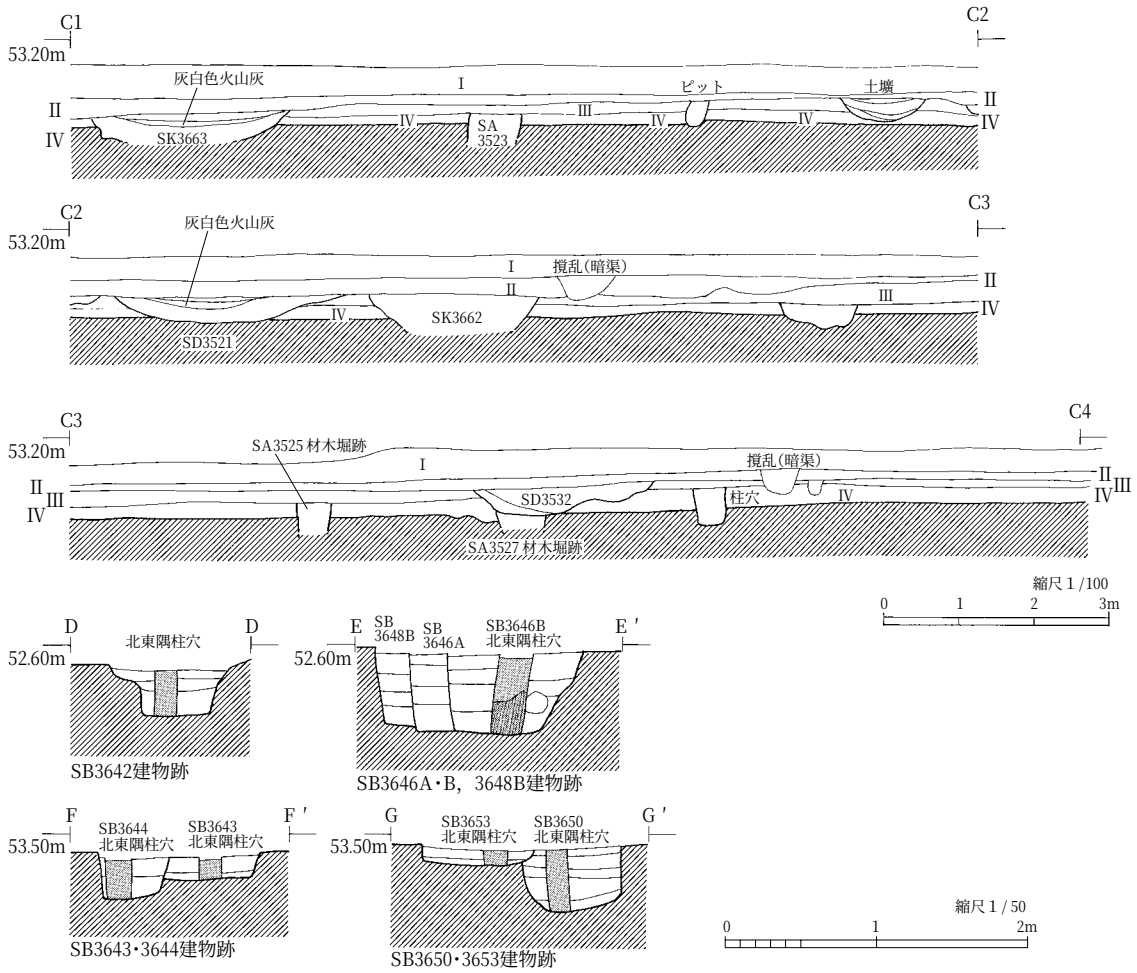
第２図　既発掘調査区の位置と方格地割・築地塀跡・門跡（1／8,000）



第３図　南北大路跡よりも西側の方格地割の様相（1／3,000）



第４図　43Ｂ区平面図（1／200、1／125）・断面図（1／50）



第５図　43Ｂ区南壁断面図（1／100）・柱穴断面図（1／50）

遺構・層位		特徴
SA3523材木塀跡	掘方	地山橙色（7.5YR6/6）砂質シルト土ブロックを多く含む黒色（7.5YR7/1）砂質シルト土の互層。しまりがよい。人為堆積土。
	抜取溝	黒色（7.5YR2/1）砂質シルト土。しまりが悪い。
	柱痕跡	黒色（7.5YR2/1）砂質シルト土。しまりが悪い。自然堆積土。部分的に柱材が残る。
SA3525材木塀跡	掘方	地山ブロックを多く含むにぶい黄褐色（7.5YR4/3）砂質シルト土。しまりがよい。人為堆積土。
	抜取溝	地山ブロックを多く含むにぶい黄褐色（7.5YR4/3）砂質シルト土。しまりが悪い。自然堆積土。
	柱痕跡	地山ブロックを多く含むにぶい黄褐色（7.5YR4/3）砂質シルト土。しまりが悪い。自然堆積土。部分的に柱材が残る。
SB3642建物跡	掘方	砂礫を多く含む黒色（7.5YR2/1）砂質シルト土。人為堆積土。
	柱痕跡	黒色（7.5YR2/1）砂質シルト土。しまりが悪い。自然堆積土。
SB3643建物跡	掘方	砂礫を多く含む黒色（7.5YR2/1）砂質シルト土。人為堆積土。
	柱痕跡	黒色（7.5YR2/1）砂質シルト土。しまりが悪い。自然堆積土。
SB3644建物跡	掘方	砂礫を多く含む黒色（7.5YR2/1）砂質シルト土。人為堆積土。
	柱痕跡	黒色（7.5YR2/1）砂質シルト土。しまりが悪い。自然堆積土。
SB3646Ａ建物跡	掘方	径2～10cmのにぶい橙色（7.5YR7/4）地山粘質シルト土ブロックを多く含む黒色（7.5YR2/1）砂質シルト土の互層。人為堆積土。
SB3646Ｂ建物跡	掘方	径2～10cmのにぶい橙色（7.5YR7/4）地山粘質シルト土ブロックを多く含む黒色（7.5YR2/1）砂質シルト土の互層。人為堆積土。
	柱痕跡	黒色（7.5YR2/1）砂質シルト土。しまりなし。粘性あり。柱材の一部が残る。
SB3648Ｂ建物跡	掘方	径2～10cmのにぶい橙色（7.5YR7/4）地山粘質シルト土ブロックを多く含む黒色（7.5YR2/1）砂質シルト土の互層。人為堆積土。
SB3650建物跡	掘方	地山黄色・灰褐色砂質土ブロックを多く含む黒色（7.5YR7/1）砂質シルト土の互層。しまりよい。人為堆積土。
	柱痕跡	黒色（7.5YR2/1）砂質シルト土。しまりが悪い。自然堆積土。
SB3653建物跡	掘方	地山黄色・灰褐色砂質土ブロックを多く含む黒色（7.5YR7/1）砂質シルト土の互層。しまりよい。人為堆積土。
	柱痕跡	黒色（7.5YR2/1）砂質シルト土。しまりが悪い。自然堆積土。
SK3662土壙		焼土粒、地山ブロックを含む黒褐色（10YR2/3）砂質シルト土。人為堆積土。
SK3663土壙	１層	黒色（10YR1.7/1）シルト土。しまりない。自然堆積土。
	２層	10世紀前葉頃に降灰した灰白色火山灰。自然堆積土。
	３層	砂礫、地山ブロックを含む黒褐色（5YR2/1）砂質シルト土。自然堆積土。
SD3521溝	１層	黒色（10YR1.7/1）シルト土。しまりない。自然堆積土。
	２層	10世紀前葉頃に降灰した灰白色火山灰。自然堆積土。
	３層	焼土粒、砂礫、地山土ブロックを含む黒褐色（5YR2/1）砂質シルト土。自然堆積土。遺物を多く含む。
SD3532溝	１層	灰白色火山灰ブロック、炭粒、地山ブロックを含むにぶい黄褐色（10YR4/3）シルト土。自然堆積土。
	２層	褐色（10YR3/3）砂質シルト土。自然堆積土。
基本層	Ⅰ層	水田耕作土。オリーブ褐色(2.5Y4/3）砂質シルト土。
	Ⅱ層	ラミナ状に砂を含む黒色（10YR2/2）砂質シルト土。自然堆積土。
	Ⅲ層	部分的にラミナ状に砂を含む黒色（10YR1.7/1）砂質シルト土。自然堆積土。「層と」層の堆積間に灰白色火山灰が降灰。
	Ⅳ層	黒色（10YR1.7/1）粘質シルト土。旧表土。自然堆積土。
	Ⅴａ層	地山漸移層。にぶい黄褐色（10YR4/3）砂質シルト土。
	Ⅴｂ層	地山。黄褐色（10YR5/6）砂。

表１　43Ｂ区遺構断面図（第４・５図）土層一覧

区でみると、SD2776北側溝とは心々で約7.3m北に位置する。42W区で検出した東西方向の長さが短いSA3524材木塀跡を介在して、南北方向のSA3525材木塀跡へと続く一連の区画施設で、西２南６区の南東部をさらに小区画する塀跡とみられる。位置関係からみてすぐ北に位置するSB3653掘立柱建物跡と同時期に存在したとみられる。

掘方は上幅約35～50cm、下幅約25cm、深さ約26cm、断面逆台形状の布掘状で、地山ブロックを多く含む黒褐色土の互層で人為的に埋め戻されている。柱を溝状に抜き取りした箇所と円形の柱材や柱痕跡の残る箇所とがある。この状況は42W区でも確認している。柱材、柱痕跡の残る箇所では、径約10cmの円形の柱痕跡を約10～20cm間隔で検出した。掘方から非ロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏・壺・蓋破片が少数出土した。このうち須恵器坏にはヘラ切りの底部破片（第６図14）、回転糸切り後に手持ちヘラケズリした底部破片がある。

【SA3525材木塀跡】

南北方向の材木塀跡で、長さ約13.5m分検出した。約42W区で検出した南端から長さ約18.5m分検出したことになる。検出した北端で残りが悪いが、さらに北に延びるとみられる。SA3668材木塀跡よりも新しい。42W区ではSA3527材木塀跡より新しく、10世紀前葉頃に降灰した灰白色火山灰の下位にある。42W区でSD3532溝跡の遺存状況が悪くて新旧関係を確認できなかったが、この溝よりも古いとみられる。検出した両端でみるとほぼ磁北を向いている。掘方は上幅約20～35cm、下幅約20cm、深さ約35cm、断面逆台形状の布掘状で、地山ブロックを多く含む黒褐色土の互層で人為的に埋め戻されている。円形の柱材が一部残り、径約14～18cmの円形の柱痕跡を約5～30cm間隔で検出した。

【SA3527材木塀跡】

本調査区南壁のSD3532溝跡の下層で布掘を検出した（第８図断面C3－C4）。42W区で検出していたSA3527材木塀跡の北延長にあたるとみられる。位置関係と重複関係から、南北方向のSD3532溝に沿うようにその下層に位置しているとみられる。42W区ではSA3525材木塀跡と重複してこれよりも古く、柱痕跡は径約20cmの円形で、柱は切り取られていることを確認している。なお、調査区北西部ではSD3532溝跡よりも古い浅い溝跡を検出している。本材木塀跡または後述のSA3668材木塀跡の延長の可能性もある。

【SA3666材木塀跡】

東西方向の溝跡で、長さ約7.4m分検出した。残りのよいSA3523材木塀跡とほぼ平行し、その北約４mに位置する。SB3652・3653掘立柱建物跡と重複し、これらよりも古い。上幅20～30cm、深さ約5cmである。遺存状況が悪く、ほとんど底面に近い。柱痕跡、柱抜取溝は検出していないが、SA3523材木塀跡との位置関係、SA3523材木塀跡と同時期とみられるSB3653掘立柱建物跡よりも古いことから、材木塀跡と考えられる。また、位置関係からみてSA3668材木塀跡に接続する可能性がある。

【SA3667材木塀跡】

東西方向の溝跡で、長さ約10.0m分検出した。残りのよいSA3523材木塀跡とほぼ平行し、その北約１mに位置する。SB3653掘立柱建物跡と重複し、これよりも古い。上幅は20～50cm、深さ約5cmで

ある。遺存状況が悪く、ほとんど底面に近い。重複するSB3653掘立柱建物跡の南東隅柱穴もほとんど底面近くまで削平されている。柱痕跡、柱抜取溝は検出していないが、SA3523材木塀跡との位置関係、SA3523材木塀跡と同時期とみられるSB3653掘立柱建物跡よりも古いことから、材木塀跡と考えられる。また、位置関係からみて42W区で検出したSA3527材木塀跡に接続する可能性がある。

【SA3668材木塀跡】

南北方向の溝跡で、長さ約2.4m分検出した。SA3525材木塀跡、SD3532溝跡と重複し、これらよりも古い。上幅20～40cm、深さ約5cmである。遺存状況が悪く、ほとんど底面に近い。柱痕跡、柱抜取溝は検出していないが、SA3525材木塀跡よりも古く、ほぼ同じ位置にあることから材木塀跡と考えられる。また、位置関係からみてSA3666材木塀跡に接続する可能性がある。

(2) SB3641～3653掘立柱建物跡

【SB3641掘立柱建物跡】

調査区南西部から42W区に位置する。桁行２間、梁行２間の南北棟とみられ、本調査区では北妻にあたる２個の柱穴を検出した。掘方は一辺約30～40cmの方形で、埋土は地山ブロックを多く含む褐色土である。柱痕跡は径約24cmの円形である。東側柱列でみると桁行は総長約4.3m、方向は北で東に約８°偏る。北妻でみると梁行は総長約3.6mと推定される。

【SB3642掘立柱建物跡】

調査区中央北寄りに位置する。SD3521溝と重複し、これよりも古い。東西２間、南北２間で平面形は正方形に近い。８個すべての柱穴を検出し、そのすべてで柱痕跡を確認した。掘方は一辺約50～80cmの方形で、埋土は地山砂礫・灰色土ブロックを多く含む黒色土である。断ち割りを行った北東隅柱穴では深さ35cmある（第５図断面図D－D'）。柱痕跡は径約16cmの円形で、西妻棟通り下柱穴では柱材の一部が残る。南側柱列でみると総長約3.6m、柱間寸法は西から約1.9m、約1.7mで、方向は東で南に約７°偏る。東側柱列でみると総長約3.5m、柱間寸法は北から約1.8m、約1.7mである。

【SB3643掘立柱建物跡】

調査区中央に位置する。SB3644掘立柱建物跡と重複し、これよりも古い。桁行２間、梁行１間の南北棟で、北西隅柱穴を除く５個の柱穴を検出し、そのすべてで柱痕跡を確認した。掘方は一辺約50～100cmの方形で、埋土は地山砂礫・黄色土・灰色土ブロックを多く含む黒色土である。断ち割りを行った北東隅柱穴では深さ17cmある（第５図断面図Ｆ－Ｆ'）。柱痕跡は径約15～20cmの円形である。東側柱列でみると桁行は総長約3.1m、柱間寸法は北から約1.7m、約1.4mで、方向は北で東に約10°偏る。南妻でみると梁行総長・柱間寸法とも約2.9mである。平面形はやや歪んでいる。

【SB3644掘立柱建物跡】

調査区中央に位置する。SB3643掘立柱建物跡よりも新しく、SD3521溝跡よりも古い。桁行２間、梁行２間の総柱南北棟で、９個すべての柱穴を検出し、８箇所で柱痕跡、１箇所で柱抜取穴を確認した。掘方は一辺約50～70cmの方形で、埋土は地山砂礫・黄色土・灰色土ブロックを多く含む黒色土である。断ち割りを行った北東隅柱穴では深さ30cmある（第５図断面図Ｆ－Ｆ'）。柱痕跡は径約15～18cmの円形である。東側柱列でみると桁行は総長約3.9m、柱間寸法は北から約1.7m、約2.1mで、方

向は北で東に約10°偏る。北妻でみると梁行は総長約3.4m、柱間寸法は西から約1.5m、約1.9mである。

【SB3645掘立柱建物跡】

調査区中央北寄りに位置する。SB3646掘立柱建物跡よりも新しく、SD3521溝跡よりも古いが、SB3642掘立柱建物跡との新旧関係は不明である。７個の柱穴を検出し、うち１箇所で柱痕跡、６箇所で抜取穴を確認した。桁行２間以上、梁行２間の南北棟とみられる。掘方は一辺40～100cmの方形で、埋土は地山黄色土ブロックを多く含む黒色土である。南妻でみると梁行は総長約4.5m、柱間寸法は西から約2.3m、約2.2mと推定される。抜取穴には焼土・炭片が多く含まれ、火災にあって焼失したとみられる。

掘方から回転糸切り無調整の須恵器坏底部破片（第６図17）の他、須恵器坏・甕・壺破片、柱抜取穴から非ロクロ調整の土師器甕、須恵器坏・甕・壺破片、鉄滓２点が出土した。

【SB3646A・B掘立柱建物跡】

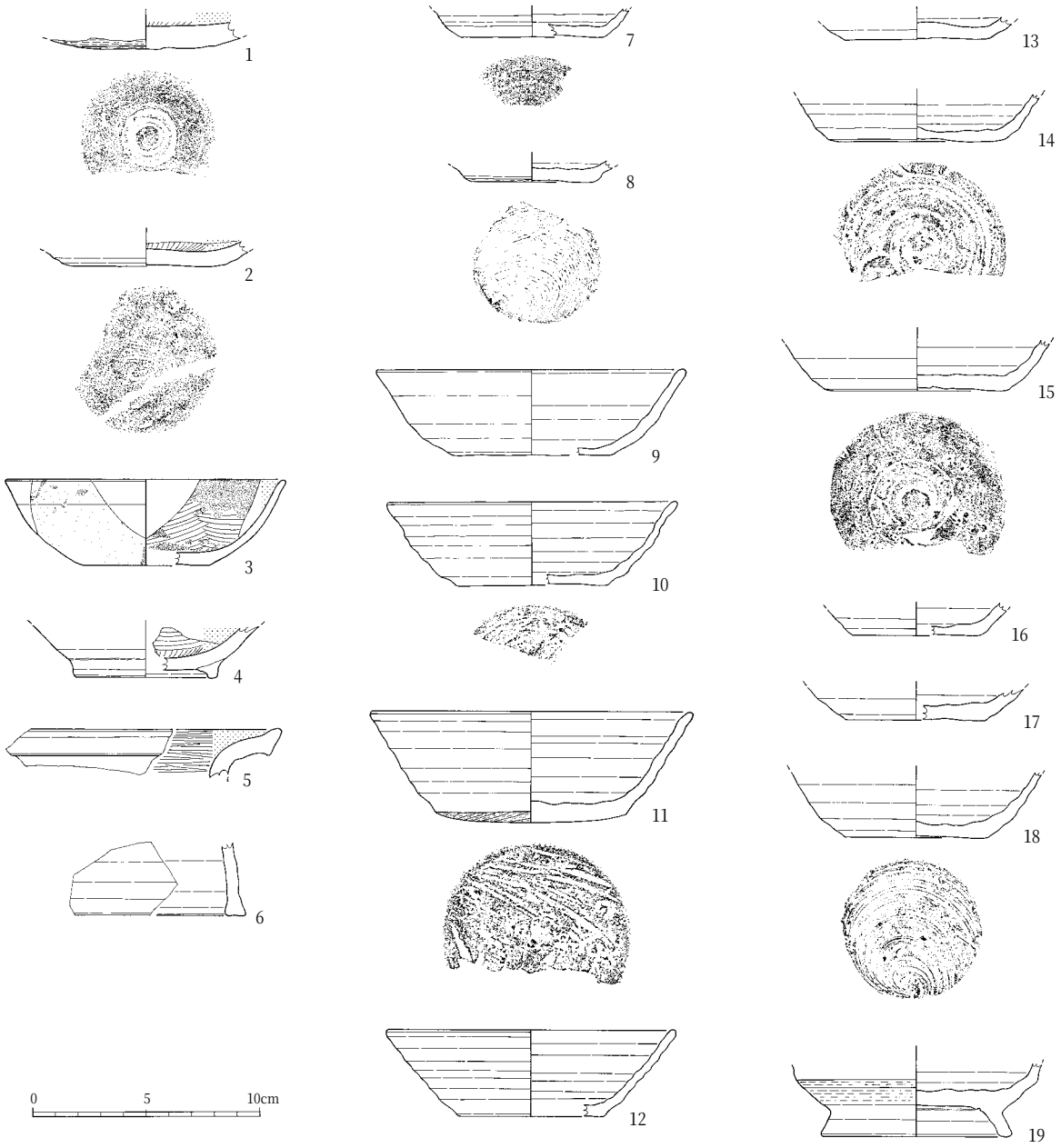
調査区北東部に位置する。SB3648掘立柱建物跡よりも新しく、SB3645・3647・3649掘立柱建物跡よりも古い。桁行４間、梁行２間の南北棟で、新旧２時期あり、位置を南に約60cmずらして建て替えられている。12個すべての柱穴を検出し、新しいB建物跡のすべての柱穴で柱痕跡を確認した。掘方は一辺約60～90cmの方形で、埋土は地山黄色土ブロックを多く含む黒色土である。断ち割りを行った北東隅柱穴では深さ55cmあり、柱材の一部が残存していた（第５図断面図Ｅ－Ｅ’）。Ｂ建物跡の柱痕跡は径約25cmの円形である。Ｂ建物跡の西側柱列でみると、桁行は総長約9.0m、柱間寸法は北から約2.3m、約2.0m、約2.2m、約2.5mで、方向は北で東に約13°偏る。北妻でみると梁行は総長約5.2m、柱間寸法は西から約2.7m、約2.5mである。

Ａ建物跡の掘方から、ロクロ調整の土師器坏（第６図２）・高台坏（第６図４）、非ロクロ調整の土師器甕、須恵器坏・甕・壺破片、柱痕跡から非ロクロ調整の土師器甕破片が少数出土した。このうち掘方出土の土師器坏には回転糸切り後に手持ちヘラケズリした底部破片（第６図２）、須恵器坏には回転糸切り無調整の底部破片、手持ちヘラケズリの底部破片がある。また、Ｂ建物跡の掘方からは非ロクロ調整の土師器甕、ロクロ調整の土師器甑（第６図６）、須恵器坏（第６図12・16）・甕・壺破片、柱痕跡からロクロ調整の土師器坏、須恵器坏・甕破片が少数出土した。このうち掘方出土の須恵器坏には底部の切り離しがヘラ切りのもの（第６図12）と回転糸切り無調整のもの（第６図16）とがある。

【SB3647掘立柱建物跡】

調査区北東部に位置する。SB3646掘立柱建物跡と重複し、これよりも新しい。桁行３間、梁行１間の南北棟で、東側柱列の南から１間目柱穴を除く７個の柱穴を検出した。掘方は一辺約30～50cmの方形を基調とし、埋土は地山黄色土ブロックを多く含む黒色土である。６箇所で径約14～20cmの円形の柱痕跡を検出した。西側柱列でみると、桁行は総長約7.5m、柱間寸法は北から約3.1m、約2.8m、約1.7mで、方向は北で東に約14°偏る。南妻でみると梁行は総長・柱間とも約2.8mである。

掘方から須恵器坏・甕破片、柱痕跡から非ロクロ調整とロクロ調整の土師器甕破片が出土した。このうち掘方出土の須恵器坏には底部を手持ちヘラケズリしたもの（第６図９）がある。



番号	種　類	遺構	層位	口径	底径	器高	残存	特　　徴	写真	登録
1	土師器坏	SB3652	検出時		6.0		3/4	ロクロ調整。外面：底部ヘラ切り→体下部～底部回転ヘラケズリ。内面：ヘラミガキ→黒色処理。焼成普通。		R27
2	土師器坏	SB3646A	掘方		6.8		2/3	ロクロ調整。外面：底部回転糸切り→底部手持ちヘラケズリ。内面：放射状ヘラミガキ→黒色処理。焼成普通。		R28
3	土師器坏	SB3652	検出時	14.4	5.6	3.8	1/4	ロクロ調整。外面：摩滅、体下部～底部の調整不明。黒色漆皮膜付着。内面：ヘラミガキ→黒色処理、赤黒い漆皮膜付着。焼成普通。		R29
4	土師器高台坏	SB3646A	掘方				破片	ロクロ調整。高台径6．4cm。底部切り離し不明→付高台。内面：放射状ヘラミガキ→黒色処理。焼成普通。		R30
5	土師器甕	SB3648B	抜取穴				破片	突帯縁。ロクロ調整。外面：ロクロナデ。内面：ヘラミガキ→黒色処理。焼成普通。	10-7	R31
6	土師器甑	SB3646B	掘方				破片	ロクロ調整。焼成普通。		R32
7	須恵器坏	SB3645	抜取穴		6.4		1/6	底部：切り離し不明→回転ヘラケズリ→部分的ナデ。焼成ややあまい。		R33
8	須恵器坏	SB3652	検出時		5.4		2/3	底部：回転糸切り→体下端回転ヘラケズリ。焼成普通。		R34
9	須恵器坏	SB3647	掘方	13.7	7.0	3.8	1/4	底部：切り離し不明→手持ちヘラケズリ。生焼け。外面の体下部～底部に黒斑。		R35
10	須恵器坏	SB3651	抜取穴	12.8	6.7	3.7	1/4	底部：ヘラ切り→手持ちヘラケズリ。焼成普通。		R36
11	須恵器坏	SB3648B	抜取穴	14.2	8.5	4.9	2/3	底部：切り離し不明→手持ちヘラケズリ。焼成普通。外面に火襷痕。内面に手擦れ痕。	9-10	R37
12	須恵器坏	SB3646B	掘方	12.8	6.4	3.8	>1/6	底部：ヘラ切り。焼成普通。口縁部に重ね焼き痕。		R38
13	須恵器坏	SB3652	検出時		6.4		1/4	底部：ヘラ切り。生焼け。		R39
14	須恵器坏	SA3523	掘方		7.8		1/2	底部：ヘラ切り。焼成普通。		R40
15	須恵器坏	SB3651	抜取穴		8.1		3/4	底部：ヘラ切り。焼成良好。		R41
16	須恵器坏	SB3646B	掘方		5.6		1/4	底部：回転糸切り無調整。焼成普通。		R42
17	須恵器坏	SB3645	掘方		6.2		<1/6	底部：回転糸切り無調整。焼成ややあまい。		R43
18	須恵器坏	SB3651	抜取穴		6.3		1	底部：回転糸切り無調整。焼成普通。		R44
19	土師器高台坏	SB3648B	抜取穴				1	高台径8．5cm、高台高1．1cm。底部切り離し不明→体下部～底部回転ヘラケズリ→付高台。焼成普通。内面見込みに重ね焼きした上の高台坏の高台の一部が融着。		R45

第６図　43Ｂ区出土遺物（1）－材木塀跡・掘立柱建物跡

【SB3648A・B掘立柱建物跡】

調査区北東部に位置し、北東部の掘立柱建物跡の中では最も古い。新旧２時期ある西側の柱列を検出したのみで、棟方向・規模など詳細は不明である。掘方は一辺約1.0～1.2mと大きく、埋土は地山黄色土ブロックを多く含む黒色土である。断ち割りを行った北西隅柱穴では深さ52cmある（第５図断面図Ｅ－Ｅ’）。柱は抜き取られている。

Ｂ建物跡の掘方から底部手持ちヘラケズリの須恵器坏破片など、Ｂ建物跡の柱抜取穴からロクロ調整の内黒土師器甕口縁部破片（第６図５）、底部手持ちヘラケズリの須恵器坏（第６図11）、須恵器高台坏（第６図19）・蓋・壺破片などが少数出土した。

【SB3649掘立柱建物跡】

調査区東部中央に位置する。桁行２間以上、梁行２間の東西棟で、調査区外の東に延びる。SB3646掘立柱建物跡と重複し、これよりも新しい。６個の柱穴を検出し、４箇所で柱痕跡、１箇所で柱抜取穴を確認した。掘方は一辺50cm前後の方形で、埋土は地山黄色土ブロックを多く含む黒色土である。柱痕跡は径約14cmの円形である。南側柱列でみると、桁行は総長3.9m以上、柱間寸法は西から１間目が約2.2mで、方向は東で南に約13°偏る。西妻でみると梁行は総長約3.5m、柱間寸法は北から約1.7m、約1.8mである。柱痕跡から非ロクロ調整の土師器甕体部破片が出土した。

【SB3650掘立柱建物跡】

調査区東部中央南寄りに位置する。SB3651・3653掘立柱建物跡、SK3658土壙、SD3664・3665溝跡よりも古い。桁行２間以上、梁行２間の東西棟で、調査区外の東に延びる。６個の柱穴を検出し、３箇所で柱痕跡、１箇所で柱抜取穴を確認した。掘方は一辺約60～80cmの方形で、埋土は地山黄色土ブロックを多く含む黒色土である。断ち割りを行った南西隅柱穴では深さ40cmある（第５図断面図Ｇ－Ｇ’）。柱痕跡は径約16～20cmの円形である。南側柱列でみると、桁行は総長5.2m以上、柱間寸法は西から約2.5m、約2.7mで、方向は東で南に約10°偏る。西妻でみると梁行は総長約3.8m、柱間寸法は北から約1.9m等間と推定される。柱穴から非ロクロ調整の土師器坏・甕破片が少数出土した。

【SB3651掘立柱建物跡】

調査区東部中央南寄りに位置する。SK3655土壙、SD3664・3665溝跡よりも古く、SB3650掘立柱建物跡、SK3657・3658土壙よりも新しい。桁行３間、梁行２間の東西棟で、東から１間目に間仕切りの柱穴３個がある。13個すべての柱穴を検出し、５箇所で柱痕跡、７箇所で柱抜取穴を確認した。掘方は一辺約50～100cmの方形で、埋土は地山黄色土ブロックを多く含む黒色土である。柱痕跡は径約16～20cmの円形である。南側柱列でみると、桁行は総長約6.0m、柱間寸法は西から約2.2m、約1.7m、約2.1mで、方向は東で南に約11°偏る。西妻でみると梁行は総長約4.7m、柱間寸法は北から約2.2m、約2.5mである。

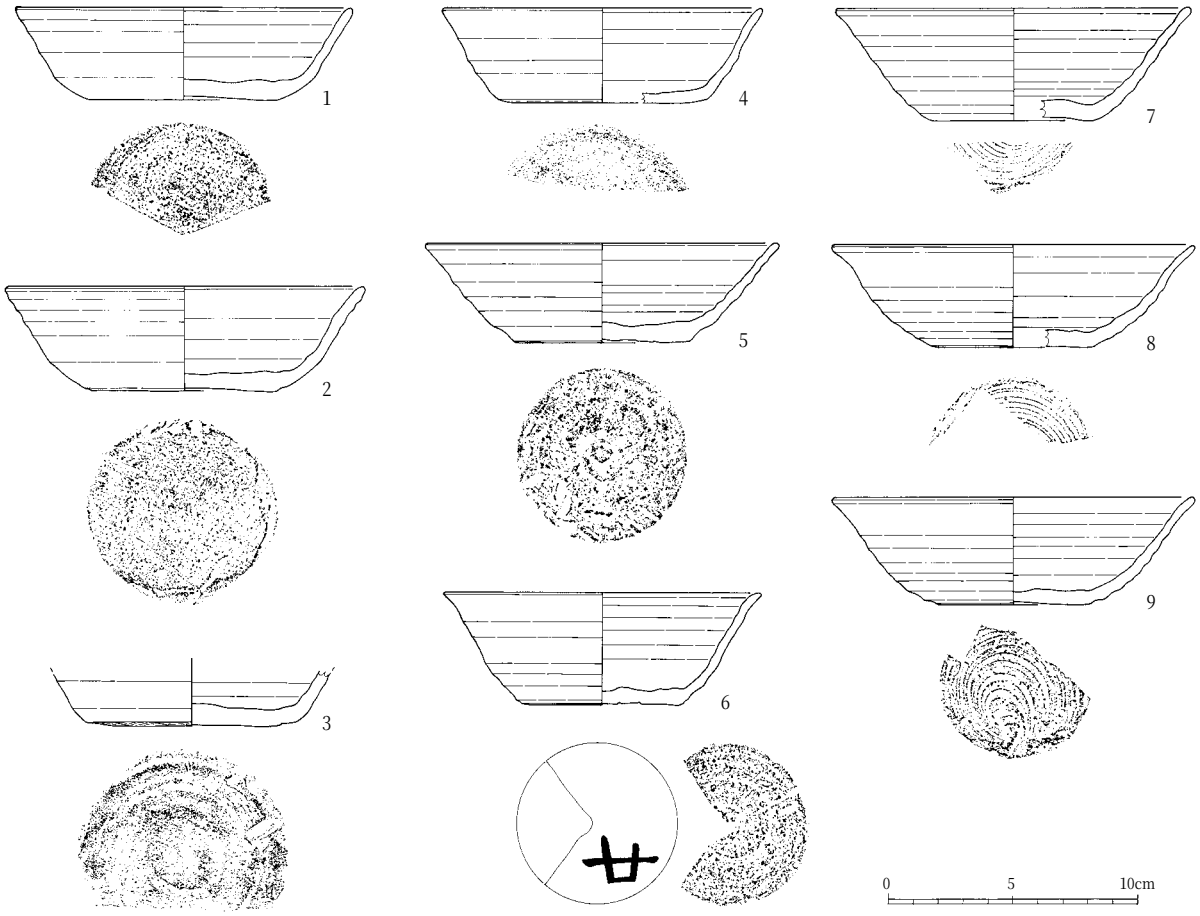
柱穴掘方から非ロクロ調整とロクロ調整の土師器甕、須恵器坏・甕破片、柱抜取穴から非ロクロ調整の土師器甕、ロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏破片、柱痕跡からロクロ調整の土師器坏、須恵器坏破片が少数出土した。このうち柱抜取穴出土の須恵器坏には、底部の切り離しがヘラ切りのもの（第６図15）、回転糸切り無調整のもの（第６図18）、ヘラ切り後に手持ちヘラケズリしたもの（第６

図10）がある。

【SB3652掘立柱建物跡】

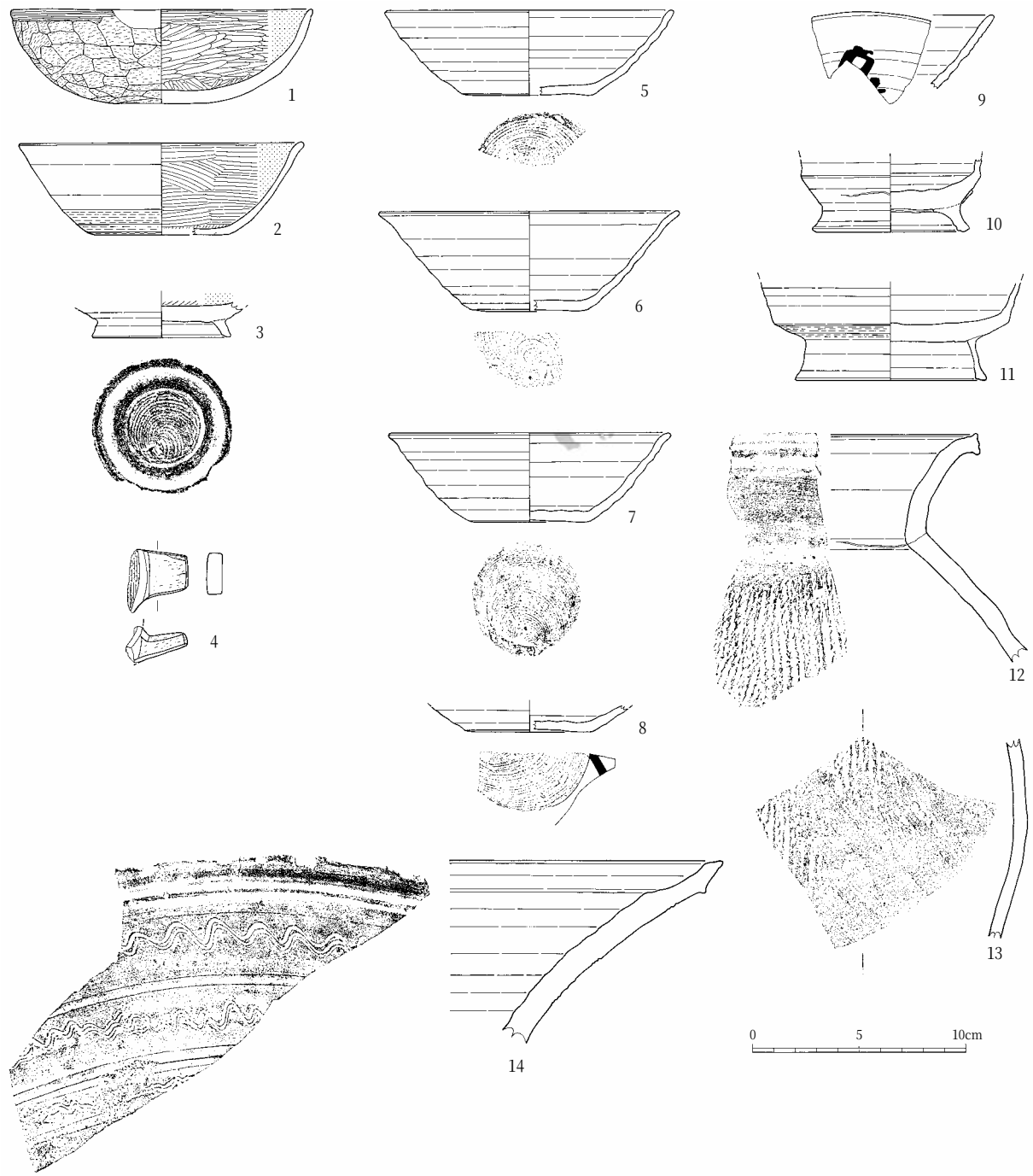
調査区南東部に位置する。SB3653掘立柱建物跡と重複し、これよりも古い。SB3651掘立柱建物跡とも重複するが、新旧関係は不明である。桁行２間、梁行２間の東西棟で、８個すべての柱穴を検出した。柱はすべて抜き取られている。掘方は一辺約40～90cmの方形で、埋土は地山黄色土ブロックを多く含む黒色土である。北側柱列でみると、桁行は総長約3.7m、柱間寸法は西から約1.8m、約1.9m、方向は東で南に約17°偏ると推定される。西妻でみると、梁行は総長約3.4m、柱間寸法は西から約1.7m、約1.7mである。桁行総長が西側柱列で東側柱列よりも約60cm長いことから、平面形はやや歪んでいる。

掘方から須恵器坏破片、柱穴検出時にロクロ調整で両面に黒漆皮膜の付着する土師器坏（第６図３）、底部ヘラ切り後に回転ヘラケズリしたロクロ調整の土師器坏（第６図１）、底部回転糸切り後に回転ヘラケズリした須恵器坏(第６図８)、底部ヘラ切りの須恵器坏(第６図13)などの破片が少数出土した。



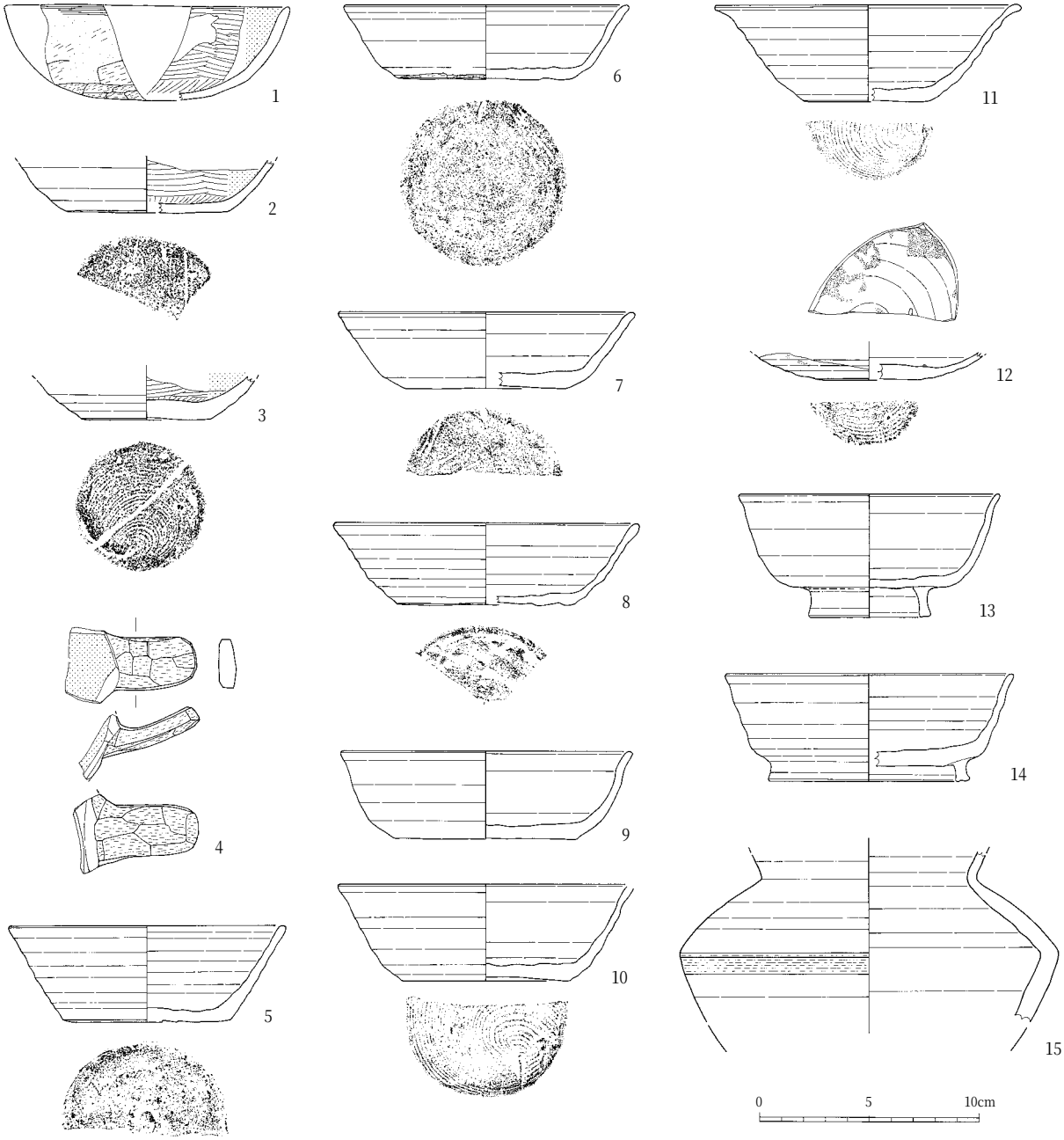
番号	種　類	遺構	層位	口径	底径	器高	底径比	残存	特　　徴	写真	登録
1	須恵器坏	SK3660	堆積土	13.5	7.4	3.7	0.548	1/3	底部：切り離し不明→手持ちヘラケズリ。焼成あまい。両面に火襷痕。		R46
2	須恵器坏	SK3660	堆積土	13.7	7.4	4.2	0.540	1	底部：切り離し不明→手持ちヘラケズリ。焼成良好。両面に火襷痕。内面底部に重ね焼きした際の融着物付着。	9-11	R47
3	須恵器坏	SK3659	検出面		8.4			2/3	底部：ヘラ切り→手持ちヘラケズリ。焼成普通。両面に火襷痕。		R48
4	須恵器坏	SK3659	検出面	12.8	8.4	3.8	0.656	1/3	底部：ヘラ切り→回転ヘラケズリ。焼成普通。両面に火襷痕。		R49
5	須恵器坏	SK3659	検出面	14.2	7.1	4.0	0.500	1	底部：ヘラ切り→部分的圧痕。焼成普通。		R50
6	須恵器坏	SK3659	検出面	12.8	6.5	4.5	0.508	2/3	底部：ヘラ切り。墨書「廿」。口縁部に重ね焼き痕。焼成普通。体部に焼け膨れ２カ所。	9-12, 10-2	R51
7	須恵器坏	SK3659	検出面	14.2	6.4	4.5	0.451	1/4	底部：回転糸切り無調整。焼成あまい。		R52
8	須恵器坏	SK3659	検出面	14.6	6.5	4.1	0.445	<1/2	底部：回転糸切り無調整。焼成ややあまい。		R53
9	須恵器坏	SK3659	検出面	14.6	6.2	4.3	0.425	>1/2	底部：回転糸切り無調整。焼成ややあまい。		R54

第７図　43Ｂ区出土遺物（2）－SK3659・3660土壙



番号	種　類	遺構	層位	口径	底径	器高	底径比	残存	特　　徴	写真	登録
1	土師器坏	SD3521	堆積土	14.2		4.4		1/2	非ロクロ調整。丸底。外面：口縁部ヨコナデ→体上部～底部手持ちヘラケズリ。内面：ヘラミガキ→黒色処理。	9-13	R55
2	土師器坏	SD3521	堆積土	13.4	6.4	4.3	0.478	1/3	ロクロ調整。底部切り離し不明→体下部～底部回転ヘラケズリ。内面：ヘラミガキ→黒色処理。焼成普通。		R56
3	土師器高台坏	SD3521	堆積土					1	高台径6.5cm、高台高8mm。ロクロ調整。底部回転糸切り→付高台。内面：ヘラミガキ→黒色処理。焼成普通。		R57
4	土師器双耳坏	SD3521	堆積土					破片	耳部破片。手持ちヘラケズリ。内面：摩滅（ヘラミガキ→黒色処理）。焼成普通。		R58
5	須恵器坏	SD3521	堆積土	13.3	6.2	4.0	0.466	1/3	底部：回転糸切り無調整。焼成ややあまい。外面体下部～底部に火襷痕。		R59
6	須恵器坏	SD3521	堆積土	14.1	5.6	4.7	0.397	1/3	底部：回転糸切り無調整。焼成普通。重ね焼き痕。		R60
7	須恵器坏	SD3521	堆積土	13.3	5.7	4.2	0.429	1	底部：回転糸切り無調整。焼成ややあまい。重ね焼き痕。体部に焼け膨れ箇所。内面口縁に煤付着。		R61
8	須恵器坏	SD3521	堆積土		6.0			>1/3	底部：回転糸切り無調整。焼成ややあまい。外面体下部に不明墨書。	10-5	R62
9	須恵器坏	SD3521	堆積土					破片	外面体部に不明墨書。焼成ややあまい。	10-4	R63
10	須恵器稜椀	SD3521	堆積土					1	高台径7.4cm、高台高1.2cm。底部回転糸切り→付高台。焼成良好。重ね焼き痕（上に乗せた器体が傾き、斜めとなる、内面灰かぶり）。		R64
11	須恵器稜椀	SD3521	堆積土					1/3	高台径9.0cm、高台高1.9cm。底部切り離し不明→体下部～底部回転ヘラケズリ→付高台。焼成ややあまい。		R65
12	須恵器甕	SD3521	堆積土					破片	口縁～体上部破片。突帯縁。外面：口頸部ロクロナデ、体部縦方向の縄叩き目痕。内面：口頸部ロクロナデ、体部ナデ。焼成普通。	10-9	R66
13	須恵器甕	SD3521	堆積土					破片	体部破片。外面：縦方向の縄叩き目痕。内面：ナデ。焼成普通。	10-10	R67
14	須恵器甕	SD3521	堆積土					破片	口頸部が大きく外傾する大甕。外面：突線、波状文。内面：稜線。焼成堅緻。内面灰かぶり。外面口縁自然釉。		R68

第８図　43Ｂ区出土遺物（3）　－SD3521溝跡



番号	種　類	遺構	層位	口径	底径	器高	底径比	残存	特　　徴	写真	登録
1	土師器坏	SD3532	検出面	13.0		4.3			非ロクロ調整。丸底気味。外面：口縁部ヨコナデ、体上部～底部手持ちヘラケズリ。 内面：ヘラミガキ→黒色処理。焼成普通。		R69
2	土師器坏	SD3532	堆積土		7.4			1/3	ロクロ調整。底部：切り離し不明→手持ちヘラケズリ。内面：ヘラミガキ→黒色処理。焼成普通。外面に黒斑。		R70
3	土師器坏	SD3532	検出面		6.0			1	ロクロ調整。底部：回転糸切り無調整。内面：ヘラミガキ→黒色処理。焼成普通。		R71
4	土師器双耳坏	SD3532	検出面					破片	耳部破片。ロクロ調整。耳部手持ちヘラケズリ。内面：摩滅（ヘラミガキ→黒色処理）。		R72
5	須恵器坏	SD3532	堆積土	12.6	7.6	4.4	0.603	2/3	底部：ヘラ切り。焼成良好。両面に重ね焼き痕、火襷痕。		R73
6	須恵器坏	SD3532	検出面	13.0	7.9	3.4	0.608	1	底部：ヘラ切り→体下部～底部半周に手持ちヘラケズリ。焼成普通。両面に重ね焼き痕、火襷痕。	9-14	R74
7	須恵器坏	SD3532	堆積土	13.6	7.2	3.5	0.529	>1/3	底部：切り離し不明→手持ちヘラケズリ。焼成あまい。両面に火襷痕。		R75
8	須恵器坏	SD3532	検出面	14.0	8.2	3.7	0.586	1/4	底部：ヘラ切り→手持ちヘラケズリ。焼成良好。両面に重ね焼き痕、火襷痕。		R76
9	須恵器坏	SD3532	堆積土	13.3	8.3	4.0	0.624	<1/4	底部：切り離し不明→手持ちヘラケズリ。焼成ややあまい。両面に重ね焼き痕、火襷痕。		R77
10	須恵器坏	SD3532	堆積土	13.6	7.6	4.4	0.559	>1/2	底部：回転糸切り無調整。焼成普通。口縁部に重ね焼き痕。		R78
11	須恵器坏	SD3532	検出面	14.0	5.8	4.4	0.414	<1/2	底部：回転糸切り無調整。焼成あまい。体部に焼け膨れ箇所。		R79
12	須恵器坏	SD3532	堆積土		4.7			1/2	底部：回転糸切り無調整。焼成普通。内面見込みに重ね焼き時の融着物付着。両面に黒漆皮膜付着（漆パレットに転用）。	10-6	R80
13	須恵器高台坏	SD3532	堆積土	11.9		5.6		約 1	高台径5.6cm、高台高1.3cm。底部：切り離し不明→回転ヘラケズリ→付高台。焼成良好。両面体部に煤付着。	9-15	R81
14	須恵器高台坏	SD3532	検出面	13.2		4.9		1/3	高台径9.2cm、高台高0.9cm。底部：切り離し不明→回転ヘラケズリ→付高台。焼成普通。胎土に海面骨針含む。		R82
15	須恵器短頸壺	SD3532	堆積土					<1/2	頸部～体下部破片。口縁部と底部を欠損し、全体の形状は不明確。頸下部径9.8cm。胴部最大径17.3cm。胴部の下部と上部が中央部で「く」字状に屈曲して内傾して立ち上がり、頸部が外傾する。胴中央部に回転ヘラケズリ。焼成やや良好。		R83

第９図　43Ｂ区出土遺物（4）　－SD3532溝跡

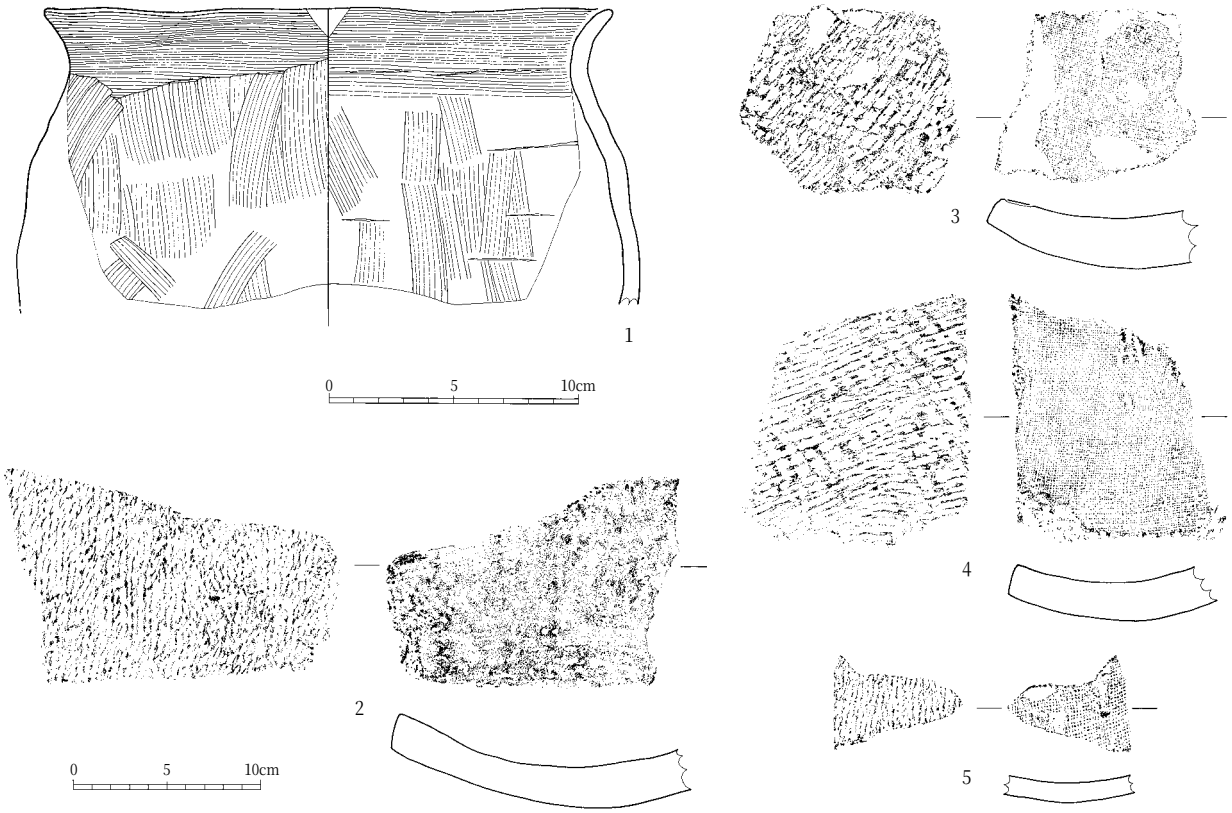
【SB3653掘立柱建物跡】

調査区南東部に位置する。SB3650・3652掘立柱建物跡、SA3666・3667材木塀跡よりも新しい。SB3651掘立柱建物跡とも重複するが、新旧関係は不明である。桁行３間、梁行２間の南北棟で、調査区外に位置する南西隅以外の柱穴９個を検出し、４箇所で柱痕跡、２箇所で柱抜取穴を確認した。掘方は一辺約70～90cmの方形で、埋土は地山黄色土ブロックを多く含む黒色土である。断ち割りを行った北東隅柱穴では深さ14cmで（第５図断面図Ｇ－Ｇ'）、南東隅柱穴は底面近くまで削平を受け、板材の礎板が露出していた。柱痕跡は径約18～22cmの円形である。東側柱列でみると、桁行は総長約5.8m、柱間寸法は約2.1m、約2.0m、約1.7m、方向は北で東に約13°偏る。北妻でみると、梁行は総長約4.7m、柱間寸法は西から約2.2m、約2.5mと推定される。

掘方から土師器坏、須恵器坏・蓋破片が少数出土した。このうち土師器坏には、非ロクロ調整で平底気味の底部破片、ロクロ調整で体部中央まで回転ヘラケズリした口縁～体部破片がある。

(3) 土壙、溝跡

検出したSK3655～3663土壙については表２、SD3521・3532・3534・3664・3665溝跡については表３に特徴、出土遺物などをとりまとめた。



番号	種　類	遺構	層位	特　　徴	写真	登録
1	土師器甕	遺構面	検出面	非ロクロ調整。口縁～体上部破片。口径22.8cm。外面：口縁ヨコナデ、体部ナデ。内面：口縁ヨコナデ、体部ナデ、粘土紐積み上げ痕。焼成普通。		R84
2	平瓦	SD3532	検出面	一枚作り。広端部、右側面残存、ヘラケズリ。凸面：縦方向の縄叩き目痕。凹面：糸切痕、ナデ。灰白色。焼成あまい。胎土に1mm以下のガラス粒、6mm以下の砂粒をやや多く含む。	11-4	R85
3	平瓦	SD3521	堆積土	桶巻き作り。狭端部、右側面残存、ヘラケズリ。凸面：斜格子叩き目痕（第１次叩き）→平行叩き目痕（第２次叩き）、一部に指ナデ痕。凹面：細布目痕（第１次布目痕が判然としていない）、指頭圧痕。灰色。焼成あまい。胎土に1mm以下のガラス粒、3mm以下の砂粒を多く含み、7mmの岩片を含む。	11-3	R86
4	平瓦	SD3521	検出面	桶巻き作り。広端部、左側面残存。広端部ヘラケズリ→茎圧痕。左側面ヘラケズリ。凸面：斜格子叩き目痕（第１次叩き）→平行叩き目痕（第２次叩き）。凹面：細布目痕（第１次布目痕が判然としていない）。灰色。焼成あまい。胎土に1mm以下のガラス粒、3mm以下の砂粒を多く含み、7mm以下の岩片を少量含む。	11-1	R87
5	平瓦	SD3532	検出面	凸面：縦方向の縄叩き目痕。凹面：布目痕。厚さ1.1cmと他の平瓦よりも薄い。灰色。焼成良好。胎土に1mm以下のガラス粒、砂粒をやや多く含む。		R88

第10図　43Ｂ区出土遺物（5）－SD3521・3532溝跡ほか

遺構名	位置	平面形	規模	出　土　遺　物	備　考
SK3655	南東	不整形	2.4m	ロクロ調整の土師器甕、須恵器坏・甕破片	SB3651より新しい。
SK3656	南東	不整形	1.6m		SB3650・3651より古い。
SK3657	南東	楕円形	1.3m	ロクロ調整の土師器坏・甕、非ロクロ調整の土師器甕破片	SB3651より古い。
SK3658	南東	不整形	1.9m	須恵器坏破片	SB3650より新しい。
SK3659	南西	不整形	3.4m	須恵器坏（ヘラ切り→手持ちヘラケズリ：第７図3、ヘラ切り→回転ヘラケズリ：第７図4、回転糸切り無調整：第7図７～９、ヘラ切り：第７図4～6、墨書「廿」：第７図6)、須恵器高台坏・甕破片	
SK3660	南西	楕円形	1.8m	須恵器坏（手持ちヘラケズリ：第７図1・2）・壺破片	
SK3661	中央	楕円形	2.9m		
SK3662	中央南	不明	1.5m		
SK3663	南東	不明	2.0m		灰白色火山灰より古い。

表２　43Ｂ区で検出した土壙一覧

遺構名	位置	方向	幅	深さ	出　土　遺　物	備　考
SD3521	中央	南北	1.0～4.0m	35cm	非ロクロ調整の土師器坏（第８図1）・甕、ロクロ調整の土師器坏（回転ヘラケズリ：第８図2、回転糸切り無調整）・双耳坏（第８図4）・高台坏（第８図3）・甕、須恵器坏（回転糸切り無調整：第８図5～8、ヘラ切り）・高台坏・稜椀（第８図10・11）・蓋・甕（第８図12～14）・壺、墨書須恵器坏（第８図8・9)、平瓦（第10図3・4）破片など多い。	北部で幅狭となる。灰白色火山灰よりも古い。SB3642・3644・3645よりも新しい。
SD3532	南西	南北	60～80cm	35cm	非ロクロ調整の土師器坏（第９図1）・甕、ロクロ調整の土師器坏（手持ちヘラケズリ：第９図2、回転糸切り無調整：第９図3）・双耳坏（第９図4)、須恵器坏（ヘラ切り：第９図5、ヘラ切り→手持ちヘラケズリ：第９図6・8、手持ちヘラケズリ：第９図7・9、回転糸切り無調整：第９図10～12）・高台坏（第９図13・14）・蓋・甕・短頸壺（第９図15）破片、漆パレット転用須恵器坏底部破片、平瓦（第10図2・5）破片など多い。	北西部で西に曲がる。SD3534と一連。SA3523よりも新しい。
SD3534	南西	東西	20～50cm	5cm以下		SD3532と一連。西側で曲がって南北溝となる。
SD3664	南東	東西	20～30cm	5cm以下		SD3665と一連。SB3650よりも新しい。
SD3665	南東	東西	15～20cm	5cm		SD3664と一連。SB3650・3651よりも新しい。

表３　43Ｂ区で検出した溝跡一覧

２．43Ａ区

SX2400南北道路跡、SX1900東西道路跡及び両者の交差点（後述の西１南６交差点)、掘立柱建物跡１棟（SB3603)、柱列跡１条（SA3628)、土器埋設遺構１基（SX3607)、土壙１基（SK3605)、道路跡より新しい溝跡７条（SD3601・3602・3635～3639）などを地山上面で検出した（第11図、図版４)。地山上面の標高は、調査区北壁中央で約52.2m、調査区南壁中央で約51.8mあり、北から南に向けて傾斜している。また、調査区東壁中央で約51.9m、西壁中央で約51.8mあり、東から西に向けてほんのわずか傾斜している。

(1) SX2400南北道路跡、SX1900東西道路跡と西１南６交差点

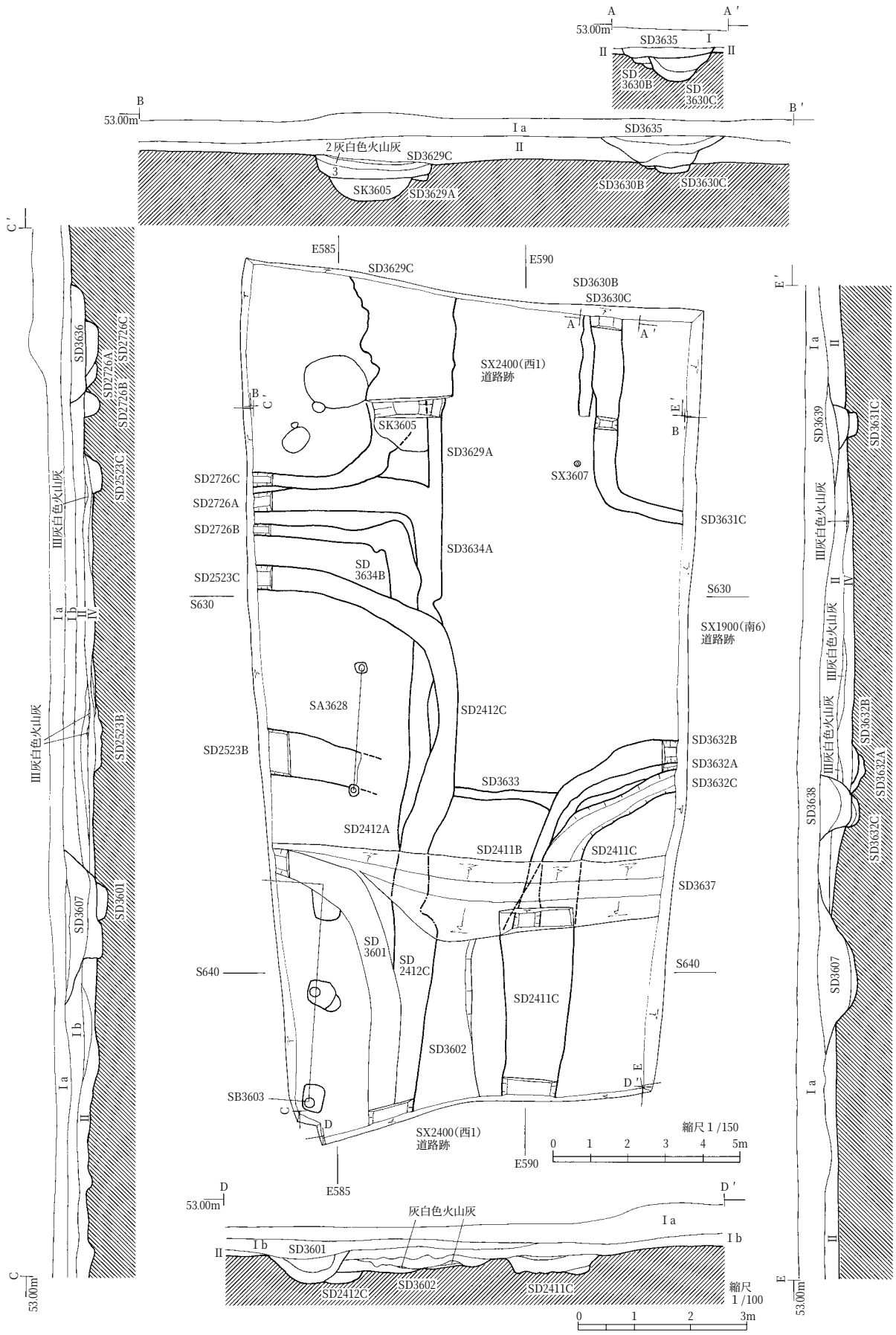
地山面で素掘の道路跡側溝、路面、西１南６交差点を検出した。道路跡の路面と交差点内は周囲に比べやや低くなっており、10世紀前葉頃に降灰した灰白色火山灰のブロックや道路跡側溝からあふれ出したとみられる砂を含む黒褐色土が約25cmの厚さで堆積していた。

SX1900東西道路跡は、交差点西側のSD2726北側溝、交差点東側のSD3632南側溝でそれぞれ３時期、交差点西側のSD2523南側溝で２時期の変遷がある。また、SX2400南北道路跡は、交差点南側のSD2411東側溝で３時期、交差点北側のSD3629西側溝とSD3630東側溝、交差点南側のSD2412西側溝でそれぞれ２時期の変遷がある。

したがって、交差点には３時期（Ａ期→Ｂ期→Ｃ期）の変遷がある。各期における道路側溝の組み合わせを新旧関係に基づいてみると、第12図、表５のようにまとめられる。Ａ期・Ｂ期の様相には不明確な点もあるが、SX2400南北道路跡とSX1900東西道路跡の一部を検出している。

【Ａ期の交差点】

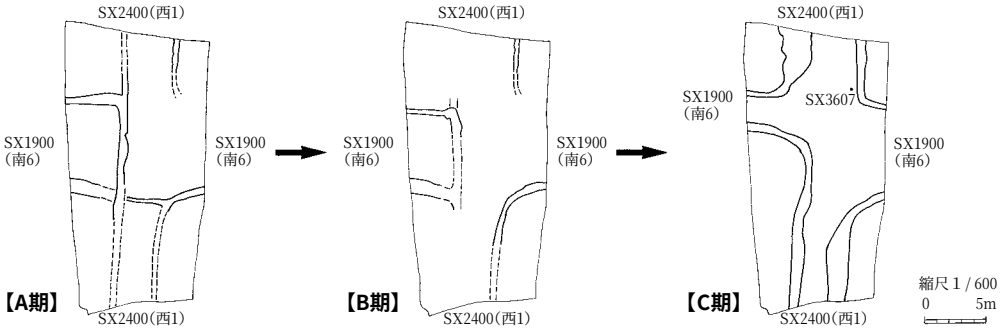
SX2400南北道路跡は、交差点南側でSD2412Ａ西側溝とSD2411Ａ東側溝の一部、交差点北側でSD3629Ａ西側溝を検出した。交差点北側の東側溝の位置は不明である。交差点南側における側溝



第11図　43Ａ区平面図（1／150）・断面図（1／100）

遺　構　・　層　位		特　　徴
交差点北側の SX2400道路跡	SD3630B東側溝	黒色（10YR1.7/1）～黒褐色（10YR2/2）砂質シルト土。地山ブロックを含む。自然堆積土。
	SD3630C東側溝	上層が暗褐色（10YR3/3）砂質シルト土、下層が黒色（10YR1.7/1）砂質シルト土。しまりない。自然堆積土。
	SD3629A西側溝	黒褐色（10YR2/2）砂質シルト土。自然堆積土。
	SD3629C西側溝	１層が黒色（10YR1.7/1）砂質シルト土、２層が灰白色火山灰、３層が黒色（2.5Y2/1）砂質シルト土で、砂をラミナ状に含む。自然堆積土。
交差点南側の SX2400道路跡	SD2411C東側溝	１層が砂混じりの黒褐色（10YR2/2）砂質シルト土、２層が地山粒を含む黒色（10YR2/1）砂質シルト土、３層が地山ブロックを含むにぶい黄褐色（10YR4/3）砂質シルト土。自然堆積土。
	SD2412C西側溝	黒褐色（10YR3/1）砂質シルト土。自然堆積土。
交差点東側の SX1900道路跡	SD3631C北側溝	黒色（7.5YR1.7/1）シルト土。しまりがない。自然堆積土。
	SD3632A南側溝	細砂をラミナ状に含む黒色（10YR2/1）砂質シルト土。自然堆積土。
	SD3632B南側溝	径5cmの地山土ブロックを含む黒色（10YR2/1）砂質シルト土。自然堆積土。
	SD3632C南側溝	上層は暗褐色（10YR3/3）粘質シルト土、下層はにぶい黄褐色（10YR4/3）粘質シルト土。いずれも径5cm程の地山土ブロックを含む。自然堆積土。
交差点西側の SX1900道路跡	SD2726A北側溝	地山土ブロックを多く含む暗オリーブ（7.5Y4/3）シルト土。自然堆積土。
	SD2726B北側溝	黒色（10YR1.7/1）砂質シルト土。自然堆積土。
	SD2726C北側溝	黒色（7.5YR2/1）砂。しまりない。自然堆積土。
	SD2523B南側溝	地山粒を含む黒色（10YR1.7/1）砂質シルト土。自然堆積土。
	SD2523C北側溝	黒色（10YR3/1）砂質シルト土。自然堆積土。
道路跡より 新しい溝	SD3601溝	上層は黒褐色（10YR3/2）砂シルト土で、地山ブロックを含む。下層は黒色（10YR1.7/1）シルト土でしまりがない。自然堆積土。
	SD3602溝	１層が黒褐色（10YR3/2）砂、２層が灰白色火山灰、３層が黒褐色（10YR3/2）砂。自然堆積土。路面（交差点南側のSX2400南北道路跡）の凸凹の可能性がある。
	SD3635溝	黒褐色（10YR2/2）砂質シルト土で、しまりがない。砂をラミナ状に含む箇所もある。自然堆積土。
	SD3636溝	黒色（7.5YR2/1）シルト土。自然堆積土。
	SD3637溝	１層は暗オリーブ（5Y4/3）砂、２層は暗褐色（10YR3/3）砂質シルト土、３層はにぶい黄褐色（10YR4/3）砂。自然堆積土。
	SD3638溝	上層は砂をラミナ状に含む黒褐色（10YR2/2）砂質シルト土、下層は細砂をラミナ状に含む黒色（10YR2/1）シルト土。自然堆積土。
	SD3639溝	上層は砂をラミナ状に含む黒色（10YR2/1）砂質シルト土、下層は小礫・地山粒を含む暗褐色（7.5YR2/3）砂質シルト土。自然堆積土。
土壙	SK3605土壙	黒褐色（2.5Y3/2）砂質シルト土で、地山ブロックを含む。グライ化している。自然堆積土。道路跡より古い。
基本層	Ⅰa層	水田耕作土。オリーブ褐色（2.5Y4/3）砂質シルト土。
	Ⅰb層	表土。黒褐色（10YR3/2）シルト。しまりない。自然堆積土。
	Ⅱ層	黒褐色（10YR3/2）シルト。自然堆積土。
	Ⅲ層	10世紀前葉頃に降灰した灰白色火山灰（十和田ａ火山灰）。自然堆積土。
	Ⅳ層	黒褐色（10YR3/2）砂質シルト土。道路路面上の自然堆積土。
	Ⅴa層	地山漸移層。にぶい黄褐色（10YR4/3）砂質シルト土。
	Ⅴb層	地山。黄褐色（10YR5/6）砂。

表４　43Ａ区遺構断面図（第11図）土層一覧



第12図　43Ａ区検出の西１南６交差点の変遷（1／600）

道路跡名	時期	交差点位置	道路側溝	側溝の規模 上幅	下幅	深さ	断面形	堆積土	側溝心々間距離	備　　考
SX1900（南６）東西道路跡	Ａ期	西側	SD2726A北側溝	100cm	30cm	20cm	U字状	自然堆積		SD3629A東側溝、SD3634A溝、SD2412A西側溝と一連。ロクロ土師器坏（第13図１）出土。
		東側	SD3632A南側溝	70cm	50cm	30cm	皿状	自然堆積		SD2411A東側溝と一連。
	BorA期	西側	SD2523B南側溝	120cm	100cm	15cm	浅い皿状	自然堆積	5.9m	Ⅲ層（灰白色火山灰）、Ⅳ層の下位。SA3628より古い。底面に鋤痕。
	Ｂ期	西側	SD2726B北側溝	30cm	20cm	30cm	U字状	自然堆積		SD3634B溝と一連。Ⅲ層（灰白色火山灰）よりも新しいSD3636溝、Ⅳ層の下位。
		東側	SD3632B南側溝	70cm	30cm	10cm	皿状	自然堆積		SD2411B東側溝と一連。Ⅲ層（灰白色火山灰）、Ⅳ層の下位。SD3638溝より古い。
	Ｃ期	西側	SD2726C北側溝	40cm	10cm	25cm	U字状	自然堆積	2.6m	Ⅱ層、Ⅲ層（灰白色火山灰）よりも新しいSD3636溝の下位。須恵器稜椀（第13図15）出土。
			SD2523C南側溝	65cm	40cm	25cm	逆台形状	自然堆積		Ⅲ層（灰白色火山灰）、Ⅳ層の下位。
		東側	SD3631C北側溝	50cm	40cm	20cm	逆台形状	自然堆積	7.0m	SD3630C東側溝と一連。Ⅱ層、Ⅲ層（灰白色火山灰）より新しいSD3639溝の下位。
			SD3632C南側溝	60cm	30cm	20cm	U字状	自然堆積		SD2411C東側溝と一連。Ⅱ層、Ⅲ層（灰白色火山灰）より新しいSD3638溝の下位。
SX2400（西１）南北道路跡	Ａ期	北側	SD3629A西側溝	40cm	?	13cm	皿状	自然堆積		SD2726A北側溝、SD3634A溝、SD2412A西側溝と一連。SK3605土壙より新しい。
		南側	SD2411A東側溝	?	?	?	?	自然堆積	4.0m	SD3632A南側溝と一連。
			SD2412A西側溝	?	?	?	?	自然堆積		SD2726A北側溝、SD3629A西側溝、SD3634A溝と一連。
	Ｂ期	南側	SD2411B東側溝	75cm	45cm	17cm	逆台形状	自然堆積		SD3632B南側溝と一連。
	BorA期	北側	SD3630B東側溝	35cm	30cm	20cm	皿状	自然堆積		痕跡的に残存。底面に鋤痕。Ⅱ層より新しいSD3635溝の下位。
	Ｃ期	北側	SD3630C東側溝	80cm	35cm	50cm	U字状	自然堆積	5.3m	Ⅱ層より新しいSD3635溝の下位。
			SD3629C西側溝	200cm	190cm	40cm	皿状	自然堆積		Ⅱ層、Ⅲ層（灰白色火山灰）の下位。
		南側	SD2411C東側溝	190cm	120cm	30cm	逆台形状	自然堆積	3.5m	SD3632C南側溝と一連。Ⅰb層の下位。須恵器坏（第13図４・７）出土。
			SD2412C西側溝	115cm	?	20cm	逆台形状	自然堆積		SD2523C南側溝と一連。灰白色火山灰を含むSD3602溝の下位。
交差点横断溝	Ａ期	西側	SD3634A溝	80cm	?	?	?	自然堆積		SD2726北側溝、SD3629A・2412A西側溝と一連。
		南側	SD3633溝	30cm	?	?	?	自然堆積		SD3632A南側溝に接続するとみられる。
	Ｂ期	西側	SD3634B溝	70cm	?	?	?	自然堆積		SD2726B北側溝と一連。

表５　43Ａ区検出の道路跡一覧

心々間距離は約４mである。

SX1900東西道路跡は、交差点東側でSD3632A南側溝、交差点西側でSD2726A北側溝を検出した。交差点東側の北側溝と交差点西側の南側溝の位置は不明である。また、交差点西側ではSX1900東西道路跡を横断するSD3634A溝、交差点南側ではSX2400南北道路跡を横断するSD3633溝が設けられ、北から南、東から西への道路排水が考慮されている。

SD2726A北側溝からは、ロクロ調整で底部回転糸切り後に体下部・底部を手持ちヘラケズリした土師器坏（第13図１）が出土した。

【Ｂ期の交差点】

SX2400南北道路跡は、交差点北側でSD3630B東側溝、交差点南側でSD2411B東側溝を検出した。交差点北側の西側溝、交差点南側の西側溝の位置は不明である。

SX1900東西道路跡は、交差点西側でSD2726B北側溝、Ｂ期またはＡ期に位置付けられるSD2523B南側溝、交差点東側でSD3632B南側溝を検出した。交差点東側の北側溝の位置は不明である。SD2523B南側溝をＢ期とみると、交差点西側での側溝心々間距離は5.9mである。

また、交差点西側ではＡ期のSD3634A溝の位置をやや西にずらし、SX1900東西道路跡を横断するSD3634B溝が設けられ、北から南への道路排水が考慮されている。

SD2726B北側溝からは底部の切り離しが回転糸切り無調整の須恵器坏（第13図６）、SD2523B南側溝からは底部の切り離しが回転糸切り無調整の須恵器坏（第13図５）が出土した。

【Ｃ期の交差点】

SX2400南北道路跡は交差点北側でSD3630C東側溝とSD3629C西側溝、交差点南側でSD2411C東側溝とSD2412C西側溝を検出した。側溝心々間距離は、交差点北側で5.3m、交差点南側で3.5mと交差点北側の道路幅が幅広である。

SX1900東西道路跡は交差点西側でSD2726C北側溝とSD2523C南側溝、交差点東側でSD3631C北側溝とSD3632C南側溝を検出した。側溝心々間距離は、交差点西側で2.6m、交差点東側で7.0mある。交差点東側の道路幅が幅広で、交差点西側の約３倍あり、交差点の形状は歪んでいる。

SD2411C東側溝からは体下部・底部を手持ちヘラケズリした須恵器坏（第13図４）、底部の切り離しが回転糸切り無調整の須恵器坏（第13図７）などが出土した。

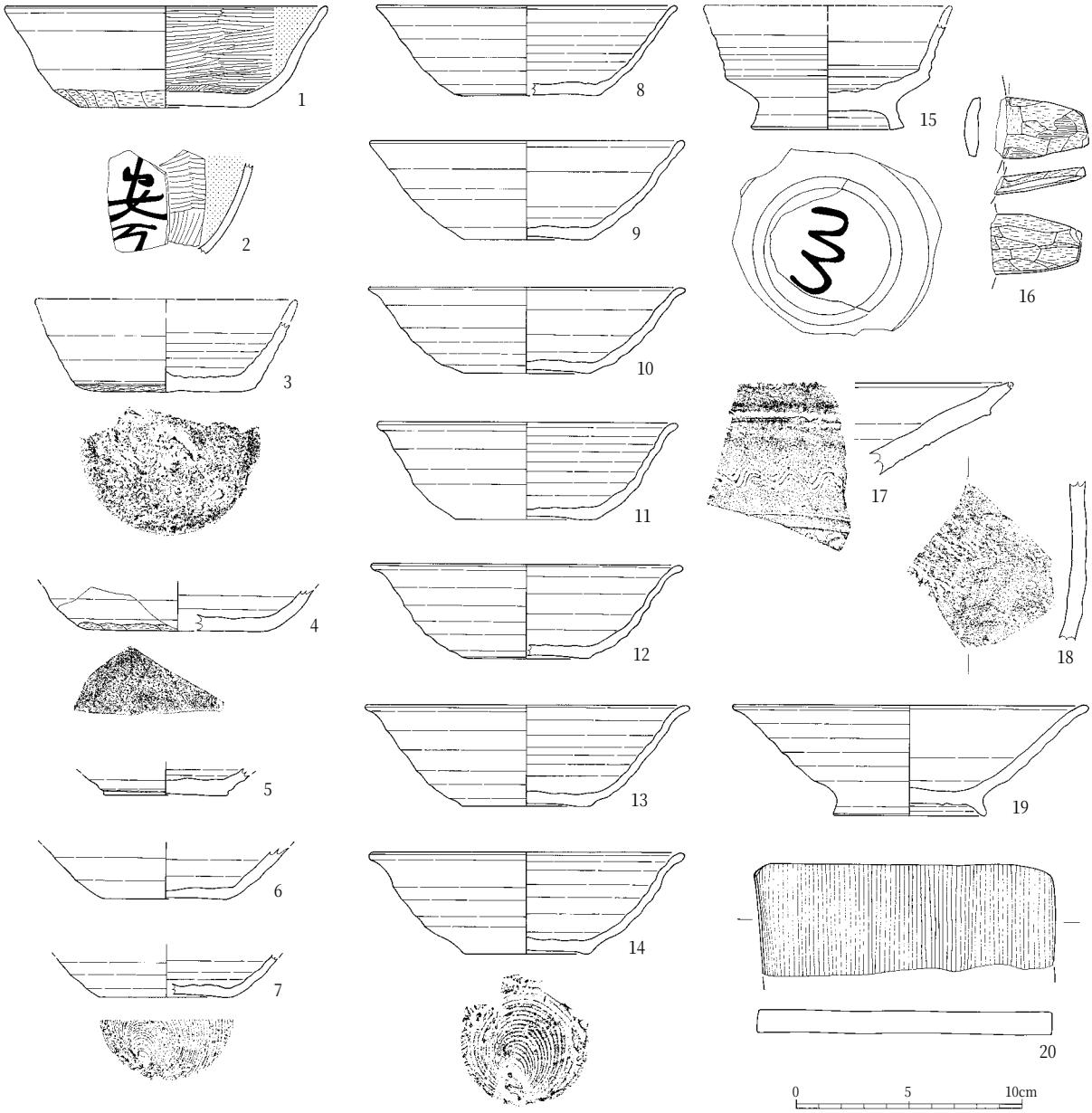
(2) SB3603掘立柱建物跡

SB3603掘立柱建物跡は南東部に位置する。東西棟の東妻とみられる柱穴３個を検出し、２箇所で柱痕跡を確認した。SX2400南北道路跡のSD2412C西側溝の心々から約2.5m西側に位置し、これと平行している。掘方は一辺60～90cm程の長方形で、柱痕跡は径25cmの円形である。東妻の総長は約5.4mと推定され、柱間寸法は南１間分が約2.9mある。

(3) SA3628柱列跡

南北１間で、掘方は一辺30cm前後の長方形である。SD2523B南側溝よりも新しい。Ｃ期の交差点に伴うとみられる。

(4) SX3607土器埋設遺構



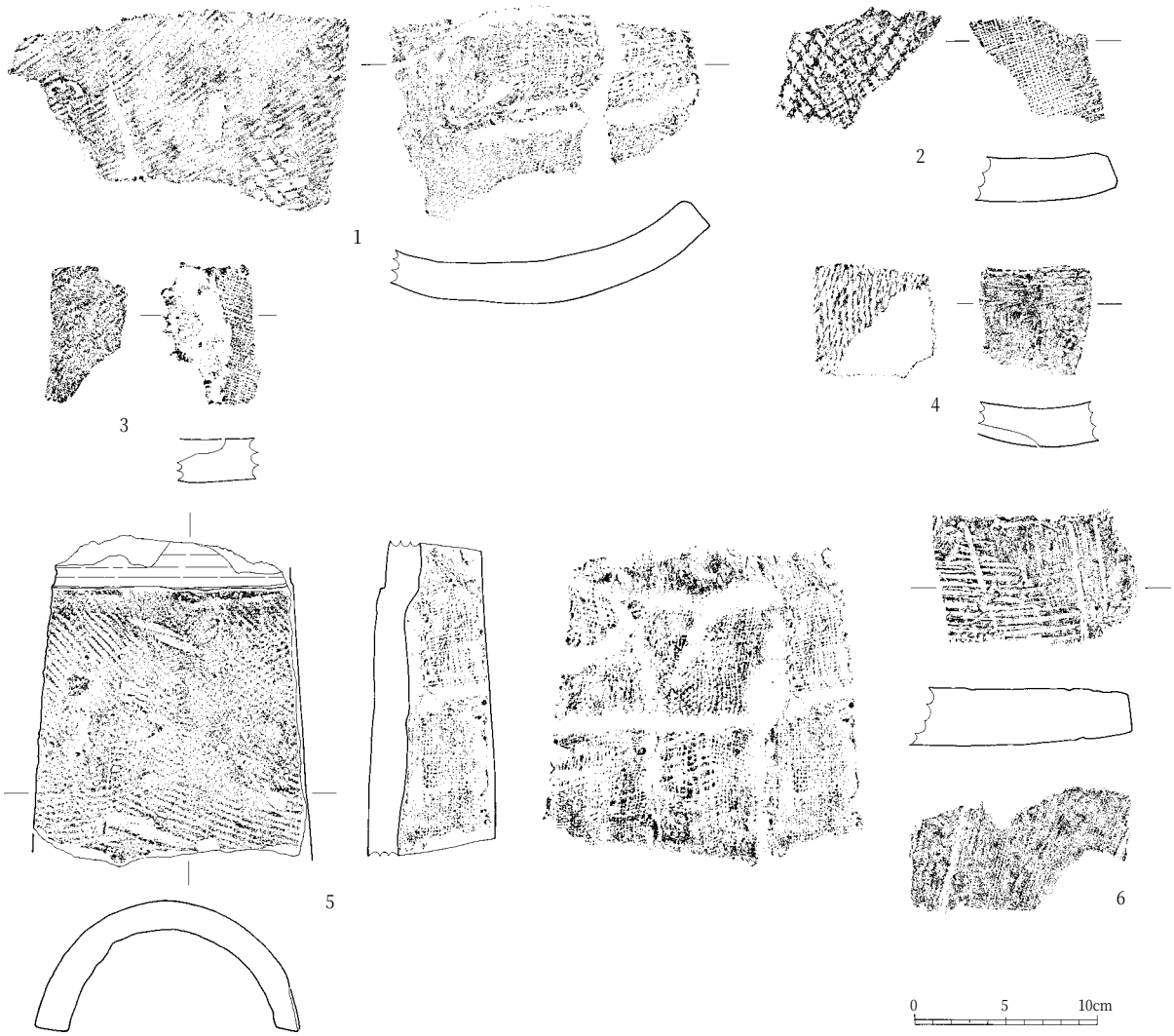
番号	種　類	遺構	層位	口径	底径	器高	底径比	残存	特　　徴	写真	登録
1	土師器坏	SD2726A	堆積土	14.3	7.7	4.5	0.538	1	ロクロ調整。外面:底部回転糸切り→体下部～底部周縁手持ちヘラケズリ。内面:ヘラミガキ→黒色処理。	9-1	R1
2	土師器坏	SD3602	堆３層					破片	灰白色火山灰下層出土。ロクロ調整。外面体部に墨書「安万」。内面：ヘラミガキ→黒色処理。	10-3	R2
3	須恵器坏	SD3602	堆３層		8.0			>1/2	灰白色火山灰下層出土。底部ヘラ切り→底部手持ちヘラケズリ。焼成普通。		R3
4	須恵器坏	SD2411C	堆積土		8.0			1/6	体下部～底部：手持ちヘラケズリ。底部両面に火襷痕。焼成良好。		R4
5	須恵器坏	SD2523B	堆積土		5.5			1/3	底部：回転糸切り無調整。焼成普通。		R5
6	須恵器坏	SD2726B	堆積土		5.6			1/3	底部：回転糸切り無調整。焼成普通。		R6
7	須恵器坏	SD2411C	堆積土		6.0			1/２	底部：回転糸切り無調整。焼成普通。		R7
8	須恵器坏	SX3607	堆積土	13.4	6.5	4.0	0.485	1/２	底部：回転糸切り無調整。焼成ややあまい。	9-2	R8
9	須恵器坏	SX3607	堆積土	14.0	5.6	4.4	0.400	1/２	底部：回転糸切り無調整。焼成普通。口縁部に重ね焼き痕。	9-3	R9
10	須恵器坏	SX3607	堆積土	14.1	5.8	3.8	0.411	1	底部：回転糸切り無調整。焼成ややあまい。	9-4	R10
11	須恵器坏	SX3607	堆積土	13.3	6.2	4.3	0.466	1/２	底部：回転糸切り無調整。焼成ややあまい。口縁～体下部に重ね焼き痕。	9-5	R11
12	須恵器坏	SX3607	堆積土	13.9	5.7	4.2	0.410	5/6	底部：回転糸切り無調整。焼成ややあまい。口縁部に重ね焼き痕。	9-6	R12
13	須恵器坏	SX3607	堆積土	14.4	5.7	4.5	0.396	>1/2	底部：回転糸切り無調整。焼成ややあまい。口縁部に重ね焼き痕。	9-7	R13
14	須恵器坏	SX3607	堆積土	14.0	5.6	4.5	0.400	<1	底部：回転糸切り無調整。焼成ややあまい。口縁部に重ね焼き痕。	9-8	R14
15	須恵器稜椀	SD2726C	堆積土						高台径6.8cm、高台高1.3cm。底部ヘラ切り→回転ケズリ→付高台。焼成ややあまい。底部に不明墨書。	10-1	R15
16	須恵器双耳坏	SD3602	検出面					破片	両面ヘラケズリ。一部に指紋・指頭オサエ痕。焼成普通。		R16
17	須恵器甕	SD3602	検出面					破片	口頸部が大きく外傾する大甕。外面：突線、波状文。内面：稜線。焼成堅緻。		R17
18	須恵器甕	SD3601	検出面					破片	外面：縄叩き→ヘラケズリ。内面：ナデ。焼成良好。		R18
19	須恵系土器 高台坏	SD3602	堆１層	15.8		4.9		>5/6	灰白色火山灰上層出土。高台径6.8cm、高台高1.3cm。両面に剥落箇所多い。焼成普通。	9-9	R19
20	板材	SK3605	底面						幅13.4cm、厚さ1.0cm。柾目板材。	10-11	R20

第13図　43Ａ区出土遺物（1）

交差点北東部に位置する。径18cmの円形の小ピットで、中からほぼ完全な形の須恵器坏７点（第13図８～14、図版９－16）が口縁部を上にして重なった状態で出土した。堆積土は褐色土で、人為的に埋め戻されている。出土した須恵器坏はいずれも底部から体部が膨らんで立ち上がり、口縁部がわずかに外反する。底部の切り離しはいずれも回転糸切り無調整であり、法量も近似している。

(5) SK3605土壙

道路跡交差点北西部のSD3629西側溝の断ち割り箇所で検出した。SD3629A・C西側溝よりも古い。



番号	種　類	遺構	層位	特　　徴	写真	登録
1	平瓦	SD3602	堆積土	桶巻き作り。狭端部、右側面残存、ヘラケズリ。凸面：斜格子叩き目痕（第１次叩き）→平行叩き目痕（第２次叩き）。凹面：太布合わせ目痕（第１次布目）→細布痕（第２次布目）→部分的ナデ。灰色。焼成ややあまい。胎土に3mm以下のガラス粒、砂粒をやや多く含む。	11-2	R21
2	平瓦	SD3602	堆３層	桶巻き作り。右側面残存、ヘラケズリ。凸面：斜格子叩き目痕（第１次叩き）→平行叩き目痕（第２次叩き）。凹面：布目痕（第１次布目痕が判然としていない）。濃灰色。焼成やや良。胎土に1mm以下のガラス粒、砂粒を多く含む。		R22
3	平瓦	SD3602	堆積土	凸面：平行叩き目。灰かぶり。凹面：布目痕。灰褐色。焼成あまい。胎土に1mm以下のガラス粒、4mm以下の砂粒をやや多く含む。		R23
4	平瓦	SD3602	堆３層	一枚作り。一端部残存、ヘラケズリ。凸面：縦方向縄叩き目痕。凹面：ナデ。上が端部。灰色。焼成ややあまい。胎土に1mm以下のガラス粒、砂粒をやや多く含む。		R24
5	丸瓦	SD3602	堆３層	有段丸瓦。玉縁一部残存。粘土紐巻き作り。胴部凸面：平行叩き目痕。玉縁凸面：ロクロナデ。胴部～玉縁凹面：重複する布目痕、布合わせ目痕。側面：ヘラケズリ。灰色。焼成ややあまい。1mm以下のガラス粒をやや多く、6mm以下の砂礫、岩片を少量含む。	11-6	R25
6	塼	遺構面	検出面	無文塼。直交する２側面（左面上・右）残存。現存幅12.3cm、現存長7.6cm、厚さ3.0cm。左面：平行叩き目→ヘラケズリ→指頭圧痕。右面：平行叩き目→ヘラケズリ→指頭圧痕。濃灰色。焼成良好。胎土に1mm以下のガラス粒、砂粒をやや多く含む。	11-7	R26

第14図　43Ａ区出土遺物 (2)

径約1.5mの不整形で、検出面からの深さは約40cmある。地山ブロックを多く含む黒褐色土で、人為的に埋め戻されている。底面から板材が１点出土した（第13図20）。

(6) その他

調査区南部のSD3602溝は上幅1.5m以上、深さ約20cmの南北溝で、灰白色火山灰ブロックと砂混じりの黒褐色土が自然堆積している。路面（交差点南側のSX2400南北道路跡）の凸凹の可能性もある。出土遺物には墨書「安万」土師器坏（第13図２）、須恵器坏（第13図３）・双耳坏（第13図16）、須恵系土器高台坏（第13図19）、平瓦（第14図１～５）、丸瓦（第14図５）などの破片がある。

３．43Ｃ区

SX2400（西１）南北道路跡の東西両側溝（SD3629・3630）の他、土壙、ピット、溝跡など少数の遺構を地山上面で検出した（第15図、図版５）。方格地割内をさらに小区画する溝等の施設の有無を目的として設定した調査区だが、後述の西２南６区の東辺の北から1／3の地点では方格地割内をさらに小区画する施設は認められなかった。地山上面の標高は、調査区北壁中央で約54.3m、調査区南壁中央で約53.8mあり、北から南に向けて傾斜している。

SX2400南北道路跡のSD3630東側溝は１時期、SD3629西側溝は新旧３時期（SD3629A→SD3629B→SD3629C）ある。SD3629C側溝については部分的な改修の可能性もある。

側溝の規模はSD3630東側溝が上幅約0.6～0.9m、下幅約0.6m、深さ約30～40cm、SD3629A・B西側溝が上幅約0.6～1.0m、下幅約0.5m、深さ約40～50cm、SD3629C西側溝が上幅約1.8m、下幅約1.2m、深さ約15cmである。断面形はSD3629A・B西側溝、SD3630東側溝が逆台形状、SD3629C西側溝が浅い皿状である。SD3629A・B・C東側溝はいずれも灰白色火山灰の下位にあり、側溝内の堆積土は自然堆積した砂混じりの黒褐色土である。

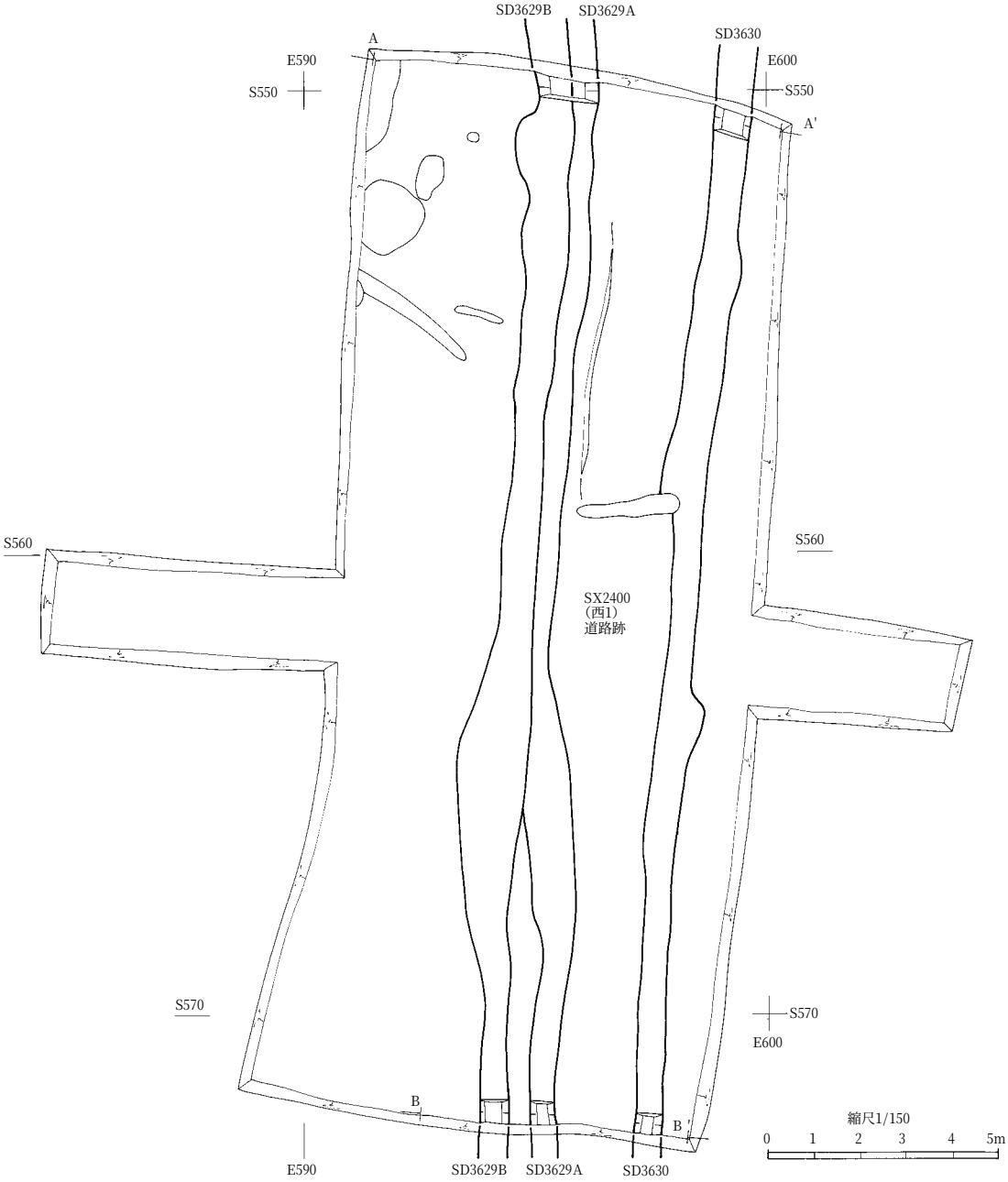
側溝心々間で測ると、調査区北壁の断ち割り箇所では道路幅はA期が約3.6m、B期が4.0m、C期が3.5m、調査区南壁の断ち割り箇所ではA期が約2.3m、B期が3.4mである。

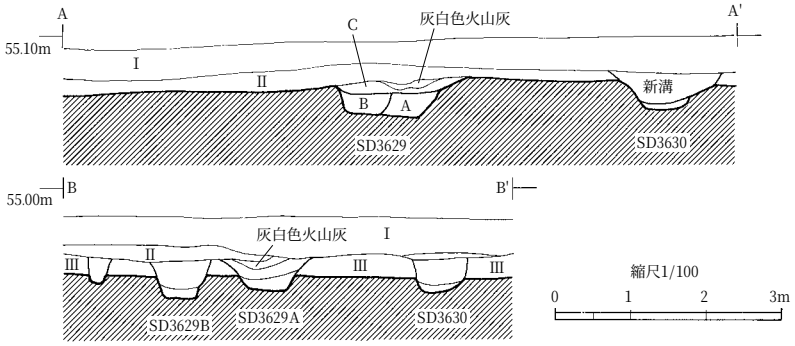
調査区の南北両端における側溝心々でみると、検出した道路側溝の長さはSD3630東側溝が約22.0m、SD3629B西側溝が約22.4mである。また、道路側溝の方向はSD3630東側溝が北で東に約５°偏り、SD3629B西側溝が北で東に約４°偏る。

SD3630東側溝から須恵器甕破片、遺構面から非ロクロ調整の土師器甕（第16図１）、ロクロ調整の土師器坏、須恵器坏・稜椀（第16図２）・甕・壺破片などが少数出土した。

４．43Ｄ区

SX2600南北道路跡、SX1100東西道路跡及び両者の交差点（後述の西２南５交差点）、掘立柱建物跡２棟（SB3610・3611）、柱列跡１条（SA3612）、道路跡より新しい溝跡５条（SD3614～3617・3619）などを表土直下の地山上面で検出した（第17図、図版６）。地山上面の標高は、調査区北壁中央で約53.8m、調査区南壁中央で約53.5mあり、北から南に向けてやや傾斜している。また、調査区東壁中央で約53.5m、西壁中央で約53.4mあり、東から西に向けてほんのわずか傾斜している。

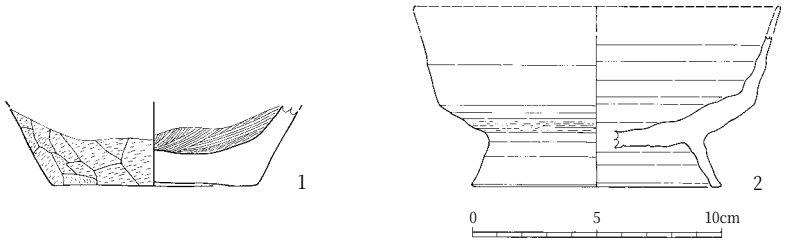




第15図　43Ｃ区平面図（1／150）・断面図（1／100）

遺　構　・　層　位		特　　徴
北壁際の断面Ａ－Ａ’	SD3630東側溝	地山漸移層ブロック、地山ブロックを含む黒褐色（7.5YR2/2）シルト土。粘性ややあり、しまりあまりない。自然堆積土。
	SD3629A西側溝	細砂を縞状に含む黒褐色（7.5YR2/2）シルト土。粘性ややあり、しまりあまりない。自然堆積土。
	SD3629B西側溝	黒褐色（7.5YR2/2）シルト土。粘性ややあり、しまりあまりない。自然堆積土。
	SD3629C西側溝	黒褐色（7.5YR3/2）シルト土。粘性ややあり、しまりあまりない。上部に10世紀前葉頃に降灰した灰白色火山灰が堆積。自然堆積土。
	新溝	黒褐色（7.5YR2/2）シルト土。粘性ややあり、しまりあまりない。自然堆積土。
南壁際の断面Ｂ－Ｂ’	SD3630東側溝	黒褐色（7.5YR2/2）シルト土。粘性ややあり、しまりあまりない。下部に地山漸移層ブロック、地山ブロックを含む。自然堆積土。
	SD3629A西側溝	３層に分かれ、１層が灰白色火山灰、２層が細砂を縞状に含む黒褐色（7.5YR2/2）シルト土、３層が地山漸移層ブロックを含む黒褐色（7.5YR2/2）シルト土。粘性ややあり、しまりあまりない。自然堆積土。
	SD3629B西側溝	黒褐色（7.5YR2/2）シルト土。粘性ややあり、しまりあまりない。下部に地山漸移層ブロック、地山ブロックを含む。自然堆積土。
基本層	Ⅰ層	水田耕作土。暗褐色(10YR3/3）砂質シルト土。
	Ⅱ層	黒色（10YR2/1）シルト土。粘性・しまりなし。自然堆積土。調査区北半部で10～30cmと厚く堆積し、南半部は5～20cmと薄くなる。
	Ⅲ層	黒褐色（7.5YR2/2）シルト土。粘性・しまりあまりない。自然堆積土。調査区南半部にのみ分布する。
	Ⅳa層	地山漸移層。にぶい黄褐色（10YR4/3）砂質シルト土。
	Ⅳb層	地山。黄褐色（10YR5/6）砂。

表６　43Ｃ区遺構断面図（第15図）土層一覧



番号	種　類	遺構	層位	特　　徴	写真	登録
1	土師器甕	遺構面	検出面	ロクロ調整。体下部～底部破片。残存2/3。底径8.2cm。外面：底部ナデ、体下部削り。内面：ナデ。焼成普通。		R89
2	須恵器稜椀	遺構面	検出面	体上部～底部・高台部破片。残存1/2。高台径10.0cm、高台高2.2cm。底部ヘラ切り→体下部回転ヘラケズリ→付高台。		R90

第16図　43Ｃ区出土土器

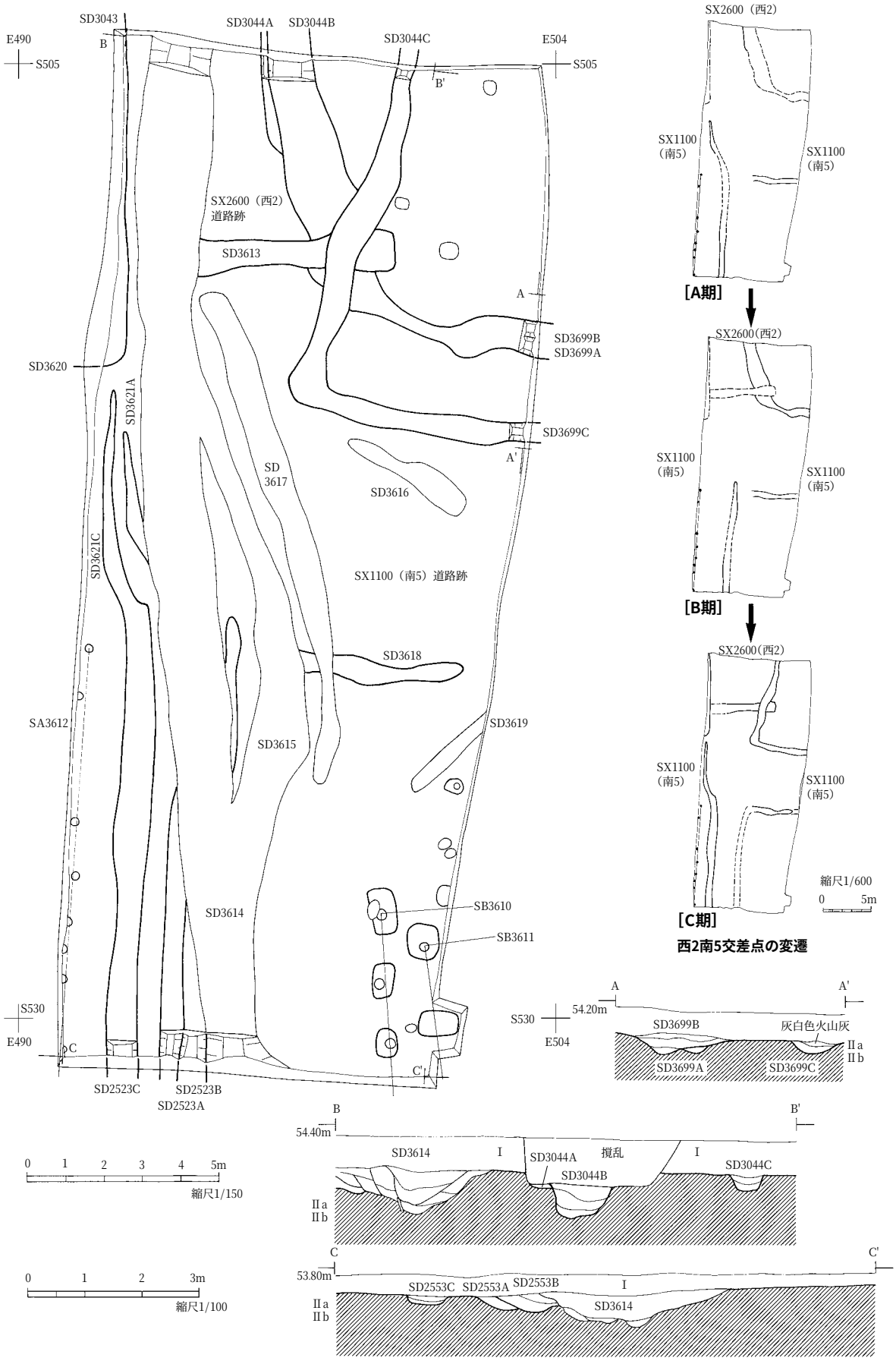
(1) SX2600南北道路跡、SX1100東西道路跡と西２南５交差点

地山面で素掘の道路跡側溝、路面、西２南５交差点を検出した。調査区西半部には道路側溝よりも新しいSD3614・3615・3617溝跡があって、交差点の状況には不明確な点が多い。後述のSD2523A・B・C側溝については、SD2523C側溝と一連のSD3621C溝跡、SD2523A側溝と一連とみられるSD2523A溝跡がそれぞれ交差点を横断する溝であり、交差点を斜めに横断する溝がこれまでにはないこと、SD2523C側溝の延長にSD3043西側溝があることから、SD2523A～C側溝を西側溝と考えた。また、交差点東側のSD3618南側溝については、SD3699C北側溝と堆積土が類似していることから、C期の南側溝と考えた。

SX2600南北道路跡には交差点北側のSD3044東側溝、交差点南側のSD2553西側溝にそれぞれ３時期ある。また、SX1100東西道路跡には交差点東側のSX3399北側溝に３時期ある。

したがって、交差点には３時期（A期→B期→C期）の変遷がある。

交差点北側のSD3044東側溝とこれらと一連の交差点東側のSD3399北側溝については、それぞれ遺構期との対応関係を把握できる。しかし、交差点南側のSD2553西側溝については、A西側溝がA期またはB期、B西側溝がB期またはC期に当たるが、C西側溝はA期～C期のどの期に当たるか不明である。交差点北側の東側溝の位置はA・B期がほぼ同位置で、C期に東にずらして道路幅を拡幅していることから、交差点南側についても最も西に位置するSD2553C西側溝がC期、その東側に位置する道路幅の狭いSD2553A・B西側溝がそれぞれA・B期に当たる可能性が高いものと考えられる。なお、交差点北側のSD3043西側溝とそれと一連のSD3620北側溝、交差点南側のSD2523西側溝と平行す



第17図　43Ｄ区平面図（1／150）、断面図（1／100）、交差点変遷図（1／600）

遺　構　・　層　位		特　　徴
交差点東側の SX1900道路跡 断面A－A’	SD3399A北側溝	地山ブロックを多く含む黒褐色（10YR2/3）シルト土。自然堆積土。
	SD3399B北側溝	３層に分かれ、１層が黒褐色（10YR3/2）細砂、２層が黒褐色（10YR3/1）シルト土、３層が地山ブロックを多く含む黒褐色（10YR2/3）シルト土。自然堆積土。
	SD3399C北側溝	黒褐色（2.5YR3/2）細砂。上部に10世紀前葉頃に降灰した灰白色火山灰が堆積。自然堆積土。
交差点北側の SX2600道路跡 断面B－B’	SD3044A東側溝	暗褐色（10YR3/3）シルト土。自然堆積土。
	SD3044B東側溝	３層に分かれ、１層が灰白色火山灰がシミ状に入る黒褐色（10YR3/2）シルト土、２層が地山ブロックを多量に含む黒褐色（10YR2/2）シルト土、３層が地山ブロックを多く含む黒色（10YR2/1）シルト土。自然堆積土。
	SD3044C東側溝	上層が黒褐色（2.5Y3/2）細砂、下層が暗灰褐色（2.5Y4/2）細砂。自然堆積土。
交差点南側の SX2600道路跡 断面C－C’	SD2553A西側溝	地山ブロックを多く含むにぶい黄褐色（10YR4/3）シルト土。自然堆積土。
	SD2553B西側溝	上層が黒褐色（10YR3/2）シルト土、下層が黒褐色（10YR2/2）シルト土。自然堆積土。
	SD2553C西側溝	上層が黒褐色（10YR2/2）シルト土、下層が黒褐色（10YR3/2）シルト土。自然堆積土。
道路跡より新しい溝	SD3614溝	現代溝。褐灰色（7.5YR4/1）粘質シルト土。下部に砂礫を縞状に含む。自然堆積土。調査区北壁際断面では複数の時期に分かれ、改修されている。底面に立杭がある。
基本層	Ⅰ層	水田耕作土。褐灰色(10Y4/1）砂質シルト土。
	Ⅱa層	地山漸移層。灰黄褐色（10YR4/2）砂質シルト土。
	Ⅲb層	地山。黄褐色（10YR5/6）砂。

表７　43Ｄ区遺構断面図（第17図）土層一覧

道路跡名	時期	交差点位置	道路側溝跡	側溝の規模			断面形	堆積土	備　　考
				上幅	下幅	深さ			
SX2600（西２）南北道路跡	Ａ期	北側	SD3044A東側溝	？	？	25cm	皿状	自然堆積	
	ＡorＢ期	南側	SD2553A西側溝	（60cm）	20cm	25cm	皿状	自然堆積	
	Ｂ期	北側	SD3044B東側溝	120～150cm	70cm	75cm	Ｕ字状	自然堆積	SD3699B北側溝と一連
	ＢorＣ期	南側	SD2553B西側溝	（50cm）	30cm	32cm	皿状	自然堆積	
	Ｃ期	北側	SD3044C東側溝	60～90cm	35cm	25cm	逆台形状	自然堆積	SD3699C北側溝と一連
	ＣorＢorＡ期	北側	SD3043西側溝	？	？	？	？	自然堆積	SD3620北側溝と一連
		南側	SD2553C西側溝	70～100cm	50cm	15cm	逆台形状	自然堆積	
SX1100（南５）東西道路跡	Ａ期	東側	SD3699A北側溝	？	20cm	25cm	皿状	自然堆積	
	Ｂ期	東側	SD3699B北側溝	30～90cm	20cm	30cm	皿状	自然堆積	SD3044B東側溝と一連
	Ｃ期	東側	SD3699C北側溝	40～70cm	35cm	22cm	皿状	自然堆積	SD3044C東側溝と一連。10世紀前葉以前に廃絶。
	ＣorＢorＡ期	東側	SD3618南側溝	30～70cm	？	？	？	自然堆積	
		西側	SD3620北側溝	？	？	？	？	自然堆積	SD3043西側溝と一連
交差点横断溝	ＣorＢ期	北側	SD3613溝	60～100cm	？	？	？	自然堆積 自然堆積	SD3044B東側溝より新しく、SD3044C東側溝より古い。これらのどちらかと同時期か。
	ＡorＢ期	西側	SD3621A溝	40cm	？	？	？	自然堆積	SD2553A西側溝と一連？
	ＣorＢorＡ期	西側	SD3621C溝	40cm	？	？	？		SD2553C西側溝と一連

表８　43Ｄ区検出の道路跡一覧

るSA3612柱列跡については、A期～C期のいずれかに位置付けられる。

各期における道路側溝の組み合わせは、第17図右上、表８のようにまとめられる。

【Ａ期の交差点】

SX2600南北道路跡は、交差点北側でSD3044A東側溝の一部、交差点南側でSD2523A西側溝の一部を検出した。交差点北側の西側溝、交差点南側の東側溝の位置は不明である。

SX1100東西道路跡は、交差点東側でSD3699A北側溝の一部を検出した。交差点東側の南側溝、交差点西側の南北両側溝の位置は不明である。また、交差点西側でSX1100東西道路跡を横断するSD3621A溝が設けられ、北から南に向けて道路排水が考慮されている。

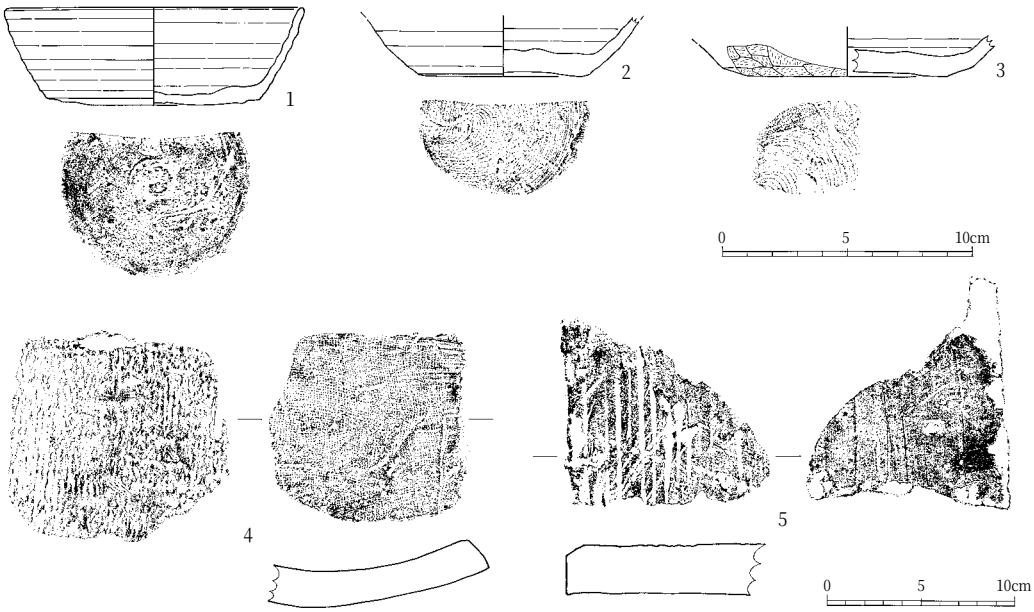
【Ｂ期の交差点】

SX2600南北道路跡は、交差点北側でSD3044B東側溝、交差点南側でSD2523B西側溝の一部を検出した。交差点北側の西側溝、交差点南側の東側溝の位置は不明である。SX1100東西道路跡は、交差点東側でSD3699B北側溝を検出した。交差点東側の南側溝、交差点西側の南北両側溝の位置は不明である。

【C期の交差点】

SX2600南北道路跡は、交差点北側でSD3044C東側溝、交差点南側でSD2523C西側溝を検出した。交差点北側の西側溝、交差点南側の東側溝の位置は不明である。

SX1100東西道路跡は、交差点東側でSD3699B北側溝、SD3618南側溝を検出した。交差点東側の南側溝、交差点西側の南北両側溝の位置は不明である。交差点東側の側溝心々間距離は6.5mである。



番号	種　類	遺構	層位	特　　徴	写真	登録
1	須恵器坏	遺構面	検出面	残存2/3。口径13.2cm、底径8.6cm、器高3.9cm、底径／口径比0.717。底部：ヘラ切り。焼成良好。両面に重ね焼き痕、火襷痕。		R91
2	須恵器坏	遺構面	検出面	残存1/2。底径6.8cm。底部：回転糸切り無調整。焼成良好。両面に重ね焼き痕。		R92
3	須恵器坏	SD3614	堆積土	残存1/4。底径8.0cm。底部：回転糸切り→体下部～底部周縁手持ちヘラケズリ。焼成普通。両面に火襷痕。		R93
4	平瓦	SD3614	堆積土	一枚作り。広端部、右側面残存、ヘラケズリ。凸面：縦方向の縄叩き目痕（つぶれ気味）。凹面：糸切痕→重複する布目痕。やや赤い褐灰色。焼成ややあまい。胎土に1mm以下のガラス粒、砂粒を多く含む。	11-5	R94
5	塼	SD3616	堆積土	無文塼。残存幅11.0cm、残存長11.7cm、厚さ2.7cm。１側面残存、ヘラケズリ。左面：糸切痕→平行叩き目痕→ヘラケズリ→縄圧痕（１条）。右面：ヘラ状工具によるナデ→指頭圧痕。両面青灰色、中は橙色。焼成やや良好。胎土に1mm以下のガラス粒、3mm以下の砂粒を多く含む。	11-8	R95

第18図　43Ｄ区出土遺物

また、交差点西側ではSX1100東西道路跡を横断するSD3621C溝が設けられ、北から南への道路排水が考慮されている。

(2) SB3610・3611掘立柱建物跡

調査区南東部で掘立柱建物跡２棟の一部とみられる柱穴５カ所を検出し、３箇所で柱痕跡、１箇所で柱抜取穴を確認した。SB3610・3611掘立柱建物跡とも柱穴は一辺0.6～1.2mの長方形を基調とし、柱痕跡は径20～25cmの円形である。両建物跡は重複し、規模、棟方向などは不明である。

(3) SA3612柱列跡

調査区西壁際で径20cm前後の円形のピット８個からなるSA3612柱列跡を検出した。SD2523C西側溝と平行しており、道路に面した区画に伴う塀跡と考えられる。

(4) その他

道路跡よりも新しいSD3614溝跡から現代陶器、須恵器坏（第18図３）、平瓦（第18図４）、SD3616溝から塼（第18図５）、遺構面から須恵器坏（第18図１・２）などの破片が少数出土した。

５．43Ｅ区

SX2800南北道路跡、SX2900東西道路跡及び両者の交差点（後述の西３南４交差点）、掘立柱建物跡３棟（SB3686～3688）、土壙１基（SK3689）、道路跡より新しい溝跡２条などを表土直下の地山上面で検出した（第19図、図版７）。地山上面の標高は、調査区北壁中央で約54.8m、調査区南壁中央で約54.5mあり、北から南に向けて傾斜している。また、調査区西壁中央・東壁中央で約54.5mあり、東西方向での傾斜はあまりない。なお、調査区南半部は開田によってかなり削平を受けている。

(1) SX2800南北道路跡、SX2900東西道路跡と西３南４交差点

地山面でSX2800南北道路跡、SX2900東西道路跡の素掘側溝、路面、西３南４交差点を検出した。

SX2800南北道路跡には交差点北側・南側の両側溝に２時期、SX2900東西道路跡には交差点東側のSD2822南側溝に３時期、SD2821北側溝に２時期ある。

したがって、交差点には３時期（Ａ期→Ｂ期→Ｃ期）の変遷がある。各期における道路側溝の組み合わせは、第20図、表10のようにまとめられる。

【Ａ期の交差点】

SX2800南北道路跡は、交差点南側でSD3682A西側溝とSD3683A東側溝を検出した。交差点北側の東西両側溝の位置は不明である。交差点南側の側溝心々間距離は3.4mである。

SX2900東西道路跡は、交差点東側でSD2822A南側溝を検出した。交差点東側の北側溝、交差点西側の南北両側溝の位置は不明である。

【Ｂ期の交差点】

SX2800南北道路跡は、交差点南側でSD3682B西側溝とSD3683B東側溝、交差点北側でSD2876B東側溝を検出した。交差点北側の西側溝の位置は不明である。交差点南側の側溝心々間距離は5.2mである。

SX2900東西道路跡は、交差点東側でSD2821B南側溝の一部を検出した。交差点東側の南側溝、交差点西側の南北両側溝の位置は不明である。

SD2876B東側溝より須恵器坏（第21図２）・蓋（第21図４）・甕・壺破片、磨製石斧（第21図５）が出土した。須恵器坏は底径が大きく、底部ヘラ切り後に手持ちヘラケズリされている。

【Ｃ期の交差点】

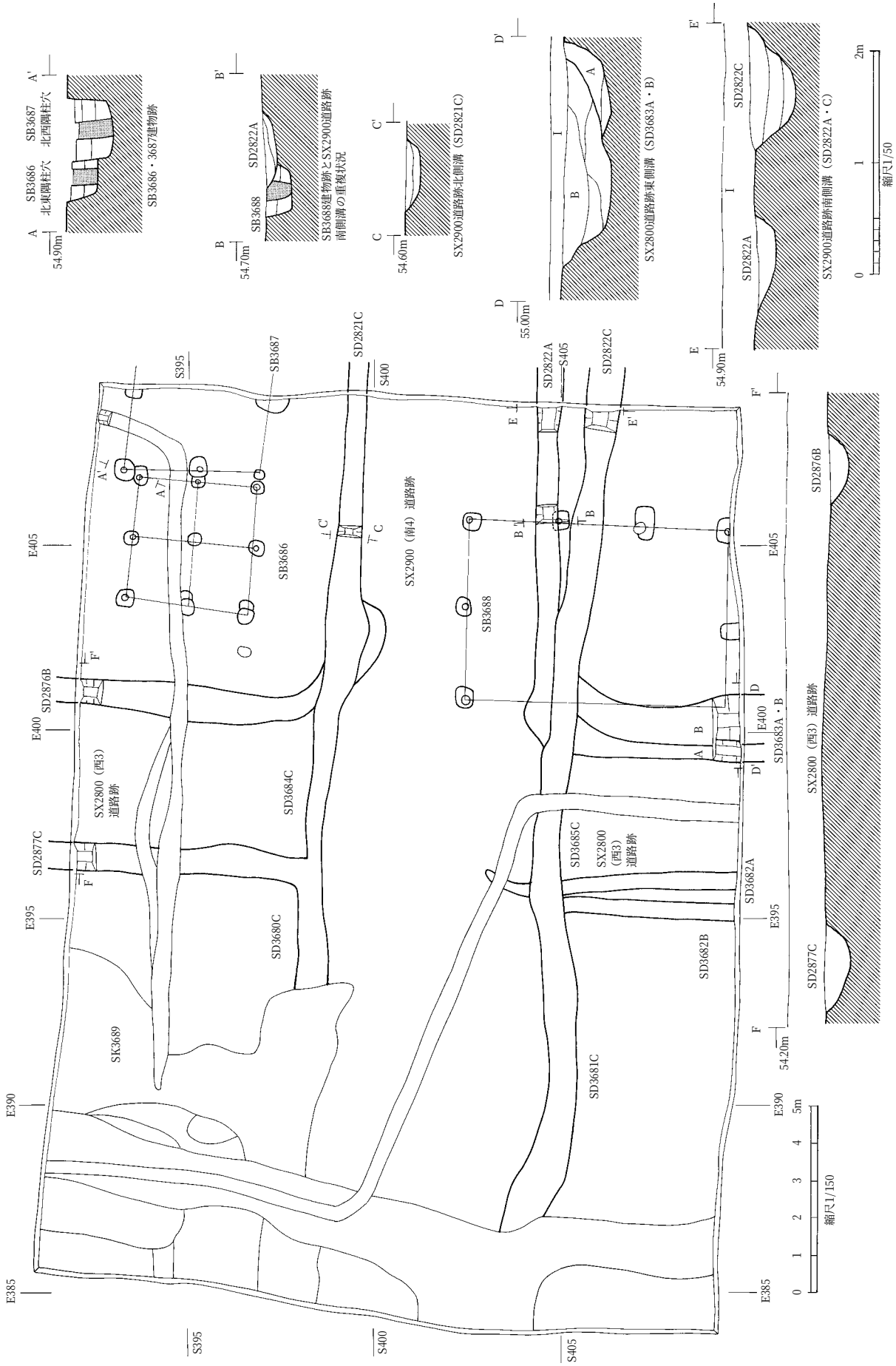
SX2900東西道路跡は、交差点東側でSD2821C北側溝とSD2822C南側溝、交差点西側でSD3680C北側溝とSD3681C南側溝を検出した。交差点両側の南北両側溝は、交差点でSX2800南北道路跡を横断するSD3684・3685溝で連結されている。交差点東側の側溝心々間距離は6.5mである。

SX2800南北道路跡は、交差点北側でSD2877C西側溝を検出した。交差点北側の東側溝、交差点南側の東西両側溝の位置は不明である。

(2) SB3686～3688掘立柱建物跡

【SB3686掘立柱建物跡】

交差点北東側の区画の南西隅に位置する。SB3687掘立柱建物跡と重複し、これよりも古い。東西２間、南北２間の総柱の掘立柱建物跡で、９個すべての柱穴を検出し、６箇所で柱痕跡を確認した。新旧２時期あり、ほぼ同位置で建て替えられている。Ａ期の柱穴は南西隅柱穴と西側柱列中央柱穴で検出した。掘方は一辺30～50cmの隅丸方形で、埋土は径2cm程の地山黄色土ブロックを多く含む黒褐色土である。柱痕跡は径約12～15cmの円形である。北側柱列でみると、総長は約3.2m、柱間寸法は約1.6m等間である。また、東側柱列でみると、総長は約3.1m、柱間寸法は北から約1.5m、約1.6mである。方向は西妻でみると、北で東に約５°偏り、SX2800南北道路跡のSD2876東側溝とほぼ同じ方向である。掘方埋土より土師器坏（ロクロ使用の有無不明)、底部を手持ちヘラケズリした須恵器



第19図　43Ｅ区平面図（1／150）・断面図（1／50）

坏（第21図１）の破片が出土した。

【SB3687掘立柱建物跡】

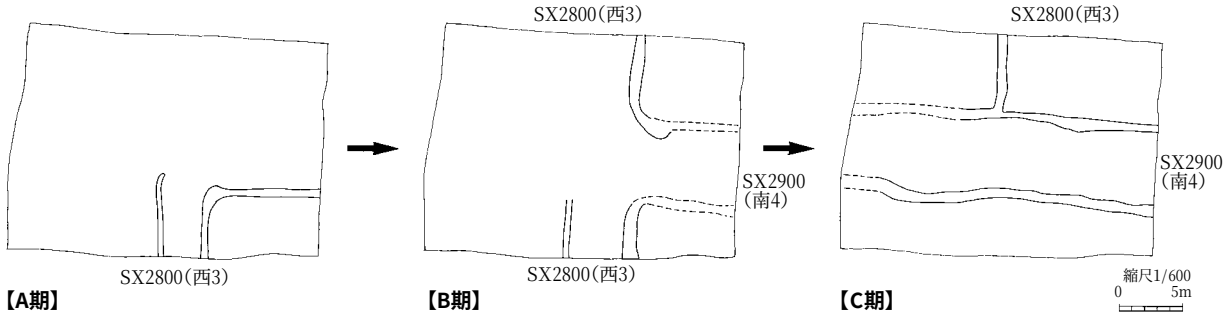
交差点北東側の区画の南西隅に位置する。SB3686掘立柱建物跡と重複し、これよりも新しい。梁行２間の東西棟と考えられ、西妻の柱穴３個と北西隅柱穴から東側１間目柱穴を検出し、２箇所で柱痕跡を確認した。南西隅柱穴から東側１間目柱穴の位置には土壙があり、これよりも古いとみられる。掘方は一辺約50～60cmの隅丸方形で、埋土は径2cm程の地山黄色土ブロックを多く含む黒色土である。柱痕跡は径約14cmの円形である。西妻の総長は約3.6mで、柱間寸法は北より約2.0m、約1.6m（推定）である。方向はほぼ北を向く。

遺構・層位		特徴
交差点東側のSX2900道路跡	SD2821C北側溝	上層が黒色（7.5YR2/1）シルト土、下層が地山橙色（7.5YR6/8）粘土ブロックを多く含む黒色（7.5YR2/1）シルト土。自然堆積土。
	SD2822A南側溝	３層に分かれ、１層が径2～5cmの地山ブロックを多く含む黒褐色（10YR3/2）シルト土、２層が黒褐色（10YR2/2）シルト土、３層が砂をラミナ状に含む黒褐色（10YR3/2）粘質シルト土。自然堆積土。
	SD2822B南側溝	黒褐色（10YR3/1）シルト土。自然堆積土。
交差点北側のSX2800道路跡	SD2876B東側溝	黒褐色（10YR3/1）シルト土。自然堆積土。
	SD2877C西側溝	黒色（10YR2/1）シルト土。自然堆積土。
交差点南側のSX2800道路跡	SD3683A東側溝	上層が径1cm前後の地山ブロックを少量含む暗褐色（10YR3/3）シルト土、下層が径2～5cmの地山ブロックを多量に含む黒褐色（10YR2/3）シルト土。自然堆積土。
	SD3683B東側溝	４層に分かれ、１層が黒色（10YR2/1）シルト土、２層が黒褐色（10YR3/1）シルト土、３層が径1cm前後の地山ブロックを多く含む黒褐色（10YR2/2）シルト土、４層が径2～5cmの地山ブロックを多量に含む黒褐色（10YR2/3）シルト土。自然堆積土。
SB3686建物跡	掘方	地山橙色（7.5YR6/8）粘質シルト土ブロックを多く含む黒色（7.5YR2/1）シルト土の互層。人為堆積土。
	柱痕跡	黒色（7.5YR2/1）シルト土。しまりがない。自然堆積土。
SB3687建物跡	掘方	地山橙色（7.5YR6/8）粘質シルト土ブロックを多く含む黒色（7.5YR2/1）シルト土の互層。人為堆積土。
	柱痕跡	黒色（7.5YR2/1）シルト土。しまりがない。自然堆積土。
SB3688建物跡	掘方	地山橙色（7.5YR6/8）粘質シルト土ブロックを多く含む黒色（7.5YR2/1）シルト土の互層。人為堆積土。
	柱抜取穴	黒色（7.5YR2/1）シルト土。しまりがない。自然堆積土。
基本層	Ⅰ層	水田耕作土。褐灰色(10Y4/1）砂質シルト土。
	Ⅱ層	地山。橙色（7.5YR6/8）粘土。

表９　43Ｅ区遺構断面図（第19図）土層一覧

交差点位置			道路側溝跡	側溝の規模			断面形		堆積土	備考
				上幅	下幅	深さ				
SX2900（南４）東西道路跡	A期	東側	SD2822A南側溝	70cm	40cm	45cm	U字状	自然堆積		SD3683A東側溝と一連
	B期	東側	SD2821B北側溝	?	?	?	?	自然堆積		SD2876B東側溝と一連
	C期	東側	SD2821C北側溝	50～110cm	35cm	13cm	皿状	自然堆積	6.5m	SD3684C溝、SD3680C北側溝、SD2877C西側溝と一連
			SD2822C南側溝	30～50cm	25cm	20cm	皿状	自然堆積		SD3685C溝、SD3681C南側溝と一連
		西側	SD3680C北側溝	80～160cm	?	?	?	自然堆積		SD3684C溝、SD2821C北側溝と一連
			SD3681C南側溝	70～110cm	?	?	?	自然堆積		SD3685C溝、SD2822C南側溝と一連
SX2800（西３）南北道路跡	A期	南側	SD3683A東側溝	60cm	25cm	40cm	U字状	自然堆積	3.5m	SD2822A南側溝と一連
			SD3682A西側溝	40cm	?	?	?	自然堆積		
	B期	南側	SD3683B東側溝	100～130cm	60cm	40cm	U字状	自然堆積	5.2m	
			SD3682B西側溝	50cm	?	?	?	自然堆積		
		北側	SD2876B東側溝	60～100cm	30cm	20cm	U字状	自然堆積		SD2821B北側溝と一連
	C期	北側	SD2877C西側溝	70～90cm	30cm	22cm	U字状	自然堆積		
交差点横断溝	C期	北側	SD3684C溝	40～60cm	?	?	?	自然堆積		SD2821C・3680C北側溝、SD2877C西側溝と一連
		南側	SD3685C溝	70cm	?	?	?	自然堆積		SD2822C・3681C南側溝と一連

表10　43Ｅ区検出の道路跡一覧

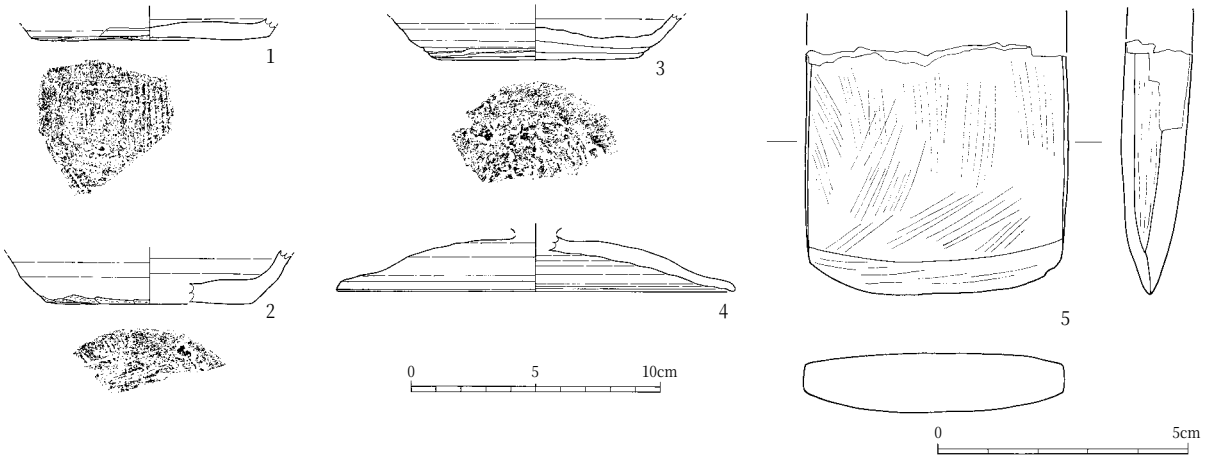


第20図　43Ｅ区検出の西３南４交差点の変遷（1／600）

【SB3688掘立柱建物跡】

交差点南東隅の区画の北東部からSX2900東西道路跡中央にかけて位置する。SX2900東西道路跡のSD2822A・B南側溝、SX2800南北道路跡のSD3683B東側溝と重複し、これらよりも古い。道路成立以前の掘立柱建物跡である。

桁行３間、梁行２間の南北棟で、７個の柱穴を検出し、４箇所で柱痕跡、１箇所で柱抜取穴を確認した。南西隅柱穴はSD3683B東側溝に壊され、遺存していない。掘方は一辺約30～60cmの方形で、埋土は径２～５cm程の地山黄色土ブロックを多く含む黒褐色土である。柱痕跡は径約18～20cmの円形である。東側柱列でみると、桁行は総長約6.9m、柱間寸法は北から約2.4m、約2.2m、約2.3mで、方向は北で東に約３°偏る。また、北妻でみると、梁行は総長約4.8mで、柱間寸法は西から約2.5m、約2.3mである。



番号	種　類	遺構	層位	特　　徴	写真	登録
1	須恵器坏	SB3686	掘方	残存<1/6。底径約9.6cm。底部：切り離し不明→手持ちヘラケズリ。焼成良好。内面底部：灰かぶり。		R96
2	須恵器坏	SD2876B	堆積土	残存1/4。底径8.2cm。底部：ヘラ切り→手持ちヘラケズリ。焼成良好。両面に火襷痕。		R97
3	須恵器坏	SK3689	堆積土	残存>1/3。底径8.4cm。底部：ヘラ切り（切り離しに２度失敗し、粘土板を底部に接合して作り直し、３度目に切り離した不良品）。焼成ややあまい。		R98
4	須恵器蓋	SD2876B	堆積土	残存1/4。つまみ欠損。口径16.0cm。口縁短く内傾。焼成普通。口縁部に重ね焼き痕。		R99
5	磨製石斧	SD2876B	堆積土	粘板岩製。両刃。刃部幅5.0cm。基部欠損。全面平滑に研磨。擦痕。	10-12	R100

第21図　43Ｅ区出土遺物

６．43Ｆ区

SX3600南北道路跡、SX2900東西道路跡及び両者の交差点（後述の西４南４交差点）、掘立柱建物跡７棟（SB3694～3700）、土壙２基（SK3678・3679）、ピット、溝跡などを表土下の地山上面で検出した（第22図、図版８）。調査区南半部は開田によって地山面下まで大きく削平を受けており、遺構はほとんど検出されなかった。地山上面の標高は、調査区北壁際のSX3600南北道路跡の路心で約54.6m、交差点中央で約54.5mあり、北から南に向けてわずかに傾斜している。また、調査区西壁際のSX2900東西道路跡の路心付近で約54.7m、調査区東壁際のSX2900東西道路跡の路心付近で約54.6mあり、西から東に向けてわずかに傾斜している。

なお、SX3600南北道路跡は、これまで本遺跡でその存在が想定されていたが検出されていなかった道路跡である。また、ピットのうちのいくつかは掘立柱建物跡または柱列跡の柱穴とみられるが、配置関係等から断定することができず、確実なもののみ掘立柱建物跡と認定した。

(1) SX3600南北道路跡、SX2900東西道路跡と西４南４交差点

SX3600南北道路跡、SX2900東西道路跡の素掘側溝、路面、西４南４交差点を検出した（第22図）。SX3600南北道路跡、SX2900東西道路跡とも１時期で、道路の修復はないものとみられる。

SX3600南北道路跡は、交差点北側でSD3692東側溝とSD3691西側溝を検出した。側溝心々間距離は3.8mである。SD3692東側溝から非ロクロ調整の土師器甕、須恵器高坏（第23図２）破片、黒曜石製石核（第23図３）が出土した。

SX2900東西道路跡は、交差点東側でSD3680北側溝、交差点西側でSD3693北側溝の一部を検出した。

(2) SB3694～3700掘立柱建物跡

【SB3694掘立柱建物跡】

調査区北西部に位置する。桁行３間、梁行２間の南北棟で、10個すべての柱穴を検出し、そのすべてで柱痕跡を確認した。掘方は一辺約30～40cmの方形または隅丸方形で、埋土は径5cm程の地山黄色土ブロックを多く含む黒色土である。柱痕跡は径約12～18cmの円形である。東側柱列でみると、桁行は総長約4.0m、柱間寸法は北から約1.2m、約1.9m、約1.0mで、方向は北で西に約13°偏る。南妻でみると、梁行は総長約2.1m、柱間寸法は西より約1.0m、約1.1mである。

【SB3695A・B掘立柱建物跡】

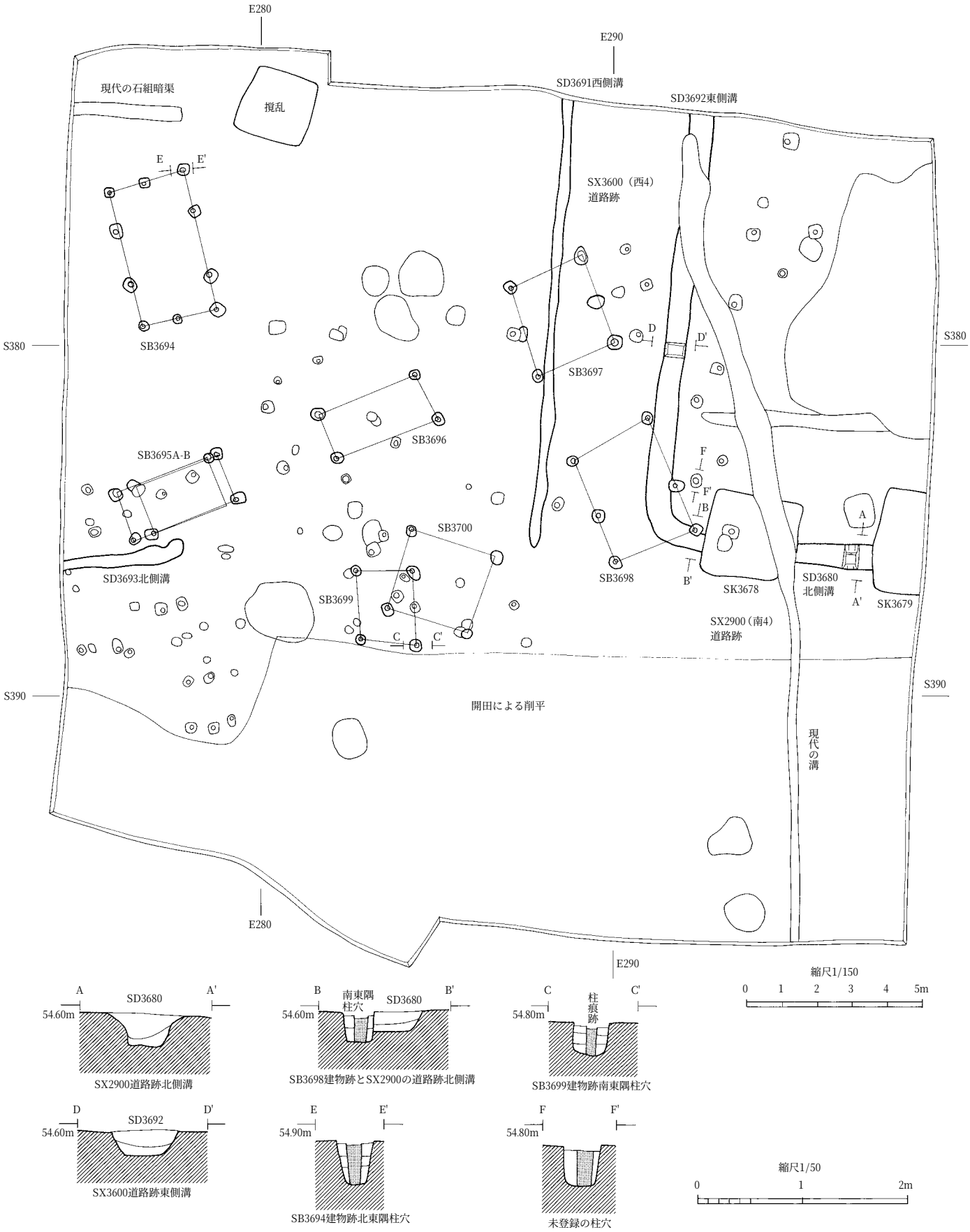
調査区北西部に位置する。桁行１間、梁行１間の東西棟で、位置を西側にややずらして建て替えられている。Ｂ建物跡の南東隅柱穴は検出していないが、それ以外の柱穴はすべて検出した。Ａ建物跡の３箇所で柱痕跡、１箇所で柱抜取穴、Ｂ建物跡の１箇所で柱痕跡、２箇所で柱抜取穴を確認した。掘方は一辺約30～40cmの隅丸方形または楕円形で、埋土は径２～５cm程の地山黄色土ブロックを多く含む黒色土である。柱痕跡はA建物跡が径約14～16cmの円形、B建物跡が径約14cmの円形である。Ａ建物跡は桁行（南側柱列）の総長・柱間とも約2.5m、梁行（東妻）の総長・柱間とも約1.4mである。Ｂ建物跡は桁行（北側柱列）の総長・柱間とも約2.8m、梁行（西妻）の総長・柱間とも約1.4mである。北側柱列でみると、方向はＡ・Ｂ建物跡とも東で北に約20°偏る。

【SB3696掘立柱建物跡】

調査区中央付近に位置する。桁行１間、梁行１間の東西棟で、４個すべての柱穴を検出し、３箇所で柱痕跡、１箇所で柱抜取穴を確認した。掘方は一辺約30～40cmの隅丸方形か楕円形で、埋土は径２～５cm程の地山黄色土ブロックを多く含む黒色土である。柱痕跡は径約12cmの円形である。南側柱列でみると、桁行は総長・柱間とも約3.1mで、方向は東で北に約21°偏る。東妻でみると梁行は総長・柱間とも約1.4mである。

【SB3697掘立柱建物跡】

交差点北側のSX3600南北道路跡の路面上に位置するが、道路跡との新旧関係は不明である。桁行２間、梁行１間の南北棟で、６個すべての柱穴を検出し、３箇所で柱痕跡、１箇所で柱抜取穴を確認した。掘方は一辺約30～50cmの隅丸方形または不整形で、埋土は径２～５cm程の地山灰色土ブロックを多く含む黒色土である。柱痕跡は径約12～18cmの円形である。西側柱列でみると、桁行は総長約2.6m、柱間寸法は約1.3m等間と推定され、方向は北で西に約17°偏る。南妻でみると、梁行は総



第22図　43Ｆ区平面図（1／150）・断面図（1／50）

長・柱間とも約2.4mである。

【SB3698掘立柱建物跡】

交差点北側のSX3600南北道路跡の路面上に位置し、道路跡よりも新しい。桁行２間、梁行１間の南北棟で、６個すべての柱穴を検出し、そのすべてで柱痕跡を確認した。掘方は一辺約30～40cmの隅丸方形または楕円形で、埋土は径２～５cm程の地山灰色土ブロックを多く含む黒色土である。柱痕跡は径約12～14cmの円形である。東側柱列でみると、桁行は総長約3.5m、柱間寸法は北から約2.1m、約1.4mで、方向は北で西に約23°偏る。北妻でみると、梁行は総長・柱間とも約2.4mである。桁行総長が東側柱列で西側柱列よりも約40cm長いことから、平面形はやや歪んでいる。

【SB3699掘立柱建物跡】

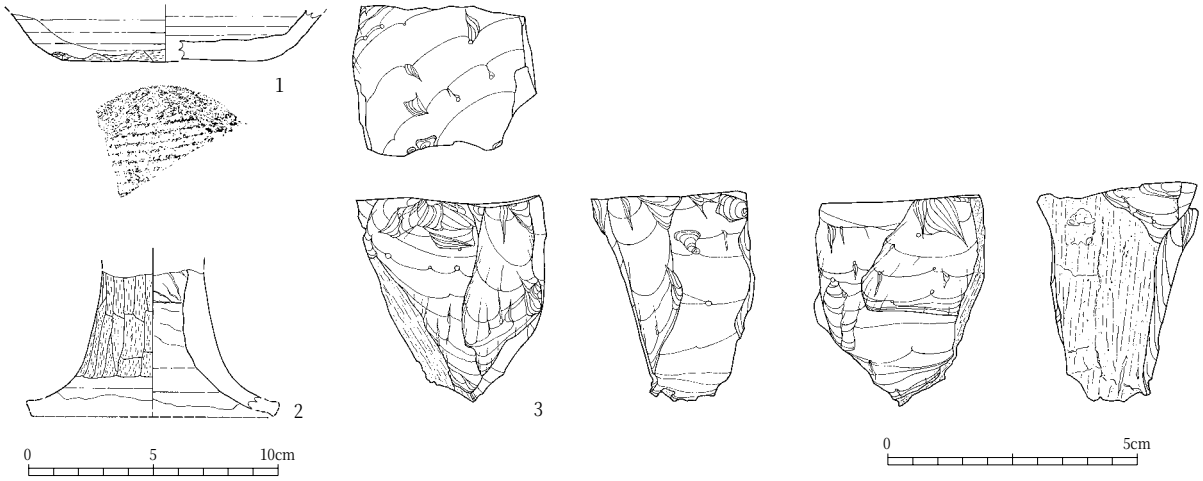
交差点西側のSX2900東西道路跡の路面上に位置するが道路跡との新旧関係は不明である。また、SB3700掘立柱建物跡とも重複するが新旧関係は不明である。桁行１間、梁行１間の南北棟で、４個

遺構・層位		特徴
交差点北側のＳＸ3600道路跡	SD3692東側溝	上層が砂粒をやや多く含む黒褐色（10YR3/1）シルト土、下層が径1～3cmの地山橙色（7.5YR6/8）粘質土ブロックを多く含む黒褐色（10YR3/1）シルト土。自然堆積土。
交差点東側のＳＸ2900道路跡	SD3680北側溝	上層が砂粒をやや多く含む黒褐色（10YR3/1）シルト土、下層が径1～3cmの地山橙色（7.5YR6/8）粘質土ブロックを含む黒褐色（10YR3/1）シルト土。自然堆積土。
ＳＢ3694建物跡	掘方	径1～5cmの地山橙色（7.5YR6/8）粘土ブロックを多く含む黒褐色（7.5YR2/2）シルト土の互層。人為堆積土。
	柱痕跡	黒褐色（7.5YR2/1）シルト土。しまりない。自然堆積土。
ＳＢ3698建物跡	掘方	径1～5cmの地山橙色（7.5YR6/8）粘土ブロックを多く含む黒褐色（7.5YR3/1）シルト土の互層。人為堆積土。
	柱痕跡	黒褐色（7.5YR3/1）シルト土。しまりない。自然堆積土。
ＳＢ3699建物跡	掘方	径1cm前後の地山黄橙色（7.5YR7/8）粘土ブロックをやや多く含む黒褐色土（7.5YR2/2）の互層。人為堆積土。
	柱痕跡	黒褐色（7.5YR3/1）シルト土。しまりない。自然堆積土。
未登録の柱穴	掘方	径2～５ｃｍの地山黄白色粘土ブロックを多く含む黒褐色（10YR2/2）シルト土。人為堆積土。
	柱痕跡	黒色（10YR2/1）シルト土。しまりない。自然堆積土。
基本層	Ⅰ層	水田耕作土。褐灰色(10Y4/1）砂質シルト土。
	Ⅱ層	地山。約12万年前に降灰した肘折火山灰起源の明褐色（7.5YR5/8）～褐色（7.5YR4/4）の砂質シルト土が上部に部分的に残る箇所もある。その下層が橙色（7.5YR6/8）粘土。

表11　43Ｆ区遺構断面図（第22図）土層一覧

道路跡名	時期	交差点位置	道路側溝跡	側溝の規模			断面形	堆積土	側溝心々間距離	備考
				上幅	下幅	深さ				
SX3600（西４）南北道路跡	Ａ期	北側	SD3692東側溝	60～70cm	45cm	25cm	逆台形状	自然堆積	3.8m	SD3680北側溝と一連。SB3698建物跡より古い。
			SD3691西側溝	20～40cm	?	?	?	自然堆積		SB3691建物跡と重複、新旧関係不明。
SX2900（南４）東西道路跡	Ａ期	東側	SD3680北側溝	50～70cm	30cm	30cm	逆台形状	自然堆積		SD3692東側溝と一連。SB3698建物跡、SK3678・3679土壙より古い。
		西側	SD3693北側溝	30～60cm	?	?	?	自然堆積		

表12　43Ｆ区検出の道路跡一覧



番	種類	遺構	層位	特徴	写真	登録
1	須恵器坏	遺構面	検出面	残存1/4。底径8.2cm。底部：静止糸切り→体下部～底部周縁手持ちヘラケズリ。焼成普通。		R101
2	須恵器高坏	SD3692	堆積土	脚部破片。外面：手持ちヘラケズリ。内面：しぼり痕、ロクロナデ。焼成普通。		R102
3	石核	SD3692	堆積土	黒曜石製。角柱状。自然面残存し、原石はさほど大きくはない。単設打面を用いて縦長薄片を剥離。肉眼観察では、本遺跡の北西約10km、加美町湯の倉産の黒曜石と特徴が類似。	10-13	R103

第23図　43Ｆ区出土遺物

すべての柱穴を検出し、そのすべてで柱痕跡を確認した。掘方は径約30～40cmの円形または不整形で、埋土は径２cm程の地山黄色土ブロックを多く含む黒色土である。柱痕跡は径約12～14cmの円形である。東側柱列でみると、桁行は総長・柱間とも約2.1mで、方向は北で西に約４°偏る。北妻でみると、梁行は総長・柱間とも約1.6mである。桁行総長が東側柱列で西側柱列よりも約20cm長いことから、平面形はやや歪んでいる。

【SB3700掘立柱建物跡】

交差点西側のSX2900東西道路跡の路面上に位置するが、道路跡との新旧関係は不明である。また、SB3699掘立柱建物跡とも重複するが、新旧関係は不明である。桁行１間、梁行１間の東西棟で、４個すべての柱穴を検出し、２箇所で柱痕跡を確認した。掘方は径約30～40cmの楕円形で、埋土は径2～5cm程の地山黄色土ブロックを多く含む黒色土である。柱痕跡は径約14cmの円形である。東側柱列でみると、桁行は総長・柱間とも約2.5mと推定される。西妻でみると、梁行は総長・柱間とも約2.4mで、方向は北で東に約18°偏る。

(3) SK3678・3679土壙

SK3678・3679土壙は調査区東部に位置し、SD3680北側溝よりも新しい。SK3678土壙は柱穴とみられる未登録のピットよりも古い。規模はSK3678土壙が南北約2.5m、東西2.0m、SK3679土壙が南北約3.0m、東西1.4m以上である。堆積土はしまりのない黒色土の自然堆積土である。

７．43Ｇ区

これまで未検出のSX3600（西４）南北道路跡を検出する目的で、43F区の北約40mに東西約25m、南北約４m、径約100m2のトレンチを設定した（第２・３図）。表土下は地山礫層で、西から東に向けて傾斜している。後世の削平を受けているとみられる。43F区で検出したSX3600南北道路跡のSD3691西側溝、SD3692東側溝の北への延長は検出されなかった。

第３章　考察

確認調査を行った43A区～43G区のうち、比較的広く調査した43B区で、材木塀によって方格地割内をさらに小区画し、多数の掘立柱建物跡が建て替えられていた一郭を検出した。また、道路跡交差点の検出を目的とした43A・D・E・F区では想定した位置でそれぞれ交差点を検出し、方格地割の交差点の様相がより明らかとなってきた。そこで、43B区の遺構変遷、及び道路跡交差点の様相について考察する。

１．43Ｂ区の主要遺構の変遷

43B区は後述の西２南６区の南半部中央に位置する。材木塀跡６条（SA3523・3525・3527・3667～3668）、掘立柱建物跡（以下、「建物跡」と略称する）13棟（SB3641～3653）、溝跡４条（SD3521・3532・3664・3665）など多数の遺構を検出した（第４図）。加美町教育委員会が昨年度に確認調査を行った隣接の42W区（加美町教育委員会、2004）と併せて以下検討する。

東西方向のSA3523材木塀跡と南北方向のSA3525材木塀跡は、柱材が一部残り、遺存状態が比較的

よい。42W区で検出した５条の材木塀跡（SA3523～3527）のうち、同様に柱材が残る最も新しい段階の東西方向のSA3523材木塀跡と南北方向のSA3525材木塀跡の延長に当たる。これらの材木塀跡は解体時に柱は抜き取られるか切り取られている。

位置関係と柱材の残存状況からみて、東西方向のSA3523・3524材木塀跡と南北方向のSA3525材木塀跡は、掘方が途切れるものの同時期に造営された一連の材木塀跡であり、Ｌ字状に接続していたとみられる。西２南６区の南東部を材木塀によって方形に小区画した一郭のうち、南西部の区画施設に当たり、SA3523・3524材木塀跡を小区画の南辺、SA3525材木塀跡を小区画の西辺と位置付けることができる。SX2400（西１）南北道路跡までの距離をこの小区画の東西幅とみると、東西幅は約56mで、西２南６区の東西幅のほぼ半分となる。

この小区画の南辺区画施設であるSA3523材木塀跡の北に平行して、２条の材木塀跡（北からSA3666、SA3667）があることから、小区画の南辺区画施設には３時期の変遷があることになる。

これら３条の材木塀跡には直接の重複関係はないが、SB3653建物跡との新旧関係、位置関係をみると、SB3653建物跡はSA3666・3667材木塀跡よりも新しく、SA3523材木塀跡の北内側に位置している。したがって、SB3653建物跡はSA3523材木塀跡と同時期の建物跡である可能性が高く、その場合にはSA3666・3667材木塀跡はSA3523材木塀跡よりも古いことになる。そして、最も新しいSA3523材木塀跡が南にあることから、小区画の南辺は新しくなるにつれて南に拡大したとみられ、Ａ期：SA3666材木塀跡→Ｂ期：SA3667材木塀跡→Ｃ期：SA3523材木塀跡の順に変遷したものと考えられる。

小区画の西辺については、前述のようにSA3525材木塀跡は、SA3523材木塀跡と一連の材木塀跡とみられることから、Ｃ期に位置付けられる。SA3668材木塀跡はＣ期のSA3525材木塀跡よりも古く、位置関係からみてＡ期のSA3666材木塀跡に接続するものとみられる。そしてSA3527材木塀跡は、SA3525材木塀跡と重複して古く､位置関係からみてB期のSA3667材木塀跡に接続するものとみられる。

以上、小区画施設の材木塀跡についてまとめると、

Ａ期：南辺がSA3666材木塀、西辺がSA3668材木塀跡

Ｂ期：南辺がSA3667・3527材木塀、西辺がSA3527材木塀跡

Ｃ期：南辺がSA3523・3524材木塀、西辺がSA3525材木塀跡

という変遷が考えられる。

次にこの小区画内の建物群についてみると、SB3646A・B建物跡は小区画のC期に位置付けられるSB3653建物跡と東側柱列を揃えて南北に並び、方向も同じく北で東に約13°偏ることから、これらは同時期の建物跡とみられる。また、SB3642建物跡とSB3644建物跡は、東側柱列を揃えて南北に並び、方向も北で東に約７～10°偏ることから、同時期の建物跡とみられる。また、SB3644建物跡の北妻がSB3646建物跡の南妻と柱筋をほぼ揃えていることから、これらSB3646・3653・3642・3644建物跡は同時期の建物跡とみられ、小区画Ｃ期の建物群に位置付けられる。

SB3643建物跡とSB3644建物跡は、ほぼ同規模で位置的にも重複する。SB3643建物跡がSB3644建物跡よりも古いこと、SB3646建物跡に新旧２時期あることから、SB3646A建物跡とSB3643建物跡、SB3646B建物跡とSB3644建物跡がそれぞれ同時期の建物跡とみられる。

また、SB3652建物跡はSB3653建物跡と重複して古く、SB3652建物跡の西側柱列はSB3646A建物跡の西側柱列とほぼ柱筋を揃えていることから、SB3646A建物跡とSB3652建物跡、SB3646B建物跡とSB3653建物跡がそれぞれ同時期の建物跡とみられる。

したがって、C期に位置付けられるSB3646A・B建物跡を基準に考えると、C１期：SB3646A・3643・3652建物跡→C２期：SB3646B・3642・3644・3653建物跡へと変遷していることがわかる。

C１期よりも古い建物跡にはSB3648A・B建物跡とSB3650建物跡がある。SB3651建物跡は、SB3653建物跡と重複するが、新旧関係は不明である。しかし、SB3651建物跡はSB3650建物跡と位置的に重複し、SB3650建物跡よりも新しいことから、C２期のSB3653建物跡よりも古く、SB3650建物跡に継続して建て替えられていた可能性が高い。したがって、C１期よりも古い建物群には新旧２時期あり、A期：SB3648A・3650建物跡→B期：SB3648B・3651建物跡の順に変遷しているとみられる。

また、C２期のSB3646B建物跡と重複して新しいSB3645・3647・3649建物跡もSB3646B建物跡と方向がほぼ同様で北で東に13°前後偏り、C２期のSB3646B建物跡に継続して建て替えられた建物跡とみられる。この時期をD期とする。

また、SD3521溝跡はD期のSB3645建物跡よりも新しく、SD3521・3532溝跡は材木塀による小区画と位置的に重複する。これらの溝跡は小区画よりも新しいとみられ、西２南６区南東部の使われ方が大きく変化していると考えられる。この時期をE期とする。

次に各期の年代について検討する。

B期のSB3648B建物跡の掘方から底部手持ちヘラケズリの須恵器坏、柱抜取穴からロクロ調整の内黒土師器甕口縁部破片（第６図５）、底部手持ちヘラケズリの須恵器坏（第６図11）、須恵器稜椀（第６図19）などが出土した。須恵器坏・稜椀の特徴は、紀年銘木簡との共伴から延暦９年（790）～延暦24年（805）の間に位置付けられている多賀城市市川橋遺跡SX1351C河川跡第２層（多賀城市教育委員会、2003）、須恵器壺Gと共伴して８世紀末～９世紀初頭頃に位置付けられる同遺跡第７次調査SK236土壙（多賀城市教育委員会、1990）、築館町伊治城跡SI173竪穴住居跡（築館町教育委員会、1991）などから出土したものと類似しており、８世紀末～９世初頭頃のものとみられる。したがって、B期のSB3648B建物跡は９世紀初頭頃に建て替えられたとみられ、A期のSB3648A建物跡は８世紀後葉頃には建てられていたと考えられる。以上のことから、A期は８世紀後葉頃、B期は９世紀初頭頃とみられる。

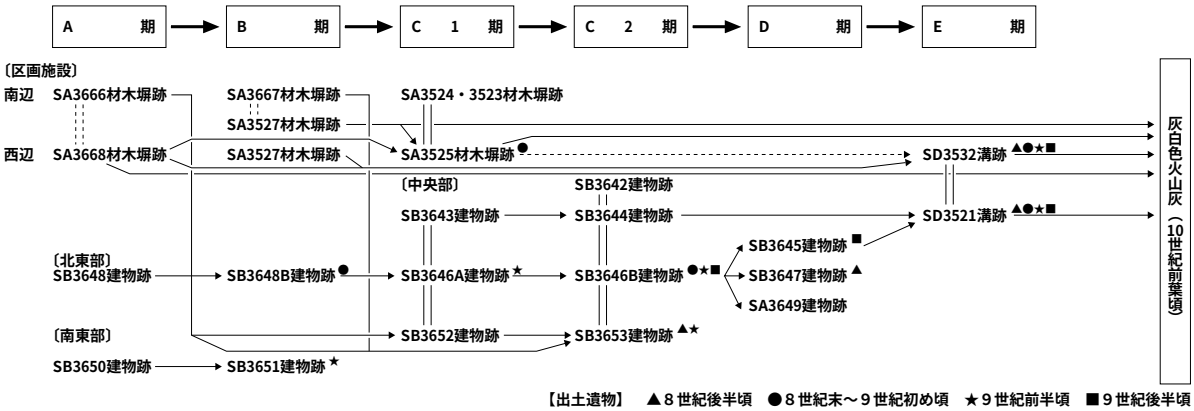
E期のSD3521・3532溝跡の堆積土上部には、10世紀前葉頃に降灰した灰白色火山灰が堆積し、この頃までには溝は完全に埋没している。SD3521・3532溝跡からは、底径の小さい回転糸切り無調整の須恵器坏（第８図５～８、第９図11・12）が比較的多く出土した。これらは貞観11年（869）の陸奥国大地震の復興瓦を焼成した仙台市五本松窯跡（仙台市教育委員会、1987）出土須恵器坏と器形・技法が共通しており、SD3521・3532溝跡は９世紀後葉頃に埋没し始めたものと考えられる。したがって、E期は９世紀後葉頃～10世紀前葉頃とみられる。

C１期、C２期、D期の建物跡から出土した土器はいずれも小破片で、C２期のSB3646B建物跡の掘方、D期のSB3645建物跡の掘方から９世紀後葉前後のものとみられる底部回転糸切り無調整の須恵

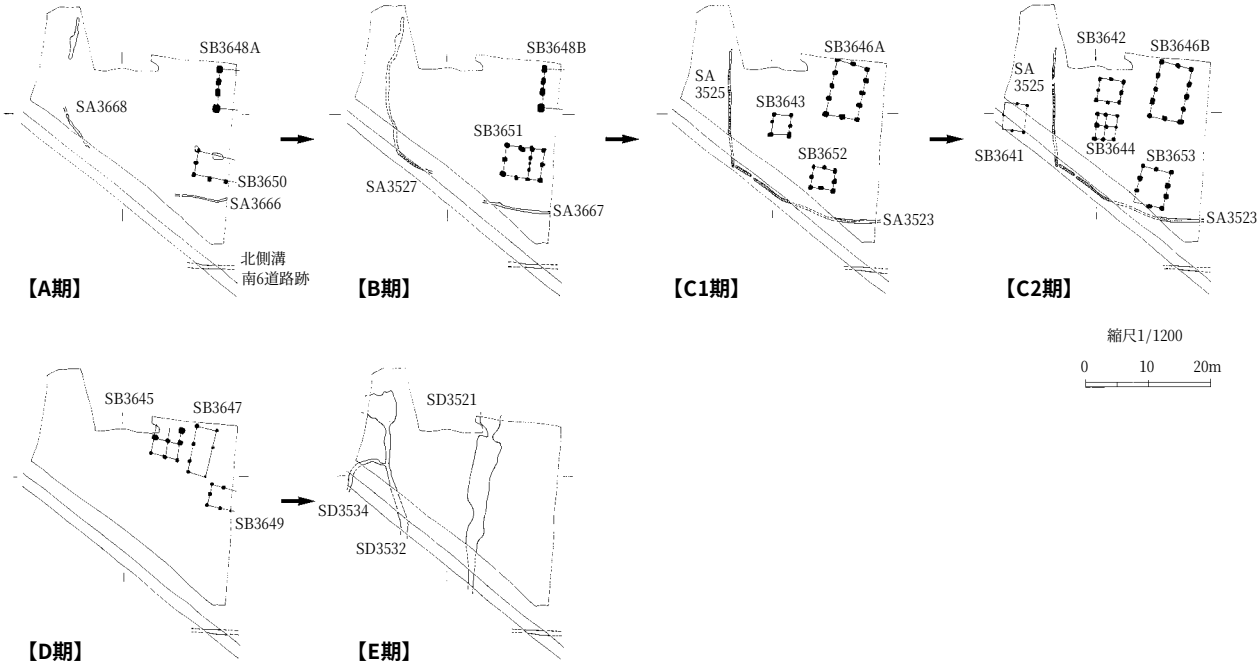
器坏小破片（第６図16・17）が出土した。

前述のように、Ｂ期が９世紀初頭頃、Ｅ期が９世紀後葉頃～10世紀前葉頃とみられることから、Ｂ期～Ｅ期の存続期間を考慮すると、ここではおおむねC１期は９世紀前葉頃、Ｃ２期は９世紀中葉頃、Ｄ期は９世紀後葉頃とみておきたい。

以上のように、主要遺構の重複状況、及び新旧関係と出土遺物からみた年代的位置付けをまとめると第24図のようになり、第25図に各期の遺構を取りまとめた。



第24図　43Ｂ区検出の主要遺構の変遷と年代



第25図　43Ｂ区の主要遺構変遷図（1／1200）

【Ａ期】８世紀後葉頃

小区画の西辺はSA3668材木塀跡、南辺はSA3666材木塀跡と考えられる。小区画内の建物跡は、規模の大きなSB3648A建物跡、中規模のSB3650建物跡で構成される。

【Ｂ期】９世紀初頭頃

小区画の西辺はSA3527材木塀跡、南辺はSA3527・3667材木塀跡と考えられる。小区画内の建物跡

は、規模の大きなSB3648B建物跡、中規模のSB3651建物跡で構成される。

【Ｃ１期】９世紀前葉頃

小区画の南辺はSA3523・3524材木塀跡、西辺はSA3525材木塀跡で小区画されている。小区画内の建物跡は中規模のSB3646A建物跡、小規模のSB3643・3652建物跡で構成される。

【Ｃ２期】９世紀中葉頃

小区画の南辺はSA3523・3524材木塀跡、西辺はSA3525材木塀跡で小区画されている。小区画内の建物跡は中規模のSB3646B・3653建物跡、小規模のSB3642・3644建物跡（SB3644建物跡は総柱の倉庫跡）で構成される。

【Ｄ期】９世紀後葉頃

規則的な配置を取る建物群が認められなくなること、前述のようにＣ１・２期のSA3523～3525材木塀跡が解体されていることから、建物群が存続するものの材木塀による小区画は認められない可能性がある。建物は中規模のSB3647・3649建物跡と小規模な倉庫と考えられるSB3645建物跡とからなる。

【Ｅ期】９世紀後葉頃～10世紀前葉頃

方格地割の内部の使われ方が大きく変化し、南北溝跡２条（SD3521・3532溝跡）で構成される。この時期に伴う建物跡の存在の有無は不明確であるが、比較的多くの遺物が含まれることから、周辺に同時期の建物群が存在する可能性もある。

２．南北道路跡・東西道路跡交差点の様相

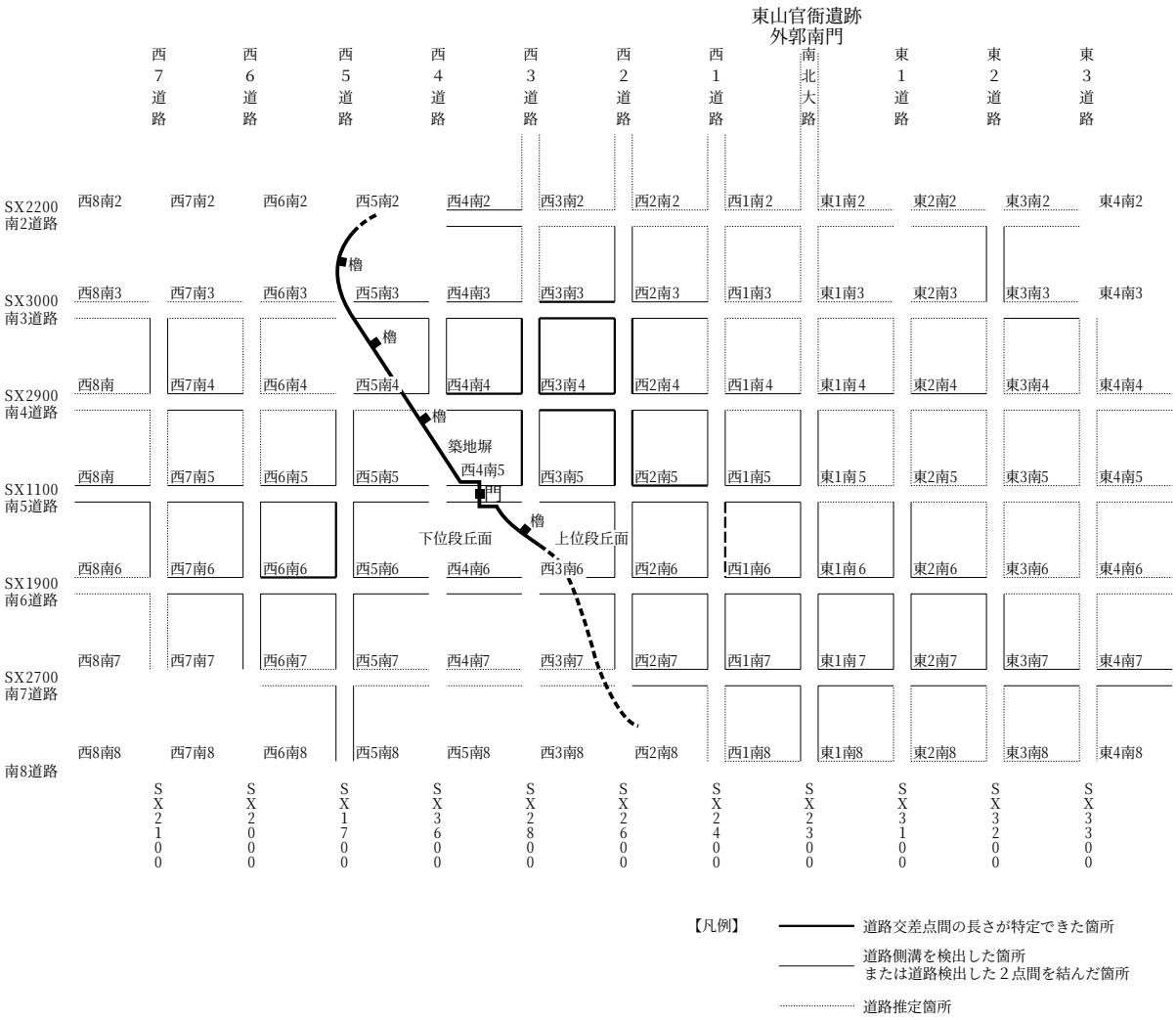
(1) 方格地割の区画と交差点の名称

方格地割内の交差点を検討するにあたり、道路跡については道路跡の略称（西１～７、東１～３、南２～８）を用いることにする。そして、都城の条坊制の呼称に倣って、南北大路跡の西側の区画については各区画の南西隅の交差点の略称を用い（たとえば西２南北道路跡、南５東西道路跡の交差点を「西２南５交差点」、西２南５交差点の北東部の区画を「西２南５区」と呼ぶ）、南北大路跡の東側の区画については各区画の南東隅の交差点の略称を用いることにする（第26図）。

今回の確認調査では、南北大路跡の西側に位置する上位段丘面上の想定位置で４箇所の交差点（43A区で西１南６交差点、43D区で西２南５交差点、43E区で西３南４交差点、43F区で西４南４交差点）を検出し、方格地割が東西10町、南北８町の広範囲に施工されていたことを再確認した（第２・３図）。

これまでの調査の結果、上位段丘面上では40区で西１南５交差点、西２南４交差点、西３南３交差点を検出し（加美町教育委員会、2004）、39A区で西２南３交差点（宮城県教育委員会、2004）、44区で東１南６交差点（宮城県教育委員会、2004のA地点確認調査；今年度の加美町教育委員会の事前調査）、計５箇所の交差点を検出している（第２・３図）。44区を除けばいずれも南北大路跡の西側に位置する。

また、下位段丘面上では南北大路跡よりも西側にあたる29S区で西５南６交差点、23区で西６南６交差点の一部を検出している（第２・３図；加美町教育委員会、2003）。



第26図　方格地割模式図

南北大路跡の西側の方格地割内には、上位段丘面の縁辺部に沿って北西から南東方向に延びる築地塀跡（一部は材木塀跡）がある（第２・３図）。この築地塀跡は東山官衙遺跡を二重に大きく取り囲む外側の大規模区画施設とみられており、約100m間隔及び屈曲点に櫓跡が付設されている。そして、この築地塀跡と南５東西道路跡とが交差する地点には門跡が設けられている（宮城県教育委員会、2003a）。

(2) 交差点の様相

交差点の様相は、上位段丘面上に位置する南北大路跡よりも西側、築地塀跡の内側に当たる調査区で比較的多く判明してきている（第２・３図）。これらの調査区で検出された交差点を中心に、交差点の年代、位置を表13、各交差点中心間の長さ、方向を表14に取りまとめた（註１）。

【交差点の形状】

西１南６交差点（43A区）では３時期（Ａ期→Ｂ期→Ｃ期）の変遷がある（第12図）。Ａ期は南北道路跡の西側溝と東西道路跡の南側溝がそれぞれ交差点を横断している。Ｂ期は不明確だが、Ａ期と同様に南北道路跡の西側溝が交差点を横断している。Ｃ期は東西・南北道路跡の各側溝がそれぞれＬ字状に接続する。東西道路跡の幅員が交差点西側で東側の1／3となっていて、交差点の形状が歪んで

交差点	時期	機能・廃絶年代	交差点中心の位置		調査区
			南門跡からの距離	南北大路跡からの距離	
西１南６交差点	Ａ期	９世紀前半頃			43Ａ区
	Ｂ期	９世紀中頃～後葉頃	約640m	約109m	
	Ｃ期	９世紀後葉頃。10世紀前葉以前に廃絶。			
西２南５交差点	Ａ期				43Ｄ区
	Ｂ期				
	Ｃ期	10世紀前葉以前に廃絶	約534m	約213m	
西３南４交差点	Ａ期				43Ｅ区
	Ｂ期	８世紀中頃以降			
	Ｃ期		約428m	約320m	
西４南４交差点	Ａ期		約423m	約429m	43Ｆ区

交差点	時期	機能・廃絶年代	交差点中心の位置		調査区
			南門跡からの距離	南北大路跡からの距離	
西１南５交差点		10世紀前葉以前に廃絶	約530m	約107m	40区
西２南３交差点	Ａ期				39Ａ区
	Ｂ期	８世紀第２四半期頃～９世紀初頭頃	約317m	約213m	
西２南４交差点			約425m	約214m	40区
西３南３交差点			約317m	約319m	40区
西５南６交差点	Ａ期				29S区
	Ｂ期		約646m	約538m	
SB2010四脚門		８世紀後半まで遡る可能性がある。	約534m	約334m	34区
SB2020八脚門		９世紀代。９世紀後半～末葉頃までに廃絶。	約536m	約342m	

表13　南北・東西道路跡交差点の年代、位置

道　路　跡	交　差　点　中　心　間	長　さ	方　向	道　路　跡	備　考
大路－西１間	大路南５交差点中心－西１南５交差点中心間	107.1m	E-5°25'-S	SX1100（南５）東西道路跡	推定値
	大路南６交差点中心－西１南６交差点中心間	108.4m	E-2°54'-S	SX1900（南６）東西道路跡	推定値
西１－西２間	西１南５交差点中心－西２南５交差点中心間	106.2m	E-3°01'-S	SX1100（南５）東西道路跡	
西２－西３間	西２南３交差点中心－西３南３交差点中心間	105.9m	E-4°54'-S	SX3000（南３）東西道路跡	
	西２南４交差点中心－西３南４交差点中心間	105.9m	E-3°28'-S	SX2900（南４）東西道路跡	
	西２南５交差点中心－西３南５交差点中心間	107.5m	E-5°33'S	SX1100（南５）東西道路跡	推定値
西３－西４間	西３南４交差点中心－西４南４交差点中心間	109.5m	E-7°43'-S	SX2900（南４）東西道路跡	推定値
西５－西６間	西５南６交差点中心－西６南６交差点中心間	107.6m	E-5°45'-S	SX1900（南６）東西道路跡	推定値
南３－南４間	西２南３交差点中心－西２南４交差点中心間	107.7m	N-5°34'-E	SX2600（西２）南北道路跡	
	西３南３交差点中心－西３南４交差点中心間	110.3m	N-5°32'-E	SX2800（西３）南北道路跡	
南４－南５間	西２南４交差点中心－西２南５交差点中心間	108.9m	N-4°38'-E	SX2600（西２）南北道路跡	
	西３南４交差点中心－西３南５交差点中心間	105.0m	N-5°31'-E	SX2800（西３）南北道路跡	推定値
南５－南６間	大路南５交差点中心－大路南６交差点中心間	105.4m	N-5°20'-E	SX2300南北大路跡	推定値
	西１南５交差点中心－西１南６交差点中心間	110.1m	N-6°00'-E	SX2400（西１）南北道路跡	推定値
交差点中心間距離　平均		107.5m	E-4°50'-S	東西道路跡　方向平均	
交差点中心間距離　分散		1.6798	N-5°26'-E	南北道路跡　方向平均	

表14　南北・東西道路跡交差点中心間の距離、方向

いる。

西２南５交差点（43D区）では３時期（Ａ期→Ｂ期→Ｃ期）の変遷がある（第17図）。各期の様相には不明瞭な点も多いが、南北道路跡の西側溝がＡ・Ｃ期に交差点を横断し、東西道路跡の北側溝がＢまたはＣ期に交差点を横断している。

西３南４交差点（43E区）では３時期（Ａ期→Ｂ期→Ｃ期）の変遷がある（第20図）。各期の様相には不明瞭な点も多いが、Ｂ期は東西・南北道路跡の各側溝がそれぞれL字状に接続するとみられ、Ｃ期では東西道路跡の南北両側溝が交差点を横断している。

西４南４交差点（43F区）は南半部が削平され、全体の形状は不明である。交差点北半部では東西・南北道路跡がL字状に接続するようである（第22図）。

西１南５交差点（40区）では交差点北半部を検出している（第３図、加美町教育委員会、2004）。南北道路跡の東側溝はなく、代わりに柱列による塀跡が東側溝の位置にある。そして、東西道路跡の北側溝が交差点を横断している。

西２南３交差点（39区）では２時期（Ａ期→Ｂ期）の変遷がある（第３図、宮城県教育委員会、2004）。Ａ期は東西・南北道路跡の各側溝がそれぞれL字状に接続し、Ｂ期は南北道路跡の東西両側溝が交差点を横断している。Ａ・Ｂ期とも交差点は東西・南北が対象となる形状をしている。

西２南４交差点（40区）では東西・南北道路跡の各側溝がそれぞれL字状に接続し、交差点は東西・南北が対象となる形状をしている（第３図、加美町教育委員会、2004）。

西３南３交差点（40区）では南北道路跡の東西両側溝、東西道路跡の北側溝が交差点を横断し、交差点は東西・南北が対象となる形状をしている（第３図、加美町教育委員会、2004）。

西５南６交差点（29S区）では２時期（Ａ期→Ｂ期）の変遷がある（第３図、宮崎町教育委員会、2002）。Ａ期は東西道路跡の北側溝が交差点を横断し、Ｂ期は東西・南北道路跡の各側溝がそれぞれＬ字状に接続している。Ａ・Ｂ期とも交差点は東西・南北が対象となる形状をしている。

このように、交差点の位置や時期によって交差点の形状は多様であり、一定していない。

【交差点中心間の距離】（表14）

南北道路跡間が105.0～110.3m、東西道路跡間が105.9～109.5mとややばらつく。南北道路跡・東西道路跡全体の平均は107.5mである。この数値は１町（約109m）に近似し、交差点中心間を１町とする方格地割が形成されていたとみることができる（斉藤、2003；宮城県教育委員会、2003a・2004）。

【交差点間の方向】（表14）

ややばらつきがあり、南北道路跡が北で東に約３～７°（平均５°）偏り、東西道路跡が東で南に約４～６°（平均５°）偏る。

【交差点の位置】（表13）

本遺跡における方格地割の造営については、東山官衙遺跡の外郭南門跡と南北大路跡を基準に造営されているとみられている（斉藤、2003；宮城県教育委員会、2003a・2004）。そこで、東山官衙遺跡の外郭南門跡と南北大路跡からの距離について、各交差点の位置を算出すると、各交差点の中心は東山官衙遺跡の外郭南門跡から南に１町の整数倍、南北大路跡から西に１町の整数倍に近い地点に位置していることがわかる。今回の確認調査の結果、検出した交差点の数はこれまでの倍近くに増えたが、これまで外郭南門跡と南北大路跡を基準として約１町の方格地割を造営していたとみていたことと同様の結果が得られた。

【交差点の存続年代】

今回検出した交差点は、１時期のみの西４南４交差点（43F区）を除けば、いずれも３時期の変遷がある。このうち、出土遺物や層位から交差点の存続年代を検討できるのは西１南６交差点（43A区）である。

西１南６交差点は周囲よりも若干低く、道路側溝からあふれ出した土砂が約25cmの厚さで自然堆積し、さらにその上に10世紀前葉頃に降灰した灰白色火山灰が堆積していた。交差点には３時期の変遷（Ａ期→Ｂ期→Ｃ期）があり、灰白色火山灰はＣ期のSD3629C西側溝の上部にも堆積していた。遅くとも10世紀前葉頃までには交差点付近の道路は完全に廃絶していたことがわかる。また、Ｂ期のSD2523B南側溝、SD2726B北側溝、Ｃ期のSD2411C東側溝からはSX3607土器埋設遺構（後述）出土のものと同様の須恵器坏（第５図５～７）が出土しており、Ｂ・Ｃ期の交差点は９世紀後葉頃に機能していたとみられる。

また、Ａ期のSD2726A北側溝からは、底部回転糸切り後に手持ちヘラケズリされたロクロ調整の土師器坏（第５図１）が出土した。これと似た器形で同様の特徴の土師器坏は、多賀城跡第60次SE2101B井戸跡第Ⅲ層出土土器群に含まれている（宮城県多賀城跡調査研究所、1992b）。この土器群は天長９年（832）以降に作成された漆紙文書と共伴し、これ以降の９世紀前半代に位置付けられている。道路跡の創建年代は不明だが、Ａ期の道路側溝跡が９世紀前半頃までには埋まっていたことが

わかる。

【東西大路跡】

SX1100（南５）東西道路跡の側溝心々間距離は、40B区で6.5m、西２南５交差点（43D区）Ｃ期で6.5mあり、４～５m前後の他の東西道路跡よりも広く、南北大路跡に次いでいる。このことから、南５道路跡が東西大路跡であった可能性が考えられる。

下位段丘面では、８世紀中葉頃に造営された居宅跡とみられる一郭が検出されている（第３図；宮城県教育委員会、2003a）。それぞれ区画南西隅に寄せて東西約61m、南北約64mのほぼ正方形に材木塀で小区画しており、多賀城跡城外の方格地割にも例のないものである。この一郭はそれぞれ南５・南６東西道路跡と西５南北道路跡に面していることから、この一郭に面した各道路跡も８世紀中葉頃には成立していたとみることができる。

南５道路跡の路線上には門跡があり、東山官衙遺跡を大きく取り囲むとみられる築地塀跡が門跡に取り付く（第３図）。門跡と築地塀跡には新旧２時期あり、当初のSB2010四脚門跡が８世紀後半頃まで遡る可能性があり、新しいSB2020八脚門跡がそれに続く９世紀代で、９世紀後半～末葉頃までには築地塀跡とともに廃絶していたと位置付けられている（宮城県教育委員会、2003a）。

したがって、南５東西道路跡の路面上に後になってから門を造営したものとみられ、南５道路跡が主要な東西大路跡として位置付けられていたことを示唆していると思われる。

なお、多賀城跡城外の方格地割でも外郭南門跡から南に５町離れた南５道路跡が東西大路跡として位置付けられている（宮城県教育委員会、1996）。

(3) 方格地割の年代について

方格地割の造営年代については、これまでの調査成果から東山官衙遺跡の創建された８世紀中葉頃とみられ、大半の道路跡が灰白色火山灰の降灰する10世紀前葉頃には廃絶していたとみられている（斉藤、2003；宮城県教育委員会、2003a・2004）。

今回の確認調査区では、43B区で材木塀によって西２南６区南東部をさらに小区画した一郭を検出し、この小区画が８世紀後葉頃～９世紀後葉頃にかけて存続し、９世紀後葉頃に区画の使われ方が大きく変化し、10世紀前葉頃までにはまったく使われなくなることが明らかとなった。また、43A区で検出した西１南６交差点は当初の道路側溝が９世紀前半頃までには埋まり、最終段階の道路側溝も９世紀後葉頃～10世紀前葉頃までの間に廃絶し、43C区、43D区で検出した道路側溝も10世紀前葉頃以前に廃絶している。

他の地区についてみると、成立年代が８世紀中葉頃にまで遡る区画は、これまでのところ上位段丘面上では築地塀跡に取り付く門跡に隣接した西３南６区など少数であり、各区画内では９世紀代とみられる遺構や遺物が多い。

これに対し、下位段丘面上では西５南５区、西５南６区で区画内を約2／3の規模でさらに材木塀跡で方形に区画する居宅跡とみられる建物群が検出され、８世紀中葉頃に方格地割が成立する。一方、９世紀になると掘立柱建物跡や竪穴住居跡がみられなくなり、一部水田化するなど、下位段丘面では方格地割が廃絶しているとみられている（斉藤、2003；宮城県教育委員会、2003a）。

こうした状況から、南北・東西大路跡が８世紀中葉頃に造営され、下位段丘面上ではこの頃に方格地割が限定的に施工されていたことは明らかではあるが、上位段丘面上での方格地割の成立がすべて８世紀中葉頃まで遡るかどうかについては、今後詰めていかなければならない重要な課題と考えられる。

(4) SX3607土器埋設遺構

西１南６交差点（43A区）の北東部で土器埋設遺構１基（SX3607）を検出した。土器埋設遺構は本遺跡の交差点で初めての検出例となる。径18cmの小ピットの中に口縁部を上にして完形の須恵器坏７点（第５図８～14）を積み重ねて埋納していた。これらの須恵器坏は底部が回転糸切り無調整で、前述の五本松窯跡出土の須恵器坏と器形・技法が共通しており、９世紀後葉頃のものとみられる。交差点内の北東部に位置し、特殊な出土状況であることから、この地点で交差点存続期の９世紀後葉頃に行われた何らかの祭祀に関連するものと判断される（註２）。

第４章　まとめ

① SX2300南北大路跡から西に４町離れたSX3600南北道路跡を43F区で新たに発見し、43A区で西１南６交差点、43D区で西２南５交差点、43E区で西３南４交差点、43F区で西４南４交差点を検出した。

② 43B区では西２南６区の南東部をさらに材木塀跡で方形に小区画し、中に掘立柱建物跡群を配置した一画を検出した。この小区画の成立の上限年代は８世紀後葉頃とみられ、９世紀後葉頃には廃絶している。43A区で検出した西１南６交差点は９世紀後葉頃～10世紀前葉頃までの間に廃絶し、43C区、43D区で検出した道路側溝も10世紀前葉頃以前に廃絶している。

③上位段丘面上の方格地割は、東山官衙遺跡の外郭南門跡とそこから南に延びるSX2300南北大路跡を造営基準として、南北道路跡・東西道路跡交差点の中心間を１町とすることを基本として造営されている。

④ SX1100（南５）東西道路跡は東西大路跡として位置付けることができる。

⑤本遺跡と密接に関連する東山官衙遺跡については、賀美郡家とみる見解が有力である。しかし、本遺跡の方格地割内に東山官衙遺跡を大きく取り込むとみられる築地塀跡とそれに取り付く門跡があり、築地塀跡には一定間隔で櫓跡も付設されていることから、東山官衙遺跡を城柵跡とみることも可能である。「天平五柵」〔『続日本紀』天平９年（737）４月14日条〕のうちの名称不明柵や色麻柵跡とみられている加美町城生柵跡との関係なども含め、東山官衙遺跡と本遺跡の性格、方格地割の造営・廃絶年代、地割内部の様相の解明など、今後の検討課題である。

附章　34区出土の漆紙文書

本章は、平成13・14年度に調査した34区出土の漆紙文書について追加報告するものである。

出土遺構：34区西部にあるＳＩ2013竪穴住居跡の床面直上から出土した。住居跡の年代は9世紀後半頃とみられる（宮城県教育委員会2003a）。

廃棄の形態と残存状況：不整形をした複数の断簡の状態で出土しており、接合作業をとおして比較的大きいＡ・Ｂ断簡が復元された。他に若干の小片がある。そのうちＡ断簡の現況（付図１）を観察した結果、本漆紙は漆桶から紙の１点をつまみ上げた後、一部が逆方向にめくれた状態であることが知られた（模式図Ⅰ・Ⅱ）。模式図Ⅰでは漆桶の中心からつまみ上げた状態を示したが、Ａ断簡を開いた状況やＢ断簡の配置（註３、付図２）も含めて検討したところ、実際には模式図Ⅱのように漆桶の中心から文書に沿って下の所（Ａ点）をつまみ上げている。その状態から、恐らくＢ点とは逆方向に投棄することによって、Ⅲ面がめくれたものと推定される。

本漆紙は非常に脆い。状態はあまりよくないが、オモテ面の文書に向かって左側を中心に約半分が残存している。漆桶の推定径は約19.5cmである。

文書の状況と体裁：オモテ・ウルシ面ともに肉眼ではほとんど文字が見えない。赤外線テレビカメラによってオモテ面では12行分が確認できるが、文字の残りは必ずしも良くない。文字の大きさは1.0cm前後（0.8～1.5cm）で、やや不揃いであり、間隔も狭い。文字列も揃わず、行間距離は1.3cm前後（1.1～1.6cm）と狭い。界線は確認できない。全体的にみて、内容の長い文章を雑に書いた印象を受ける文書である。ウルシ面ではＢ断簡に4～5行分の文字・墨痕が部分的に確認できるのみである（付図3）。文字の大きさは0.8cm前後、行間距離は5行とみて1.8cm前後である。界線は確認できない。

上記のような文書の様子から、以下では比較的残りのよいオモテ面文書（以下、本文書と呼称）を中心に述べることにする。

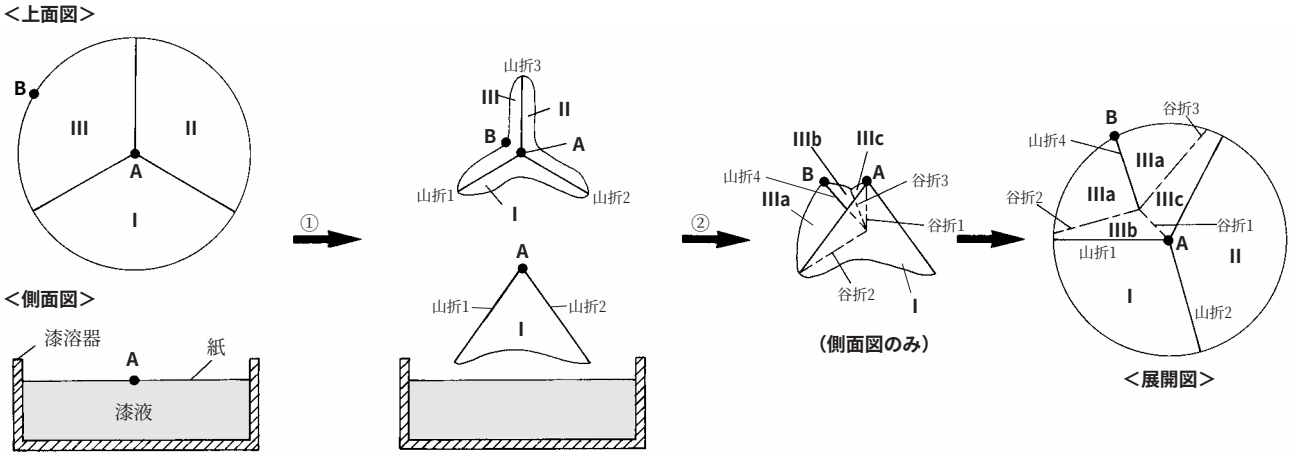
文書の性格：状況が必ずしも良好ではないため、十分な判読や文章の内容把握は難しいが、書式や語句の特徴から五龍祭など陰陽祭祀に関わる典籍を書写した文書と考えられる。

本文書には、①文字の大きさや文字列、行間が揃わない、②文字間隔や行間が狭い、という特徴がある。その特徴は長文を雑に書いた印象を受けるもので、人名を列記した歴名様文書や物品の数量を記した帳簿様文書とは異なり、情報伝達を目的とした通常の行政文書にしても整った体裁とはいえない。また、語句をみると「龍」という想像上の生物や「神」「神祠」「罪」「導」など祭祀・道義的な意味の語句が頻出している。特に注意されるのは「龍」の記載である。「龍」には「赤龍」「白龍」「黒龍」がおり、各「龍」の色は陰陽五行説に基づく五色（青、赤、黄、白、黒）と考えられる。11行目には「黄」字があるので黄龍の存在も推定される。そして、この「龍」記載から想起されるのが五龍祭である。

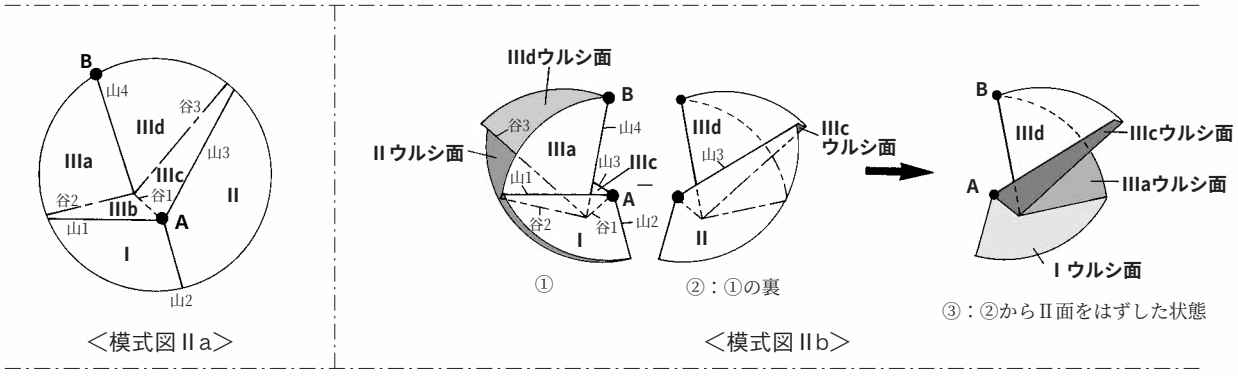
五龍祭とは青龍、赤龍、黄龍、白龍、黒龍の五龍を祀る雨乞の祭で、中国の唐では祠部の行う祭祀とされていた（岡田1984）。日本では10世紀初頭の『日本紀略』延喜二年（902）六月十七日条、及び『扶桑略記』裏書、同日条の“左大臣已下陣に就きて、雨を祈るにより山陵使を定む。又、同じ事に

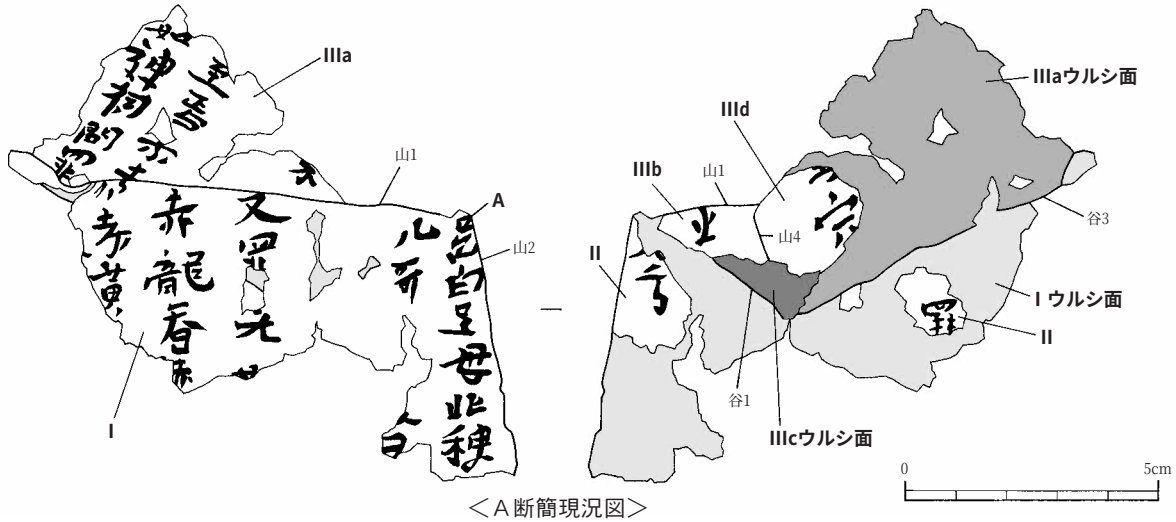
より陰陽寮を召して、明日より乾方において五龍祭を勤むべきの由、仰せ下されおわんぬ。其地は鳴瀧北十二月谷口なり。”を初見とし、以後頻繁に散見するようになる。『禁秘抄』祈雨の条にも「陰陽師奉仕五龍祭、或於神泉祭之」とあるように、五龍祭は陰陽寮の陰陽師が行う祈雨の祭祀であり、都では北山十二月谷や神泉苑で行われた。

五龍祭で祀る五龍と本文書の「龍」とは同一の対象を指すと考えられる。五龍祭の実施が知られるのは史料上10世紀初頭以降だが、遡る可能性は勿論あるし、その実施のための知識や典籍の日本への



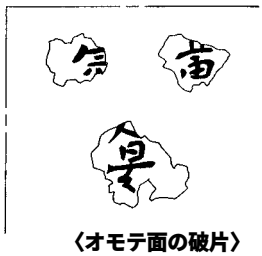
＜模式図Ⅰ＞





＜Ａ断簡現況図＞

付図１　Ａ断簡現況図及び折込模式図



《釈文》

・苗

・□〔完力〕

・□□

《釈文》

〕罪〔

〕□〔

〕□黒龍〔比力〕〔

〕多利導〔

〕□□言罪□□〔倍力〕

〕□罪□□□□□□□□□母此神〔募力〕〔白力〕

〕□白龍□□□□□□哥□□□〔眷力〕〔完力〕

〕□□導□〔

〕□知神□□□罪□□□又罪无□〔女力〕〔罪力〕

〕□色□□□□□赤龍□□〔无力〕〔罪力〕〔眷力〕

〕□□□□至焉導吉□□□黄〔

〕如神祠問罪〔

付図２　オモテ面の文書

伝来がそれ以前なのは確実であろう。こうした「龍」記載をはじめとする本文書の祭祀・道義的な語句が、帳簿や行政文書等に現れないことは必ずしもないであろうが、前述の書式の特徴とあわせ考えると、本文書は語句に象徴される思想的な文書であり、五龍祭など陰陽祭祀に関わる典籍を書写した文書と推定される。ただし、現段階では具体的な典籍名は不明とせざるをえなかった。

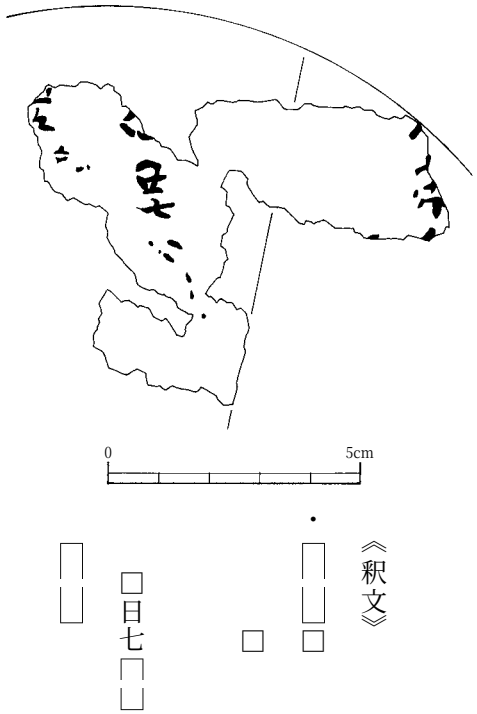
書写について：本文書の書写を考えるにあたっては、ウルシ面の文書についても考慮する必要がある。しかし、ウルシ面の文書は状態が非常に悪く、内容や性格がほとんど把握できない。そのため本来の表裏関係が不明であり、本文書の書写も十分には明らかにできない。

そこで典籍を書写した漆紙文書の類例をみると、胆沢城跡と多賀城市山王遺跡で儒教の経典『孝経』が出土している。胆沢城跡の『孝経』は巻子本の写本と判断される断簡で、都または陸奥国府から移入され、鎮守府における釈奠など公式の儀式に使用されたと推測されている（平川1984）。紙背文書はない。一方、山王遺跡の『孝経』は書式の整った計帳の紙背に書かれており、陸奥国で書写された断簡である。本来、全文が書かれていたとみられるが、胆沢城跡のものほど体裁は良くない。

本文書の場合、書き方が雑であり、整った書式とはいえない。必ずしも全文の書写とする根拠はなく、抄出文の可能性も否定できない。裏面にも文書が存在する。そのあり方は胆沢城跡や山王遺跡の『孝経』に比べて劣るものである。したがって、陸奥国内で書かれた可能性が高いと思われる。しかし、本文書は9世紀後半頃の陸奥国に陰陽五行思想に関わる典籍がもたらされていた実態を示すものであり、地方への典籍の広がりを考える上で貴重な資料といえる。

伝来について：底本となった典籍の陸奥国への伝来について述べておきたい。近年、出土文字史料の増加によって、地方における典籍の受容状況も明らかになりつつある。その享受は地方豪族層を含む官衙の役人レベルに限られたとはみられるが、前掲の『孝経』をはじめ、秋田城跡の『文選』、多賀城跡の医方書（『集験方』と推定）、多賀城市市川橋遺跡の『杜家立成』、阿波国府推定地の『論語』、大宰府跡の『魏徴時務策』など、想像以上に典籍は地方にもたらされていた。その伝来過程はあまり明確ではないが、儒教の経典や医方書については国学制との関係が考えられている（平川1984、丸山1992）。

本文書の場合には、陸奥国に陰陽師が置かれたこととの関係が考えられる。律令の規定で地方に陰陽師が置かれたのは大宰府のみだが、9世紀初頭頃に陸奥国、嘉祥三年（850）に出羽国、元慶六年（882）には鎮守府など、9世紀以降、東国を主体（他に武蔵・下総・常陸国など）に陰陽師が置かれるようになっている（註４）。これらの陰陽師の職掌は元慶六年太政官符所引の鎮守府牒では軍事上の必要や漏刻の調整、怪異出来時の卜占などであったが（註５）、陰陽祭祀に関わる



付図３　ウルシ面の文書（Ｂ断簡のみ）

彼らの専門的な知識は雨乞いをはじめとする他の様々な機会にも必要とされたであろうことは想像に難くない。したがって、彼らが陰陽祭祀に関する典籍を陸奥国に持込むことは十分ありえることであり、本文書も陰陽師による伝来をへて書写されたものと考えられる。

まとめ：

1．本漆紙は、漆桶から紙の１点をつまみ上げた後、一部が逆方向にめくれた状態のもので、約半分が残存し、オモテ面の文書が比較的判読できる。

2．オモテ面の文書は、五龍祭など陰陽祭祀に関わる典籍を書写したものとみられる。陸奥国に陰陽五行思想に関わる典籍が伝来していた実態を示すものであり、９世紀後半頃の地方への典籍の広がりを考える上で貴重な資料といえる。

3．底本となった典籍の伝来には陰陽師の介在が想定される。

《註》

註１　交差点中心の座標値は、Ｌ字状に屈曲する側溝屈曲部心々を結ぶ交点、または交差点を通る南北道路跡・東西道路跡各中軸線の交点をとった。交差点の位置は大きく変わらないので、当初の交差点の中心位置が不明の場合には、当初の造営計画を反映していると仮定してそれがわかる時期の交差点中心を用いた。交差点の位置については、東山官衙遺跡外郭南門跡南側柱列中央を通り、南北大路跡中軸線と直交する線分と交差点中央の距離、及び南北大路跡中軸線から西への距離をそれぞれ座標計算により算出した。交差点中心間の距離、方向についても座標計算で算出した。

註２　宮城県内では、多賀城跡城外の方格地割の交差点付近の道路跡路面上から、土器埋設遺構がこれまでに16基検出されている。内訳は山王遺跡多賀前地区で土師器坏入れ子正位１、須恵器坏単体正位１、土師器甕・坏合わせ口横位１、土師器甕単体横位３、土師器甕合わせ口横位３の計９基、同遺跡八幡地区で土師器高台皿合わせ口１、土師器甕単体横位２、土師器甕合わせ口横位２の計５基、同遺跡東町裏地区で土師器甕単体横位２基である。このうち多数を占める土師器甕を横位にしたものは、甕棺墓とみられている（宮城県教育委員会、2003ｂ）。少数例の土師器小形坏・大形坏各１点を入れ子正位にした例と須恵器坏を単体横位にした例は、掘方がなく道路盛土整地時に埋設されたものとみられ、道路建設時の祭祀が想定されている。いずれも土器の器形・技法より９世紀中頃のものとみられる。

註３　Ｂ断簡の配置は、断簡内の語句「知神」の右脇にある山折が文字の向きから山折４に相当すること、Ａ・Ｂ断簡の残存状況、文字のつながり方などから決定した。

註４　『令義解』巻一　職員令大宰府条。『日本文徳天皇実録』嘉祥三年六月甲戌（28日）条。『類聚三代格』所収元慶六年九月廿九日太政官符。なお、陸奥国に陰陽師が置かれた年代については、陸奥国官人の定員を確認し、按察使を定員として明確に位置づけた『類聚三代格』所収延暦十七年（798）六月廿八日太政官奏には陰陽師が見えず、『弘仁式』〔弘仁11年（820）成立〕の公廨稲処分率を定めた規定には存在するので、９世紀初頭頃とみられる。

註５　『類聚三代格』所収元慶六年九月廿九日太政官符所引鎮守府牒

《引用・参考文献》

赤石和幸・光谷拓実・板橋範芳　2000　「十和田火山最新噴火に伴う泥流災害－埋没家屋の発見とその樹木年輪年代－」『地球惑星科学関連学会合同大会予稿集』

井上和人　1984　「古代都城制地割再考」『研究論集Ⅶ』（奈良国立文化財研究所学報第41冊）

井上和人　2002　「平城京の条坊設定方式について－山中章氏の説に対する批判－」奈良国立文化財研究所『研究紀要2002』

岡田荘司　1984　「陰陽道祭祀の成立と展開」『国学院大学日本文化研究所紀要』第54輯　のち『陰陽道叢書　1　古代』（1991）に収録
加美町教育委員会　2004　『壇の越遺跡－平成15年度発掘調査概報－』
斉藤篤　2003　「東山官衙遺跡に伴う方格道路―宮城県加美町壇の越遺跡－」『条里制・古代都市研究』第19号
鈴木拓也　1998　『古代東北の支配構造』（吉川弘文館）
仙台市教育委員会　1987　『五本松遺跡』（仙台市文化財調査報告書第99集）
多賀城市教育委員会　1990　『市川橋遺跡－平成元年度発掘調査報告書－』（多賀城市文化財調査報告書第21集）
多賀城市教育委員会　2003　『市川橋遺跡－城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書Ⅱ－』（多賀城市文化財調査報告書第70集）
築館町教育委員会　1991　『伊治城跡』（築館町文化財調査報告書第４集）
早川由紀夫・小山真人　1998　日本海をはさんで10世紀に相次いで起こった二つの大噴火の年月日－十和田湖と白頭山－」『火山』43-5
平川南　1984　「胆沢城跡第43次調査出土漆紙文書」『胆沢城跡－昭和58年度発掘調査概報－』（水沢市教育委員会）
丸山裕美子　1992　「多賀城跡第61次調査出土の医方書断簡漆紙文書」『宮城県多賀城跡調査研究所年報1991　多賀城跡』
宮城県教育委員会　1996ａ　『山王遺跡Ⅲ』（宮城県文化財調査報告書第170集）
宮城県教育委員会　1996ｂ　『山王遺跡Ⅳ』（宮城県文化財調査報告書第171集）
宮城県教育委員会　1997　「壇の越遺跡他」『舟場遺跡ほか』（宮城県文化財調査報告書第173集）
宮城県教育委員会　1998　「壇の越遺跡」『壇の越遺跡、念南寺遺跡』（宮城県文化財調査報告書第177集）
宮城県教育委員会　2003ａ　「壇の越遺跡」『壇の越遺跡ほか』（宮城県文化財調査報告書第195集）
宮城県教育委員会　2003ｂ　『市川橋遺跡』（宮城県文化財調査報告書第193集）
宮城県教育委員会　2004　「壇の越遺跡」『壇の越遺跡ほか』（宮城県文化財調査報告書第199集）
宮城県多賀城跡調査研究所　1987　『東山遺跡Ⅰ』（多賀城関連遺跡発掘調査報告書第12冊）
宮城県多賀城跡調査研究所　1988　『東山遺跡Ⅱ』（多賀城関連遺跡発掘調査報告書第13冊）
宮城県多賀城跡調査研究所　1989　『東山遺跡Ⅲ』（多賀城関連遺跡発掘調査報告書第14冊）
宮城県多賀城跡調査研究所　1990　『東山遺跡Ⅳ』（多賀城関連遺跡発掘調査報告書第15冊）
宮城県多賀城跡調査研究所　1991　『東山遺跡Ⅴ』（多賀城関連遺跡発掘調査報告書第16冊）
宮城県多賀城跡調査研究所　1992ａ　『東山遺跡Ⅵ』（多賀城関連遺跡発掘調査報告書第17冊）
宮城県多賀城跡調査研究所　1992ｂ　『宮城県多賀城跡調査研究所年報1991　多賀城跡』
宮城県多賀城跡調査研究所　1993　『東山遺跡Ⅶ』（多賀城関連遺跡発掘調査報告書第18冊）
宮崎町教育委員会　1996　『東山遺跡Ⅹ』（宮崎町文化財調査報告書第７集）
宮崎町教育委員会　1997　『東山遺跡ⅩⅠ』（宮崎町文化財調査報告書第８集）
宮崎町教育委員会　1998　『東山遺跡ⅩⅡ』（宮崎町文化財調査報告書第９集）
宮崎町教育委員会　1999ａ　『壇の越遺跡Ⅱ－平成10年度発掘調査報告書－』（宮崎町文化財調査報告書第10集）
宮崎町教育委員会　1999ｂ　『壇の越遺跡Ⅲ－平成10年度発掘調査報告書－』（宮崎町文化財調査報告書第11集）
宮崎町教育委員会　2001　『壇の越遺跡－平成12年度発掘調査概報－』
宮崎町教育委員会　2002　『壇の越遺跡－平成13年度発掘調査概報－』
宮崎町教育委員会　2003ａ　『壇の越遺跡Ⅳ－平成11年度発掘調査報告書－』（宮崎町文化財調査報告書第13集）
宮崎町教育委員会　2003ｂ　『壇の越遺跡－平成14年度発掘調査概報－』
山中章　1992　「古代条坊制論」『考古学研究』38－４（通巻152号）

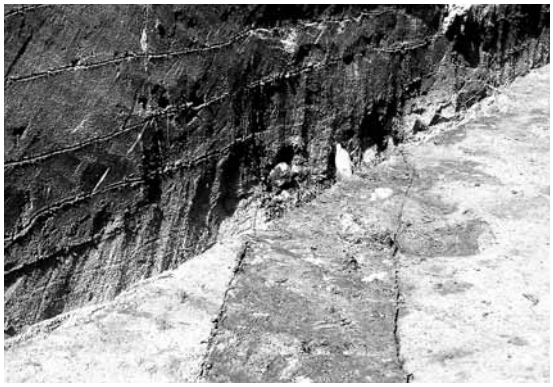
1．43B区全景（西から）

2．43B区東半部全景（北から）

図版１　43B区の調査（1）

1．43B区西半部のSA3525・3668材木塀跡、SD3532・3534溝、SK3659溝など（北東から）

2．SA3525材木塀跡の断面（南から）



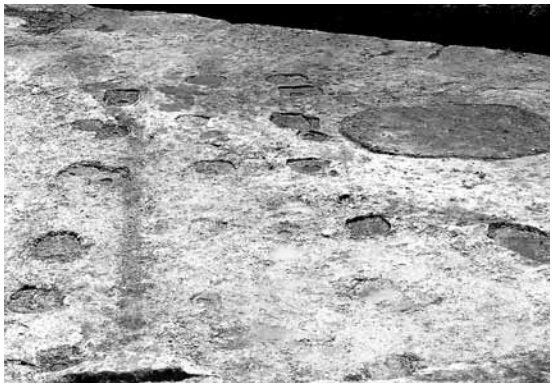
3．SA3523材木塀跡の断面（南壁、北東から）

4．SA3523材木塀跡（西から）

5．SA3523材木塀跡の断面（東から）

図版 2
43B区の調査 (2)

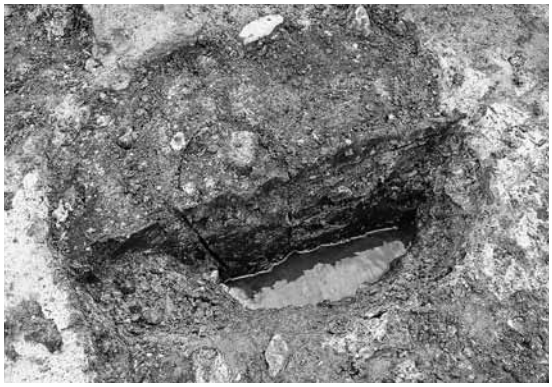
1．43B区西半部全景（北東から）



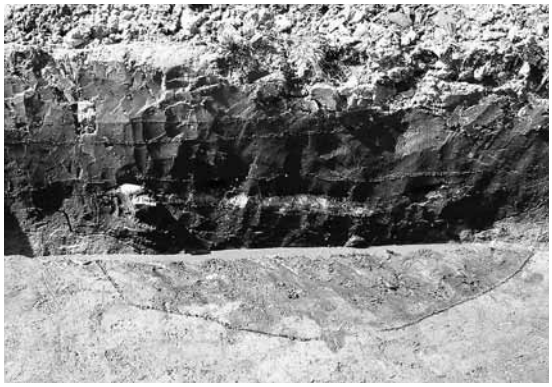
2．SB3643・3644建物跡、SK3661土壙（北から）

3．SB3644・3643建物跡・柱穴の重複状況(断面Ｆ－Ｆ′)

4．SB3646・3648建物跡柱穴の重複状況(断面Ｅ－Ｅ′)



5．　SB3642建物跡北東隅柱穴の断面



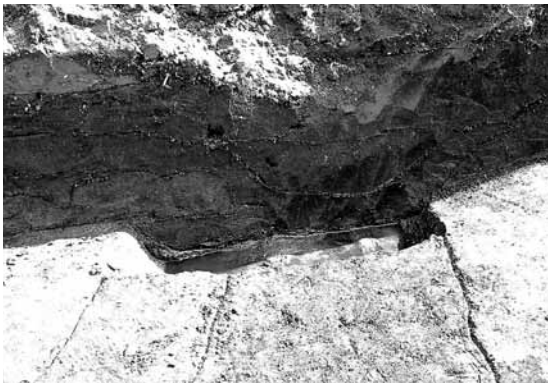
6．SK3662土壙の断面

図版３　43B区の調査（3）

1．43A区全景（南から）

2．SX2400道路跡　SD3629西側溝の断面

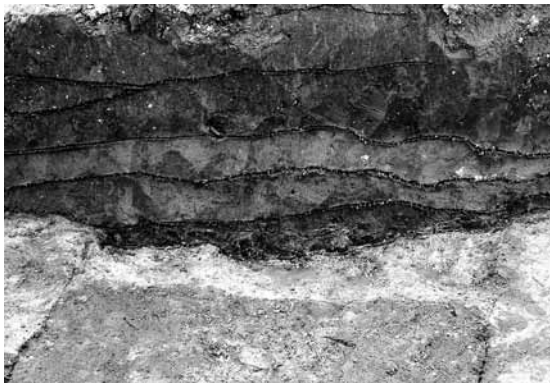
3．SX2400道路跡　SD3630東側溝と新しいSD3635溝



4．SX2400道路跡　SD2412西側溝と新しいSD3601溝

5．SX2400道路跡　SD2412西側溝と新しいSD3601溝

6．SD3602溝の断面



7．SX1900道路跡　SD2523B西側溝の断面

図版４
43A区の調査

1．43C区の全景（南から）

2．SX2400道路跡　SD3629A・B西側溝の断面（北壁）

3．SX2400道路跡　SD3630東側溝の断面（北壁）

4．SX2400道路跡　SD3629A・B西側溝の断面（南壁）

5．SX2400道路跡　SD3630西側溝の断面（南壁）

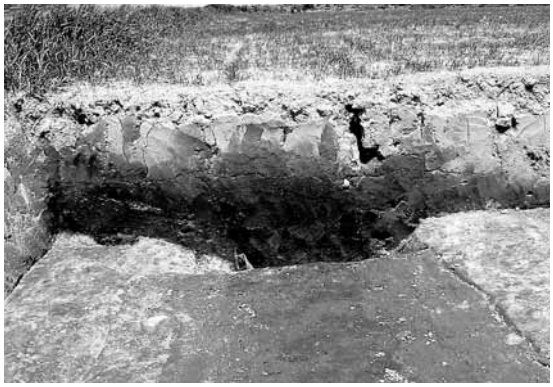
6．SX2400道路跡　SD3629A・B西側溝の断面（南壁）

7．SX2400道路跡　SD3629A・B西側溝の断面（南壁）

図版5
43C区の調査

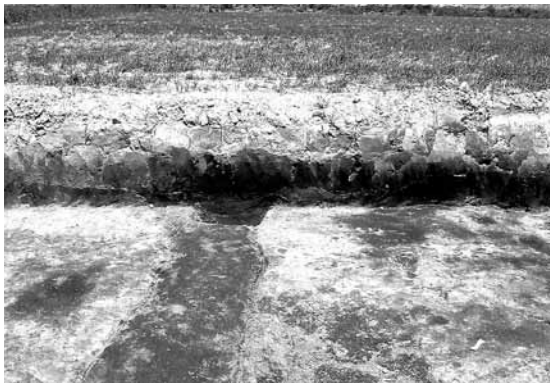
1．43D区全景（南から）

2．43D区全景（北から）



4．SD3614溝跡の断面（北壁）

3．43D区南東部　SB3610・3611建物跡



5．SX2600道路跡　SD3044C東側溝の断面（北壁）

6．SX2600道路跡　SD3044A・B東側溝の断面（北壁）

図版6
43D区の調査

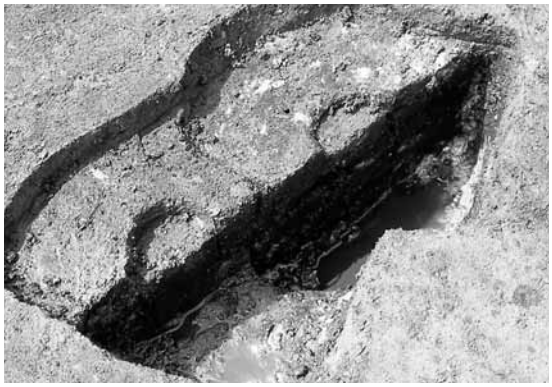
1．43E区全景（南から）

2．43E区全景（東から）

4．SX2900道路跡　SD2822Ａ・Ｂ東側溝の断面（東壁）

5．SB3688建物跡柱穴とSD2822A東側溝の重複状況（断面Ｂ－Ｂ′）

3．SB3686建物跡（西から）



6．SB3686・3687建物跡柱穴の重複状況（断面Ａ－Ａ′）

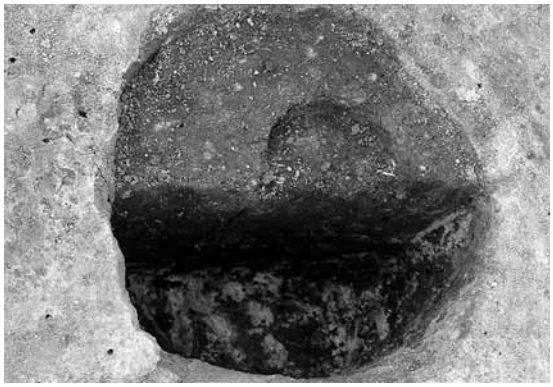
図版７
43E区の調査

1．43F区全景（南から）

2．SX2900道路跡　SD3680北側溝の断面

3．SX3600道路跡　SD3692東側溝の断面

4．SB3698建物跡南東隅柱穴とSD3680北側溝の重複状況



5．SB3699建物跡南東隅柱穴の断面

6．SB3694建物跡北東隅柱穴の断面

7．未登録のピットの断面（断面Ｆ－Ｆ′）

図版８
43F区の調査

第13図１（R1）　1

第13図８（R8）　2

第３図９（R9）　3

第13図10（R10）　4

第13図11（R11）　5

第13図12（R12）　6

第13図13（R13）　7

第15図14（R14）　8

第３図19（R19）　9

第６図11（R37）　10

第７図２（R47）　11

第７図６（R51）　12

第８図１（R55）　13

第９図６（R74）　14

第９図13（R81）　15

第13図８～14（R8～14）　16

１・13：土師器坏　　２～12・14・16・17：須恵器坏　　15：須恵器高台坏

１～9・16・17：43A区　　10～15：43B区

２～８・16： SX3607土器埋設遺構出土一括土器

図版９　43区出土遺物（1）

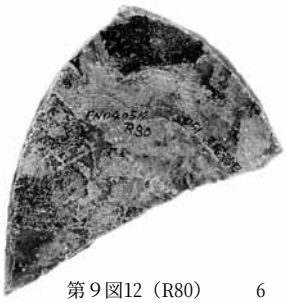
第13図15（R15）　1

第７図６（R51）　2

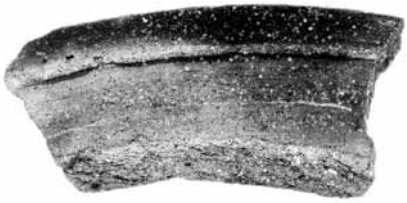
第13図２（R２）　3

第８図９（R63）　4

第８図８（R62）　5



第９図12（R80）　6

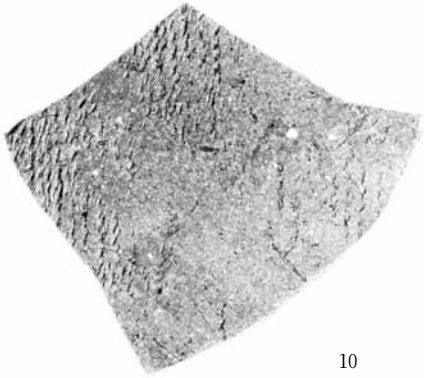


第６図５（R31）　7a

7b

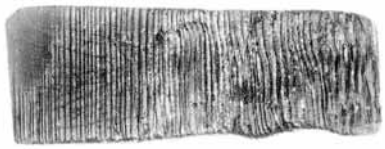
43A区SD3602（R104）　8

9



10

第８図12（R66）　第８図13（R67）



第13図20（R20）　11

第21図５（R100）　12

第23図３（R103）　13

１～５：墨書土器
６：塗パレット転用の須恵器坏
８：塗パレット転用のロクロ土師器坏
７：内黒土師器甕口縁部破片
９・10：外面体部縄叩きの須恵器甕
11：板材　12：磨製石斧　13：石核

１・３・８・11：43A区
２・４～７・９・10：43B区
12：43E区
13：43F区

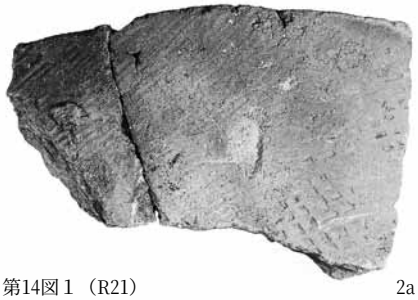
図版10　43区出土遺物（2）

1a

1b

第10図４（R87）

6a



2a

2b

第14図１（R21）

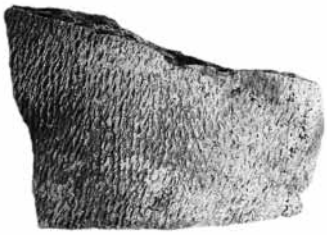
6b

3a

3b

第10図３（R86）

7a



4a

4b

第10図２（R85）

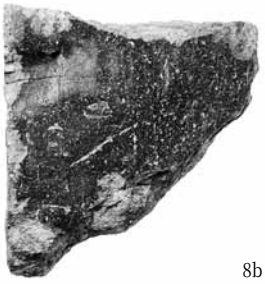
7b

5a

5b

第18図４（R94）

8a



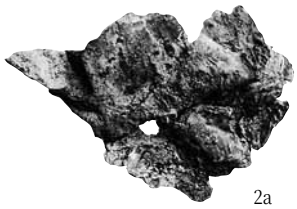
8b

１～５：平瓦　　６：丸瓦　　７・８：塼
１・３・４：43B区　　２・６・７：43A区　　５・８：43D区

図版11　43区出土遺物（3）

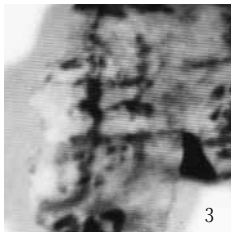
—

1

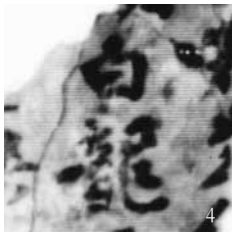


2a

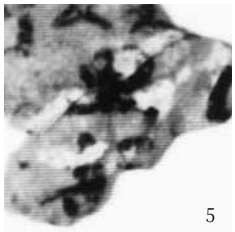
2b



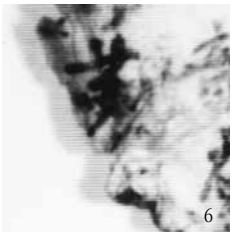
3



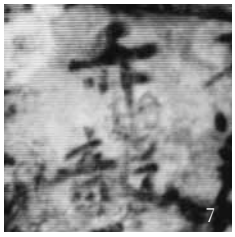
4



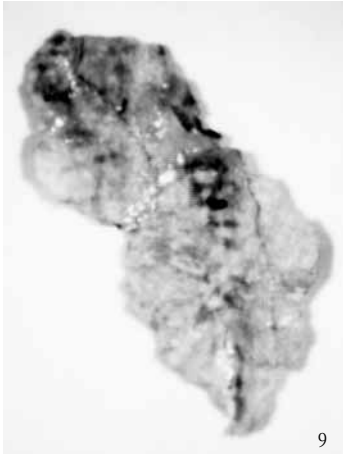
5



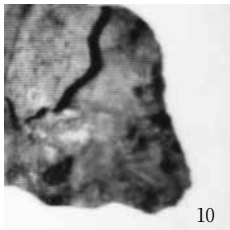
6



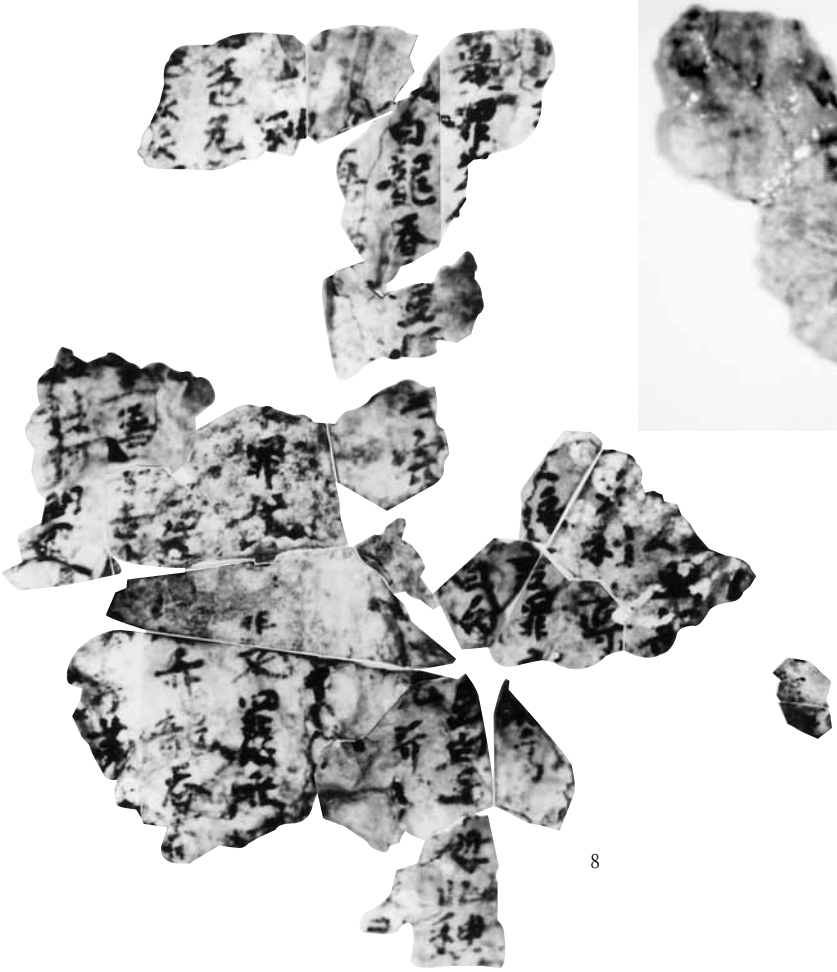
7



9



10



8

1　：漆紙文書A断簡の現況
2　：A断簡右側切開状況（a→b）
3　：オモテ面文書「神祠」記載
4～7：オモテ面文書「龍」記載
8　：オモテ面文書
9・10：ウルシ面文書

（縮尺1・2：1／2
3～7：任意拡大
8～10：2／3）

図版12　43区出土の漆紙文書

北小松遺跡（きたこまついせき）

調　査　要　項

遺 跡 名：北小松遺跡（宮城県遺跡地名表登載番号：38005　遺跡略号：UO）

所 在 地：宮城県遠田郡田尻町小松字新欠下・字屋敷浦

調査原因：重要遺跡確認調査

調査主体：宮城県教育委員会

調査担当：宮城県教育庁文化財保護課

調査期間：平成16（2004）年11月8日～12日

対象面積：約18,500m^2

調査面積：約670m^2

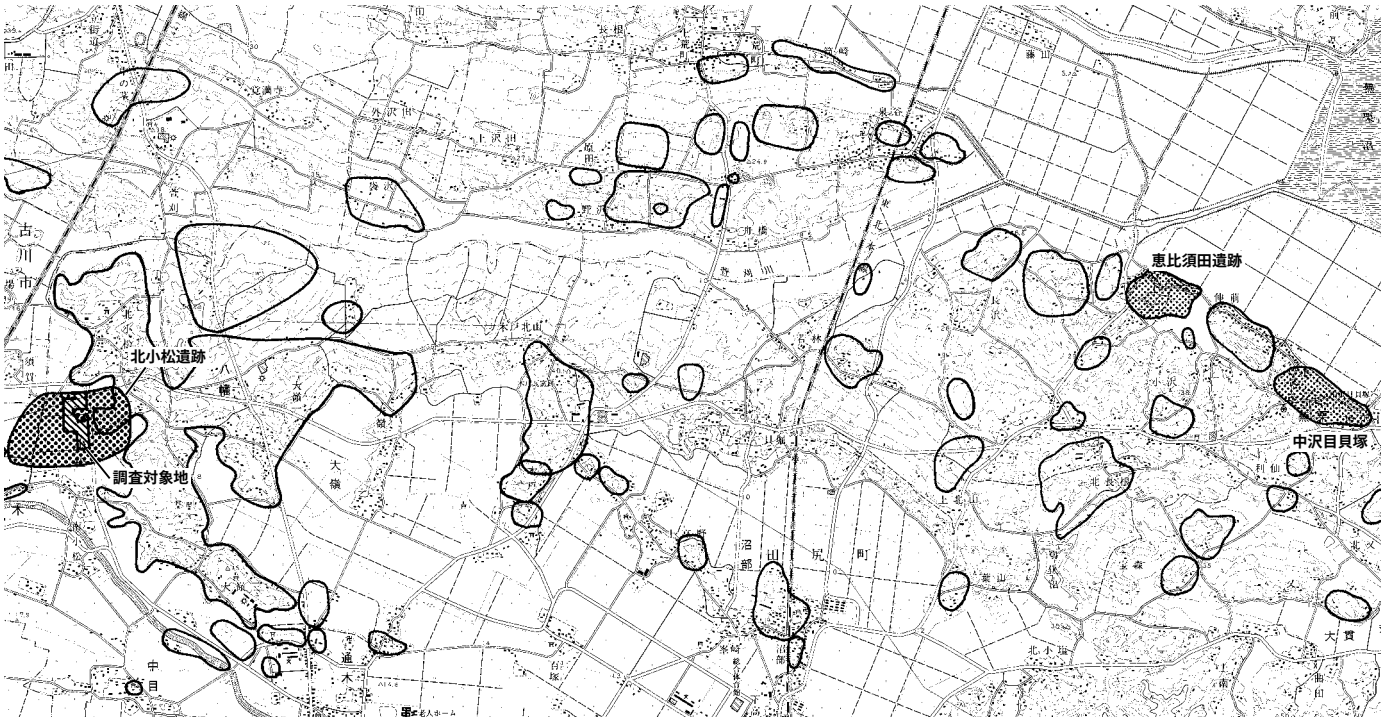
調 査 員：相原淳一、菊地逸夫、柳澤和明

調査協力：田尻町教育委員会、江合川沿岸土地改良区

１．遺跡の概要

北小松遺跡(註1)は遠田郡田尻町小松字新欠下・字屋敷浦に所在する。江合川と鳴瀬川の沖積作用で形成された大崎平野は東西約13km、南北約17kmの広さを持つ。四周は主に丘陵で、東は広淵丘陵が南北に、南と北はそれぞれ三本木丘陵、清滝丘陵が西から東に延びる。遺跡はこの清滝丘陵の一部が西に緩く沖積地に潜り込む微高地とその周囲の沖積地に広がっている。遺跡の標高は約17.0～17.8mで、田尻川の支流群が遺跡周辺の沖積地を潤している。

北小松遺跡は1953年に発見され、『宮城県史１』の遺跡地名表には大洞BC～A′式土器の出土する遺跡として紹介（伊東：1957）された。1957年の開田工事では、抜歯の施された人骨が発見されたことやシジミ・タニシ等の淡水産貝類が出土したことが報告（興野：1959）されている。町内にはこのほか多くの縄文時代遺跡が知られ、特に町北東部の蕪栗沼沿岸には著名な遺跡が多い。蕪栗沼南岸の国史跡中沢目貝塚では縄文時代後期末葉～晩期前葉を主とする貝層の調査が行われている（須藤編：1995）。中沢目貝塚西側には、国指定重要文化財の遮光器型土偶が出土した恵比須田遺跡がある。



第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡（１：50,000）

２．調査に至る経緯と調査方法

上記のように本遺跡は縄文時代晩期の豊富な遺物が出土することで古くから著名であった。近年、本遺跡の周辺に田尻西部地区ほ場整備事業が計画され、遺跡の範囲や遺構面までの深さを確認するために、発掘調査を実施することとなった。

平成16年11月８日～12日までに、21本の調査トレンチ（幅２m×長さ任意）を配して確認調査を行った。湧水が激しく遺構面まで掘り下げられなかった調査区や、翌年以降の耕作を勘案して遺構面まで掘り下げなかった調査区があるが、そうした調査区でも適宜、小面積の深掘調査を行った。検出遺構は掘り下げなかった。１/200平面図と土層模式図を作成し、写真はデジタルカメラを使用した。

３．発見された遺構と遺物

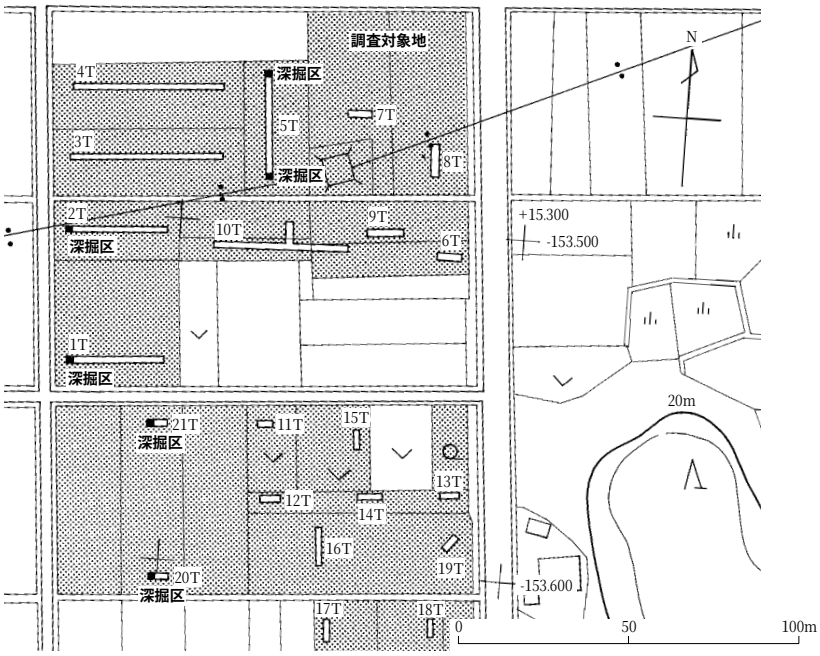
調査の結果、西へ延びる丘陵末端の微高地北側に縄文時代晩期後葉～弥生時代前期の遺物包含層、南側に縄文時代晩期中葉～末葉の遺物包含層が分布することが確認された。遺物包含層は黒色土層で一部泥炭質の箇所も認められた。出土遺物総量は平箱１箱である。

(1) 北側の５Ｔ～10Ｔのうち、10Ｔ・５Ｔで遺物包含層が確認された。確認深度は10Ｔで田面比－25cm、５Ｔ南深掘区で－120cm、５Ｔ北深掘区で－190cmと遺物包含層は北側に深く潜っていくことが明らかとなった。遺物包含層の上には、下から青砂層、黄褐色粘土層、流木層が認められた。遺物包含層は今回の調査対象地を越えて、さらに北側まで広がるものと考えられる。６Ｔ～９Ｔでは、来年以降の耕作を勘案し、遺物包含層までの深掘調査を行っていない。

出土土器の大半は縄文時代晩期大洞Ａ～Ａ′式である。第３図－12の鉢や第３図－15の高坏に見られる２個１対の貼瘤の付される変形工字文の配される土器等は、弥生時代前期砂沢式並行の山王Ⅳ上層式に相当するものである。第３図－26の口縁部に幅広の無文帯を持つ深鉢の胴部には、やや細かい直前段多条縄文が施されている。

(2) 南側の11Ｔ～18Ｔのうち、11Ｔ～16Ｔで遺物包含層が確認された。確認深度は14Ｔで田面比－15cm、16Ｔで－40～－70cmと南側に傾斜し、17Ｔと18Ｔでは、来年以降の耕作を勘案して、遺物包含層までの深掘調査は行わなかった。11Ｔでは、やや泥炭質の黒色土層からクルミの殻とともに土器や土製品が出土している。遺物包含層の上部は北側と同様、河川の氾濫に由来すると見られる厚い沖積層に覆われていた。以前に多量の縄文土器とともに、埋葬人骨やシジミ・タニシの淡水産貝層が発見されたのは地元の聞き取り調査では、この南側遺物包含層と推察されたが、貝層等は確認することができなかった。

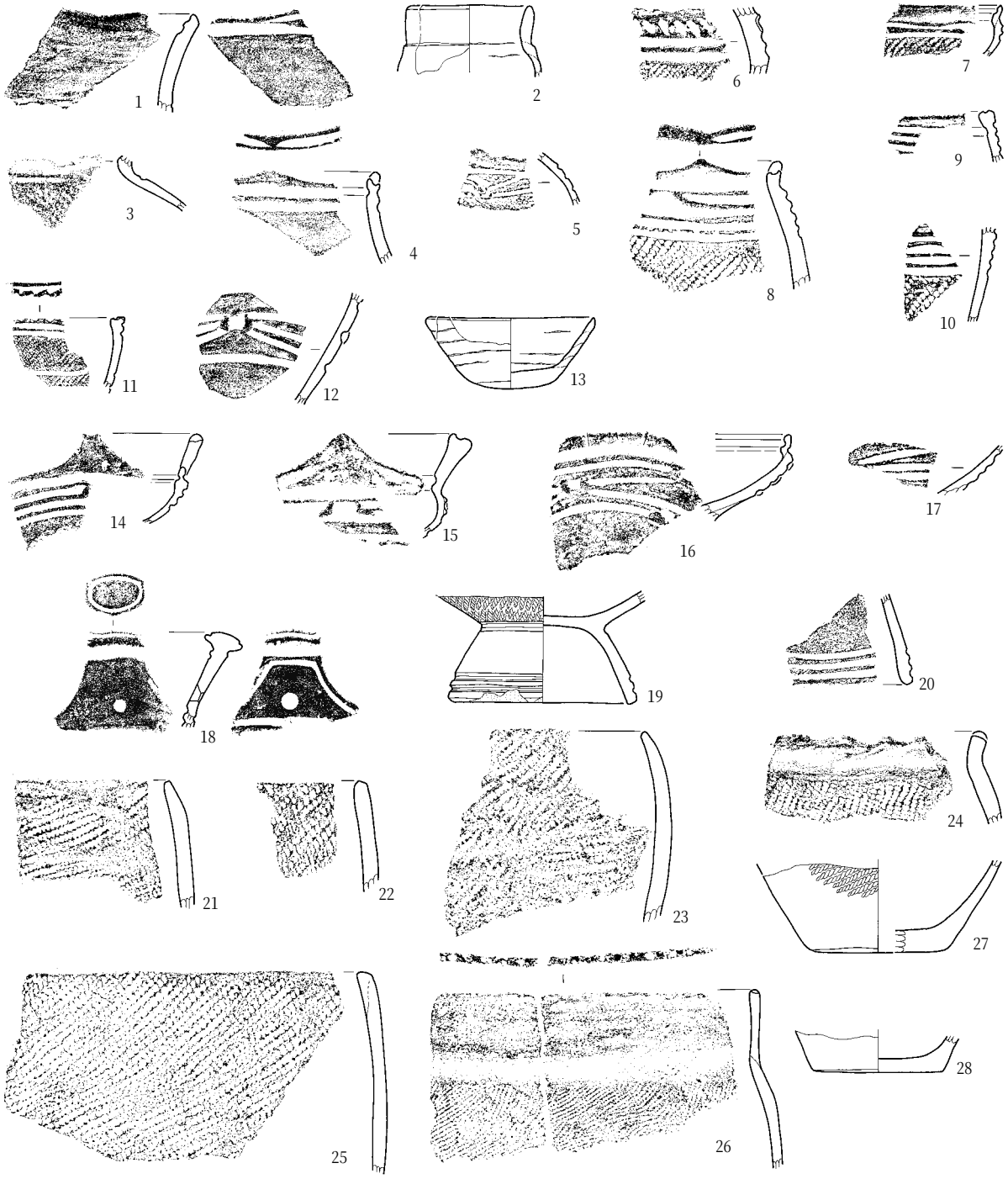
出土土器はいずれも縄文時代晩期中葉～末葉（大洞Ｃ１式～Ａ′式）に位置づけられるもので、弥生土器は出土していない。



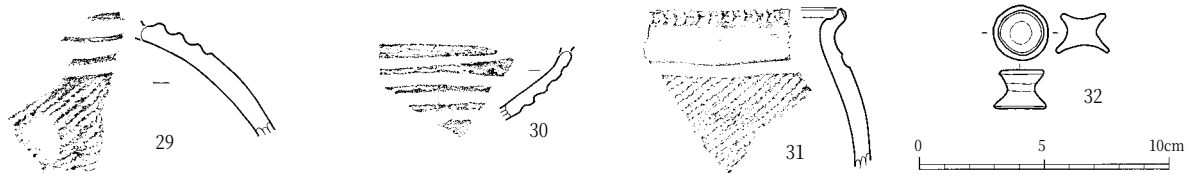
第２図　トレンチ配置図

トレンチ名	調査深度（cm）	遺物包含層
1T	－70～－15	未確認
2T	－35～－15	未確認
3T	－35	未確認
4T	－30	未確認
5T	－40～－20	未確認
6T	－65	未確認
7T	－50	未確認
8T	－55	未確認
9T	－80	未確認
10T	－25	確認
11T	－35～－30	確認
12T	－35	確認
13T	－45～－35	確認
14T	－40～－15	確認
15T	－60	(攪乱)
16T	－70～－40	確認
17T	－75	未確認
18T	－70	未確認
19T	－60	確認
20T深掘区	－170	確認
21T深掘区	－110	確認
1T深掘区	－120	確認
2T深掘区	－160	確認
5T南深掘区	－120	確認
5T北深掘区	－190	確認

トレンチ別調査深度一覧

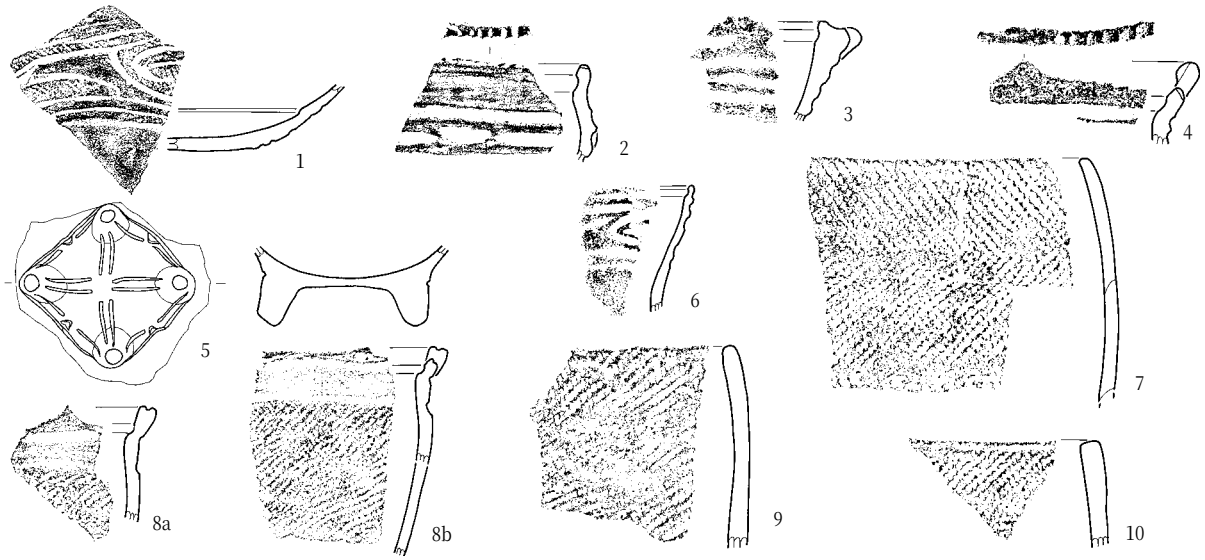


① 10トレンチ出土遺物　1～5：壷　6～10：浅鉢　11～13：鉢　14～20：高坏　21～28：深鉢

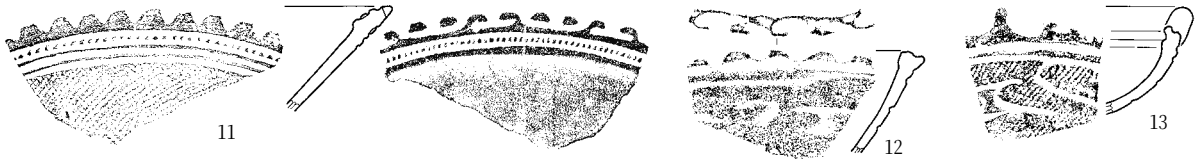


② 11トレンチ出土遺物　29：壷　30：高坏　31：深鉢　32：耳飾

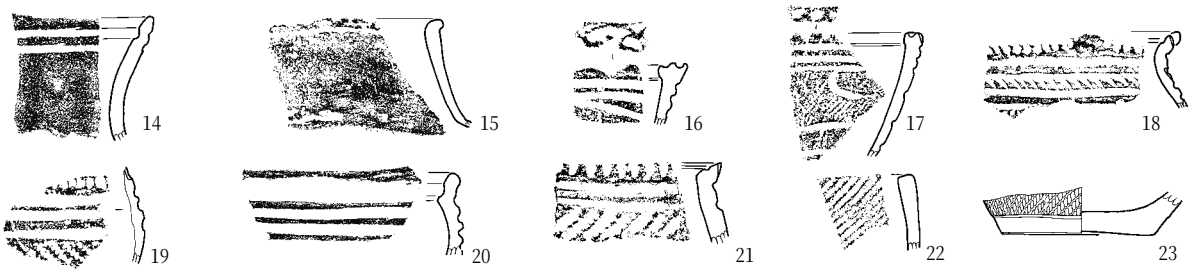
第３図　遺物包含層出土遺物（1）



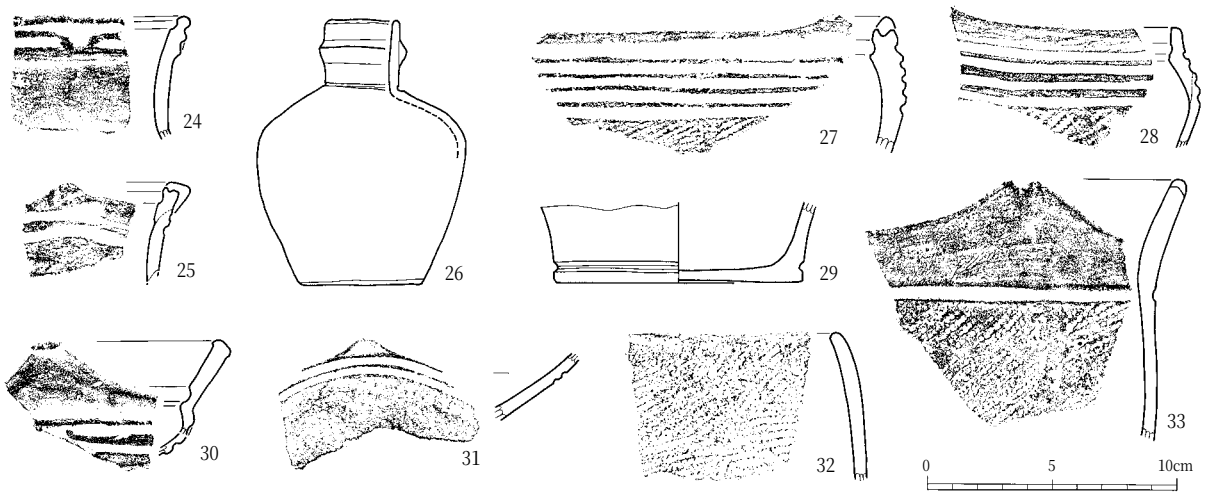
① 12トレンチ出土遺物　1～4：浅鉢　5：四足土器　6：鉢　7～10：深鉢



② 14トレンチ出土遺物　11～13：浅鉢



③ 15トレンチ出土遺物　14～15：壷　16～20：浅鉢　21～23：深鉢



④ 16トレンチ出土遺物　24～26：壷　27～28：浅鉢　29：鉢　30～31：高坏　32～33：深鉢

第４図　遺物包含層出土遺物 (2)

(3) 西側の１Ｔ～４Ｔ、20Ｔ～21Ｔのうち、１Ｔ・２Ｔ、20Ｔ・21Ｔで遺物包含層が確認された。確認深度は1Ｔ深掘区で田面比－120cm、２Ｔ深掘区で－160cm、20Ｔ深掘区で－170cm、21Ｔ深掘区で－110cmである。遺物包含層は尾根筋にあたる１Ｔ・21Ｔがやや浅いながら、西側に深く潜っていく。基本層序は北側・南側と同様、遺物包含層の黒色土層を厚い沖積層が覆っている。なお、深掘区内は湧水が激しく危険な状況のため、遺物の取り上げは行わなかった。３Ｔ・４Ｔでは、来年以降の耕作を勘案し、遺物包含層までの深掘調査を行っていない。

４．まとめ

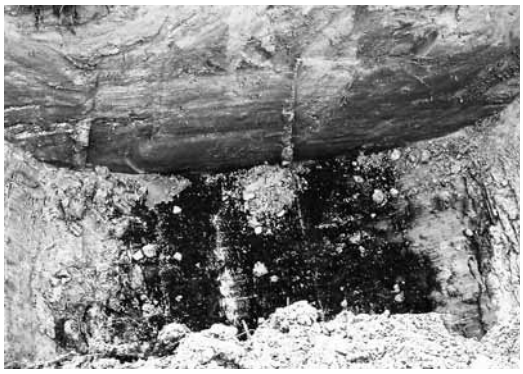
今回の調査によって検出された遺物包含層は微高地の周辺に形成されており、北側・南側・西側ともに厚い水成堆積の沖積層に潜り込んでいくことが確認された。こういった状況から集落は微高地上に営まれていたと考えられる。北側遺物包含層では弥生土器が検出され、縄文時代晩期から弥生時代前期にかけて継続する遺跡であることが明らかとなった。以前に確認されていた淡水産貝類の出土層や泥炭層を確かめることはできなかった。

註１：本遺跡は従来「北小松・岩田西遺跡」と呼称されて来たが、「北小松」は集落名、「岩田西」は地権者の屋号でいずれも正式な地名ではないことが明らかとなった。遺跡の正式な字名が「新欠下」「屋敷浦」であること、発見当初とは異なり遺跡が広域に及んでいることを勘案し、今後は学史的にも著名な「北小松遺跡」を用いていくことにする。

引用・参考文献

伊東信雄（1957）：「古代史」『宮城県史１』
須藤隆編（1995）：『縄文時代晩期貝塚の研究２　中沢目貝塚Ⅱ』東北大学文学部考古学研究会
須藤　隆（1998）：『東北日本先史時代文化変化・社会変動の研究　縄文から弥生へ』纂修堂
興野義一（1958）：「迫川流域の石器時代文化」『仙台郷土研究』18－3　pp.20－30
興野義一（1959）：「江合川流域の石器時代文化」『仙台郷土研究』19－3　pp.7－23
宮城県教育委員会（1980）：「恵比須田遺跡出土の土偶」『金剛寺貝塚　宇賀崎貝塚　宇賀崎1号墳他』宮城県文化財調査報告書第67集

遺物包含層検出状況（11Ｔ）


遺物包含層検出状況（５Ｔ深掘区）

クルミ・耳飾出土状況（11Ｔ）

壺出土状況（16Ｔ）

袖沢古墳群（そでさわこふんぐん）

調　査　要　項

遺 跡 名：袖沢古墳群（宮城県遺跡地名表登載番号：70037、遺跡記号：ＳＳ）

所 在 地：宮城県桃生郡桃生町太田字袖沢地内

調査原因：県営ほ場整備事業に伴う土取り工事

調査主体：宮城県教育委員会

調査担当：宮城県教育庁文化財保護課

調査期間：平成16(2004)年３月４日・29日・30日

調査面積：約200m^2

調 査 員：後藤秀一、相原淳一、柳澤和明、高橋栄一、佐藤憲幸、白崎恵介、田中政幸

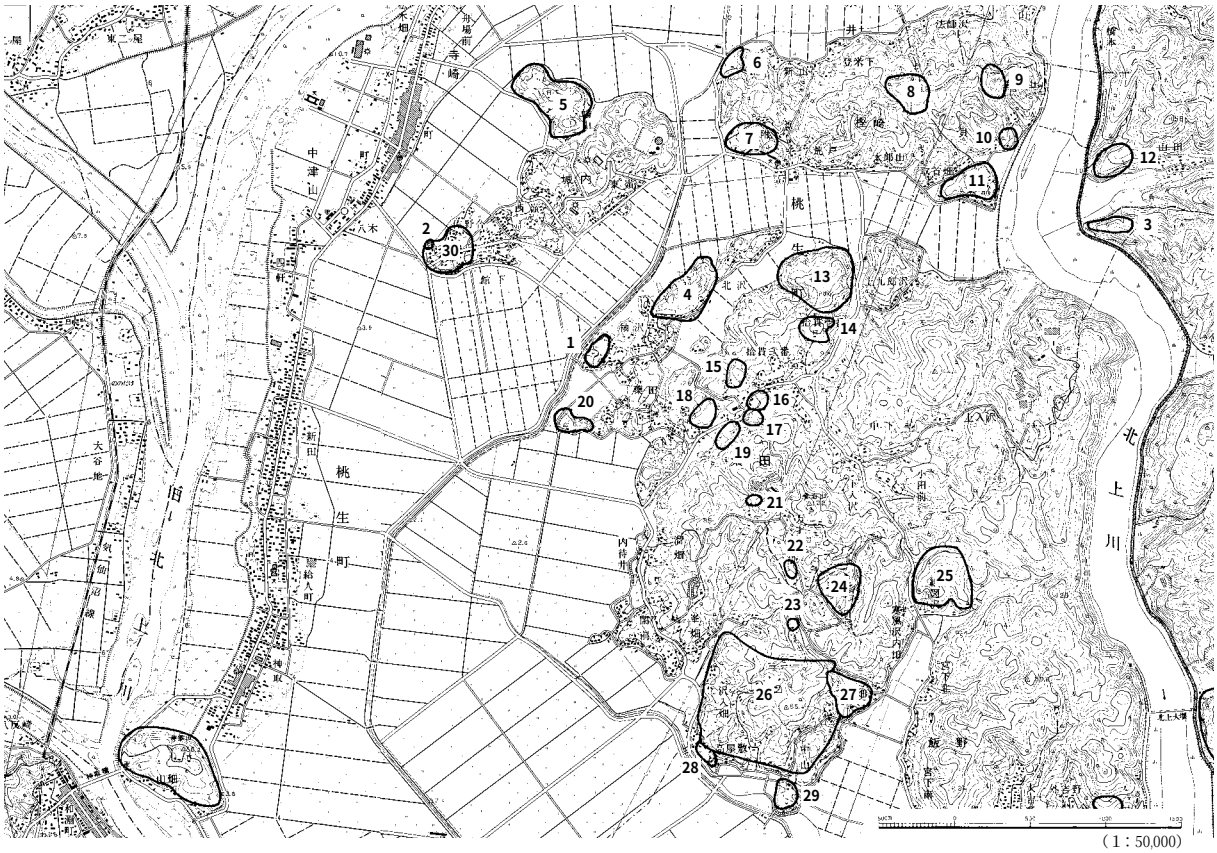
調査協力：桃生町教育委員会、桃生町文化財保護委員

遠藤勝太郎、阿部榮伍、遠山博久、千葉昌子

１．遺跡の概要

袖沢古墳群は、桃生郡桃生町太田字袖沢地内に所在し、桃生町役場の南東約２kmに位置する。本古墳群は北上川と旧北上川の中間に位置し、北上山地から西に延びる丘陵先端部に立地する。標高は10～14.5mで、西側に広がる水田地帯を眺望できる（第１図）。

周辺には縄文時代から中近世まで多数の遺跡がみられる。古墳時代を中心に概観すると、前期の遺跡としては、河北町新田東遺跡、石巻市と河南町にまたがる須江丘陵上に立地する河南町須江糠塚遺跡、関ノ入遺跡、その南にあたる自然堤防上、浜提上に立地する石巻市新金沼遺跡などで竪穴住居跡が発見されている。また石巻市新山崎遺跡では方形周溝墓が発見されている。中期の遺跡は周辺ではみられず、埴輪をもつ古墳で最も近いのは矢本町五十鈴神社古墳である。後期になると、袖沢古墳群の北東に位置する桃生町角山遺跡で竪穴住居跡が発見されている（註１）。また後期以降の古墳と考えられるものに、日高見神社遺跡、山田囲古墳、合戦谷古墳などがある。古代になると、奈良時代の城柵である桃生城跡がつくられ、河北町新田東遺跡、沢田山西遺跡など集落が多くみられるようになる。



No.	遺跡名	立地	種別	時代	No.	遺跡名	立地	種別	時代	No.	遺跡名	立地	種別	時代
1	袖沢古墳群	丘陵	古墳	古墳中	11	樫崎館跡	丘陵麓	城館	中世	21	万歳山B遺跡	丘陵	散布地	奈良・平安
2	白鳥古墳	丘陵	円墳	古墳	12	山田館跡（館山城）	丘陵	城館・散布地	古代・中世	22	万歳山A遺跡	丘陵	散布地	縄文
3	山田囲古墳	丘陵斜面	古墳	古墳後	13	阿倍館跡	丘陵麓	城館	中世	23	万歳山C遺跡	丘陵	集落	縄文中・後・古代
4	角山遺跡	丘陵	集落・水田	縄文・古墳後・奈良・平安・中近世	14	日高見神社遺跡	丘陵	散布地	縄文・古墳後	24	問答山遺跡	丘陵斜面	散布地	古代
5	八幡館跡	丘陵	城館	中世	15	拾貫壱番遺跡	丘陵斜面	散布地	奈良・平安・近世	25	赤間館遺跡	丘陵斜面	城館	中世
6	八幡遺跡	丘陵	集落・水田	縄文・平安	16	宋全山遺跡	丘陵	散布地	縄文・古代	26	桃生城跡	丘陵	城柵	奈良・平安
7	壇の森館跡	丘陵	城館	中世	17	細谷遺跡	丘陵	散布地	縄文晩期・古代	27	新田東遺跡	丘陵	包含層・集落	縄文前・古墳前・奈良・平安・近世
8	黄竜渕館跡	丘陵	城館	中世	18	太田窯跡	丘陵	窯跡・集落	奈良・平安・近世	28	高屋敷遺跡	丘陵麓	散布地	古代
9	陣ヶ峯館跡	丘陵	城館	中世	19	細谷B遺跡	丘陵斜面	散布地	縄文中・奈良・平安	29	飯野館跡	丘陵麓	城館	中世
10	樫崎貝塚	丘陵麓	貝塚	縄文早・中	20	太田館跡	丘陵麓	城館	中世	30	中津山城跡	丘陵	城館	中近世

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡

２．調査に至る経緯と調査の方法

桃生町袖沢地区では平成15年度県営ほ場整備事業に伴う土取り工事が実施されており、その工事中に桃生町文化財保護委員の阿部氏により埴輪片が発見されたことを桃生町教育委員会から連絡を受け、平成16年３月４日に現地を確認した。重機で埴輪が採集された地点の周辺の盛り土を除去し、遺構確認をしたところ、遺構、遺物とも検出されなかった。袖沢地区では昭和41年の開田で大規模な切り土、盛り土が行われ、旧地形が失われており、それ以前には埴輪が採集された地点に塚（註２）があったということで、埴輪が伴っていたと思われる古墳（２号墳）は開田時に完全に削平されたと思われる。

その後、前回埴輪が採集された地点から南西約40mの地点で多数の埴輪が発見されたことを桃生町教育委員会から連絡を受け、３月29日に現地を確認した。重機で盛り土を除去し遺構確認をしたところ、盛り土直下で古墳（１号墳）の周溝の一部が検出され、多数の埴輪が出土した。石巻産業振興事務所、地権者、桃生町教育委員会、宮城県教育庁文化財保護課で協議した結果、古墳周溝が検出された部分はこれ以上掘削を行わないことを了解していただき、現状保存することとなった。翌３月30日に周溝の延びを確認するため西側の盛り土を重機で除去し、残存する周溝の確認調査を行い、調査終了後に周溝を埋め戻した。

また工事予定地外の丘陵上を踏査したところ、古墳と考えられる高まりを２基確認した（第２図）。これらの４基については「袖沢古墳群」として平成16年４月13日付けで宮城県遺跡台帳に登録した。

検出した遺構の実測にあたっては、平面図は縮尺１／100、断面図は縮尺１／20で作成した。平面図における北は磁北を示している。記録写真はデジタルカメラを用いて撮影した。

第２図　古墳の位置と周辺の地形

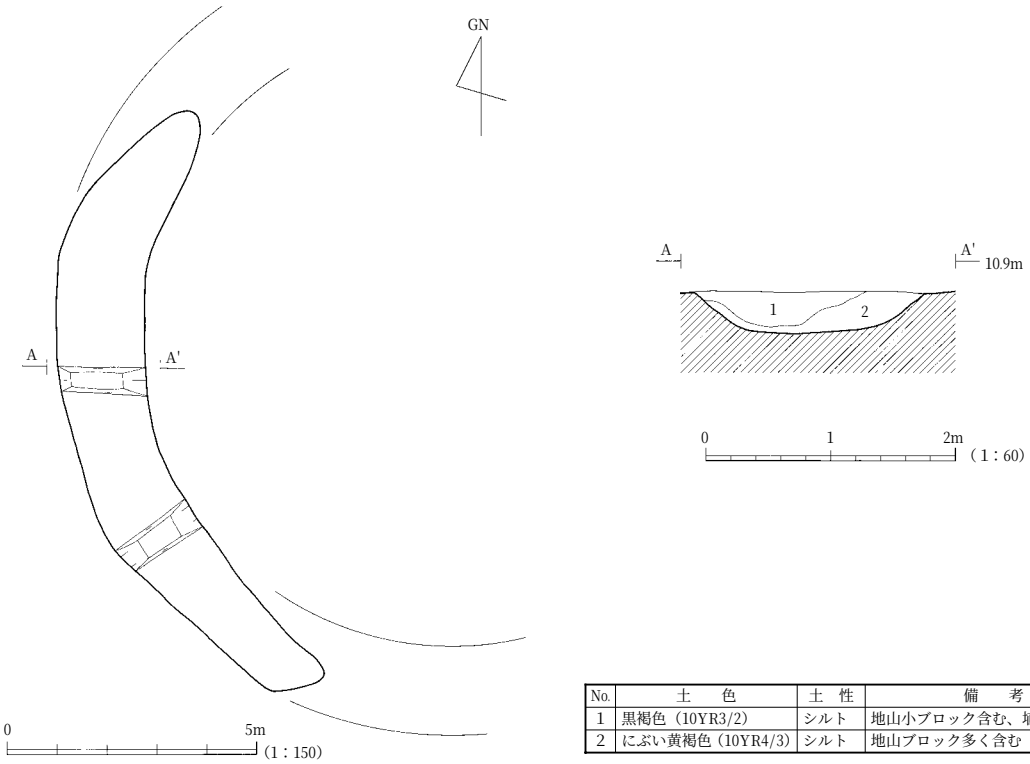
３．発見された遺構と遺物

本古墳群は南北約250m、東西約150mの小丘陵上に立地する。

(1)　１号墳（第３～５図）

南西に傾斜する尾根の先端部に位置する古墳である。尾根の下側で周溝の一部を確認した。開田による削平のため、墳丘及び尾根上側の周溝は残存していない。

検出した周溝から古墳の規模は、外周約16.0m、内周約12.4mの円形と考えられる。周溝は残りのよい部分で、上幅約1.8m、下幅約1.0m、深さは約0.4mである。埋土は２層に分けられ、１層は黒褐



No.	土　色	土　性	備　考
1	黒褐色（10YR3/2）	シルト	地山小ブロック含む、埴輪多く含む
2	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	地山ブロック多く含む

第３図　１号墳周溝平面図・断面図

色シルトで、崩壊した埴輪片を多く含み、２層は地山ブロックを含むにぶい黄褐色シルトである。

遺物は周溝埋土１層から円筒埴輪、朝顔形埴輪が出土している（第４・５図）。

円筒埴輪

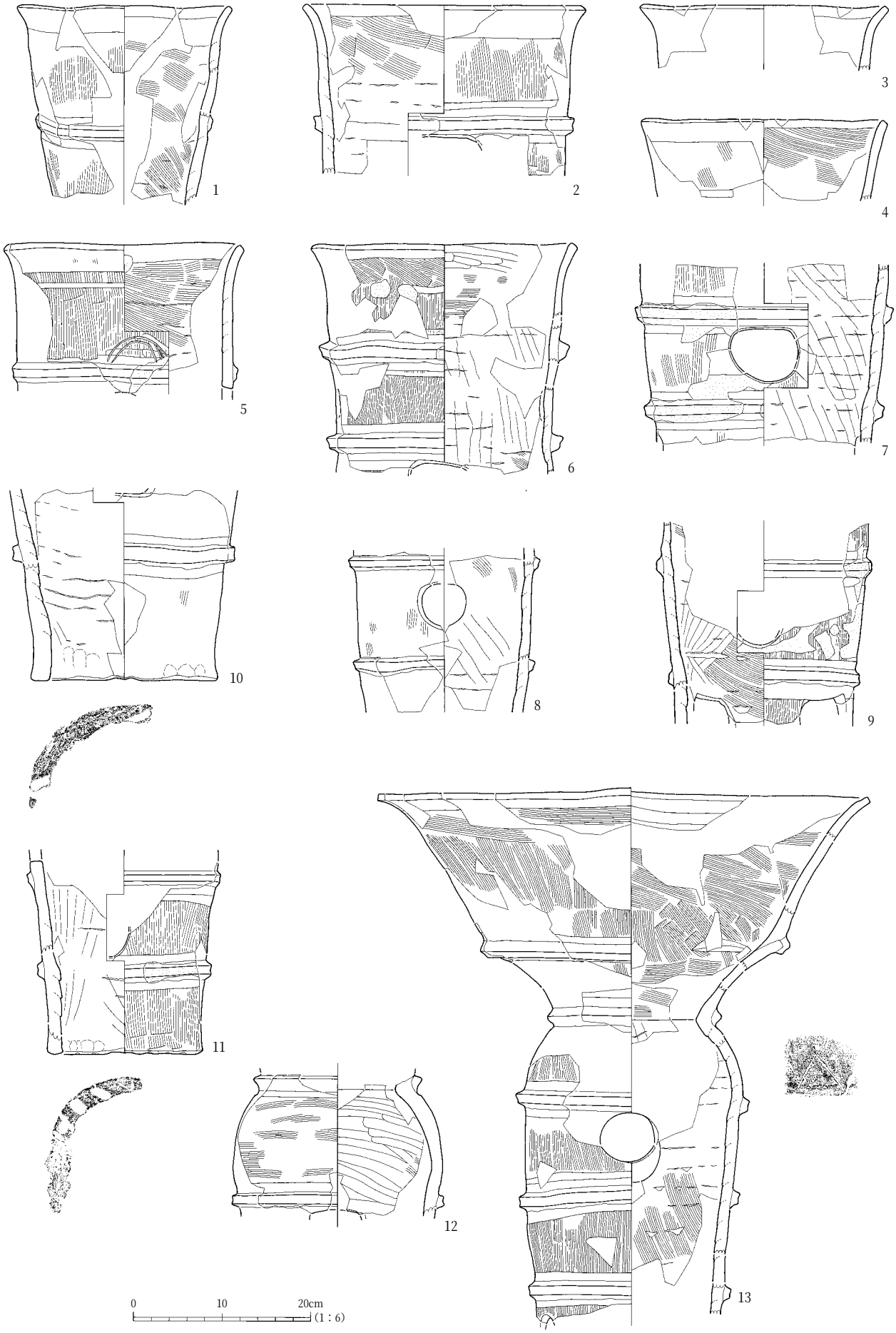
円筒埴輪の全体が復元できたものはなく、いずれも破片資料である。なお、口縁部が残存し円筒埴輪と確認できるもの以外の中間段や最下段の資料に、朝顔形埴輪の円筒部が含まれる可能性がある。

６は口縁部から凸帯２条をはさんで３段目まで残存し、上から２段目と３段目の直行する位置にスカシ孔がみられ、11は底部から凸帯２条をはさんで３段目まで残存し、下から２段目と３段目の直行する位置にスカシ孔がみられる。最上段および最下段にスカシ孔がみられるものがないことから、少なくとも凸帯３条以上、４段以上の構成をとると考えられる。

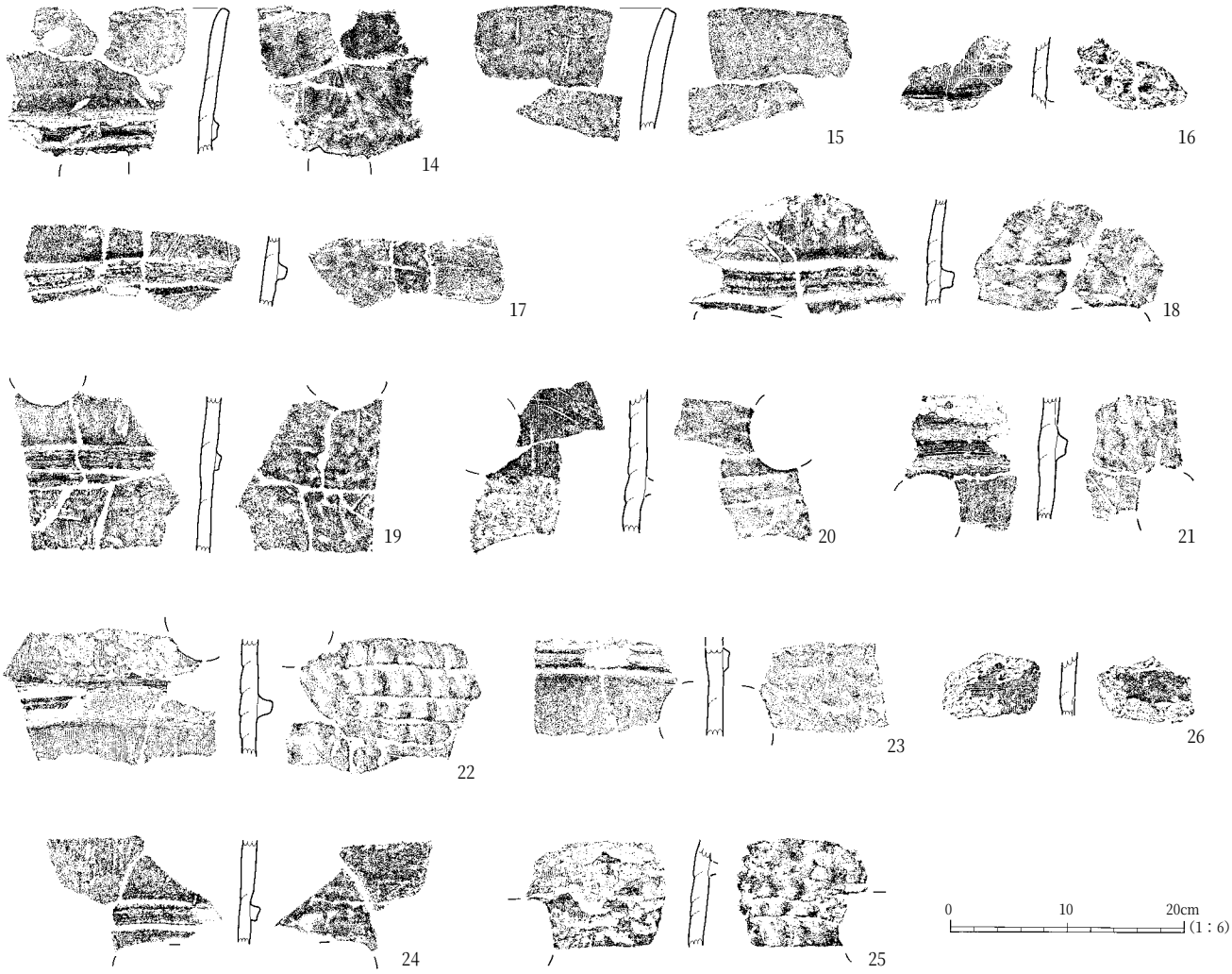
器形は底部から口縁部に向かってやや開いて立ち上がり、口縁端部が外反するもの（１～３・５・６）と直線的にすぼまるもの（４・14・15）がある。口径には、径24～28cmの小形のもの（１・３～５）と径30～32cmの大形のもの（２・６）があり、底径が分かるものでは、径17.6cmのもの（11）、径21.0cmのもの（10）がある。

最上段の幅は10～14cm、中間段の幅は10.5～13.0cm、最下段の幅は9.5～14.5cmで、６では最上段の幅が中間段よりやや幅広となり、11では最下段の幅が中間段の幅よりやや狭くなる。

外面調整は１次調整タテハケのみのものがほとんどを占め、26の破片資料１点に２次調整ヨコハケが認められる。口縁部は１・２・４・５・14・15で１次調整タテハケ後にヨコナデが施され、６で１次調整タテハケ後斜方向のハケメ調整が施され、さらにヨコナデが施される。最下段の下端部では指オサエが施される。



第４図　１号墳周溝出土埴輪（1）



No.	種類	出土層位	法量（cm）	凸帯（cm）			調整	焼成	写真図版	R No.
				上幅	下幅	高さ				
1	円筒埴輪	周溝１層	口径（24.2）、最上段高14.0	0.9	2.0	0.5	外面：タテハケ→凸帯取り付け、口縁部ヨコナデ　内面：斜方向ハケメ・横方向ハケメ→口縁部ヨコナデ	やや不良	図版2-1	7
2	円筒埴輪	周溝１層	口径（32.0）、最上段高13.5	1.4	2.2	0.8	外面：タテハケ→凸帯取り付け→スカシ孔穿孔、口縁部ヨコナデ　内面：斜方向ハケメ→口縁部ヨコナデ	やや不良	図版1-2	5
3	円筒埴輪	周溝１層	口径（28.0）	―	―	―	外面：摩滅　内面：摩滅	やや不良		13
4	円筒埴輪	周溝１層	口径（27.6）	―	―	―	外面：タテハケ→口縁部ヨコナデ　内面：斜方向ハケメ→口縁部ヨコナデ	やや不良		12
5	円筒埴輪	周溝１層	口径（27.0）、最上段高14.5	1.0	2.2	0.6	外面：タテハケ→凸帯取り付け→スカシ孔穿孔・ヘラ記号、口縁部ヨコナデ 内面：斜・横方向ハケメ→口縁部ヨコナデ	良好	図版1-1	1
6	円筒埴輪	周溝１層	口径（30.0）、第3段高10.5、最上段高12.0	1.2～1.3	2.3～2.5	1.3	外面：タテハケ→凸帯取り付け→スカシ孔穿孔、口縁部斜方向ハケメ→ヨコナデ 内面：縦方向ナデ、斜・横方向ハケメ、口縁部横方向ナデ	良好	図版2-2	2
7	円筒埴輪	周溝１層	第３段高（11.0）	1.0～1.1	2.2～2.6	0.9～1.0	外面：タテハケ→凸帯取り付け→スカシ孔穿孔　内面：斜方向ナデ	やや不良		9
8	円筒埴輪	周溝１層		0.7～0.8	1.5～1.6	0.7～0.8	外面：タテハケ、凸帯取り付け、スカシ孔穿孔　内面：斜方向ナデ、斜方向ハケメ	やや不良	図版2-5	6
9	円筒埴輪	周溝１層	第３段高（13.0）	0.9～1.0	1.8～2.2	0.6～0.7	外面：タテハケ→凸帯取り付け→スカシ孔穿孔　内面：斜方向ハケメ→斜方向ナデ	やや不良	図版2-4	8
10	円筒埴輪	周溝１層	底径（21.0）、最下段高14.5	1.5	2.1	1.0	外面：タテハケ、凸帯取り付け→スカシ孔穿孔、底部付近オサエ　内面：ナデ、底部付近オサエ	やや不良	図版2-6	4
11	円筒埴輪	周溝１層	底径（17.6）、最下段高9.5、第2段高10.5	0.8～1.0	1.9～2.1	0.5～0.7	外面：タテハケ→凸帯取り付け→スカシ孔穿孔　内面：縦方向ナデ、底部付近オサエ	良好	図版1-3	3
12	朝顔形埴輪	周溝１層	頸部径（17.0）	1.0	1.6	0.8	外面：ナデ?→ヨコハケ、凸帯取り付け、スカシ孔穿孔　内面：斜方向ハケメ→斜方向ナデ	良好	図版2-7	11
13	朝顔形埴輪	周溝１層	口径（55.8）、頸部径（17.6）	1.0～1.1	2.1～2.2	0.8～0.9	外面：タテハケ→凸帯取り付け、スカシ孔穿孔、ヘラ記号、口縁部横方向ハケメ→ヨコナデ 内面：斜・横・縦方向ハケメ、一部縦方向ナデ、口縁部ヨコナデ	やや不良	図版1-4	10
14	円筒埴輪	周溝１層		1.0	1.9	0.5	外面：タテハケ→凸帯取り付け→スカシ孔穿孔、口縁部ヨコナデ　内面：横方向ハケメ→口縁部ヨコナデ	やや不良		21
15	円筒埴輪	周溝１層		―	―	―	外面：タテハケァ→口縁部ヨコナデ　内面：ナデァ→口縁部ヨコナデ	良好		19
16	円筒埴輪	周溝１層		―	―	―	外面：タテハケ→凸帯取り付け→ヘラ記号　内面：ナデァ	良好	図版2-9	18
17	円筒埴輪	周溝１層		0.8	1.4	0.8	外面：タテハケ→凸帯取り付け→ヘラ記号　内面：ナデァ	やや不良	図版2-10	20
18	円筒埴輪	周溝１層		1.1	1.9	1.1	外面：タテハケ→凸帯取り付け→スカシ孔穿孔・ヘラ記号　内面：縦方向ナデ	良好	図版2-11	14
19	円筒埴輪	周溝１層		1.2	1.6	0.5	外面：タテハケ→凸帯取り付け→スカシ孔穿孔　内面：縦方向ナデ	やや不良		24
20	円筒埴輪	周溝１層		―	―	―	外面：タテハケ→凸帯取り付け→スカシ孔穿孔　内面：縦方向ナデ	良好		16
21	円筒埴輪	周溝１層		1.1	2.2	0.9	外面：タテハケ→凸帯取り付け→スカシ孔穿孔　内面：縦方向ナデ	やや不良		22
22	円筒埴輪	周溝１層		0.9	1.9	1.3	外面：タテハケ→凸帯取り付け→スカシ孔穿孔　内面：縦方向ナデ	良好		15
23	円筒埴輪	周溝１層		1.2	2.0	0.6	外面：タテハケ→凸帯取り付け→スカシ孔穿孔　内面：斜方向ハケメ→縦方向ナデ	やや不良		23
24	円筒埴輪	周溝１層		1.0	1.3	0.8	外面：タテハケ→凸帯取り付け→スカシ孔穿孔　内面：ナデ	やや不良		25
25	円筒埴輪	周溝１層		―	―	―	外面：タテハケ→凸帯取り付け→スカシ孔穿孔　内面：縦方向ナデ	良好		17
26	円筒埴輪	周溝１層		―	―	―	外面：タテハケ→ヨコハケ　内面：横方向ナデ	やや不良	図版2-8	26

第５図　１号墳周溝出土埴輪（2）

内面調整は縦・斜方向のナデ調整や斜・横方向のハケメ調整で、調整が粗く粘土の積み上げ痕跡を残すものが多い。口縁部ではヨコナデ、最下段の下端部では指オサエが施される。また６では上から２番目の凸帯付近でハケメ調整が途切れること、その他の資料でも凸帯付近で調整の方向が変わることから、凸帯付近で一定の休止期間を設け、また粘土を積み上げたと判断される。

底面には棒状の圧痕が認められる。

凸帯は１次調整タテハケ後に貼り付けられ、側面がわずかにくぼむ台形を呈する。上・側面は丁寧にヨコナデされているが、下面のヨコナデは粗い。凸帯の高さは0.5～1.3cmで、１・５・14・19・23は0.5～0.6cmと低いものである。

スカシ孔は段の上方に位置するものが多く、２段にわたって直行する位置に穿孔される（６・７・11）。９は約30°の位置に穿孔されている。スカシ孔の全形が分かるものはないが、２・６・９・１４・18・24・25は残存状況から半円形と考えられる。７は凸帯の位置から不整な半円形の可能性がある。８・21は残存状況から円形の可能性がある。その他についてはいずれとも判断がつかない。

ヘラ記号は５・16～18の外面に認められる。５は最上段の凸帯のすぐ上に施されており、その他についても最上段に位置するとみられる。ヘラ記号は半円を基本とし１～３本単位で施されている。

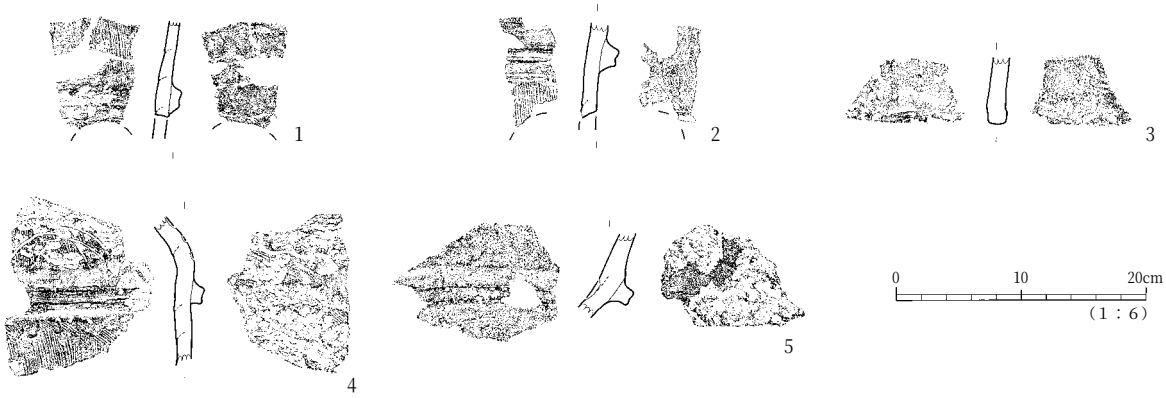
朝顔形埴輪

朝顔形埴輪の全体が復元できたものはない。

13は円筒部と朝顔花部との接点はないが、胎土・焼成・調整などから同一の個体と考えられたものである。円筒部はわずかに開き、肩部はやや丸みをもち、頸部で強くくびれて外反し、凸帯をはさんで外反しながら口縁部にいたる。円筒部は肩部の段から下に凸帯３条をはさんで、４段目まで残存し、肩部の段から２段目と４段目の直行する位置にスカシ孔がみられる。最下段にスカシ孔がないとすると、４段目の下に凸帯１条をはさんで５段目の存在が想定できることから、少なくとも円筒部は凸帯４条以上、５段以上の構成をとると考えられる。口径55.8cm、頸部径17.6cmである。

外面調整は１次調整タテハケで、口縁部で横方向ハケメの後ヨコナデが施される。内面調整は円筒部が縦方向のハケメ、頸部より上が横・斜方向のハケメが施される。口縁部ではヨコナデが施され、端部はヨコナデによる軽い段が認められる。屈曲部では丁寧に整形された擬口縁を作っている。凸帯は、頸部で三角形、その他は側面がわずかにくぼむ台形を呈する。頸部の凸帯は上・下面とも丁寧にヨコナデされ、その他も上・側面は丁寧にヨコナデされているが、下面のヨコナデは粗い。凸帯の高さは、頸部凸帯で1.0cm、円筒部で0.8～0.9cm、朝顔部で1.2cmである。スカシ孔は段の上寄りに位置し、径６～７cmの円形とみられる。また肩部外面に「∧」のヘラ記号が認められる。

12は肩部の資料で、やや丸みをもつ。頸部径は17.0cmである。外面調整はナデ調整の後２次調整ヨコハケが認められる。内面調整は斜方向のハケメの後、斜方向のナデが施される。凸帯は、頸部で三角形、円筒部で側面がわずかにくぼむ台形を呈し、高さはいずれも0.8cmである。スカシ孔は凸帯の直下に位置し、残存状況から半円形と考えられる。



No.	種類	出土層位	法量	凸帯（cm）			調整		写真図版	R No.
				上幅	下幅	高さ				
1	円筒埴輪	2号墳付近表採		1.2	2.5	0.8	外面：タテハケ→凸帯取り付け→スカシ孔穿孔　内面：ナデヵ	やや不良		1
2	円筒埴輪	2号墳付近表採		1.2	2.6	1.3	外面：タテハケ→凸帯取り付け→スカシ孔穿孔　内面：縦方向ナデ	良好		2
3	円筒埴輪	2号墳付近表採		―	―	―	外面：タテハケヵ　内面：縦方向ナデ	やや不良		3
4	朝顔形埴輪	2号墳付近表採		1.0	2.0	1.0	外面：タテハケ→斜方向ハケメ→凸帯取り付け→ヘラ記号　内面：斜方向ハケメ	良	図版2-12	4
5	朝顔形埴輪	2号墳付近表採		1.0	2.0	1.1	外面：タテハケ？→凸帯取り付け　内面：ナデ？	良		5

第６図　２号墳周辺の表採埴輪

(2) ２号墳

２号墳は１号墳の約40m北東に位置する古墳と推定される。開田による削平のため、周溝などは残存せず規模など不明であるが、開田前には径10m前後の高まりがあったということである（註２）。

遺物は表土から円筒埴輪、朝顔形埴輪が採集された（第６図）。１・２は円筒埴輪の中間段の資料で、外面調整は１次調整タテハケ、内面調整は縦方向のナデである。凸帯は側面がややくぼむ台形を呈し、高さは１が0.8cm、２が1.3cmである。スカシ孔は一部しか残存していないが円形の可能性がある。３は円筒埴輪の最下段の資料で、外面調整は１次調整タテハケ、内面調整は縦方向のナデである。４・５は朝顔形埴輪の肩部資料（４）と屈曲部資料（５）である。４の外面調整は１次調整タテハケの後斜方向のハケメ、内面調整は斜方向のハケメが施される。凸帯は側面がややくぼむ台形を呈し、高さは1.0cmである。肩部外面にヘラ記号が施される。５は摩滅が激しいため調整は不明である。凸帯は側面がややくぼむ台形を呈し、高さは1.1cmである。

４．考察

(1) 袖沢１号墳の埴輪の特徴

袖沢１号墳の周溝は全体の１／４程しか残存しておらず、今回出土した埴輪も古墳に立て並べられた埴輪全体からみると１／５以下と思われる。

円筒埴輪は、３条凸帯４段構成もしくはこれより大きいと考えられる。器形は底部からやや開いて立ち上がり、口縁部は外反するものと直線的にすぼまるものがある。大きさには、口径24～28cmの小形のものと、口径30～32cmの大形のものがある。段の幅は10～15cmで、分かるものでは最下段より中間段、中間段より最上段の方がわずかに幅広のようである。器高は４段の場合45～50cmと推定される。

朝顔形埴輪は、頸部より上が凸帯１条２段構成をとり、円筒部は４条凸帯５段構成もしくはこれよ

り大きいと考えられる。円筒部はわずかに開き、肩部はやや丸みをもち、頸部で強くくびれて外反し、凸帯をはさんで外反しながら口縁部にいたる。口径55.8cm、頸部径17.6cmで、器高は円筒部が５段の場合75～80cmと推定される。

円筒埴輪、朝顔形埴輪は、黒斑が認められるものがないことから窖窯焼成と考えられ、硬く焼き締まった黄褐色を呈するものと、やや焼成不良で軟質な赤褐色を呈するものがある。外面調整は、円筒埴輪の破片資料（第５図26）と朝顔形埴輪の肩部資料（第４図12）に２次調整ヨコハケが認められる以外、すべて１次調整タテハケのみである。内面調整は、ナデ調整とハケメ調整が認められる。成形は、一定の高さまで粘土を積み上げて休止期間を設け、また粘土を積み上げていくという製作工程を行ったと考えられる。凸帯は側面のややくぼむ台形を呈し、突出度の高いものが多い。スカシ孔の形状には、半円形と円形が認められる。

(2) 埴輪からみた袖沢１号墳の築造年代について

古墳築造に伴うと考えられる埴輪から検討する。年代を考える上で、埴輪の主な特徴として以下の点が挙げられる。

・外面調整は、円筒埴輪で１点、朝顔形埴輪で１点に２次調整ヨコハケが認められる以外、すべて１次調整タテハケのみである。

・焼成はすべて窖窯焼成と考えられる。

・円筒埴輪は休止期間を設けて製作されており、一挙巻き上げに伴う底部調整はみられない。

・凸帯は側面のややくぼむ台形を呈し、突出度の高いものが多い。

これらの点を、川西宏幸氏の「円筒埴輪総論」（川西；1978）で示された編年と比較検討すると、Ⅳ期の特徴である２次調整ヨコハケが認められる円筒埴輪１点を含むが、その他の特徴はⅤ期古段階に相当する。

また宮城県内で袖沢１号墳の埴輪と類似するものをみると、仙台市裏町古墳出土の埴輪が挙げられる（仙台市教育委員会：1974・1987）。裏町古墳の円筒埴輪・朝顔形埴輪は、半円形のスカシ孔がみられるＡ群と円形のスカシ孔がみられるＢ群があり、Ａ群の一部に２次調整Ｂ種ヨコハケがあり、Ｂ群はすべて１次調整タテハケのみである。陶邑編年ＴＫ208型式の須恵器ハソウが供伴している。

袖沢１号墳の埴輪では、ほとんどが１次調整タテハケのみで、２次調整ヨコハケが認められる円筒埴輪は１点であることから、袖沢１号墳の埴輪は裏町古墳の埴輪よりも後出的と考えられる。また東北地方では２次調整ヨコハケの消滅はＴＫ208型式からＴＫ23型式の間という指摘がなされており（辻；1989）、袖沢１号墳の埴輪はよりＴＫ23型式に近いと考えられる。

以上より、袖沢１号墳の築造年代はＴＫ208型式を上限年代として、概ねTK23型式を中心とする時期と思われる。実年代については5世紀後葉を中心とする年代が想定されよう。

なお、袖沢２号墳の年代は資料が少ないため細かい検討はできないが、袖沢１号墳の年代と大きく変わらないと考えられる。

(3) 埴輪の製作技法の特徴

袖沢１号墳の円筒埴輪、朝顔形埴輪の製作技法の特徴の一つとして、スカシ孔の形状に半円形が含

まれることが挙げられる。宮城県内で、半円形のスカシ孔をもつ埴輪が出土している古墳は10例ある。

このうち仙台平野中央部に位置する仙台市裏町古墳、五反田古墳（仙台市教育委員会：1987)、原５・６・９・11号墳（仙台市教育委員会；1998)、原13号墳（註３）の各古墳出土埴輪（註４）と袖沢１号墳の埴輪を比較すると、半円形のスカシ孔をもつこと以外に、朝顔形埴輪の内面口縁端部にヨコナデによる軽い段をもつこと、頸部凸帯の形状が三角形であることなどが類似している。このように袖沢１号墳の埴輪と仙台平野中央部の埴輪には、製作技法に共通する点が認められる（註５)。

(4) 袖沢古墳群について

調査の結果、１号墳は埴輪を有する径12.4mの古墳であることがわかり、２号墳も埴輪を有していた古墳の可能性が考えられる。また周辺を分布調査したところ、古墳とみられる高まりを２基確認した。昭和41年の開田によって失われた古墳もあると思われるが、４基の古墳が存在していたことが想定される。

埴輪を有する１・２号墳と同時期の集落は、古墳群周辺では確認されていない。しかし北東約1.5kmに位置する角山遺跡で古墳時代中期とみられる土師器片が出土していることから（註１)、古墳群を築造した集落が存在した可能性がある。袖沢古墳群の被葬者は周辺地域の首長と考えられ、古墳時代中期後半における北上川下流域の様子を解明する上で注目される発見である。

註１：三陸縦貫自動車道建設工事に伴い平成14・15年度に発掘調査が行われた。主に古墳時代後期、奈良・平安時代の集落が発見されている（宮城県教育委員会：2002)。なお、本報告は平成16年度に刊行予定である。

註２：桃生町文化財保護委員の阿部氏よりご教授頂いた。なお、地元では「日招塚（ひまねきづか)」と呼ばれていたということである。

註３：仙台市教育委員会　2000「仙台市　原遺跡（第４次調査)」『平成12年度　宮城県遺跡調査成果発表会　発表要旨』pp.13～18　宮城県考古学会

註４：藤沢敦氏は仙台平野中央部の埴輪群において、半円形のスカシ孔をもつ一群を五反田古墳系列、円形のスカシ孔をもつ一群を富沢窯跡系列としている（仙台市教育委員会：1987、藤沢：2002)。

註５：ただし、仙台平野中央部の円筒埴輪は、原13号墳などの一部の例を除き、ほとんどが２条凸帯３段構成で、３条凸帯４段構成もしくはそれ以上である袖沢１号墳の円筒埴輪とでは形態的な違いがある。

引用・参考文献

川西宏幸（1978）：「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第２号　pp.1～70　日本考古学協会

佐藤公保（2003）：「宮城県矢本町五十鈴神社古墳採集の埴輪について」『宮城考古学』第５号　pp.267～278　宮城考古学会

仙台市教育委員会（1974）：『裏町古墳発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第7集

仙台市教育委員会（1987）：『大野田古墳群　春日社古墳・鳥居塚古墳発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第108集

仙台市教育委員会（1998）：『原遺跡―第１・２次調査発掘調査報告書―』仙台市文化財調査報告書第229集

仙台市教育委員会（1999）：『原遺跡―第３次調査発掘調査報告書―』仙台市文化財調査報告書第240集

辻　秀人（1989）：「東北古墳時代の画期について（その１）―中期後半の画期とその意義―」『福島県立博物館研究紀要』第３号　pp.1～19　福島県立博物館

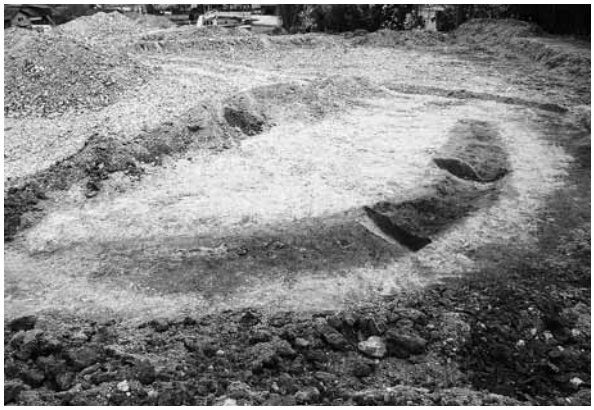
藤沢　敦（2001）：「倭の周縁における境界と相互関係」『考古学研究』第48巻第３号　pp.41～56　考古学研究会

藤沢　敦（2002）：「東北地方の円筒埴輪―窯焼成埴輪の生産と波及―」『埴輪研究会誌』第６号　pp.17～42　埴輪研究会

宮城県教育委員会（2002）：「角山遺跡」『平成15年度　宮城県遺跡調査成果発表会　発表要旨』　pp.31～36　宮城県考古学会

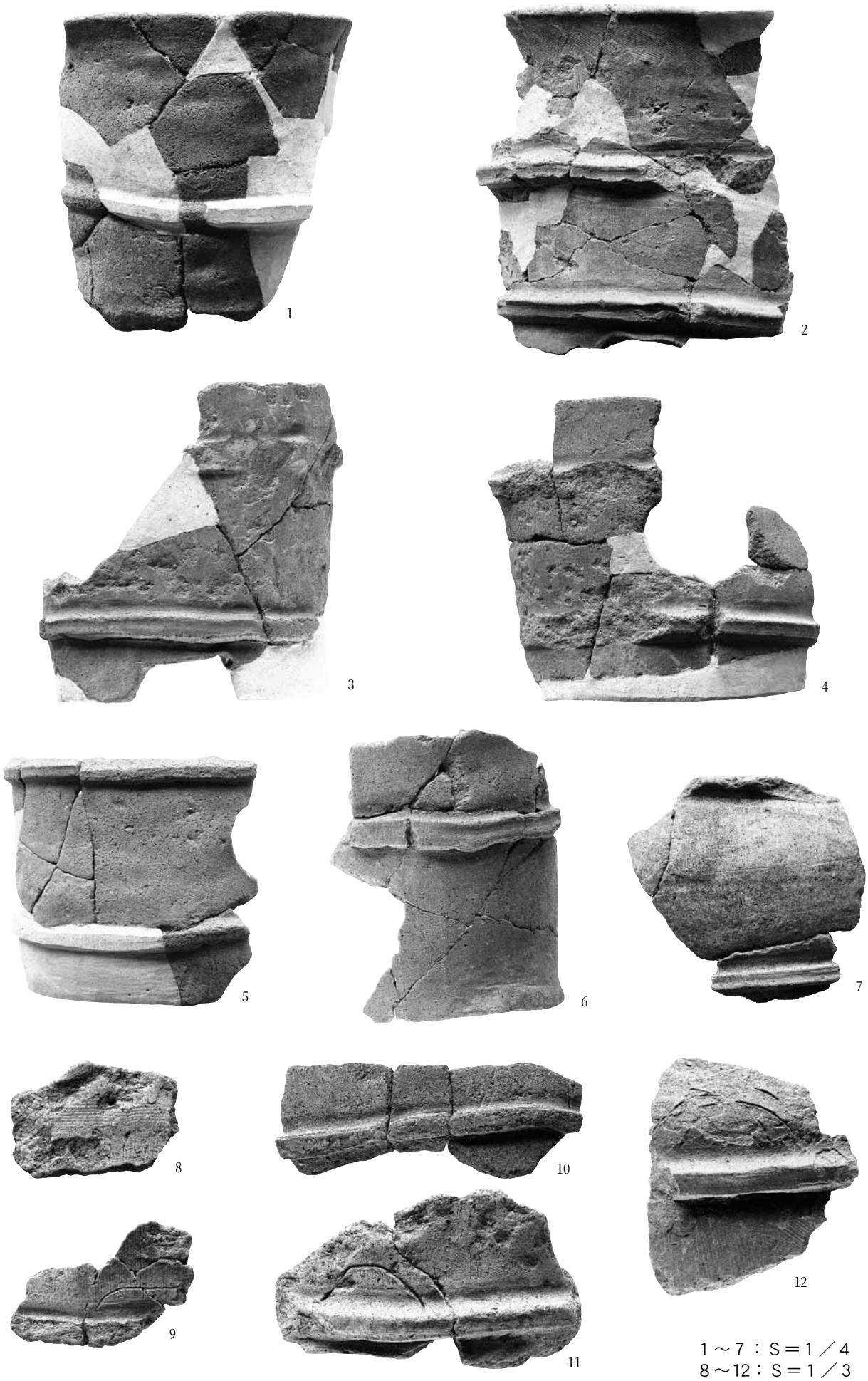
遺跡遠景（南東より）

左：１号墳全景（北西より）
右：１号墳周溝断面（南より）



S＝1／6

写真図版１



1～7：S＝1／4
8～12：S＝1／3

写真図版 2

吹付遺跡（ふっつけいせき）

調　査　要　項

遺 跡 名：吹付遺跡（宮城県遺跡地名表登載番号：49021　遺跡記号：TO）

所 在 地：宮城県栗原郡志波姫町八樟字吹付地内

調査原因：宅地造成（八樟地区住環境整備事業）

調査主体：志波姫町教育委員会

調査担当：宮城県教育庁文化財保護課

調査期間：平成16(2004)年４月５日～７日

対象面積：約1,800m^2

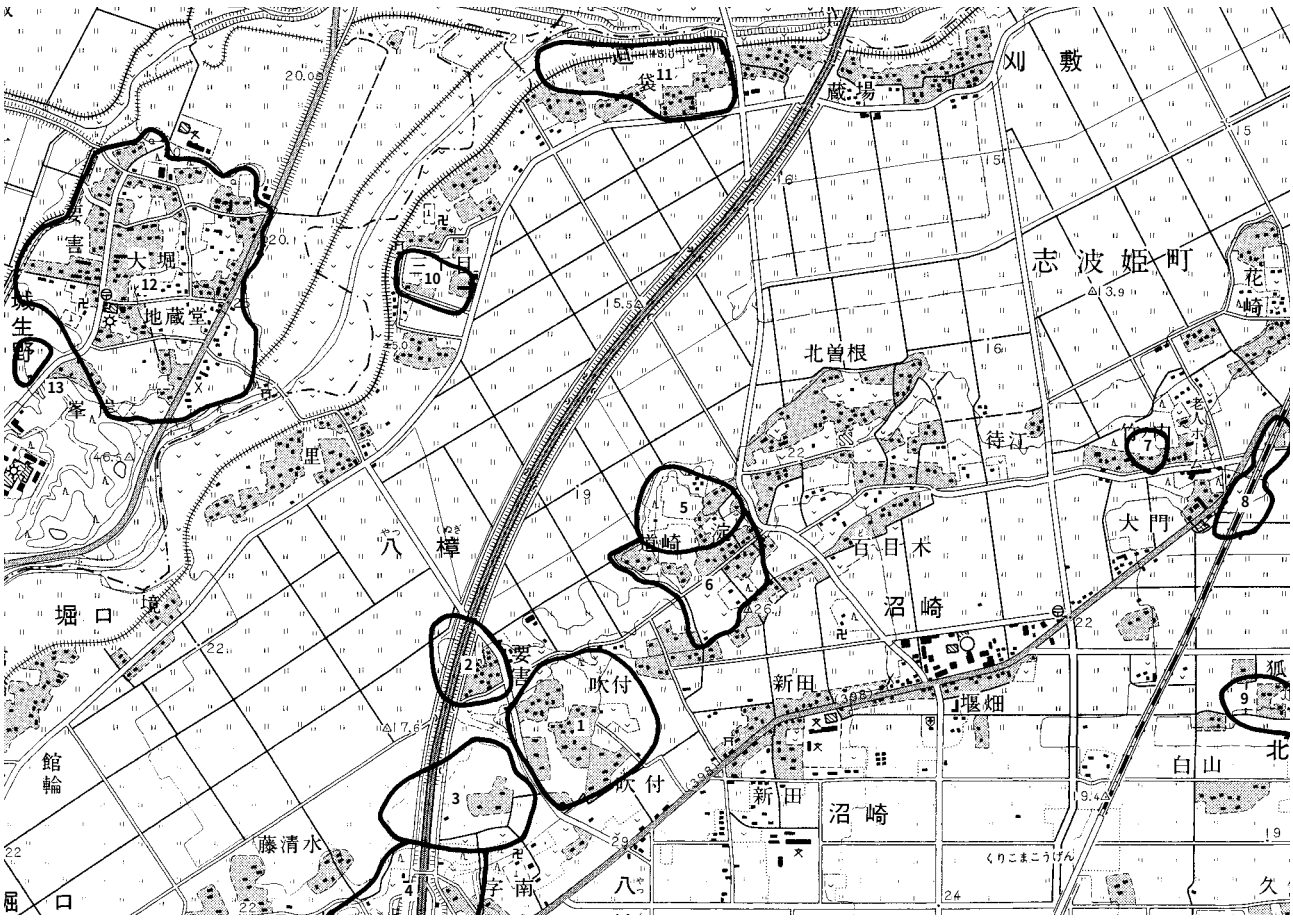
調査面積：事前調査 約830m^2

調 査 員：相原淳一、佐久間光平

1．遺跡の概要

吹付遺跡は栗原郡志波姫町八樟字吹付に所在する。遺跡の周辺には、「伊豆野原」と呼ばれる標高20～30mの緩やかに東に傾斜する段丘地形が発達しており、本遺跡はこの段丘上に立地している。同一段丘面には、御駒堂遺跡、宇南遺跡、鶴の丸遺跡（八樟要害）、淀遺跡、日路館跡がほぼ連続して分布している。一迫川を挟んで、西側の段丘上には古代城柵官衙遺跡の国史跡伊治城跡が立地している。一迫川の周辺には、沖積地が広がり、自然堤防上には刈敷館跡、刈敷袋遺跡が位置している。

吹付遺跡西隣の鶴の丸遺跡（宮城県教育委員会：1981）では、縄文時代晩期～弥生時代前期、古墳時代前期、平安時代、鎌倉～江戸時代の遺構や遺物が発見されている。中世以降の遺構は館跡に関わるものと考えられ、中世においては郡地頭狩野氏一族あるいは葛西氏家臣沼田氏と関係する武士居館、近世においては伊達氏家臣茂庭氏、西大條氏と関連する屋敷地として使用された可能性が指摘されている。同じく吹付遺跡に隣接する宇南遺跡（宮城県教育委員会：1979・1980）では、縄文時代、弥生時代、古墳時代前期、平安時代、鎌倉～江戸時代の遺構や遺物が発見されている。吹付遺跡東隣の淀遺跡（宮城県教育委員会：2001）では、旧石器時代、古墳時代、奈良～平安時代の遺物が発見され、特に竪穴住居跡31軒・掘立柱建物跡8棟が発見され、大規模な古代の集落跡が広がっていることが明らかになった。



1．吹付遺跡　2．鶴の丸遺跡　3．宇南遺跡　4．御駒堂遺跡　5．日路館跡　6．淀遺跡　7．竹ノ内遺跡
8．大門遺跡　9．狐塚遺跡　10．刈敷館跡　11．刈敷袋遺跡　12．国史跡伊治城跡　13．甚内屋敷遺跡

第１図　吹付遺跡の位置と周辺の遺跡（1：25,000）

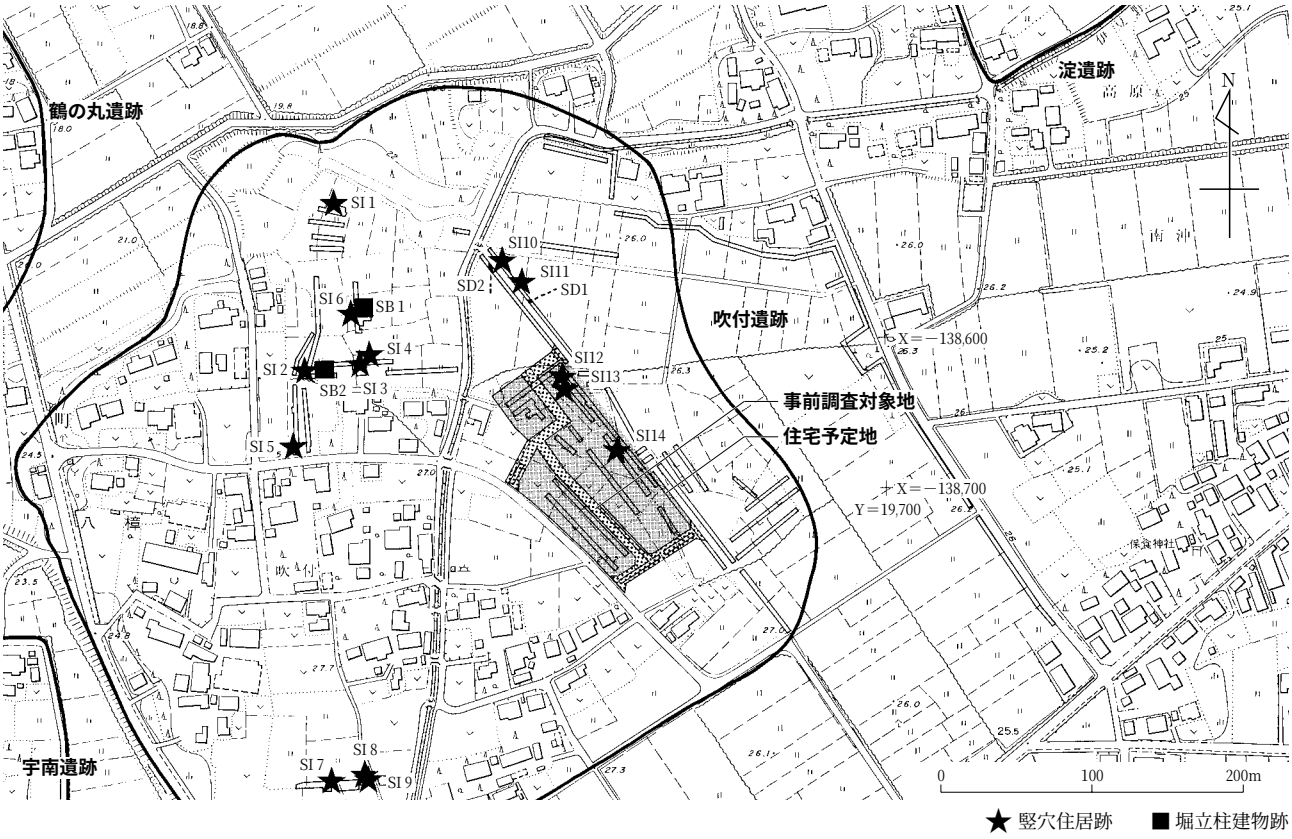
２．調査に至る経緯と調査方法

吹付遺跡は平成５年に文化財パトロールによって発見され、古代の集落跡として登録された。志波姫町による八樟地区住環境整備事業に伴い、平成12年５月・11月に遺構の確認調査を実施している。発見された遺構は、古代の竪穴住居跡11軒、掘立柱建物跡２棟、土壙３基、溝跡、時期不明小ピット多数である。この中で特に、掘立柱建物跡２棟は４×３間、２×２間以上と規模の大きいものであること、灰白色火山灰のはいる大溝跡が２条確認されたことから、対岸の伊治城跡との関連が考えられた。また、この時の調査成果により、遺跡の範囲が大きく拡大され、遺跡保護のために、計画の設計・工法変更が行われた。

平成15年４月には志波姫町による同事業のうち宅地造成（約8,500m²）が行われることとなり、計画区域内の確認調査を実施した。道路予定区域及び宅地予定区域に幅３ｍのトレンチ18本を設けて、遺構の確認調査を行った。その結果、古代の竪穴住居跡3軒、土壙１基、溝跡23条、ピット４個が検出された。この調査成果を受けて再協議を行い、一部設計変更がなされた。

これらを受けて、平成16年４月に事前調査を実施した。道路（幅６ｍ）予定区域のうち、確認調査で古代の遺構が確認された北側区域を対象として調査を行った。調査区は道路建設予定区域に沿って幅６ｍで設定した。最終的な事前調査面積は830m²である。

確認調査では検出遺構は１/500平面図、事前調査では１/200・１/20平面図と１/20断面図を作成し、写真記録は35mmモノクロ・カラーリバーサル及びデジタルカメラを使用した。



第２図　これまでの確認調査と事前調査対象地

３．発見された遺構と遺物

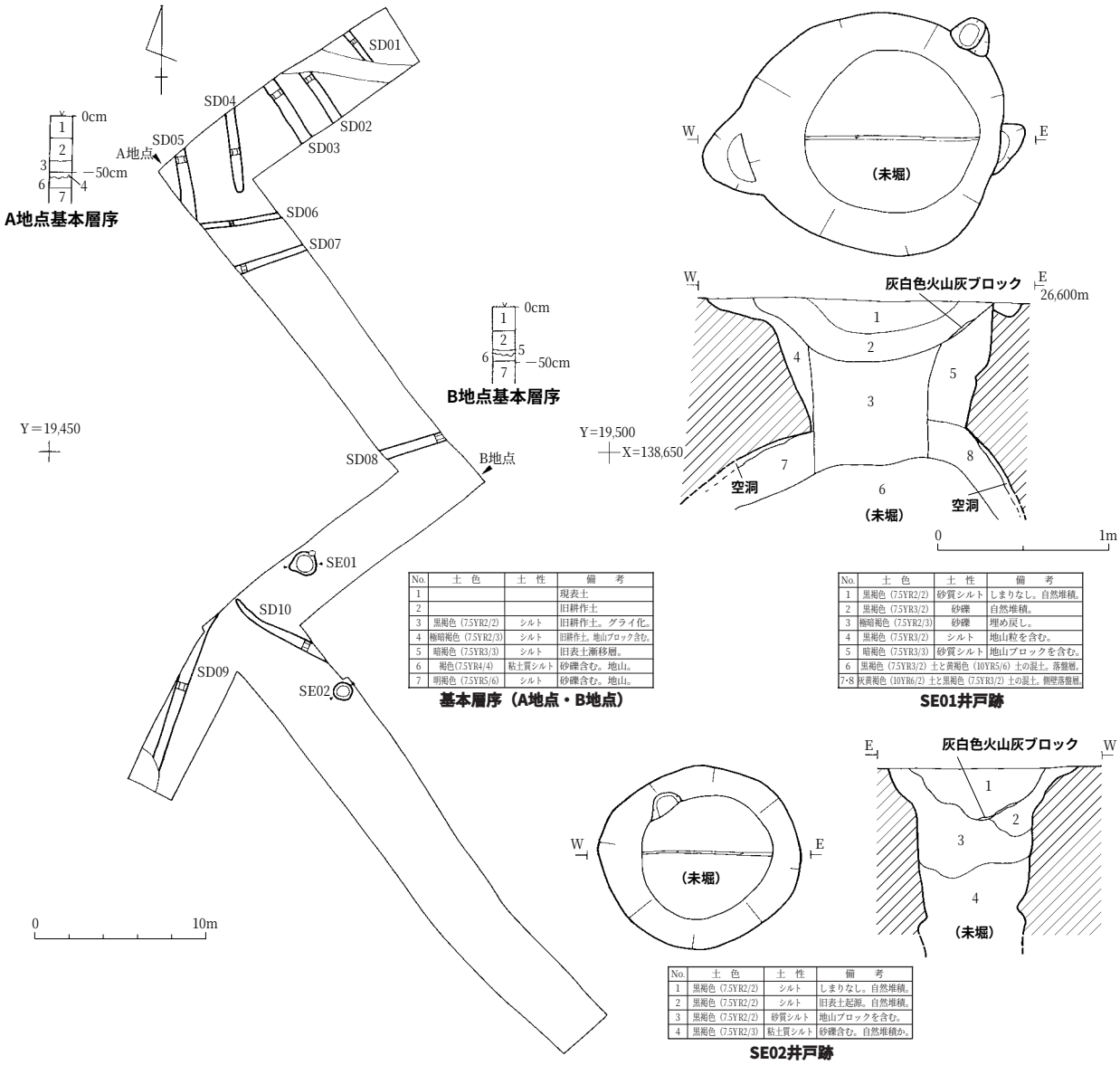
遺跡の現地形は標高約27mの平坦な地形で、旧地形は北～北東側に緩やかに傾斜している。遺構検出は平均30～50cmの表土直下の黄褐色シルト面で行った。事前調査で検出した遺構は、井戸跡２基、溝跡10条である。遺物は土師器、須恵器、ふいごの羽口、中世陶器が整理用平箱0.1箱分出土した。

(1) 井戸跡　２基検出した。

【SE01井戸跡】径2.2m、深さ２m以上である。下部の壁が大きく抉れ、調査中も壁の崩落が続き危険を伴うことから、底面の検出は断念した。出土遺物はない。

【SE02井戸跡】径1.8m、深さ1.6m以上である。SE01井戸跡同様、調査に危険を伴い、底面の検出はできなかった。堆積土中に、中世陶器、須恵器、ふいごの羽口の破片が含まれていた。

(2) 溝跡　10条検出した。規模では、幅40～60cm、深さ15～20cmのもの、幅70～80cm、深さ20～30cmのものがある。堆積土は暗褐色、極暗褐色シルトで、古代の遺構の堆積土とは異なっている。一部は中世に属すると考えられるものの、大半は近世以降の可能性が高い。出土遺物はない。



No.	土　色	土　性	備　　考
1			現表土
2			旧耕作土
3	黒褐色（7.5YR2/2）	シルト	旧耕作土。グライ化。
4	極暗褐色（7.5YR2/3）	シルト	旧耕作土。地山ブロック含む。
5	暗褐色（7.5YR3/3）	シルト	旧表土漸移層。
6	褐色(7.5YR4/4)	粘土質シルト	砂礫含む。地山。
7	明褐色（7.5YR5/6）	シルト	砂礫含む。地山。

No.	土　色	土　性	備　　考
1	黒褐色（7.5YR2/2）	砂質シルト	しまりなし。自然堆積。
2	黒褐色（7.5YR3/2）	砂礫	自然堆積。
3	極暗褐色（7.5YR2/3）	砂礫	埋め戻し。
4	黒褐色（7.5YR3/2）	シルト	地山粒を含む。
5	暗褐色（7.5YR3/3）	砂質シルト	地山ブロックを含む。
6	黒褐色（7.5YR3/2）土と黄褐色（10YR5/6）土の混土。落盤層。		
7･8	灰黄褐色（10YR6/2）土と黒褐色（7.5YR3/2）土の混土。側壁落盤層。		

No.	土　色	土　性	備　　考
1	黒褐色（7.5YR2/2）	シルト	しまりなし。自然堆積。
2	黒褐色（7.5YR2/2）	シルト	旧表土起源。自然堆積。
3	黒褐色（7.5YR2/2）	砂質シルト	地山ブロックを含む。
4	黒褐色（7.5YR2/3）	粘土質シルト	砂礫含む。自然堆積か。

第３図　発見された遺構

４．まとめ

吹付遺跡は古代から中近世に及ぶ複合遺跡である。今回の調査で検出した遺構は井戸跡2基、溝跡10条である。このうち、井戸跡1基からは中世陶器などが出土し、中世に属するものと考えられる。その他の遺構からは出土遺物がなく、明確な時期は不明なものの、遺構の堆積土の特徴から中世～近世以降と考えられる。

中近世の吹付遺跡は、隣接する鶴ノ丸遺跡（館跡）で中世においては武士居館、近世においては伊達氏家臣の屋敷地として使用された可能性がある遺構が確認されており、同じく吹付遺跡に隣接する宇南遺跡とともに、館跡周辺に広がる遺構群の一部として捉えられよう。

引用・参考文献

多賀城跡調査研究所（1978）：『伊治城跡Ⅰ－昭和52年度発掘調査報告－』多賀城跡関連遺跡調査報告書第３冊

宮城県教育委員会（1979）：『宇南遺跡』宮城県文化財調査報告書第59集

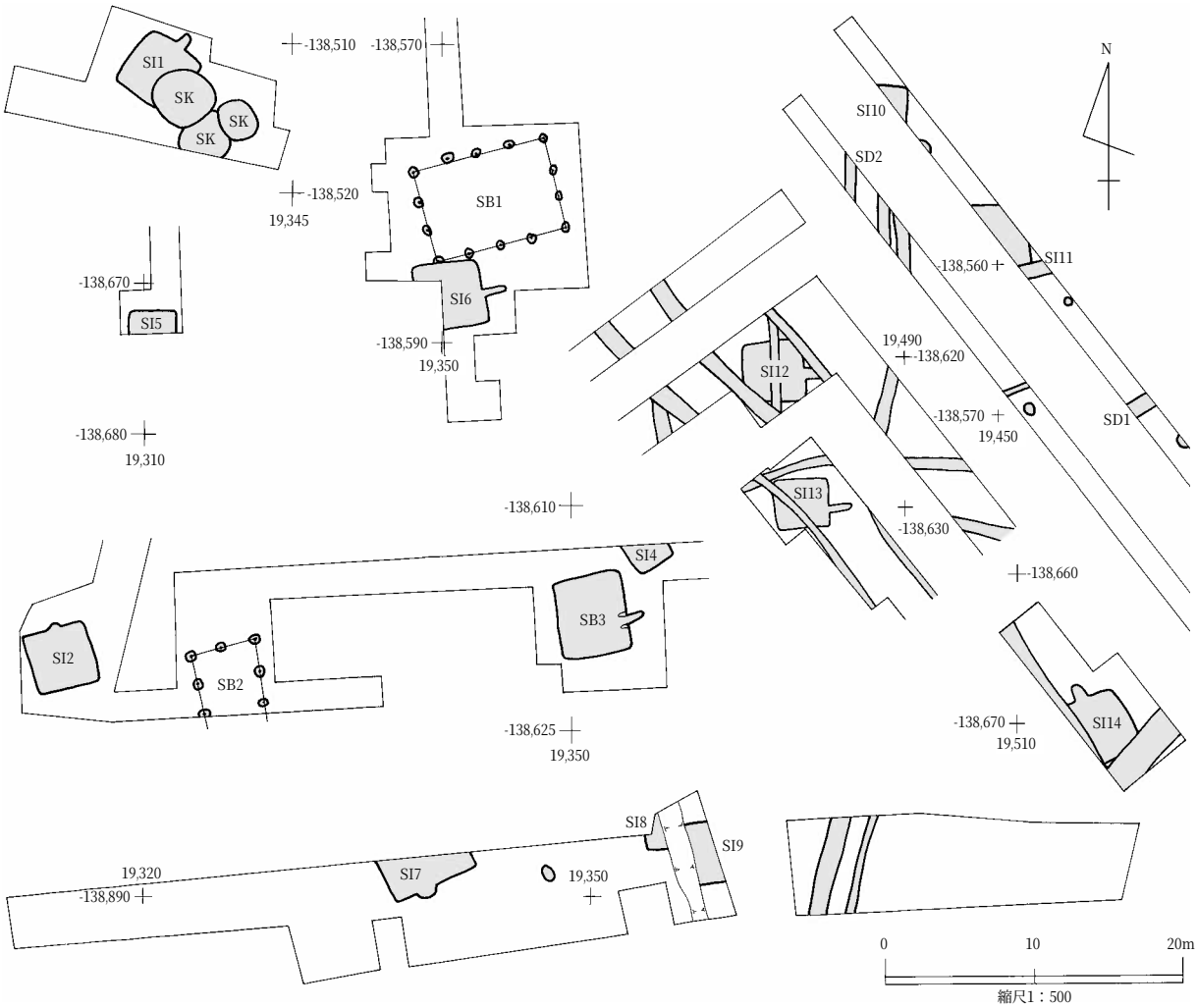
宮城県教育委員会（1980）：「宇南遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅲ』宮城県文化財調査報告書第69集

宮城県教育委員会（1982）：「鶴の丸館跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅴ』宮城県文化財調査報告書第81集

宮城県教育委員会（2001）：「淀遺跡」『名生館遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書第187集

宮城県教育委員会（2002）：「刈敷館跡」『名生館遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書第188集

吉井　宏（2004）：「北緯38度以北の要害（１）」『宮城考古学』第６号　pp.197～216　宮城県考古学会



第４図　これまでの確認調査で検出された主な遺構（第２図と対照）

SI 1 住居跡（南から）

SI 2 住居跡（南から）

SI 3 住居跡（北から）

SI 4 住居跡（南から）

SB 1 建物跡・SI 6 住居跡（南から）

SI 8 住居跡・SI 9 住居跡（南から）

SI 10 住居跡・SI 11 住居跡（南東から）

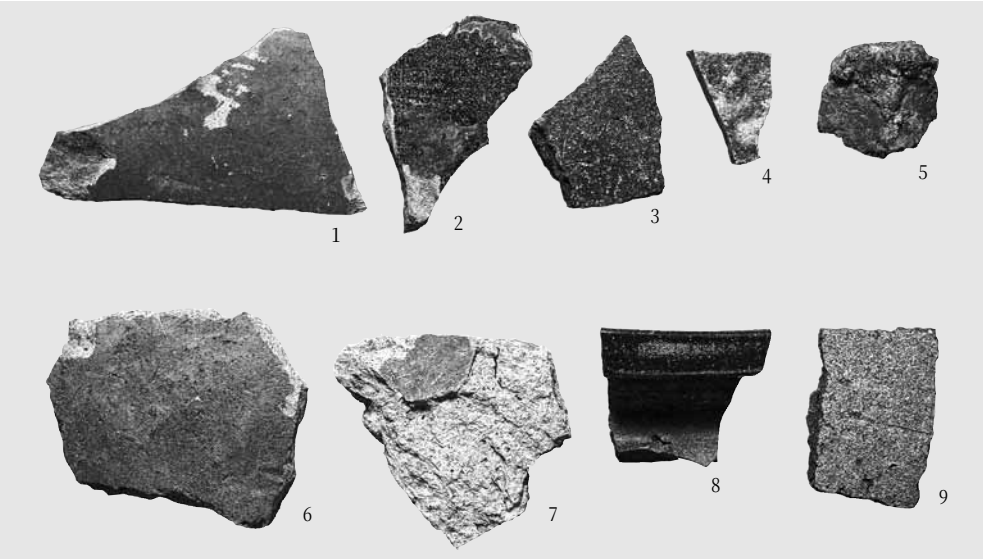
SI 12 住居跡（南から）

SI 13 住居跡（西から）

SI 14 住居跡（東から）

SE01 井戸跡（南から）

SE02 井戸跡（北西から）



SE02 出土遺物
（縮尺１／３）
中世陶器（３・８・９）
ふいごの羽口（５）
須恵器（１・２・４・６・７）

（１～５：１層
６～７：４層
８～９：５層）

大石原遺跡（おおいしはらいせき）

調　査　要　項

遺 跡 名：大石原遺跡（宮城県遺跡登載番号：73023、遺跡記号：ＵＴ）

所 在 地：宮城県牡鹿郡女川町大石原浜地内

調査原因：町道横浦大石原浜線（トンネル）建設工事

調査主体：女川町教育委員会

調査担当：宮城県教育庁文化財保護課

調査期間：平成16(2004)年10月４日～13日

対象面積：約1,000m^2

調査面積：約450m^2

調 査 員：須田良平、田中政幸

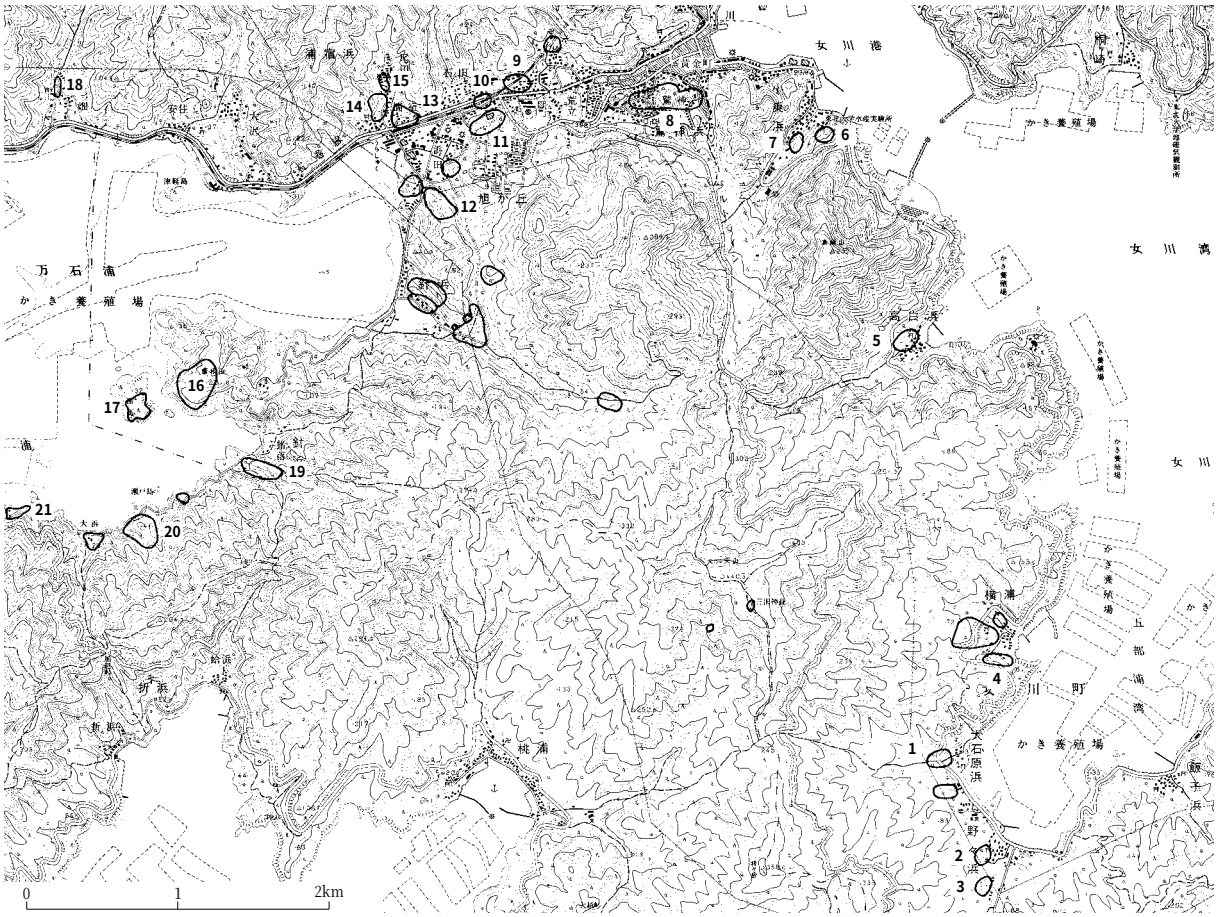
Ⅰ　はじめに

大石原遺跡は女川町役場の南約5.5km、女川町大石原浜字大石原に所在する。女川町は県北東部の牡鹿半島の付け根から半島東部に位置する。牡鹿半島を含む三陸沿岸は、急峻な丘陵と狭い平坦地を持つ入り江が複雑に入り組んでいる。遺跡は五部浦湾に面した大石原浜西側に位置し、急峻な丘陵から大石原浜の方向へ開く沢の末端部の傾斜地に立地する。

周辺には縄文時代から中近世までの遺跡が多く存在する。縄文時代の遺跡を概観すると、女川湾周辺では、近年、発掘が行われた出島貝塚（宮城県教育委員会1989）、浦宿尾田峰貝塚（女川町教育委員会1993）など多くの遺跡が分布している。五部浦湾沿岸では横浦Ｂ遺跡、大石原遺跡、野々浜Ａ遺跡などが点在するが、これらの遺跡については不明な点が多い（第１図）。

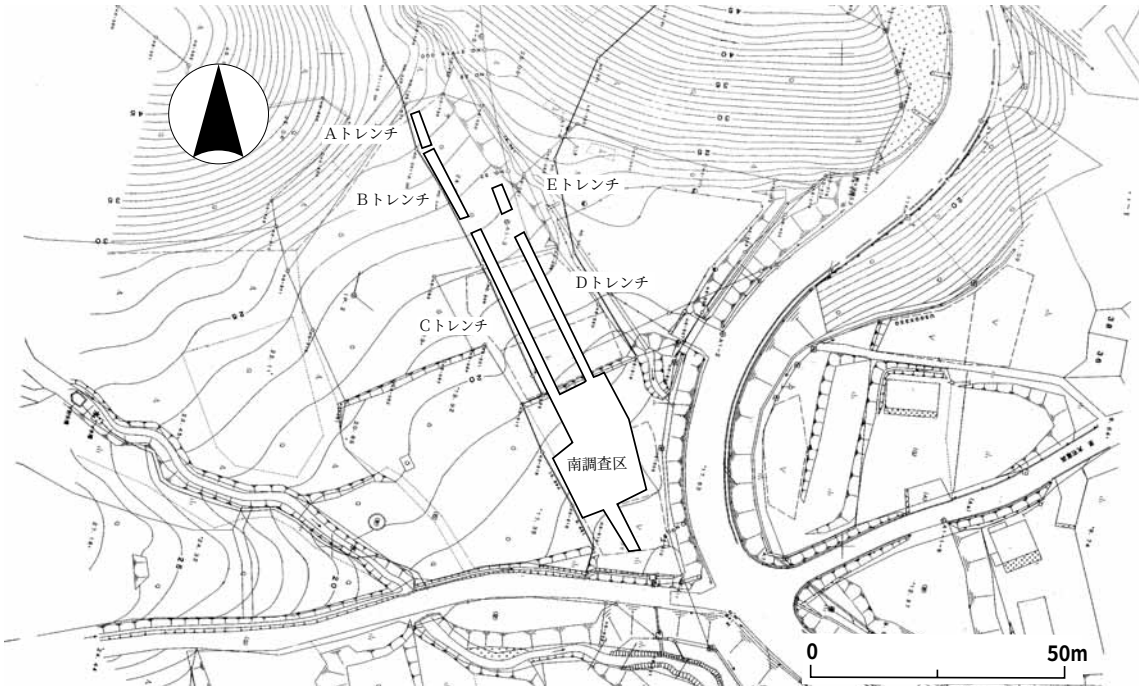
本遺跡ではこれまで縄文時代前期・中期、弥生時代中期、平安時代の土器が採集されており、県道西側の畑地から文様のない縄文土器の破片が一個体分採集されている（女川町誌編さん委員会1991）。

今回の調査は町道横浦大石原浜道路建設事業に伴うものである。計画では、遺跡中央部を通る湾曲した県道の路線に替えて、丘陵を貫通する町道（トンネル）を建設する予定である。女川町と県文化



No.	遺跡名	立地	種別	時　代	No.	遺跡名	立地	種別	時　代	No.	遺跡名	立地	種別	時　代
1	大石原遺跡	丘陵麓	散布地	縄文・弥生・平安	8	内山遺跡	丘陵	散布地	縄文前～晩・古代	15	浦宿Ｃ遺跡	丘陵斜面	散布地	縄文後
2	野々浜遺跡	丘陵麓	散布地	縄文前・中・晩・弥生中	9	門前ガード脇遺跡	丘陵麓	散布地	縄文中	16	唐松山下貝塚	丘陵麓	貝塚	縄文前・晩・弥生・古代
3	野々浜Ｂ遺跡	丘陵斜面	散布地	縄文・弥生	10	門前一小前遺跡	丘陵麓	散布地	縄文	17	黒島貝塚	島嶼	貝塚	縄文晩・弥生・古墳・古代
4	横浦Ｂ遺跡	丘陵麓	散布地	縄文・古代	11	十二神遺跡	丘陵麓	散布地	縄文前	18	志畑遺跡	丘陵麓	散布地	縄文中・古代
5	高白浜遺跡	丘陵斜面	散布地	縄文前・後・古代	12	小浦遺跡	丘陵	散布地	縄文前～後・奈良	19	猪落遺跡	丘陵麓	散布地	旧石器・縄文前・中
6	小乗浜Ａ遺跡	丘陵麓	散布地	縄文	13	浦宿Ｂ遺跡	丘陵斜面	散布地	縄文前～晩・古代	20	屋敷浜貝塚	丘陵麓	貝塚・製塩	縄文前～晩・奈良・平安
7	小乗浜Ｂ遺跡	丘陵麓	散布地	縄文	14	浦宿尾田峰貝塚	丘陵麓	貝塚	縄文後・晩	21	神林遺跡	丘陵麓	散布地	縄文

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡

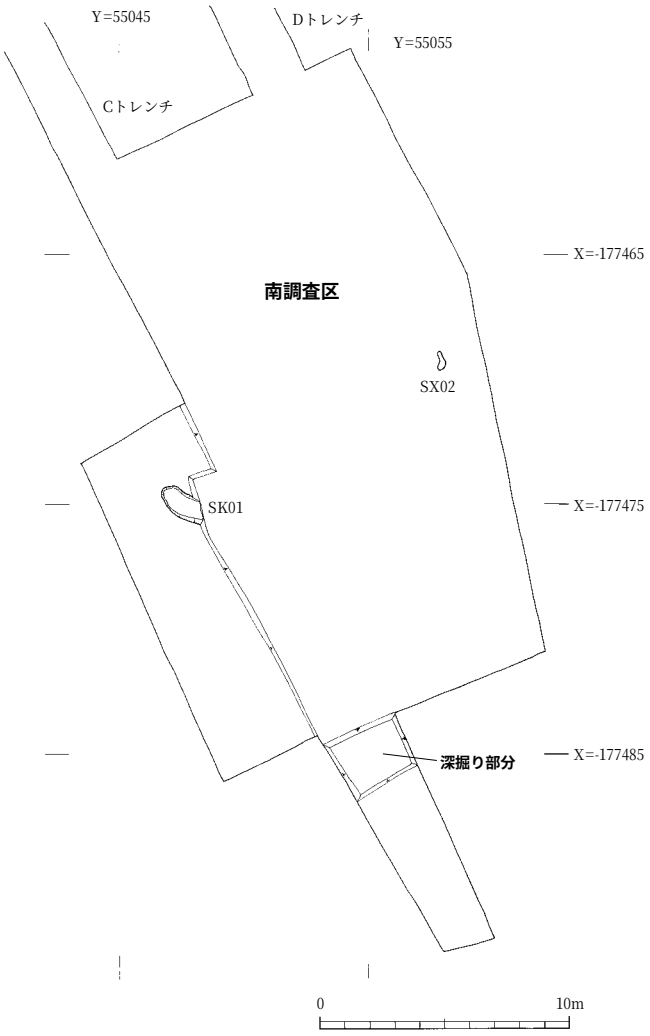


第２図　調査区の位置と周辺の地形

財保護課で協議を重ねた結果、道路の位置は計画上変更できないため、確認調査を行うこととなった。調査はまず、調査区の傾斜に沿ってトレンチを５本（Ａ～Ｅ）設けて遺構の有無を確認した。そして遺構を検出したＣトレンチ南側で周囲を拡張し、南調査区を設定した（第２図）。当初は確認調査のみの予定であったが、遺構の密度が低いため再協議の結果、事前調査に切り替えて調査を行った。

調査対象地は遺跡北西部の畑地として利用されていた南斜面で、標高の高い斜面北側は東西の丘陵に挟まれる沢状を呈し、幅が狭く傾斜もきつい。斜面南側は標高が低くなるとともに平坦面も広がり、傾斜も緩やかになる。調査区の標高は14～27mである。

調査区付近は丘陵から崩落した基盤岩が継続的に流入していたと考えられ、地層は基盤岩が崩落した小角礫に粘土が混入した層（角礫層）を基本とし、角礫層はいくつかの層に分けられた。角礫層の上位では腐食物を混入し、黒色ベルト状となった層が複数認められ、何度かの崩落の休止期（弱い時期）があったことが伺えた。



第３図　南調査区遺構配置図

角礫層の堆積は斜面北側では表土下４m、南調査区でも表土下３m以上認められた。このような状況から、慎重に角礫層を下げながら遺構確認を行った。

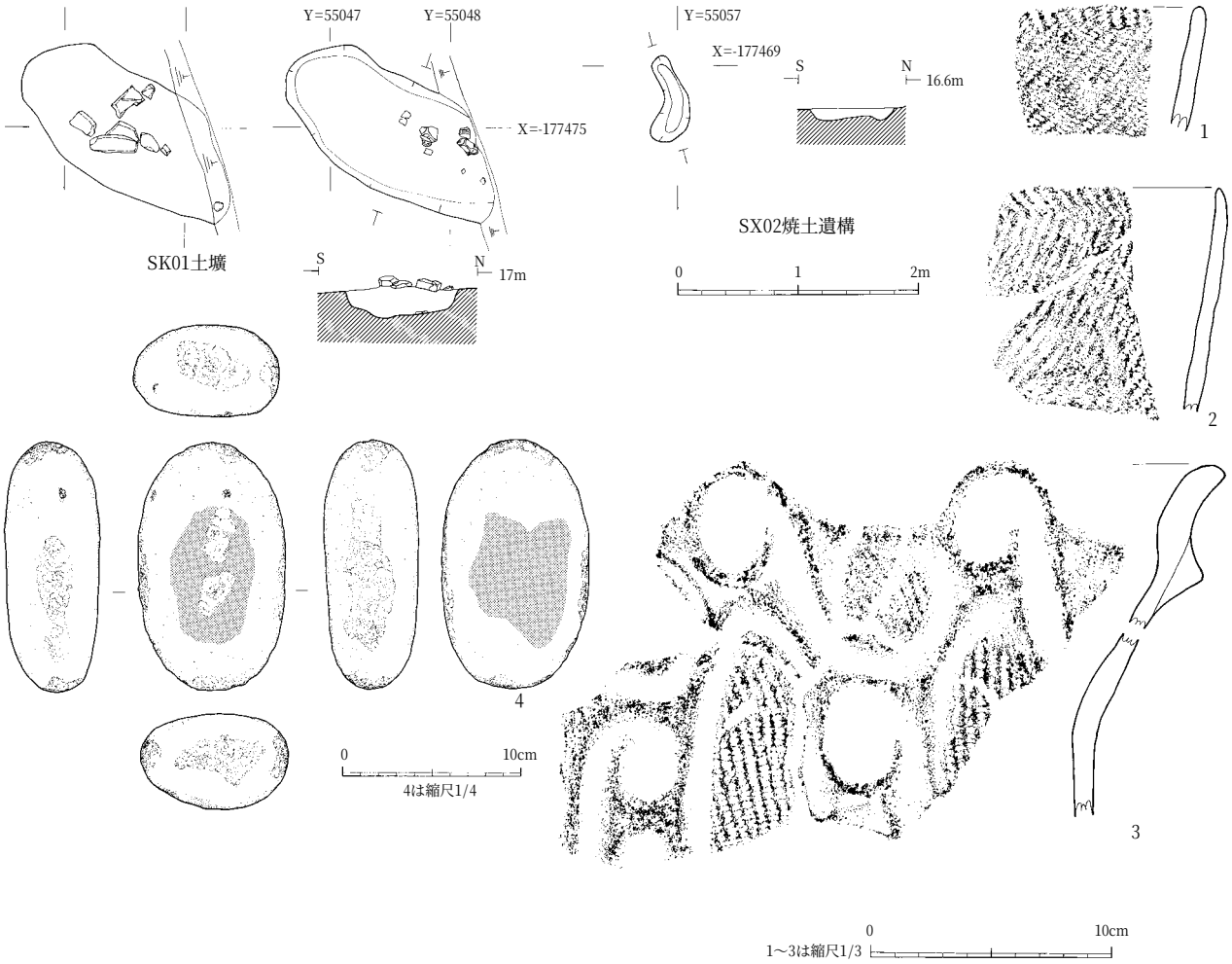
SK01を検出した南調査区西壁中央付近の層序は、Ⅰ層が表土・耕作土（層厚22cm）、Ⅱ層が黒色粘土を含む礫層（層厚18cm）、Ⅲ層が褐色粘土や円礫を含む角礫層（層厚５cm）、Ⅳ層が暗褐色粘土を含む角礫層（層厚18cm）、Ⅴ層が黒褐色粘土を含む角礫層（層厚10cm）、Ⅵ層がにぶい黄褐色粘土を含む角礫層（層厚５cm以上）である。

今回の調査で検出した遺構、調査区の位置などの記録は、工事用測量点３点を基準として調査区の位置を縮尺１／100で平板実測して作成した。主要な遺構に関しては縮尺１／20の平面図、断面図を作成した。記録写真は500万画素のデジタルカメラ、35mmカラースライドフィルムで撮影した。

Ⅱ　発見された遺構と遺物

南調査区のⅣ層上面で土壙１基、Ⅵ層上面で焼土遺構１基を検出した（第３図）。

【SK01土壙】（第４図）



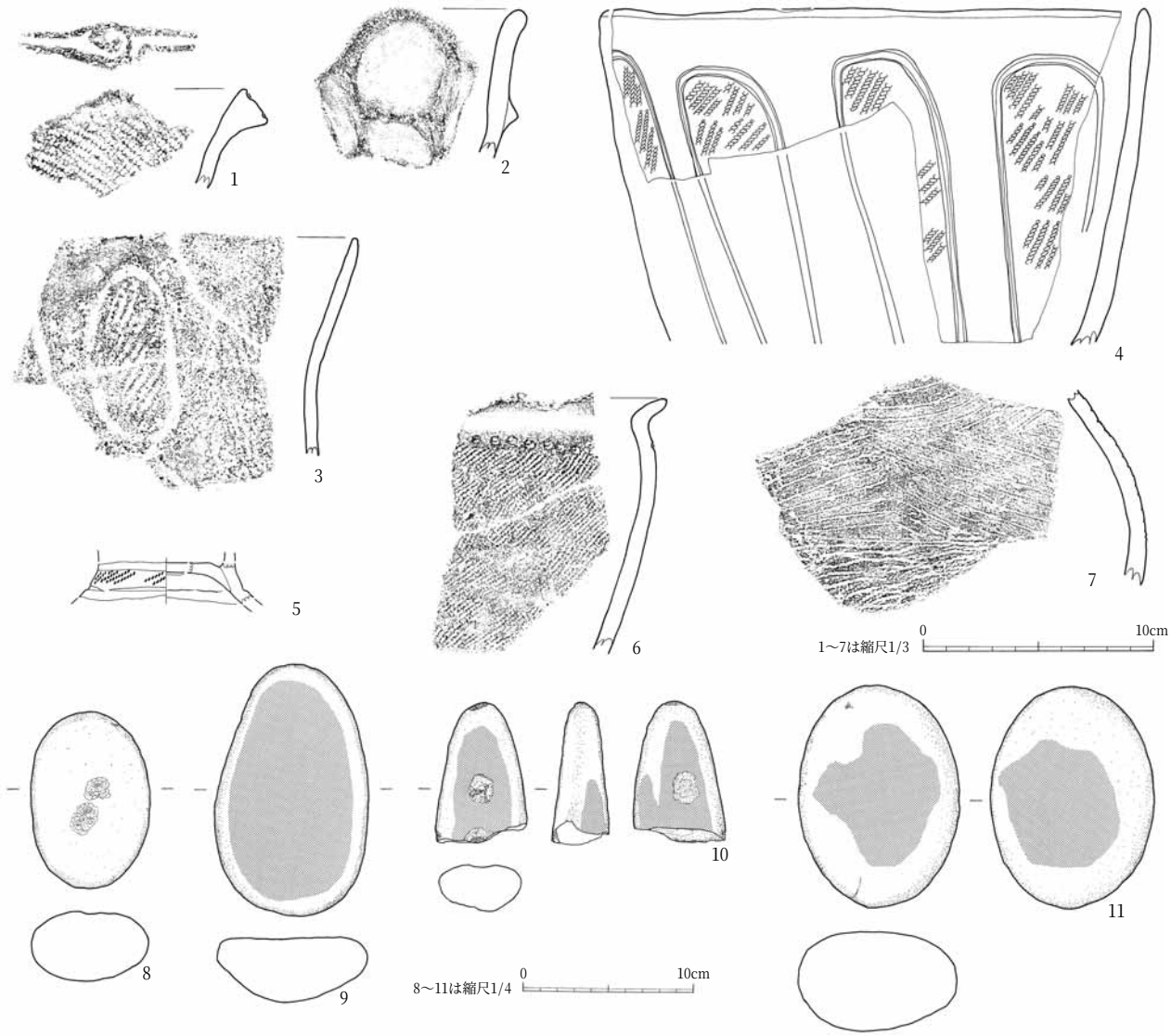
No.	出土層位	種別	器種	特徴	写真図版
1	ＳＫ０１堆積	縄文土器	深鉢	口縁：平縁　口縁端部：RL縄文横回転　口縁～胴部：RL縄文縦回転	２－１
2	ＳＫ０１堆積	縄文土器	深鉢	口縁：平縁　口縁端部：RL縄文横回転　口縁～胴部：RL縄文縦回転	２－２
3	ＳＫ０１堆積	縄文土器	深鉢	口縁：半円状突起あり　横位渦巻文（隆起線文）胴部：縦位渦巻文（隆起線文）　LR縄文縦回転充填	２－３
4	ＳＫ０１堆積	礫石器	磨石+敲石+凹石	砂岩　長軸13.7cm、短軸7.9cm、厚さ5.1cm　重さ860ｇ	２－４

第４図　SK01土壙および出土遺物、SX02焼土遺構

平面形は1.8m×0.9mの不整楕円形で、深さは約30cmである。断面形は逆台形を呈し、底面には僅かに凸凹が認められる。堆積土は黒褐色粘土を含む角礫層である。堆積土上面には長軸８～40cm、短軸６～18cmの角礫が７つあり、一部の角礫が重なる状態で検出され、人為的に置かれた可能性がある。

遺物は、底面から縄文土器（第４図１～３）、堆積土から礫石器（第４図４）が出土した。

３は深鉢形土器の内湾する口縁部破片である。口縁部には半円状突起が付き、隆起線文による横位渦巻文が展開する。胴部には隆起線文による縦位渦巻文が展開し、文様の間には地文が施される。こうした特徴から縄文時代中期の大木９式と考えられる。



No.	出土層位	種別	器種	特徴	写真図版
1	遺構確認	縄文土器	深鉢	口唇部：肥厚　横位渦巻文（隆沈線文）LR縄文縦回転	2－5
2	遺構確認	縄文土器	深鉢	口縁：半円状突起あり　渦巻文（隆起線文）	2－6
3	遺構確認	縄文土器	深鉢	口縁：平縁　胴部：楕円状文（沈線文）→　RL縄文縦回転	2－7
4	遺構確認	縄文土器	深鉢	口径約22.0cm　口縁：平縁　胴部：∩状文（沈線文）→　RL縄文縦回転	2－8
5	遺構確認	弥生土器	蓋	体部：沈線文　LR縄文横回転	2－9
6	遺構確認	弥生土器	甕	口縁下部：列点文（半載竹管による刺突文）胴部：L｛RRR｝縄文（直前段多条）横回転	2－10
7	遺構確認	弥生土器	壺	胴部上部：重菱形文（沈線文）→交互にミガキと赤彩有り　胴部下部：横位にLR＋L・L縄文（付加条）横回転	2－11
8	表面採集	礫石器	凹石	砂岩　長軸13.7cm、短軸7.9cm、厚さ5.1cm　重さ425ｇ	2－13
9	表面採集	礫石器	磨石	砂岩　長軸14.7cm、短軸8.9cm、厚さ3.7cm　重さ660ｇ	2－15
10	遺構確認	礫石器	凹石+磨石+敲石	砂岩　長軸（8.1）cm、短軸5.3cm、厚さ2.7cm　重さ150ｇ　折れ有り	2－12
11	遺構確認	礫石器	磨石	砂岩　長軸12.9cm、短軸9.5cm、厚さ5.7cm　重さ910ｇ	2－14

第５図　その他の出土遺物

【SX02 焼土遺構】（第4図）

平面形は60cm×30cmの不整楕円形で、深さは約10cmである。断面形は皿状を呈する。堆積土は焼土ブロック、炭、角礫である。堆積土から少量の縄文土器が出土した。深鉢形土器の胴部破片で、渦巻文が施されるものが認められる。

【その他の出土遺物】（第５図）

表土及び遺構確認時に、縄文土器（第５図１～４）、弥生土器（第５図５～７）、礫石器（第5図８～11）が出土した。

１～４はすべて深鉢形土器の口縁部破片である。１は口縁部が外反する波状口縁であり、肥厚した口唇部分に隆沈線文による横位渦巻文が展開することから、大木８ｂ式とみられる。２は口縁部に付く半円状突起部分で、隆起線文による渦巻文が施される。３は口縁部が平縁で、胴部に沈線文による「∩」文が施され、内側に地文が認められる。４は口縁部が平縁で、胴部に沈線文による縦位楕円文が施され、内側に地文が認められる。こうした特徴から、２～４は大木９式の土器とみられる。

５は蓋の体部破片で、沈線文が施される。６は甕の口縁部破片で、頸部に半載竹管を用いた列点文が認められる。こうした特徴から、５・６は弥生時代中期の枡形囲式の土器とみられる。７は壺の胴部破片で、沈線文による重菱形文様が施され、沈線間には交互にミガキと赤彩が認められることから弥生時代中期の円田式の土器とみられる。

III　まとめ

縄文時代中期の土壙1基、焼土遺構１基を検出した。また、縄文時代中期の土器を中心に弥生土器、礫石器などが出土したが、その量は多いものではない。

今回の調査区は遺構の密度が希薄で、出土した遺物も少ないことから、遺跡の縁辺部にあたり遺跡の中心部は別の場所にあると考えられた。

〔引用・参考文献〕

伊東信雄（1957）：「古代史」『宮城縣史』１（古代・中世史）宮城県

女川町教育委員会（1993）：『尾田峰貝塚』女川町文化財調査報告書第１集

女川町誌編さん委員会（1991）：『女川町誌続編』

仙台市教育委員会（1996）：『中在家南遺跡他』仙台市文化財調査報告書第213集

宮城県教育委員会（1977）：「上深沢遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅰ』宮城県文化財調査報告書第56集

宮城県教育委員会（1982）：「勝負沢遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅵ』宮城県文化財調査報告書第83集

宮城県教育委員会（1988）：「大梁川遺跡」『七ヶ宿ダム関連遺跡発掘調査報告書Ⅳ』宮城県文化財調査報告書第126集

宮城県教育委員会（1989）：「出島貝塚」『大貫館山館跡ほか』宮城県文化財報告書第137集

山内清男（1979）：『日本先史土器の縄紋』

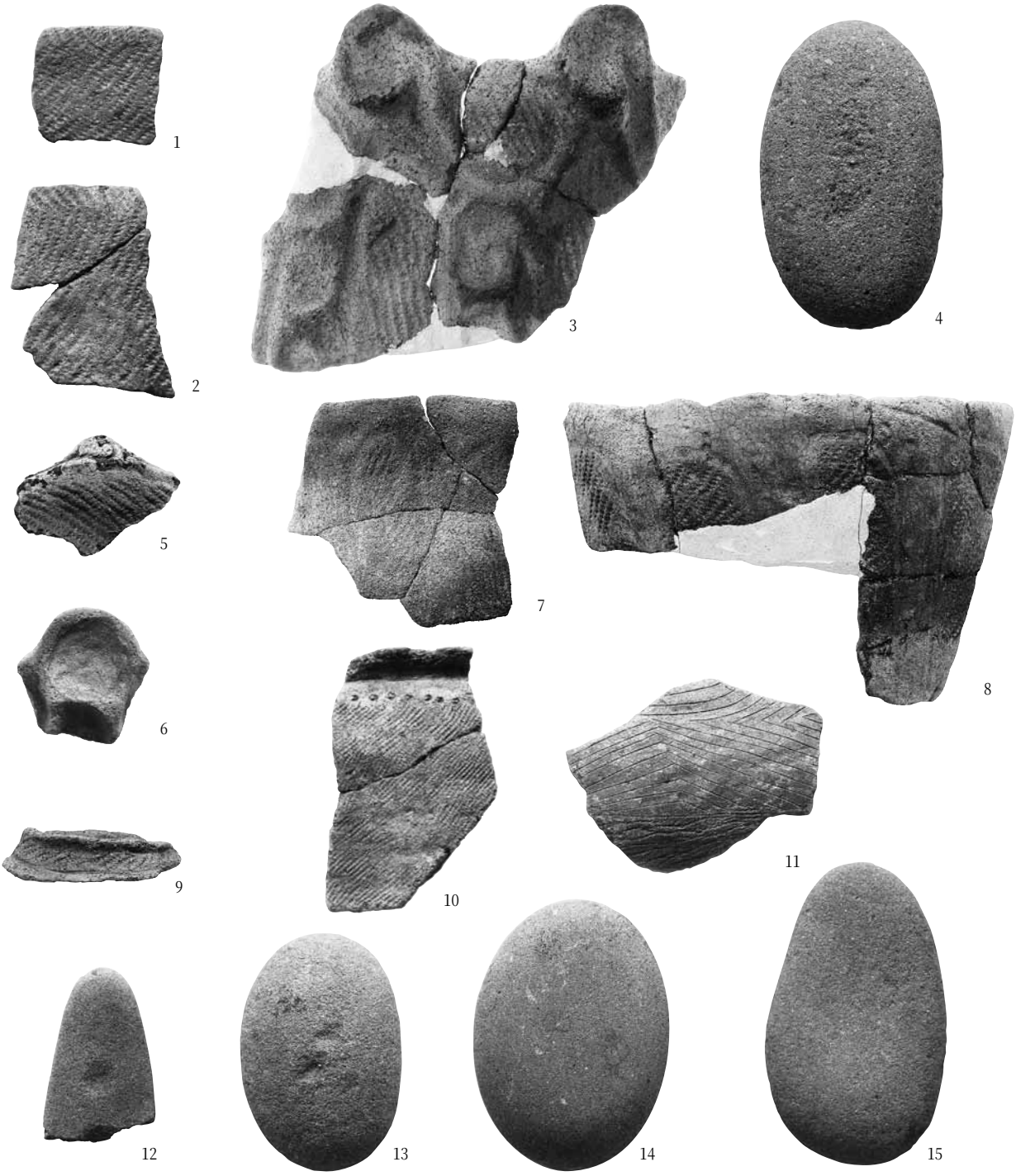
調査区全景（北から）

南調査区全景（北から）

SK01土壙底面土器検出状況
（東から）

SK01土壙上面角礫検出状況（東から）

SX02焼土遺構底面検出状況（南から）



縮尺 1 / 3

上川名貝塚（かみかわなかいづか）

調　査　要　項

遺 跡 名：上川名貝塚（宮城県遺跡地名表登載番号：08015）

所 在 地：宮城県柴田郡柴田町上川名字神廻り戸

調査原因：個人住宅新築

調査主体：宮城県教育委員会

調査担当：宮城県教育庁文化財保護課

調査期間：平成16（2004）年11月24日～26日

調査面積：57m^2

調 査 員：佐藤則之、菊地逸夫、奥山芳明、佐藤憲幸、吉野武、小玉敏（柴田町教育委員会）

１．はじめに

上川名貝塚はJR東北本線槻木駅の北方約２kmに位置し、柴田町上川名字神廻り戸に所在する。貝塚のある柴田町北部から中央部にかけては、奥羽山系に連なる高舘丘陵が派生してきており、これらは幾重にも開析され樹枝状に支谷を形成している。こうした小丘陵が沖積地に舌状に張り出す突端部には上川名貝塚をはじめ金谷貝塚、中居貝塚、深町貝塚、館前貝塚、松崎貝塚などがあり、いわゆる「槻木貝塚群」を形成している。

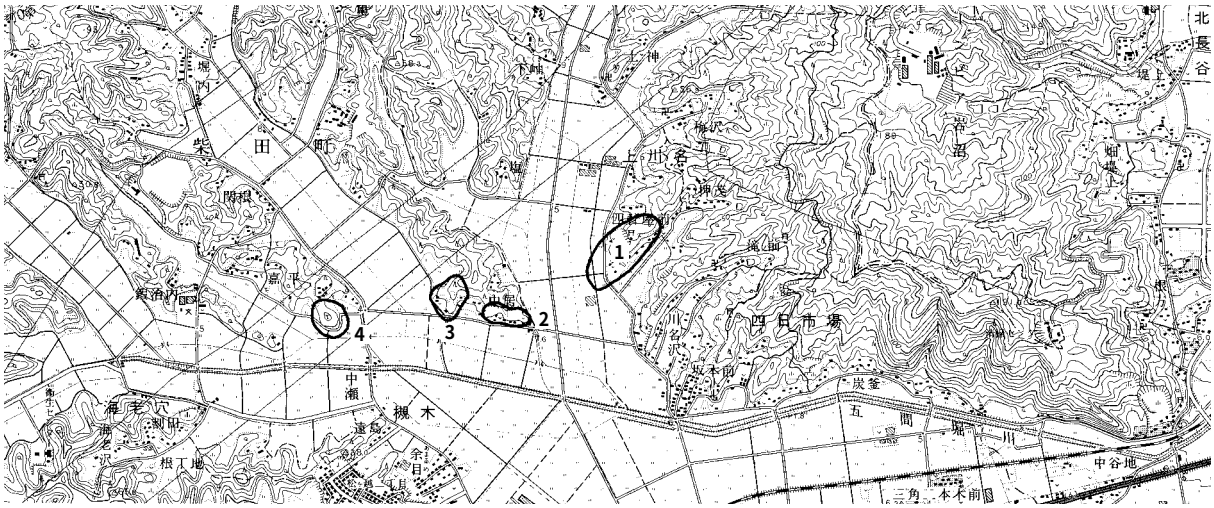
本貝塚は柴田町と岩沼市との境界をなす標高200mほどの丘陵から南西方向に派生する舌状丘陵端部の頂部から斜面にかけて立地している。貝層は丘陵の西側斜面と東側斜面に形成され、さらにこの丘陵に続く一段高い鹿島神社の北西斜面にも分布している。貝層の規模は西側が150m×50m、東側が50m×15m、北側は現在杉林となっており表面観察が困難な部分もあるが10m×10m程度と推定される。貝層は上層がヤマトシジミを、下層がハマグリを主体とし、貝層は西斜面の厚い部分では２m以上にも達するといわれている。

上川名貝塚は古くから「貝殻塚」として知られ、明治27年９月には若林勝邦により『東京人類学会雑誌』の「陸前磐城両地方二三之遺跡」の中で紹介されるなど学史的にも有名である。また、昭和22年には加藤孝氏により発掘調査され、上川名上層式と上川名下層式の土器型式が提唱され、前者は縄文時代前期初頭の標式資料となっている。

２．調査の成果

今回の調査は、遺跡内にある個人住宅の新築に伴う確認調査で、住宅裏側にある丘陵を調査対象とし、貝層及び遺構の有無を確認した。重機により耕作土（約60cm）を除去したところ、調査区の西側は耕作により、東側は住宅建設により削平を受けており、旧地形が残存するのはこれらに挟まれた僅かの部分であった。また、この部分には貝殻の散布が見られたが、ビニールやガラス片が混在しており、純粋な貝層や遺構は検出されなかった。調査面積は57m²である。

なお後日、遺跡南側の水田部分について貝層の延びを確認するため分布調査を行った。その結果、



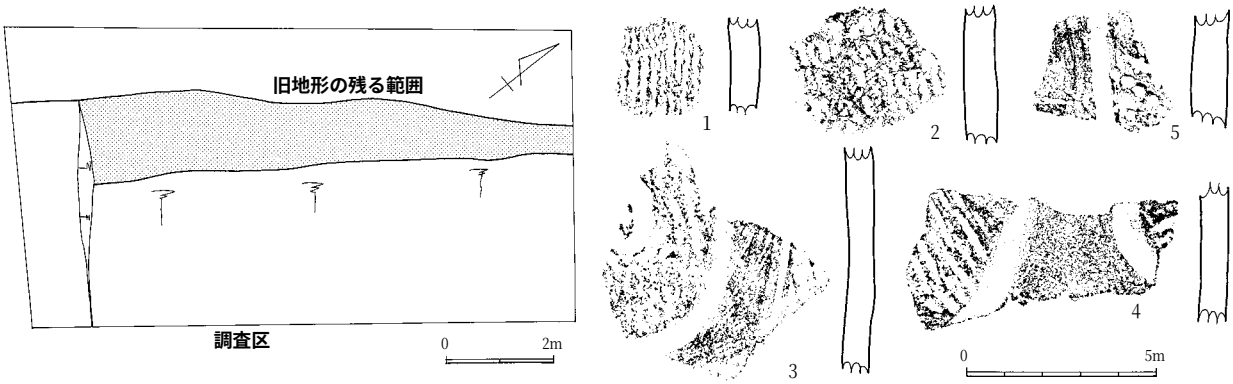
１．上川名貝塚　２．金谷貝塚　３．中居貝塚　４．深町貝塚

第１図　上川名貝塚と周辺の遺跡

貝層の範囲

今回の調査区

第２図　調査区と貝層の分布



第３図　調査区と出土遺物

水田の耕作面で貝殻の散布がみられたほか、用水路や水田側溝の断面では貝層の露出も観察され、西側貝層は当初の考えよりもさらに広がることが確認された。（第２図）

遺物は表土から縄文土器・ヤマトシジミ・ハマグリ等が少量出土している。

①は外面に縦位の細い撚糸文を施したもので、内面はナデ調整のみで条痕文は施されていない。胎土に繊維を含む。②は横位多段の緩いループ文を施したもので、胎土に繊維を含む。いずれも、前期初頭の上川名上層式頃のものと考えられる。③～⑤は沈線により区画した中に縄文を充填して文様を構成している。中期後半大木９式頃のものと考えられる。

《引用・参考文献》

若林勝邦（1895）：『陸前磐城両地方二三之遺跡』「東京人類学会雑誌」
加藤孝（1951）：『宮城県上川名貝塚の研究』　宮城学院研究論文集Ⅰ
柴田町（1983）：『柴田町史　資料編Ⅰ』
東北歴史資料館（1989）：『宮城県の貝塚』　東北歴史資料館資料集25

上川名貝塚全景（東から）

出土遺物

要害遺跡（ようがいいせき）

調　査　要　項

遺 跡 名：要害遺跡（宮城県遺跡地名表登載番号：35067　遺跡記号：YA）

所 在 地：宮城県玉造郡岩出山町上野目字西田

調査原因：砂利採取事業

調査主体：宮城県教育委員会

調査担当：宮城県教育庁文化財保護課

調査期間：平成16(2004)年５月14日、６月４日、７月６日

対象面積：約8,150m²

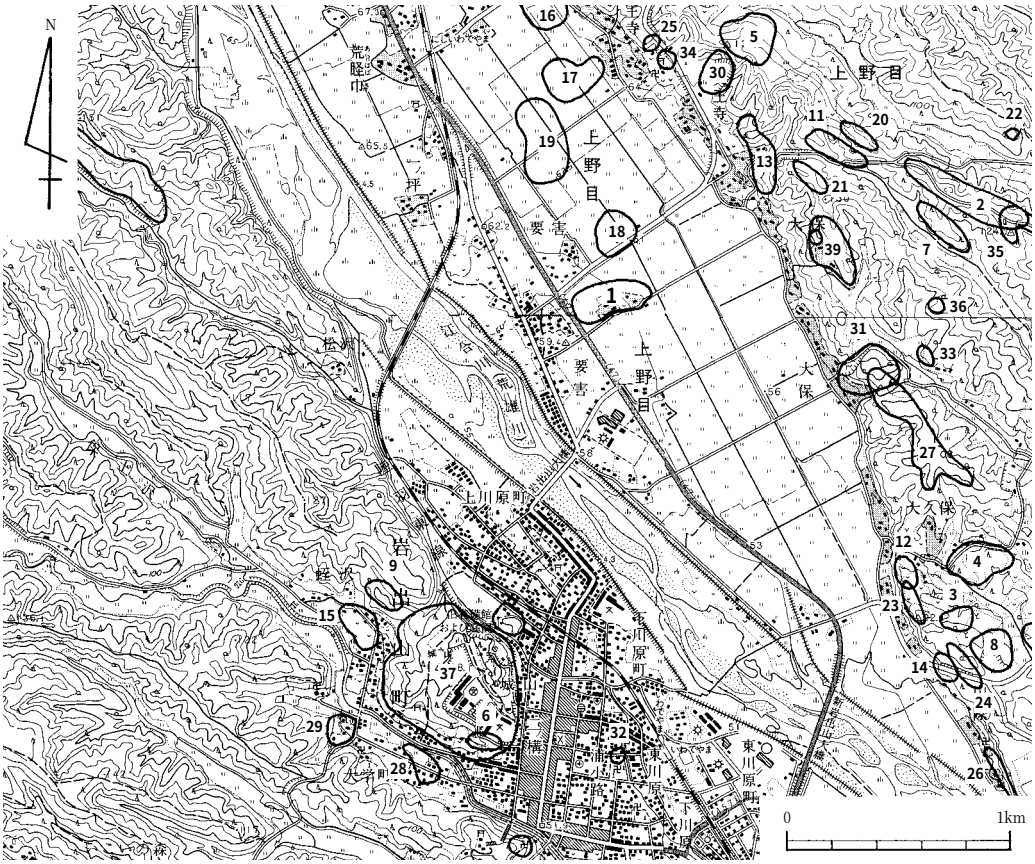
調 査 員：佐藤則之、須田良平、佐藤憲幸

調査協力：菊地淳一、藤原二郎、岩出山町教育委員会

Ⅰ．はじめに

要害遺跡は玉造郡岩出山町上野目字西田に所在し、JR岩出山駅から約２km北の江合川左岸の段丘に立地する（第１図）。一部が住宅や畑、他は水田に利用され、周囲も水田地帯となっている。遺跡は、縄文時代中・晩期と平安時代の遺物散布地として登録されている。周辺には北側の段丘に消防署西遺跡や境野目遺跡、天王寺遺跡、蛇王田遺跡など縄文・弥生時代の遺跡がみられ（佐藤ほか1982、藤原1986）、約３km北の玉造遺跡では縄文・平安時代の住居跡もみつかっている（千葉1980）。また、東側の丘陵には旧石器時代から近世までの遺跡が多く認められ、なかでも本遺跡から2.5km南東の川北横穴墓群は、江合川沿いの丘陵崖に約３kmにわたって造られた大規模な横穴墓群として著名である。

調査の経緯と経過：調査は、遺跡の東側に隣接する砂利採取地で土器が出土しているとの通報を藤原二郎氏とその連絡を受けた岩出山町教育委員会とから受けて行ったものである。現地に赴いたところ、対象地内はすでに礫層まで掘削されていたが、遺跡に最も近い南西隅の壁面に河川跡がかかっているのを確認し、遺物も藤原氏の証言から河川跡で出土したことが知られた（第２図）。そこで河川



No.	遺跡名	種別	時代	No.	遺跡名	種別	時代	No.	遺跡名	種別	時代
1	**要害遺跡**	**散布地**	**縄文中・晩、平安**	14	大坂Ｂ遺跡	散布地	縄文前、古代	27	安養寺古墳群	方墳？・塚	古墳、中・近世
2	三太郎山遺跡	散布地	旧石器	15	蛭沢遺跡	散布地	縄文中	28	大学町遺跡	散布地	古代
3	大久保遺跡	散布地	旧石器、縄文早、古代	16	蛇王田遺跡	散布地	縄文中・晩、弥生	29	満願寺跡	寺院	平安～近世
4	大山庵遺跡	散布地	旧石器、縄文早・前・晩、弥生、古代	17	天王寺遺跡	散布地	縄文後・晩	30	陣館跡	城館	中世
5	西天王山遺跡	散布地	旧石器、縄文早・晩、弥生、古代	18	消防署西遺跡	散布地	縄文後、古代	31	勝館跡	城館	中世
6	城山Ａ遺跡	散布地	旧石器、縄文中～晩	19	境野目遺跡	散布地	弥生、古代、近世	32	来迎寺板碑	板碑	鎌倉
7	土橋Ａ遺跡	散布地	縄文早・前	20	縄換古墳群	円墳	古墳	33	安養寺跡	寺院	鎌倉
8	大坂遺跡	散布地	縄文早・前	21	沢口古墳群	円墳	古墳	34	天王寺板碑群	板碑	鎌倉、南北朝
9	大学町北遺跡	集落	縄文早・中	22	九十九沢古墳	円墳	古墳	35	山谷塚群	塚	中・近世
10	松沢遺跡	散布地	縄文早・晩、古代	23	大平古墳群	円墳	古墳	36	土橋塚群	塚	中・近世
11	縄換遺跡	散布地	縄文早、弥生	24	大坂古墳群	方墳？・円墳	古墳（中・近世の塚群の可能性あり）	37	岩出山城跡	城館・散布地	縄文中、中・近世
12	大平西遺跡	散布地	縄文早、弥生、古代	25	天王寺横穴墓群	横穴墓	古墳	38	旧有備館と庭園	学問所・庭園	近世
13	下鎌遺跡	散布地	縄文早、弥生、奈良、平安	26	川北横穴墓群	横穴墓	古墳後	39	上野目焼窯跡	窯跡	近世

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡

跡の断面と遺物の出土層位を検討のうえ、断面については１／20の図面作成とデジタルカメラ撮影による記録保存をした。また、事業地が南に広がる計画であるため、対象地をあらためて調査をしたところ、河川跡が南西から南東にのびることを確認した（第2図確認トレンチＡ・Ｂ）。事業者を含めて協議した結果、河川跡部分は事業範囲から除外することになった。

Ⅱ．河川跡と出土遺物

河川跡は、遺跡の東縁に沿って北西から南東に流れている。当初事業地西壁の河川跡北端から確認

No.	土色	土　性	備　　考		No.	土色	土　性	備　　考	
1	灰黄	シルト		河川Ｂ	9	暗灰黄	砂・粘土	砂と粘土のラミナ状堆積	河川Ａ
2	灰褐	シルト質粘土			10	灰黄	シルト質粘土	砂と粘土のラミナ状堆積。部分的に砂ブロックを含む	
3	黒褐	砂質シルト	腐食植物と砂ブロックを含む		11	暗褐	シルト質粘土	砂と粘土のラミナ状堆積。炭・黒色粘土を含む	
4	灰黄	シルト質粘土	部分的に砂・灰白色火山灰ブロックを含む		12	灰黄	シルト質粘土	砂と粘土のラミナ状堆積。砂・腐食植物を含む	
5	灰白	火山灰	火山灰ブロック主体の層。4・7層の土が混ざる		13	青灰	砂・粘土	砂と粘土のラミナ状堆積	
6	灰黄	シルト質粘土	部分的に砂ブロックを含む		14	灰褐	スクモ		
7	黒褐	シルト質粘土	部分的に砂ブロックを含む		15	灰黄	シルト質粘土		
8	灰黄	砂・粘土	砂と粘土のラミナ状堆積。一部に炭層を挟む		16	明黄褐	砂礫		

第２図　調査区の位置と河川跡断面図

トレンチＢ南壁の河川跡東端までの長さは約100mである。断面検討の結果、大きくＡ→Ｂの変遷が認められた。深さはともに2mほどである。堆積土はすべて水成堆積で、河川Ａが大別で下位から砂礫層、スクモ層、砂・粘土の互層となっており、９層と11層上面では部分的にブロック状の灰白色火山灰が認められた。河川Ｂは河川Ａを浸食して流れており、下位から互層状の砂・粘土、ブロック主体の灰白色火山灰、砂・灰白色火山灰ブロックや腐食土を含む粘土が堆積している。

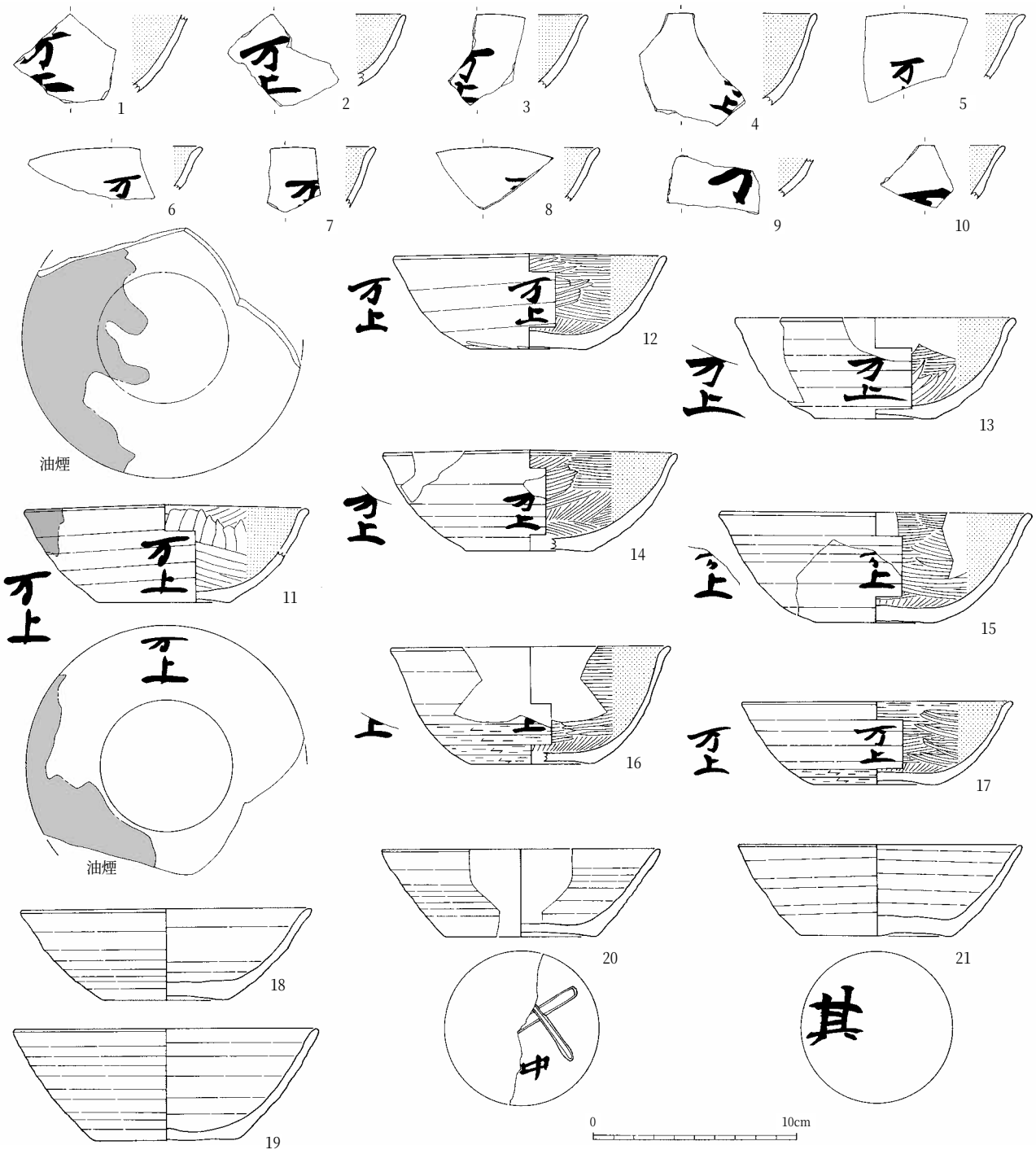
遺物は、大半が藤原二郎氏が採集・保管していたもので、他に菊地淳一氏が採集したものが少しある。ロクロ調整の土師器坏・高台坏・高台皿・鉢・甕、須恵器坏・甕のほか、赤焼土器坏、縄文土器、石器があり、大部分は土師器坏である（第３・４図）。土師器坏・鉢、須恵器坏には「万上」、「上」など墨書された土器も多くみられる。藤原氏によると、遺物は当初事業地の河川跡南壁と、西壁の北側で多く採集されたそうである。出土層位は断定しがたいが、断面検討の際に９層で土師器甕、11層で須恵器坏など６層以下に遺物が含まれ、５層以上では確認されなかったことから、上記の遺物は６層以下に伴う可能性が高いと考えられる。

遺物の年代：器形のわかる土師器坏は、口径に対する底径の比が小さく（0.37～0.46）、体部が内湾気味に立ち上がるもので、口縁部は軽く外反、またはそのまま外傾する。底部の切離し技法が判るものはすべて回転糸切りで、底部や体部下端に回転・手持ヘラケズリ、ヘラミガキなどの再調整が施されるものと、無調整のものが同じ程度ある。両者には同様な墨書が記されており、同時期のものの可能性が高い。こうした土師器坏は加美町壇の越遺跡（斎藤2003）や色麻町色麻古墳群（古川1984）、築館町佐内屋敷遺跡（森1983）など、県北部の遺跡では9世紀後半頃の遺構から出土しており、概ねその頃のものと思われる。一方、須恵器坏で器形のわかるものには口径に対する底径の比が小さいもの（0.42～0.46）と、やや大きいもの（0.52～0.55）がある。前者は体部が内湾気味に立ち上がる器形で、口縁部はそのまま外傾または軽く外反する。後者は体部が直線的に立ち上がり、そのまま口縁部にいたる器形である。底部はともに回転糸切り無調整が主体で、ほかにヘラ切り後にナデ調整するものがある。年代については、前者は土師器坏と同じく９世紀後半頃のものとみられている。後者は加美町壇の越遺跡（高橋1999）や色麻町上新田遺跡（小井川1981）で９世紀前半頃の遺構から出土しており、その頃のものと考えられる。その他、赤焼土器坏は10世紀前葉頃から増加すると考えられている。以上のことから、河川跡に含まれた古代の遺物は９世紀～10世紀初め頃のものと考えられる。

河川跡の年代：Ａ→Ｂの変遷があり、類似した水成堆積土で埋没している。Ａでは灰白色火山灰が上層の９・11層上面に認められることから、火山灰が降下した10世紀前葉頃にはかなり埋まっており、降下後には完全に埋没したと考えられる。上限は遺物の年代から９世紀前半頃までは遡り得る。一方、ＢはＡを浸食して流れており、Ａと似た堆積土で埋没している。したがって、Ａとはそれほど時間差をおかない10世紀頃に流れていたと考えられる。以上のことから、河川跡の年代は９～10世紀頃の平安時代とみられる。

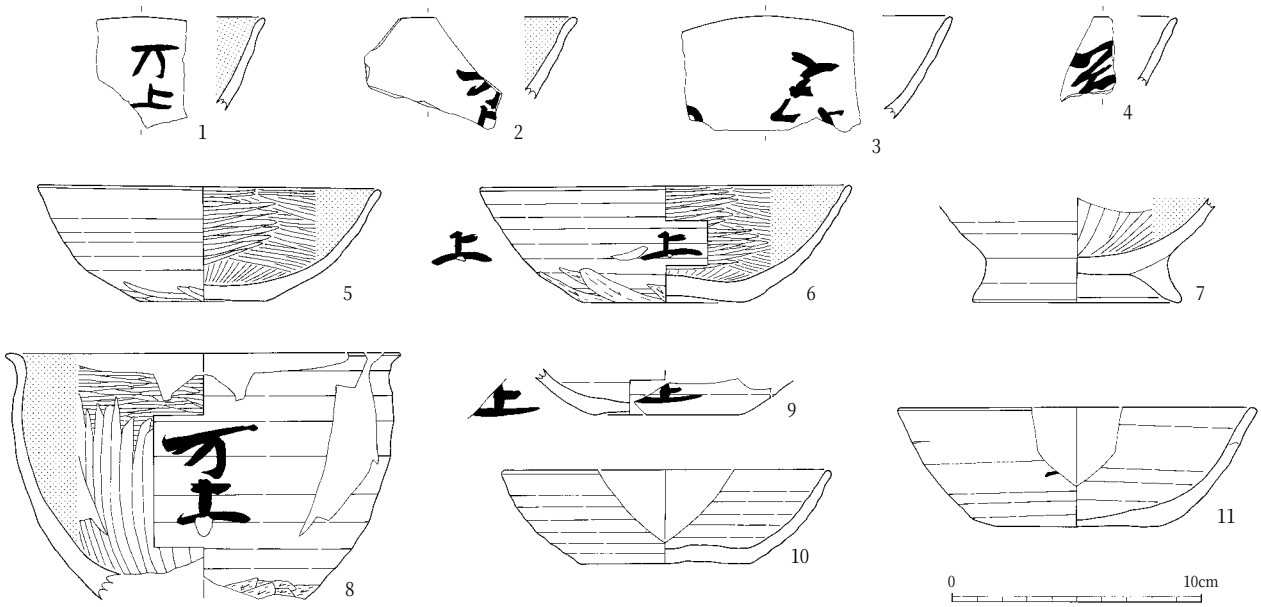
III. 墨書土器について

概要：37点ある（表１）。県北部で墨書土器がこれだけ一度に見つかったのは初めてである。土師



No.	種別	口径	底径	器高	特徴	写真	登録
1	土師器　坏	―	―	―	外：ロクロナデ　内黒　体部に正位で墨書「万上」	1―1	R10
2	土師器　坏	―	―	―	外：ロクロナデ→回転ヘラケズリ　内黒　体部に正位で墨書「万上」	1―2	R11
3	土師器　坏	―	―	―	外：ロクロナデ　内黒　体部に正位で墨書「万上」	1―3	R12
4	土師器　坏	―	―	―	外：ロクロナデ　内黒　体部に正位で墨書「□万カ上」	1―4	R13
5	土師器　坏	―	―	―	外：ロクロナデ→回転ヘラケズリ　内黒　体部に正位で墨書「万□」	1―5	R14
6	土師器　坏	―	―	―	外：ロクロナデ　内黒　体部に正位で墨書「万」	1―6	R15
7	土師器　坏	―	―	―	外：ロクロナデ　内黒　体部に正位で墨書「万」	1―7	R16
8	土師器　坏	―	―	―	外：ロクロナデ　内黒　体部に正位で墨書「□万カ」	1―8	R17
9	土師器　坏	―	―	―	外：ロクロナデ→回転ヘラケズリ　内黒　体部に正位で墨書「□万カ」	1―9	R18
10	土師器　坏	―	―	―	外：ロクロナデ　内黒　体部に正位で墨書「□万カ」	1―10	R26
11	土師器　坏	13.8	6.4	4.8	外：ロクロナデ　底：回転糸切り　内黒　体部に正位で墨書「万上」　内外面に油煙付着	2―1	R2
12	土師器　坏	(13.4)	(5.7)	4.7	外：ロクロナデ→ヘラミガキ　底：回転糸切り→ヘラミガキ　内黒　体部に正位で墨書「万上」	2―4	R1
13	土師器　坏	(13.8)	(6.0)	5.0	外：ロクロナデ　底：回転糸切り→ヘラミガキ　内黒　体部に正位で墨書「万上」	2―5	R3
14	土師器　坏	(14.6)	(6.2)	5.0	外：ロクロナデ　底：回転糸切り　内黒　体部に正位で墨書「万上」	2―6	R6
15	土師器　坏	(15.4)	(5.8)	5.5	外：ロクロナデ　底：回転糸切り　内黒　体部に正位で墨書「万上」	2―7	R7
16	土師器　坏	(13.8)	(6.0)	5.8	外：ロクロナデ→回転ヘラケズリ　底：不明→回転ヘラケズリ　内黒　体部に正位で墨書「上」	2―8	R8
17	土師器　坏	(13.4)	(6.0)	4.1	外：ロクロナデ→回転ヘラケズリ　底：不明→回転ヘラケズリ　内黒　体部に正位で墨書「万上」	2―9	R9
18	須恵器　坏	(14.4)	(6.0)	4.5	内外：ロクロナデ　底：回転糸切り		R33
19	須恵器　坏	(15.0)	(7.0)	5.5	内外：ロクロナデ　底：回転糸切り	2―3	R32
20	須恵器　坏	(13.8)	(7.6)	4.3	内外：ロクロナデ　底：回転糸切り　底部に墨書「中」と刻書「□十カ」（焼成前）	2―11	R31
21	須恵器　坏	13.9	7.4	4.5	内外：ロクロナデ　底：ヘラ切り→ナデ　底部に墨書「其」	2―10	R30

第３図　河川跡出土遺物（南壁周辺）



No.	種別	口径	底径	器高	特徴	写真	登録
1	土師器　坏	―	―	―	外：ロクロナデ　内黒　体部に正位で墨書「万上」		R36
2	土師器　坏	―	―	―	外：ロクロナデ　内黒　体部に正位で墨書「万上」		R37
3	須恵器　坏	―	―	―	内外：ロクロナデ　体部に倒位で墨書「□・□」	1―12	R44
4	須恵器　坏	―	―	―	内外：ロクロナデ　体部に倒位で墨書「□」	1―13	R45
5	土師器　坏	13.8	5.1	4.7	外：ロクロナデ→ヘラミガキ　底：回転糸切り　内黒	2―13	藤原氏所蔵
6	土師器　坏	(15.0)	(6.4)	4.7	外：ロクロナデ→手持ヘラケズリ　底：回転糸切り　内黒　体部に正位で墨書「上」	2―12	R34
7	土師器　高台坏	―	(8.4)	―	外：ロクロナデ　底：回転糸切り→（高台貼付）→ロクロナデ　内黒	2―14	R39
8	土師器　鉢	(15.9)	―	―	外：ロクロナデ→手持ヘラケズリ　内黒　体部に正位で墨書「万上」	2―2	R40
9	須恵器　坏	―	(6.0)	―	内外：ロクロナデ　底：回転糸切り　体部に正位で墨書「上」	1―11	R43
10	須恵器　坏	(13.2)	(6.8)	3.8	内外：ロクロナデ　底：ヘラ切り→ナデ		R42
11	須恵器　坏	(14.4)	(6.5)	4.8	内外：ロクロナデ　底：回転糸切り　体部に墨書「□」	2―15	R41

第４図　河川跡出土遺物（西壁周辺）

器坏に書いたものが30点、土師器鉢が１点、須恵器坏が６点あり、ほとんどが坏に墨書をしている。

土師器はすべて体部に正位で記入されている。判読できるものには「万上」が14点、「万□上カ」、「□万カ上」、「万□」が各1点、「万」と「上」が各１点、「□万カ」が３点あり、「万上」とみられる墨書が多い。「万」、「上」、「□万カ」も明らかに１文字単独のものは「上」１点のみである。ほかは土器の残存上、１文字とせざるをえないもので、土器の種類や記入部位・方向の共通性からそれらも「万上」だった可能性が高いと思われる。なお、「万上」墨書土器には内外面に油煙の付着するものがある（第３図11）。一方、須恵器では底部に墨書したものと、体部のものとがある。底部のものは２点あり、それぞれ「其」、「中」と判読される。体部の墨書には「上」が１点、「□」が３点あり、「上」は正位で記入されている。一方、「□」には運筆から倒位とみられるものもあり、須恵器の墨書は土師器とは異なる様相を呈している。

「万上」墨書土器について：主体をしめる「万上」墨書土器には文字の内容、土器の種類、記入の仕方に統一性がある。筆跡は比較的上手だが、大雑把な書もあり、複数の人の手によるものとみられる。こうした統一性や筆跡から「万上」墨書土器は、複数の人によって同じ目的・思考のもとに使われたと考えられる。また、「万上」墨書土器は当初事業地の南壁周辺で多く採集されており、西壁の断面検討や南側の確認調査の際には出土していない。こうした状況と前述の統一性からすると、「万上」墨書土器は南壁周辺の比較的狭い範囲にまとまっていたことが推定される。その場合、年代もある程度の限定が可能となろう。こうした土師器は前述のように９世紀後葉頃とされる加美町壇の越遺

No.	場所	器　種	墨　　書	部位・方向	挿図	図版	登録	No.	場所	器　種	墨　　書	部位・方向	挿図	図版	登録
1	南壁	土師器坏	万上	体部正位	3−12	2−4	R1	20	南壁	土師器坏	□	体部正位			R20
2	南壁	土師器坏	万上	体部正位	3−11	2−1	R2	21	南壁	土師器坏	□	体部正位			R21
3	南壁	土師器坏	万上	体部正位	3−13	2−5	R3	22	南壁	土師器坏	□	体部正位			R22
4	南壁	土師器坏	万上	体部正位			R4	23	南壁	土師器坏	□	体部正位			R23
5	南壁	土師器坏	万上	体部正位			R5	24	南壁	土師器坏	□	体部正位			R24
6	南壁	土師器坏	万上	体部正位	3−14	2−6	R6	25	南壁	土師器坏	□	体部正位			R25
7	南壁	土師器坏	万上	体部正位	3−15	2−7	R7	26	南壁	土師器坏	□万カ	体部正位	3−10	1−10	R26
8	南壁	土師器坏	上	体部正位	3−16	2−8	R8	27	南壁	須恵器坏	其	底部	3−21	2−10	R30
9	南壁	土師器坏	万上	体部正位	3−17	2−9	R9	28	南壁	須恵器坏	中、刻書「□十カ」（焼成前）	底部	3−20	2−11	R31
10	南壁	土師器坏	万上	体部正位	3−1	1−1	R10	29	西壁	土師器坏	上	体部正位	4−6	2−12	R34
11	南壁	土師器坏	万上	体部正位	3−2	1−2	R11	30	西壁	土師器坏	万□上カ	体部正位			R35
12	南壁	土師器坏	万上	体部正位	3−3	1−3	R12	31	西壁	土師器坏	万上	体部正位	4−1		R36
13	南壁	土師器坏	□万カ上	体部正位	3−4	1−4	R13	32	西壁	土師器坏	万上	体部正位	4−2		R37
14	南壁	土師器坏	万□	体部正位	3−5	1−5	R14	33	西壁	土師器鉢	万上	体部正位	4−8	2−2	R40
15	南壁	土師器坏	万	体部正位	3−6	1−6	R15	34	西壁	須恵器坏	□	体部	4−11	2−15	R41
16	南壁	土師器坏	万	体部正位	3−7	1−7	R16	35	西壁	須恵器坏	上	体部正位	4−9	1−11	R43
17	南壁	土師器坏	□万カ	体部正位	3−8	1−8	R17	36	西壁	須恵器坏	□、□	体部倒位	4−3	1−12	R44
18	南壁	土師器坏	□万カ	体部正位	3−9	1−9	R18	37	西壁	須恵器坏	□	体部倒位	4−4	1−13	R45
19	南壁	土師器坏	□	体部正位			R19								

表１　墨書土器一覧表

跡SK895土壙（斎藤2003）や色麻町色麻古墳群第24・25住居跡（古川1984）で主体をしめる土師器坏と特徴が同じであり、同じ頃のものとみられる。

ところで、「万」「上」といった１文字の墨書はよくみられるもので、県内にも例は多い。こうした東日本各地の墨書土器については、他にも「大」「富」「吉」「生」「千」「田」など比較的少数の限定された文字を共通して用いていること、これらの文字を２・３文字組合わせて使用する場合があることが指摘されている（平川1991）。「万上」の例を探すと、福島県西白河郡上札堂遺跡や同郡赤坂裏遺跡に例がある。県内では初出だが、多賀城市山王遺跡や桃生町八幡遺跡では文字を逆にした「上万」の墨書土器がみつかっている。また「万」や「上」と組合わせた墨書は、多賀城跡と周辺の山王・市川橋遺跡に多くみられ、「生万」「千万」「大万」「得万」「万福」「上田」「天上」などがある。こうした例は多賀城跡周辺には限らず、蔵王町東山遺跡では「万田」「田万」が多数出土しているし、加美町壇の越遺跡には「大万」の墨書土器がある。本遺跡に近い川北横穴墓群にも「上田」、古川市新谷地北遺跡にも「万積」の例がある。新谷地北遺跡のものは９世紀末～10世紀初頭頃の竪穴住居跡から出土しており、本遺跡のものと年代も近い。共伴遺物には「富集」の墨書土器もある（註）。こうした例から「万上」もそれらと同じ組合わせ文字の１つであり、県内では初出ということができる。

「万」は大きい数を示し、「上」には高い、上級などの意味がある。「万上」は吉祥、吉事に関わる意味とみられ、そうした行事に使われた可能性が高い。こうした見方は吉祥的な表現をもつ墨書土器一般に言われている。勿論、各墨書ごとに特有の意味があり、行事にも違いがあると思われるが、各地で共通・組合わせ文字が使われた背景からみて、大きな捉え方としては問題なかろう。そのうえでさらに検討するには、行事自体のあり方や、その中での墨書土器の使われ方といった総体・具体的な検討が必要となる。近年ではそうした検討もされつつあり、遺跡内の給食活動における特別な場面での使用を考えた報告（荒木2001）や、吉祥的表現の墨書土器に農繁期労働に伴う共同飲食儀礼での使用を想定した見解（三上2003）などがある。いずれも示唆的な見方であり、農耕生産との関わりは蔵王町東山遺跡の「万田」「田万」墨書でも漠然とした可能性が提示されている（真山1981）。ただ、こうした検討には出土状況をはじめ、周辺も含めた遺跡・遺構・遺物の様相についての十分な把握が前提である。本報告の墨書土器は必ずしも良好とはいえない出土状況にある。緊急的な調査で、範囲も

狭く、各様相の把握も十分ではない。文字や土器の形態・付着物・年代などに上記の見解に結び付く可能性を見出すのみである。したがって、先のような大きな捉え方したうえで、近年の動向にも繋がる可能性を指摘するにとどめておきたい。

（註）　報告書では「宮□」とするが、「富集」と判読できる。

Ⅳ．まとめ

１．遺跡の東縁部分で北西から南東に流れる河川跡を発見した。墨書土器を含む土師器坏・鉢・甕、須恵器坏・甕などが出土しており、９世紀から10世紀頃の河川跡とみられる。

２．墨書土器は土師器坏に「万上」と書いたものが主体をしめる。その記入の仕方には統一性があり、文字の意味から吉祥、吉事などの行事に使われた可能性が高いと考えられる。

《引用・参考文献》

相原淳一（2004）：「八幡遺跡」『沢田山西遺跡ほか　－三陸縦貫自動車道建設関連調査報告書Ⅲ－』宮城県文化財調査報告書第196集

荒木志伸（2001）：「古志田東遺跡出土の墨書土器」『古志田東遺跡』米沢市埋蔵文化財調査報告書第73集

木皿直幸・早川英紀（1992）：「新谷地北遺跡」『下草古城跡ほか』宮城県文化財調査報告書第146集

小井川和夫（1981）：「上新田遺跡」『長者原遺跡　上新田遺跡』宮城県文化財調査報告書第78集

斎藤　篤（2003）：『壇の越遺跡Ⅳ　－平成11年度発掘調査報告書－』宮崎町文化財調査報告書第13集

佐久間光平・吉野　武ほか（2001）：『市川橋遺跡の調査　－県道『泉－塩釜線』関連調査報告書Ⅲ－』宮城県文化財調査報告書第184集

佐藤信行・藤原二郎ほか（1982）：「宮城県岩出山町境ノ目Ａ遺跡の出土遺物」『籾』第４号　弥生時代研究会

佐藤和彦・柳沢和明（1994）：「第58・60次調査資料の追加報告」『多賀城跡』宮城県多賀城跡調査研究所年報1993

菅原弘樹・吉野　武ほか（1996）：『山王遺跡Ⅳ　－多賀前地区考察編－』宮城県文化財調査報告書第171集

高橋栄一（1999）：『壇の越遺跡Ⅲ　－平成１０年度発掘調査報告書－』宮崎町文化財調査報告書第11集

千葉孝弥・廣瀬真理子ほか（2004）：『市川橋遺跡　－城南土地区画整理事業に係わる発掘調査報告書Ⅲ－』多賀城市文化財調査報告書第75集

千葉宗久（1980）：『玉造遺跡』宮城県文化財調査報告書第68集

戸田有二（1994）：『上礼堂遺跡』泉崎村教育委員会

平川　南（1991）：「墨書土器とその字形　－古代村落における文字の実相－」『国立歴史民俗博物館研究報告』第35集

藤原二郎（1986）：「宮城県岩出山町要害Ｅ遺跡の出土遺物」『籾』第6号　弥生時代研究会

古川一明（1984）：「色麻古墳群」『宮城県営圃場整備等関連遺跡詳細分布調査報告書』宮城県文化財調査報告書第100集

真山　悟（1981）：「東山遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅴ』宮城県文化財調査報告書第81集

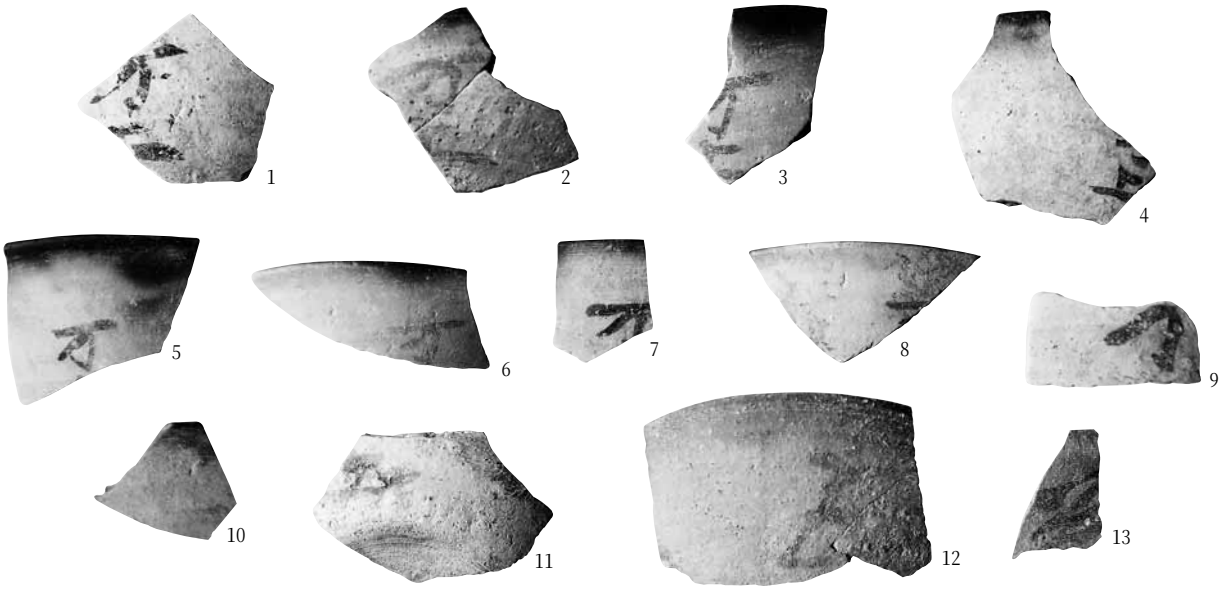
三上喜孝（2003）：「文献史学からみた墨書土器の機能と役割」『古代官衙・集落と墨書土器　－墨書土器の機能と性格をめぐって－』奈良文化財研究所

森　貢喜（1983）：「佐内屋敷遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅷ』宮城県文化財調査報告書第93集

河川跡断面（E→）

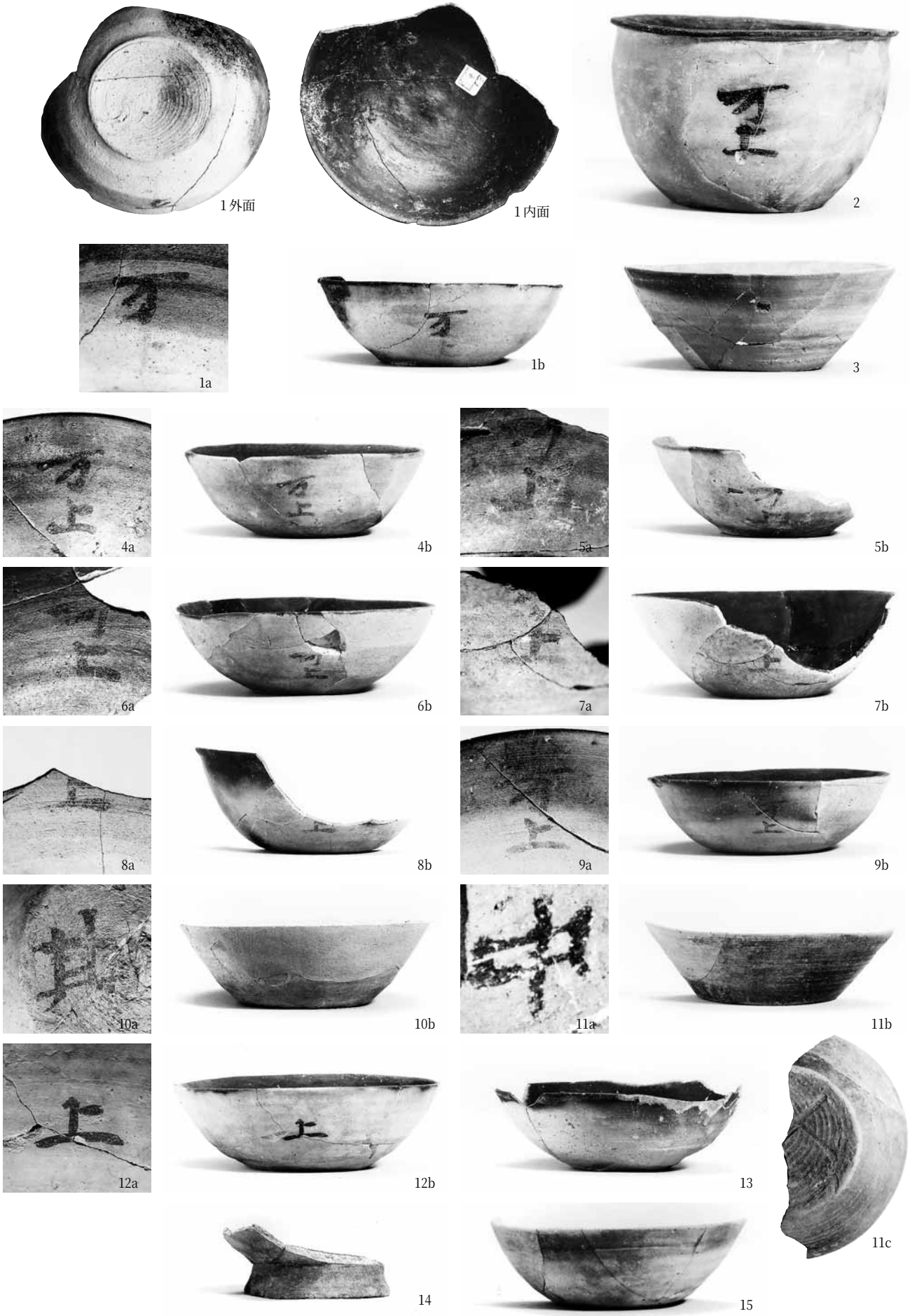
河川跡遺物出土層位確認状況（E→）

確認トレンチA・B（NW→）



1：3－1　2：3－2　3：3－3　4：3－4　5：3－5　6：3－6　7：3－7　8：3－8
9：3－9　10：3－10　11：4－9　12：4－3　13：4－4

図版1



1：3－11　2：4－8　3：3－19　4：3－12　5：3－13　6：3－14　7：3－15　8：3－16
9：3－17　10：3－21　11：3－20　12：4－6　13：4－5　14：4－7　15：4－11

図版2

洲崎城跡（すざきじょうあと）

調　査　要　項

遺 跡 名：洲崎城跡（宮城県遺跡地名表登載番号：53011）

所 在 地：宮城県登米郡東和町錦織字岩の沢地内

調査原因：墓地造成

調査主体：東和町教育委員会

調査担当：宮城県教育庁文化財保護課

調査期間：平成16(2004)年11月２日～４日

対象面積：約300m^2

調査面積：約50m^2

調 査 員：佐藤則之、相原淳一、柳澤和明、佐藤憲幸、西村　力

調査協力：普慶院

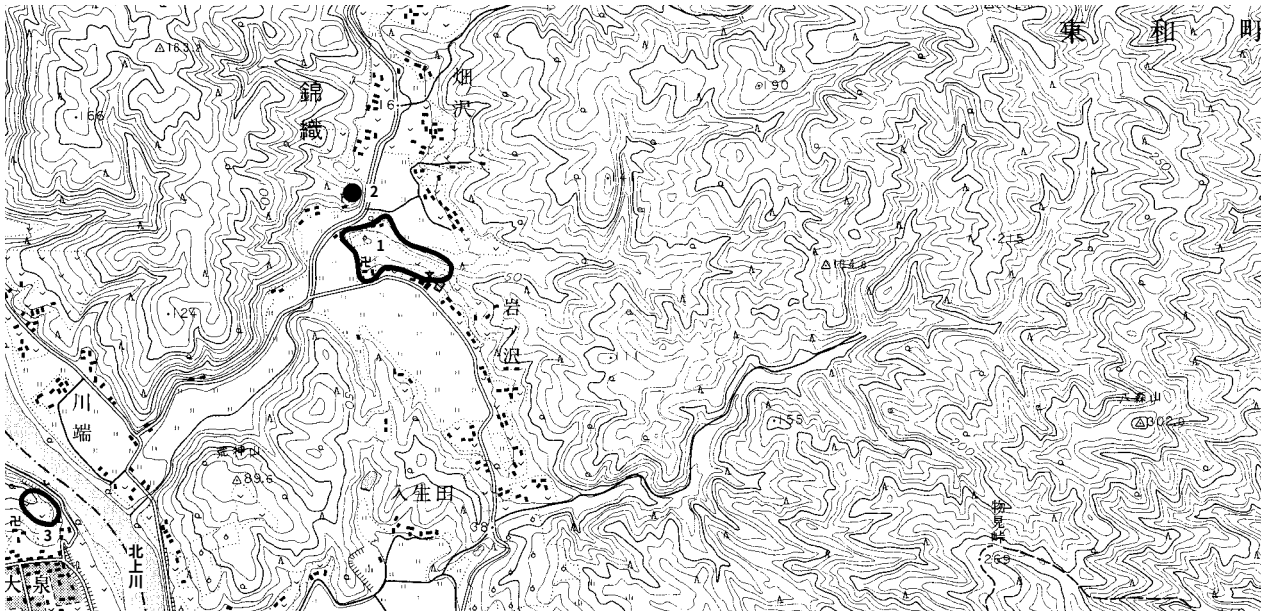
１．遺跡の概要

洲崎城跡は登米郡東和町錦織字岩の沢に所在する。北上川支流岩の沢川東岸の標高約40mの西に突き出た丘陵上に立地し、東和町役場の北西約５kmに位置する。遺跡の現状は杉林・畑を主に、南側は寺院（「普慶院」）・墓地、民家・水田となっている。

東和町内には、城館跡が数多く知られており、米谷の米谷城跡・大膳館跡・森合城跡・鶴尾城跡・楼台城跡、米川では鳩岡城跡・上沢城跡・高古屋城跡・鱒渕城跡・平城跡、錦織では古館跡・錦織城跡・湖水城跡・洲崎城跡の14ヶ所がある。洲崎城跡は町内では米川の鳩岡城跡に次ぐ規模のものである。また、洲崎城跡の所在する嵯峨立（さがたち）地区（旧嵯峨立村）は中世板碑が多く残されているところとして知られ、岩の沢川を挟んで洲崎城跡対岸の熊野神社裏に残される約230基の板碑群（小山田板碑群）は特に著名である。このうち最も古い紀年銘は北朝年号の康永４年（1345）である。

洲崎城跡は天然の要害地形に立地し、その北面・西面は急崖をなし、西側から北側にかけては岩の沢川とその支流が取り巻いている。本城縄張は東から西に主要な曲輪を連ねる連郭式の構造を採り、主として南山腹には腰曲輪として平場を数段にわたって設けている。本郭に相当する曲輪Ⅰは現在、リンゴ畑になっており、形態はやや不明瞭になっているものの、北辺80m、南辺60m、西辺60m、東辺40mの略長方形で、本館跡中、最高所に位置している。曲輪Ⅱ・Ⅲ・Ⅳはそれぞれ堀切・土塁で画され、その規模は曲輪Ⅱで70m×35m、曲輪Ⅲで40m×35m、曲輪Ⅳで80m×20mで、曲輪Ⅳはやや不整な形をしている。

洲崎城跡に関する記録は、『仙台領古城書上』『封内名蹟志』『封内風土記』『登米郡嵯峨立村風土記御用書上』『奥羽観蹟聞老志』等に見られ、「嵯峨立城」「洲前城」「淵前城」「淵寄城」「淵峰城」「岩淵館」の異称があり、城主として岩淵信濃守の名を伝えている。天正18年（1590）の秀吉の奥羽仕置に際しては、葛西氏側第一陣に嵯峨立城主岩渕信濃守信継の名が見え、天正19年（1591）の葛西大崎一揆では信継が桃生郡深谷の戦いで敗れ、子孫は嵯峨立から鱒渕泉屋敷に移り住んだと伝えている。



１：洲崎城跡　　２：小山田板碑群　　３：補陀落山観音寺跡

第１図　洲崎城跡の位置と周辺の遺跡（１：25,000）

入沢
岩の沢
曲輪 I
曲輪 II
曲輪 III
曲輪 IV
錦織
調査対象地
平場
平場
普慶院
保嵯育峨所立
(道路)
(道路)
岩の沢
北
0
50
100m

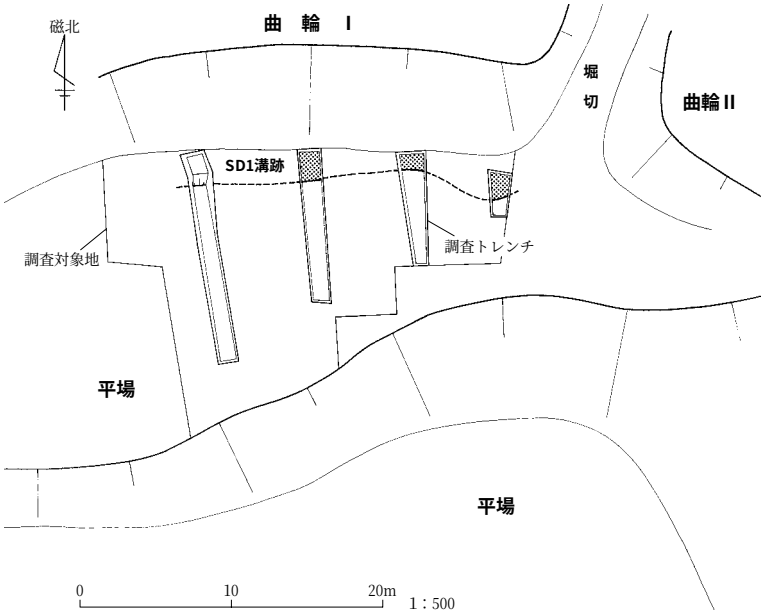
第2図　洲崎城跡平面図

２．調査に至る経緯と調査方法

普慶院の既存墓地東側の墓地造成に係わり、確認調査を実施した。調査対象地区は曲輪Ⅰの南側１段下の腰曲輪にあたる。４本の調査トレンチを設定し、遺構の分布状況を確認した。検出遺構は１/100平面図を作成し、写真記録はデジタルカメラを使用した。あわせて館跡全体の踏査も行い、１/1,000地形図に記録している。

３．発見された遺構

遺構の検出は表土直下の黄褐色シルト面で行った。曲輪Ⅰ直下の腰曲輪北縁で溝跡１条を検出した。SD１溝跡は曲輪Ⅰに沿い、規模は上幅2.0m以上、下幅1.2m以上、深さ26cmの逆台形状を呈し、堆積土は地山起源のにぶい黄褐色土で、焼土粒・炭化物を含み、縄文土器の細片が出土している。全体的に削平を受けており、他の遺構は検出されなかった。



SD1溝跡（北西から）

第３図　発見された遺構

４．まとめ

洲崎城跡は連郭式の中世山城跡である。今回の調査区は曲輪Ⅰの南側１段下の腰曲輪で、発見された遺構は溝跡１条である。SD１溝跡は曲輪Ⅰに沿い、焼土粒・炭化物を含むにぶい黄褐色土が堆積していた。縄文土器の細片が出土している。他の遺構は確認されなかった。

引用・参考文献

東和町史編纂委員会（1987）：『東和町史』

報　告　書　抄　録

ふりがな	だんのこしいせきほか
書　　名	壇の越遺跡ほか
副 書 名	
巻　　次	
シリーズ名	宮城県文化財調査報告書
シリーズ番号	第202集
編著者名	柳澤和明・相原淳一・菊地逸夫・吉野武・高橋栄一・田中政幸
編集機関	宮城県教育委員会
所 在 地	〒980－8423　宮城県仙台市青葉区本町３－８－１　TEL 022－211－3685
発行年月日	西暦2005年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
だんこしいせき 壇の越遺跡	みやぎけんかみぐんかみまちあざとりしま・とりやがざき 宮城県加美郡加美町字鳥嶋・鳥屋崎	044445	30039	38°35′33″	140°48′20″	2004/4/12～5/26	2,520㎡	重要遺跡確認調査
きたこまついせき 北小松遺跡	みやぎけんとおだぐんたじりちょうこまつあざしんかけした・あざやしきうら 宮城県遠田郡田尻町小松字新欠下・字屋敷裏	044502	38005	38°37′00″	141°00′30″	2004/11/8～11/12	670㎡	ほ場整備
そでさわこふんぐん 袖沢古墳群	みやぎけんものうぐんものうちょうおたあざそでさわ 宮城県桃生郡桃生町太田字袖沢	044565	70037	38°33′03″	141°15′58″	2004/3/4･29･30	200㎡	ほ場整備
ふっつけいせき 吹付遺跡	みやぎけんくりはらぐんしわひめちょうやつくぬぎあざふっつけ 宮城県栗原郡志波姫町八樟字吹付	044529	49021	38°45′06″	141°03′25″	2004/4/5～4/7	830㎡	宅地造成
おおいしはらいせき 大石原遺跡	みやぎけんおしかぐんおながわちょうおおいしはらはま 宮城県牡鹿郡女川町大石原浜	044581	73023	38°23′46″	141°28′03″	2004/10/4～10/13	450㎡	町道建設
かみかわなかいづか 上川名貝塚	みやぎけんしばたぐんしばたちょうかみかわなあざかみまわど 宮城県柴田郡柴田町上川名字神廻り戸	044323	08015	38°05′43″	140°48′54″	2004/11/24～11/26	57㎡	個人住宅新築
ようがいいせき 要害遺跡	みやぎけんたまつくりぐんいわでやまちょうかみのめあざにしだ 宮城県玉造郡岩出山町上野目字西田	044481	35067	38°40′05″	140°52′30″	2004/5/14,6/4,7/6	8,150㎡	砂利採取
すざきじょうあと 洲崎城跡	みやぎけんとめぐんとうわちょうにしごりあざいわさわ 宮城県登米郡東和町錦織字岩の沢	044543	53011	38°46′10″	141°17′10″	2004/11/2～11/4	50㎡	墓地造成

所収遺跡名	種　　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
壇の越遺跡	官衙関連遺跡・集落跡	奈良 平安	道路跡、材木塀跡、掘立柱建物跡、土器埋設遺構、土壙、溝跡	土師器、須恵器、須恵系土器、平瓦、丸瓦、塼、石核、磨製石斧、砥石、板材	国史跡東山官衙遺跡と一体となった官衙関連遺跡。方格地割。
北小松遺跡	散布地	縄文晩期 弥生前期	遺物包含層	縄文土器、弥生土器、土製品、クルミ	
袖沢古墳群	古墳群	古墳 中期	円墳	朝顔形埴輪、円筒埴輪	新発見の古墳群
吹付遺跡	集落跡	古代 中世	井戸跡、溝跡	土師器、須恵器、ふいごの羽口、中世陶器	
大石原遺跡	散布地	縄文 弥生 平安	土壙、焼土遺構	縄文土器、弥生土器、礫石器	
上川名貝塚	貝塚	縄文前 中期		縄文土器	
要害遺跡	散布地	縄文 平安	河川跡	土師器、須恵器、赤焼土器、縄文土器、石器	墨書土器37点出土。「万上」と書いたものが主体。
洲崎城跡	城館跡、散布地	縄文 中世	溝跡	縄文土器	

宮城県文化財調査報告書第202集

壇の越遺跡ほか

平成17年３月25日印刷
平成17年３月31日発行

発　行　宮 城 県 教 育 委 員 会
仙台市青葉区本町三丁目８番１号
印　刷　株式会社　東 北 プ リ ン ト
仙台市青葉区立町24－24